東方新生紀

森羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方新生紀

【Ｎコード】
Ｎ２６６９Ｕ

【作者名】
森羅

【あらすじ】
ただ楽しく幸せに過ごしたい・・・。それだけを願っていた一人の少年が大昔に転生して、そこでいろんな人・妖怪などと関わり、懸命に生きていく。そんなものを書きたいです。多少原作と違うことも書いたりすると思うので、それでもよい方はお読みください。

プロローグ（前書き）

初めて小説を書きました。
なので変な文章になったりすることもあると思います。というかその可能性が高いです。
それでも、それぐらい問題ない、ぜんぜん大丈夫だぜという方はどうぞおよみください。
それではスタート！！

プロローグ

ザァ――――――

雨の音が鳴り響く

体が動かない
辛うじて動かせるのは眼だけ
状況を知ろうと今動かせる範囲内で辺りを確認する。その視界に入ってきたものは、
まずアスファルト
トラック
そしてなぜか横たわっている自分の所から流れる大量の赤い液体
その液体が自分の血だということを認識したときにやっと気づいた。

――ああ・・・僕ははねられたのか・・・

息をするのも辛いというまさしく瀕死の状態にも関わらず、自分でも驚くほど冷静にこの状況を受け入れていた。

・どうして・・・こうなったのだろう。

意識が薄らいでいくなかで、今までのことが全て走馬灯のように流れていった。

――――両親は僕が物心つく前に交通事故で亡くなってしまっていた。だから僕は両親がどんな人だったかとかどういう存在だったと

かいうのは知らない。僕には親戚は誰もおらず引き取り手がいなかったため施設へと送られたそうだ。だから、物心ついたときには施設にいた。施設の人たちは僕の世話をしていたがただ世話をしていただけだった。まるで作業のように……。そこに両親の愛のようなものは感じられなかった。両親のことを覚えていない僕だったが、そんな僕でもそれだけはわかった。あまりにも機械的過ぎたからだ……。それでも、僕はあまり気にせず過ごしていた。それから次第に幼稚園・小学校で友達がたくさんでき、生活は充実していて僕は生き生きとしていた。友達と外でいろんな遊びをしたり、祭りにも行ったりした。毎日が本当に楽しくそして幸せだった。

でも、それは中学二年生になる頃に脆く崩れ去っていった。その原因は勉強についてだった。もともと僕は昔から少し頭が偉く、よく友達に聞かれ教えたりしていた。でも、中学二年生になってからその勉強が他の誰よりも偉く、頭ひとつ抜きん出るようになってしまっていた。自分が誰かに何かをしたわけでもない、勉強が他の人より出来ていただけ。ただそれだけのはずなのに：たったそれだけのことなのにそれを妬まれ、僕に対しての理不尽なイジメが始まってしまった。初めの頃は昔からの友達が庇ってくれてくれた。それだけで僕はかなり救われていた。でも、その友達も次第に妬むようになっていき、少しずつ僕から離れていき、ついには僕の周りから誰もいなくなっていた。そのイジメは卒業するまで続いた。高校に入ってからはそれまでよりは軽くはなっていたがイジメはなくならなかった。

そして現在に至る。

――いやな思い出が多い走馬灯だなぁ……まぁ走馬灯自体起こってしまうのはよくないけどねぇ……

ハハッ、とか細い声で笑う。
そして僕の眼から涙が溢れてきた。
本当にどうしてこうなってしまったのだろう。僕は何も悪くないのに……ただ普通に楽しく過ごして居たかっただけなのに……。
本格的に意識が遠のいてきた。これはホントに死ぬんだなと思った。
走馬灯でも流れたいたようなことがあったためか、もうこの世にあまり未練は無い。このまま死ぬのならそれも仕方ないと思った。でも……もしも……もしも神様が本当に存在して僕にもう一度人生を歩ませてくれるのなら

……新しい世界に……そして新しい自分になりたい……。

……ブツンッ！！

そう思ったところで僕の意識は完全に途切れた。

プロローグ（後書き）

まだ転生もしていないし、東方キャラも一人もでてなくてすみません。次回は、この少年が転生したところから始まります。東方キャラは出せれるようにがんばります。読んでくれた方、ありがとーーーーー！！

第1話　新しい世界、新しい自分（前書き）

いや～眠い！！眠いですね～。
前回の話ではぜんぜん進まなかったので頑張ります。
それではどうぞ

第1話　新しい世界、新しい自分

チュンチュンチュン……。

小鳥のさえずりが聞こえ僕は目を覚ました。
ムクリっと起き上がり、少しの間ボ――ッとしていたが、

「!?」

直後自分の身に何が起きたのかを思い出し、すぐさま自分の身体を見渡す。
……どこにも出血も無ければ怪我も無い。

――あれは夢だったのか?

そう思ったがあまりにも鮮明に脳裏に焼きついているのでそれはない…とすぐさま否定した。
やっぱりあの事故は夢などではない。

「どういう…ことなんだ?」

混乱する思考を無理やり働かせ、事故のことを思い出してみた。僕は確かに雨が降る帰り道に突然トラックにはねられ、そして死んでしまったはず……。そこでもう一度自分の身体を見ようと思ったのだが、

「……あれ?僕の手ってこんなに小さかったっけ?」

なぜそんなことを言ったのかと言うと、明らかに僕の手ではなかったのだ。
確かに僕の手は比較的小さいほうだったがここまで小さくは無かった。
足も見てみると同様に覚えがある僕の足よりよずいぶん小さい…．というか身体全体が小さいような気が…。何かとてつもなくいやな予感がしたので急いで鏡を探した。幸いにも僕が寝ていた部屋の隅のほうに鏡が置いてあるを発見し、すぐ自分の身体を映した。
そして愕然とした。
そこに映っていたのは４～５歳ぐらいの子供の姿だったのだ。

「パクパクパクッ……。」

あまりにも衝撃的過ぎて言葉が出なかった。そのまま数分呆然と突っ立っていると、部屋のドアが不意に開いた。反射的に振り返ってみると、ドアの向こうに立っていたのは３０歳ぐらいのとても優しそうな女性だった。僕が起きているのを確認すると、

「起きたのね、朝ごはんできてるわよ。顔を洗ったらみんなで食べましょう♪」

と僕に言って女性は奥のほうへと戻っていった。何がなんだか分からなかったがとりあえずそうすることにした。奥に進むと洗面所らしきところがあったのでそこで顔を洗いさらに奥へと進んだ。
奥のほうへと進むにつれて美味しそうなにおいがしてきたので足を速めると、そこはリビングだった。テーブルの上に朝ごはんが並べられていた。そこにはすでに一人の男性が新聞を読み、座っていた。

歳は先ほどの女性と同じくらいに見え、顔には凛々しさが残っており優しそうに見える。しばらくその男性を見ているとそれに気づいた男性が話しかけてきた。

「おっ。起きたか。」

「えっと、うん。」

「あいさつ。」

「えっ？」

「朝起きたら最初に何を言う？」

「あ、……おはよう。」

「おはよう。」

そういうと男性は満足したのか笑みを浮かべると、また新聞のほうへ顔を向けた。そのまま突っ立っている訳にもいかないので、僕も座った。リビングの中を見渡してみると、見たことの無いようなものがたくさんあった。ただ珍しいだけならたいして気にも留めないのだが、どれも僕がテレビなどで見て知っているものと比べたら何ランクか上ぐらいの機能がありそうに見えたのである。そうやって眺めているうちにあの女性が戻ってきた。

「じゃあ食べましょうか。」

「そうだな。」

「「いただきます。」」

「‥いただきます。」

その場の流れでご飯を食べたのだが、おいしかった。今まで食べたどの料理よりも美味しいように感じた。

「‥おいしい。」

「それは良かったわ。」

僕がそういうと女性はうれしそうに答えてくれた。朝ごはんを食べ終わるととりあえず自分の部屋?に戻った。今の状況を整理するためだ。

まず、わかったことは僕があの二人の子供、つまり僕の両親ということだ。これは僕にとってかなり重大なことだった。僕には両親はもうずっと前からいない。そしてトラックにひかれたという記憶もある。でも、今の僕の身体はどっからどう見ても4、5歳の子供である。これはつまり‥‥。

「‥‥転生したってことなんだろうか。」

にわかには信じられなかったが前の記憶がありながら、今はあの二人の子供になっているのだからこれ以外ないだろう、多分。

なぜだろうと考えたが、一つだけ心当たりがあった。死に際に僕は新しい世界へ、そして新しい自分に‥‥と願っていた。きっとその願いが叶ったのだろう。ホントに神様いたんだなぁと思いながらも感謝した。こうして第二の人生が送れるのだから。ただお礼を言いたかったなとも思った。

次に僕の名前のことである。これもそこそこ僕にとっては重大なことだった。転生前の名前が思い出せないのだ。他の事は思い出せるのだが、名前だけは出てこなかった。幸いにも今の僕には両親がいるので名前はすでにあった。というか食べてるときに何回か呼ばれて気づいたことのだが……。

「新幸生（あらたこうせい）……か。」

前の名前が思い出せないのはもう仕方が無いし、この名前も実はそれなりに気に入っているのですでに問題はなくなっていた。ちなみに、苗字のほうは表札のようなものを見て確認した。（僕の苗字って何？って聞くわけにはいかないしね。）

「とりあえず今分かったことはこれくらいかな。この年齢でこんなに知性があるのはおかしいとは思うけどある程度知識があると助かるしね。情報整理するのに役立ったし。後分かってないのは……この時代のことかな……。まぁ素人の僕でも分かるぐらい科学とかその技術力とかが高いし未来にでもきたんでしょ。」

その後は今の両親といろいろと話した。そのときはあまりにも僕が４、５歳とは思えないような、それこそ青年が会話しているような話し方だったので、驚いていたが……。どうやらつい最近までは年相応の話し方だったようで会話力が無かったようだ。それまでの僕はまだ転生前の記憶が無かったようだ。これはヤバイかもと思ったが、不審に思うどころかなぜか大喜びしていた。まぁ勘ぐられるよりはマシだったので放っておいたが……。ただ僕が父さん、母さんと呼ぶと少しだけ残念そうな顔をしていたのだが気のせいだろうか……。

父さんも母さんも優しかった。
僕からしたら珍しいものばかりだったのであれはこれはと父さんに次々聞いても、嫌な顔や面倒そうな顔など一つもせずそれどころか一つ一つ丁寧に教えてくれ遊んでくれた。
アルバムを見たいと言うとすぐに母さんが持ってきてくれて見さしてもらった。どの写真にも僕と両親が写っており、父さんも母さんもとても嬉しそうな顔をしてるものばかりだった。僕が生まれたときの写真などはそれがさらににじみ出ていた。傍らで一緒に見ている母さんはこの写真のときはこうだったとか、「あの時は大変だったのよ。」などと嬉しそうに話してくれた。

それからずっとその日は二人と過ごしていた。昼食も夕食もやっぱりおいしかった。そして、楽しい時間というものはあっという間に過ぎていくもので気づけば夜中になろうとしていた。

「あら、もうこんな時間になっていたのね。」

「ホントだな、幸生と話すのが楽しくて気がつかなかったな。もうこんな時間だしお前はもう寝なさい。」

「え〜〜、やだよ。僕ももっと父さん達と話がしたい。まだまだ聞きたいことたくさんあるし・・・。」

「うれしいこと言ってくれるじゃないか。だけど子供はもう寝る時間だ。」

「そうよ、母さんも幸生ともっとお話したいけど夜更かしは体に悪いからだめよ。明日になってからでもお話はいっぱい出来るわよ。」

「ん〜〜〜、わかった。じゃあおやすみ父さん、母さん。」

「「おやすみ。」」

そう言って僕は自分の部屋に戻り布団を敷き、そこに潜り込んだ。
今日一日を通して分かったことがもう一つ増えた気がした。これが両親の愛なんだなと思った。そう考えると少し恥ずかしくなったが、それでも僕は今とても幸せだった。明日はどんなことを聞こうかなと考えているうちに眠くなってきた。

「まっ、明日でいいか。」

そして目を閉じるとそのまますぐに眠りに落ちた。

両親サイド
少ししてから幸生の様子を見に行ったが、部屋に戻ってすぐ眠ってしまったようだった。たくさんのことを聞いてはしゃいでいたから疲れが出たのだろう。ふふっと笑みを浮かべ、リビングに戻った。

「幸生もう寝てたわ。幸せそうな顔してぐっすりと。」

「まぁかなりの時間話していたからなぁ。そりゃ疲れも出るだろう。しかし、幸生のやつホントによくしゃべったよなぁ。考え方も話し方も青年と話してるようだったよ。」

「そうねぇ、もしかしたらいわゆる天才ってものじゃないかしら?

あなたがあの製品の説明をしてあげている時だって、全部じゃないようだったけど少しは理解しているようだったし……。」

「かもしれないな。まるで八意さんのところの娘さんみたいだな。まぁ幸生はあそこまで天才じゃないかもしれんが……。たしかあの子も同じくらいの年じゃなかったか？」

「確か幸生の一つ上ぐらいだったと思うわ。」

「じゃあ五歳ぐらいか。あの年であの知識、理解力、技術力。大人の研究者達も顔負けだったしな。」

「そうねぇ、あの子はホントに天才ね。」

「……よし決めた。」

「？」

「明日八意さんのところへ幸生を連れて行こう。歳も近いわけだし、幸生もあの子ほどではないが理解力はあるしすぐ打ち解けるんじゃないかな。」

「……そうね、しばらく八意さんのところには忙しくて行けなかったことだし、幸生のことも改めて紹介できるし、いいかもしれないわね。」

「よし、決まりだな。」

「でも、何も言わずにお邪魔しても大丈夫かしら？」

「大丈夫だろう。あそことは長い付き合いだし快く受け入れてくれるよ。」

「そうね、じゃあ明日行きましょうか。三人で。」

「おう。」

このような会話がされているとも知らずに、幸生はぐっすりと眠りについているのだった。

第1話　新しい世界、新しい自分（後書き）

名前しか東方キャラ出せなくてすみません。
次回は絶対に出ます。誰が出てくるかはもうお分かりだと思います。
頑張るのでよろしく～

第2話　才女と能力（前書き）

レポートとかテストとかってめんどいですよねー。
これ書く時間も少なくなるばかりですよ
まぁ頑張ります。

第2話　才女と能力

「幸生～、朝よ～。起きなさい～。」

声が聞こえ僕は「ん～。」と唸りながらもとりあえず起きた。ぼんやりとした頭のまま今聞こえた声について考え、

「そっか、今のは母さんの声か。」

と思い出したようにつぶやいた。転生したことに気づいてからまだ一日しか経っていないからか、寝ぼけた状態の頭ではすぐに母さんの声だと気づけなかったようだ。

早く慣れなきゃな～、と思いながら起き上がり顔を洗ってからリビングへと向かった。

「おはよう～。」

「ああ、おはよう。」

今日の朝ごはんも昨日と同じご飯、玉子焼き、魚の干物、味噌汁といった和食で美味しそうだった。

「いただきま～す。」

味噌汁を一口飲んだ。うん、やっぱりおいしい。ホント母さんの作る料理は美味しいよな～。まだ一日しか味わってないけどね。心の中でつぶやきながらも今日はどんなことを聞こうかなと思案していると父さんが、

「幸生、食べ終わったら着替えてきなさい。少ししたら三人で出かけるから。」

「えっ、昨日またいろいろ話してくれるって言ったよね？」

「そんなことなら帰ってきてからいくらでもしてやるから。それに外をたくさん見たいと昨日言ってたじゃないか。待ちきれんとばかりに。」

「うっ、まぁそうだけど……。でも、どこに出かけるの？」

「昔から付き合いのある家に行くんだよ。目的はお前を改めて紹介することだな。まぁすこし長話になると思うが、お前より一つぐらい歳が上の女の子がいるからその子と話でもしてなさい。たぶん父さんの勘ではお前と気が合うと思うし。それが終わったら買い物ついでにこの辺りを回ろう。まぁそういうことだから着替えておけ。」

「うん…わかった。」

僕に言うだけ言うと父さんは「ごちそうさま。」と言ってから着替えに行った。その後に続くように母さんもリビングから出て行った。何を聞こうかと考えているところで今日の予定が決められていたので、最初はムッとしたが外を見てまわれると思うと嬉しくなった。それに父さんが言ってた女の子にも会ってみたいと思った。朝ごはんを一気に食べて、僕も着替えに行った。

「わ～、すごいな～。」

家を出て数分歩いていったところで出た言葉がそれだった。自分が想像していたものよりも近未来的な街だった。いや、この場合は都市と言ったほうがいいかもしれない。そびえ立つビル、見たことも無い機械などがたくさんあった。僕がそれらに目移りしていると、

「ほら、幸生置いてくぞ。迷っても知らんぞ。」

と父さんが意地悪そうな顔をして言ってきた。

「わっ、ちょ、ちょっと待って。」

「はいはい、待ちますから慌てないの。あなたも幸生をからかわないで頂戴。かわいそうでしょ。」

「すまんすまん。ほんの遊び心だ、ほんの。」

僕が慌ててそういう母さんが父さんをたしなめた。そこからははぐれたりしないように母さんに手をつないでもらっていた。なにしろ人が多く、すぐにはぐれてしまいそうなるからだ。現にさっき父さんがほんの少しだがはぐれていた。何でも珍しいものを見つけてほんの少し見ていたら僕たちが見えなくなっていたらしい。父さん……、と悲しい目で僕が見つめると、

「誰にでも失敗はある！！」

と胸を張って言い放った。

おいっ、と思って母さんのほう見ると顔に手を当て、またかという表情をしていた。

その後ははぐれることなく進んだ。その間ずっと母さんが手をつないでくれていたのだが……
あったかいなぁ……と思った。母親の手なんてつないだことは一度も無かったので少し嬉しかった。
しばらく歩いていくと、

「おっ、着いた着いた。」

「……でかっ!!」

ものすんごく大きい家に着いた。僕の家も名家だったようでそれなりに大きかったのだが、この家はその倍以上はあるように見えた。
あまりのでかさに呆然としてしまった。

「幸生、いくわよ。」

「あっ、うん。今行く。」

母さんが家に入っていったので僕もそちらに向かった。そして家に入る前に表札を何気なく見ると、

「……八意？」

なんかすごく見覚えがある名前が書いてあった。この名前知ってる気がする。でも、まさかいるわけないよね～と思いながら入っていくと、
あの八意永琳がいた。

「君が幸生君だね。確かに賢そうな子じゃないか。ほら××、自己紹介。」

「わかってるわ、いちいち言わないで。××のほうだと呼びづらいでしょ。」

「すまんすまん。」

「もうっ、じゃあ改めて。私は八意永淋(やごころえいりん)よ。××のほうは呼びにくいから永淋って呼んで頂戴。」

今僕の目の前にいるのは紛れも無くあの東方ｐｒｏｊｅｃｔというゲームに出ているキャラクターの一人、永淋だった。実は、転生前はよく東方のシューティングゲームをしていたのだ。だから知っていたのだが……。びっくりしすぎて何も言えずにいると、父さんにパコッと頭をはたかれた。

「ほら、幸生。お前もボーッとしてないで自己紹介しなさい。」

「いった～……。えっと新幸生です。」

そう自己紹介すると、クスクスッと永淋に笑われた。ちょっとムッとしたがその表情が可愛らしかったので言い返す気が無くなった。

「じゃあ、永淋。私達はこっちの部屋で話しているから幸生君を部屋まで連れて行ってあげないさい。」

「わかったわ、じゃ新……。」

「あっ幸生でいいよ。」

「そう、じゃあ幸生こっちよ。」

そういって永淋は僕の手をつかんで歩き出した。

今目の前にいるのは間違いなくあの永淋だ。ということは未だに信じられないがここは東方の世界ということになる。でも、僕が知っている永淋はもっと大人っぽく、背丈が高くて、胸が豊かであるというように記憶しているが今の永淋はほとんど僕と変わらないように見える。ということはもしかしたら月に行く前という大昔に僕は転生したのかもしれない。だから、科学とか技術力とかが異様に高かったのかと思った。月人は科学などがすごいという知識があったのですんなり納得することが出来た。そんなことを考えているといつの間にか着いたようだった。

「着いたわよ。」

「お～すごいな。」

そこには部屋というより研究室と言ったほうが似合ってると思わせるほど機械やら資料やらがたくさんあった。その中には薬品と思われるものも多数あった。

「ここにあるの全部永淋が作ったり考えたりしたものなのかな?」

「ええ。まぁそれぐらい能力を使えば簡単よ。」

「能力?」

「そうよ、『あらゆる薬を作る程度の能力』。それが私の能力よ。たまに試してみないと何の薬か分からないときがあるけど。」

少し誇らしげにまだ少ない胸を張って言った。まだ五歳ぐらいなのにもう能力持ってるのか。でも、やっぱり頭もむちゃくちゃ偉いって言うのも要因の一つなんだろうな。資料とか機械を見てると自然と分かる。さすが後に月の頭脳っていわれるだけのことはある。

「能力か～、いいなそういうの。最初から持ってたの？」

「違うわ。父上から能力のことについて話してくれたことがあったの。じゃあ私にはあるのかなって思ってちょっと意識してみたら、ふっと出てきたの。」

「へぇ～そうなのか～。」

ついルーミア口調で言ってしまった。

「誰もが持ってるわけじゃないらしいんだけどね。・・・そうだ、ためしに幸生もやってみたら？心の中に意識を向けるような感じでやるの。もしかしたら幸生にもあるかもしれないわよ。」

「え～～、あるわけないよ、僕なんかに。」

「いいからやってみて。」

永淋に強く言われたので、じゃあやってみるか、と思い僕は目をつぶって心の中に意識を向けるようにして（向けれているのかは自信が無いが）能力～能力～、と念じるようにしていると、

「あっ、あった。」

――――――『壁を操る程度の能力』――――――

「『壁を操る程度の能力』っていうやつみたい。」

「壁を操る……ねぇ。どんなことができるの？やってみて。」

「無茶言わないでよ。僕今時分の能力に気づけたばかりなんだよ。」

「い・い・か・ら！！」

「うっ……わかったよ。たぶんここじゃできそうにないから外に出よう。」

「わかったわ。」

幸生サイド

まさか僕にも能力があるなんてなぁ。そんなことを考えていると永淋が今やってみてといきなり言ってきた。今気づけたばかりだから無理だと言うと、威圧感たっぷりの声で催促された。仕方ないのでやる外でやると言うと永淋も了解したようですぐに外へ行った。結構わがままだったんだな幼少期の永淋って……。ハァ～と深いため息をついてから永淋の後についていった。

永淋サイド

ほとんど冗談のつもりで言ったのにまさか彼、幸生にも能力があるなんてね……。能力があると聞くと無性に見てみたくなったのでやってみてくれと言うと幸生に言うと、今気づいたばかりだから無理だと言われた。それでも諦め切れなかったので少しだけ凄みを増した声でもう一度聞くと渋々了承してくれた。その返事を聞き心の中でやったと言った。外でやると言ったので私は先に行って待つことにした。

「じゃあ、やるよ～。」

「ええ。いつでもどうぞ。」

僕は目の前にある地面を見て目をつぶり、その場所に壁が出来るの

をイメージした。そしてゆっくり目を開けてみると土の壁が出来ていた。一メートルもない大きさだったが‥‥。

「ふ〜ん、まさしく『壁』ね。壁と言うには小さいけど‥。」

「自分の能力に気づいてからまだ十分も経ってないんだから仕方ないでしょ。初めてっていうのもあったからか少し疲れたし‥‥。少しは友達の労を労ってくれても‥‥‥。」

「えっ‥‥‥‥、とも‥だち?」

「そっ、友達。僕はもうそのつもりだったんだけど‥‥‥だめかな?」

「‥‥‥いいえ、そんなことないわ。嬉しいわ。ただ私まだ友達っていうのがいなかったから少しびっくりしたの。」

「そっか、じゃあ僕は永淋の友達第一号か。」

僕がそういうとまた驚いた顔をした。そしてそれはすぐに笑顔となり、

「そうね、幸生は私の友達第一号。そして私は幸生の友達第一号よ。」

と言った。その言葉に少し驚いたが僕も永淋と同じように笑顔で返した。その後、僕たちは永淋の部屋に戻り両親達の話が終わるまで会話を楽しんだ。帰る頃にはもう夕方を過ぎていた。永淋が手を振りながら見送ってくれている。

「ねぇ父さん。」

「ん？何だ？」

「父さんが言ったとおりとても楽しかった。もう友達にもなったよ。」

「そうか、良かったな。」

明日も行ってみようかなと思う。初めて出来た友達なのだから。

永淋サイド

幸生たちが帰っていく。私は姿が見えなくなるまで見送っていた。

見えなくなったところで、

「どうしたんだ、永淋？」

「父上……。」

いつの間にか後ろにいた父上が私の顔を見ながら尋ねてきた。

「友達って言ってくれたの、幸生が……。父上、私にも友達が出来たのよ。」

そういうと父上は嬉しそうに、言ってきた。

「そうかそうか。永淋にも友達が出来たか。それでお前はそんなに

嬉しそうな顔をしてたのか。」

「‥そんなに嬉しそうな顔してた、私？」

「ああ、それはもうホントに。」

「／／／／／。」

顔が赤くなっていくのを感じた。恥ずかしくはあったがそれでも嬉しかった。
そんな私を見て父上は、

「（……娘はやらんぞ）」

ボソッと小さな声で父上が言った。ただ小さすぎて私には聞こえず聞き返しても何でもない、と慌てて言うと父上は家に戻っていった。
何だったんだろうと思いながらもまぁ流すことにした。

「明日も幸生来るかしら。」

そうつぶやくだけで笑みが浮かぶのを感じた。

その日の夜、新家では息子から能力があると言った瞬間その家から
両親の歓喜の声が上がったのは言うまでも無かった。

第2話　才女と能力（後書き）

ついに出ました。永淋です。キャラが違うかな～と思ったりもしたけど気にしたら負けだぜ。
幸生の能力も出ました。使い道については次回出していこうと思います。
永淋の父ちゃん考えるの早すぎ。

第3話　妖怪初遭遇：前編（前書き）

最近暑いよねー。
いや暑い、暑いねー。
だからこっちも無駄にテンションがハイになってくぜ！！

自重します、すんません。
それではそうぞ。

第3話　妖怪初遭遇：前編

あれから数週間が経った。
永淋の家に行ってからというもの僕はほとんど毎日永淋の家に遊びに行くようになった。
永淋の家には僕の家にはないものがたくさん見られるからというというのもあるのだが、一番の理由は永淋と話すのが楽しいからだし、なにより僕の初めての友達だからだ。

ただ、永淋と仲良くしているとおじさん（永淋のお父さんね）が時折怖い顔で僕を見ている気がしたのだが……、気のせいかな…気のせいだろ……たぶん。

それとこれは全く関係ない話だけど永淋や僕の家、この都市にある機械ってほとんどが、永淋が考え設計したんだって。

「やっぱすごいよ、永淋は!!僕と一つしか年は違わないのに。」

そういうと永淋は照れたのか顔を赤くしてうつむき、

「……ありがと／／／／／。」

小さくつぶやいた。
その仕草と表情を見て僕はついドキッとした。
ちなみにここで永淋から

「私5歳じゃなくて6歳よ。」

なぜかカミングアウトされた。歳が間違えられるのは嫌だったのだろうか

話すこと以外で永淋としてることといえば、僕の能力について把握することぐらいだった。というかほとんどこのことについて話し合ってる。二人で話し合ったり、実践してみてわかったがどうやら僕の『壁を操る程度の能力』というのはそこそこ応用が利きそうなものだった。この能力、『壁』という字が入れば大体のことは出来るらしい。
例えば、

肉体の限界という『壁』を越えるとか、

言葉の『壁』を越える、

障『壁』をはるなどいろいろとできるらしい……。

らしいというのは永淋の推測だからである。実際には実力・経験・修行不足のためできなかった。今僕に出来るのは、文字通り『壁』だった。でも、このことに関してはそれなりにできていた。前にやった土の『壁』はもちろん、空気を集め固めて作った空気の『壁』、水を集め固め作った水の『壁』などである。

ただし、どれも厚さ三センチ以下、大きさ一メートル未満という壁というには心許ないものだった。
打ちひしがれている僕を見た永淋の反応はというと、大笑いしてくれた方がまだ楽だったのに、同情と哀れみが混じったような表情をして僕の肩に手をポンッと置いた。

ここで精神的にトドメをさされた僕はその後数分間地面に「の」の

字を書いていじけていた。
ズーンという効果音がつきそうなぐらい落ち込んだ。
さすがの永淋も僕を元の状態に戻すのに時間がかかったのは言うまでもなかった。

そんなある日だった。いつものように朝ごはんを食べ、習慣になったように永淋の家に遊びに行こうとした。

「いってきま～す。」

「ん、また永淋ちゃんのとこか？」

「うん。そうだよ。今日は永淋の手伝いで一緒に森の方で薬の材料を探しに行くんだ。」

「そうか。でも、暗くなるまでには戻ってくるんだぞ。最近この辺で妖怪が見られてるらしいからな。」

「妖怪？」

「そうよ、昔はあまり確認されてなかったんだけど、都市として発達し始めてからよく見られるようになったらしいわ。だから、幸生。早く帰ってくるのよ。」

「うん。わかった、気をつけるよ。じゃあいってきま～す。」

「「いってらっしゃい。」」

そういって僕は家を出た。ちゃんと暗くなる前に帰らないと、と心では思いつつもまぁ遭遇しても何とかなるだろうと僕はこの時楽観視していた。でも、僕は知らなかった。妖怪の脅威を…。妖怪の恐ろしさというものを……。

少しだけ待ち合わせの時間に遅れていたので僕は森の入り口まで少し走った。着いたときにはもう永淋は到着しており僕を待っていた。

「幸生、遅い！！」

「ごめん、まだこの辺りの地理把握してなくて…。」

「女の子を待たせるなんて…。普通は逆よ、逆。」

ぷうっと頬をふくらませてそっぽを向いた。その仕草がかわいいなぁと思いながらも謝罪する。悪いのは僕だし。

「ホントにごめんって、このとおり。」

「……まぁいいわ。ちゃんと来てくれたし。じゃあ行きましょうか。幸生はこの森は初めてだったかしら？」

「そうだね、街の中を歩いたりはしたけど、森にはまだ一度も入ったことはないね。」

「そう、じゃあ入る前に注意しておくわね。この森には今回私たちが探しに来た薬草とかが生えているのだけど、妖怪もいるわ。こいつには本当に気をつけないといけないわ。まぁこの辺は朝・昼の時間帯には確認されていないようだから大丈夫だと思うけどね。」

「わかった。気をつけるよ。」

「そう、じゃあ行きましょうか。」

「おう！」

そう元気よく答えると、二人は森の中に入っていった。今回は永淋が今作っている薬に使う薬草をいくつか探しに来ていた。だいたいのものは森に入ってすぐに見つかったのだが、一つだけ見つかりにくい薬草があった。休憩がてらに昼食を二人で食べてからまた探し始めたのだが一向に見つからなかった。

「う〜ん、見つからないねぇ〜。」

「そうね、この辺りにあるって言うのは間違いないらしいのよね……。」

永淋も長時間探していたからか、表情に疲れが見えていた。このまま二人で探していても埒が明かないと思った僕は一つ提案してみた。

「……よし、永淋。ここから二手に分かれよう。」

「えっ。だっ、だめよそれは。もし幸生が迷いでもしたら……。それに妖怪もいるって最初に言ったでしょ。！」

「大丈夫だって。この辺りは散々歩き回ったから森の入り口までの戻り方ぐらいならもうわかるよ。それに二手に分かれた方が見つけられる確立があがるでしょ。」

「それはそうだけど……。」

「僕にだって一応能力があるんだし、大丈夫だって。それにその薬草がないと完成しないんだろ。いくらあの能力があっても材料がないと出来ないんだし。」

そう繰り返し言い続けているとついに永淋が折れた。

「……わかったわ。じゃあ夕方になる前ぐらいに森の入り口に集合よ。これは見つからなくても絶対よ。」

「了解、了解。じゃあまた後で。」

「またね。」

そう言って永淋と分かれた。この時、後に起こるであろう事を知っていたならばきっとこんな軽率な発言はしなかっただろう。

「ハァ……見つからないなぁ。」

永淋と分かれてから数時間が経ったがまだ見つかってなかった。ここまで見つからないとはホントにあるんだろうか……。さすがに僕もだいぶ疲れた。

「ホントにあるのかなぁ……。ってやっべ、もうとっくに夕方になってるじゃん。」

空を見上げるともうすでに夕焼け色に染まっており徐々に夜へと近づいていた。

「早く戻らないと。……ん?あっ、あったぁぁぁぁぁ。」

僕の視線の先に今まで探しに探し続けてきた薬草があった。よく辺りを見回してみると同じ薬草がいくつか生えていた。しかも何度かこの辺は通ったところだった。灯台下暗しである。

「さっさと見つかってくれてたら楽だったのに……。まっいっか、見つかったんだし。」

そう上機嫌になっていると後ろの方からガサガサと草を掻き分けるようにして大きく動く音が聞こえた。

永淋かな、と思ってその音が聞こえた方へと僕は振り向いた。

そして、振り向いた先にいたのは、

「ギャシャアアアア！！」

正真正銘の化け物、妖怪がいた。

第3話　妖怪初遭遇：前編（後書き）

ついに妖怪と遭遇です。そして次回初戦闘になります。
幸生は勝てるでしょうか？答えはかにのみそしる！！

間違えました。神のみぞ知る！！

第４話　妖怪初遭遇：後編（前書き）

今まで投稿するとき直接書き込んでたけど
今になってもっと楽に出来ることが判明してしまった。

愕然ですよ。今までの時間を取り戻したいですよマジで。
まぁこれからは日にちがあいたりするかもしれませんが時間は一定にしていきたいです。

第４話　妖怪初遭遇：後編

「ハァ、ハァ……。」

怖い。自分が、人間がこれほどまでに何かに対して恐怖を抱くことができるとは思わなかったぐらい怖い。
今まで生きてきた中で比べられないほど僕に恐怖心を抱かせるその妖怪は今も僕を襲わんとして木々をなぎ倒しながら追ってきている。震える足にムチをうってここまで逃げていたが、徐々にその間隔が狭まっていた。

「ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。ホントにやばいよこれは。」

そんなことをつぶやいていたせいか、突然木の根に躓き転んでしまった。

「～～～～～！！っは！？」

気づけばもうその妖怪は目の前で来ていた。
真正面から見たからか…その妖怪の姿がおぼろげながらも確認でき

た。
体中に毛がびっしりと生えており、脚は六本で先端のつめは僕なんか布を切るように切れてしまうことが予測できるほどの鋭さ。口もこれまた獲物を食い破るために存在するといわんばかりの鋭さで、眼は複眼なのかいくつもあった。
そう土蜘蛛だった。
以前永淋の家で見た資料に比べれば小さかったかもしないがそんなことはどうでもよかった。まさか本当に出遭ってしまうとは……。

「……こうなったら腹くくるしかないか。自分の能力で何とかするしか……。」

そう考えていると土蜘蛛がつめを振り上げ頭を狙っていた。それにギリギリで気づき何とか避けて間隔を取った。先ほどまでいた場所が思いっきり抉られている。もしあのままいたらどうなっていたかと思うとゾッとした。
間合いを取ったままどうするかを考えた。能力を使って土の壁を作って足止めをするというのはすでにやったがまだ修行不足のためかすぐに壊された。ほんの数秒だけなら持つのだが……。壁で防ぐのが無理なら攻撃するしかないと思ったが、いかんせん攻撃方法が思いつかない。まだ弾幕も出せないし……。

「（こんなことなら弾幕の練習もしとけばよかったよ……。）」

どうしよう、どうしようと思ったところで、

……待てよ。数秒しか持たないってことは数秒ならとめることが出

来るってことだ。なら！？

そんなことを考えていると、また爪が迫っていた。しかも、さっきよりも近い。

「くっ！！」

避けようとしたが距離が近かったせいか避けきれず、左腕が引き裂かれた。
直後今までに感じたことのないような激痛が走ったが、それをなんとかこらえる。
傷を見ると幸いにもそれほど傷は深くないように見えた。土蜘蛛の攻撃が鈍かったからだろう。
左腕から血を流しながらも先ほど考えたことを実行することにした。

チャンスは一度。
僕の能力もまだなれていないからか体力の消費が早い。それに先ほどの傷から今も出血が続いてる。亮は多くは無いが少なくも無い。
そう長くは持たないだろう。だから失敗すれば終わりだ。どのみちこのまま何もしなければ待っているのは死だけ。なら何でもいいからやるしかないのだ。

先ほどの攻撃で獲物を仕留められなかったのが悔しかったのか「ギャシャァァァ！！」と叫びながらこちらへ突っ込んできた。それに対して僕は手を前にかざして目をつぶっただけだった。土蜘蛛はそれを諦めたと思い、そのまま獲物めがけて突っ込んだ。もうすぐ

目の前まで来たところで、

ドスンッ！！

と思いっきり土蜘蛛は何かにぶつかった。

「ギャシャァ！？」

僕がしたことというのはいたって単純なことで目の前に壁を作っただけだ。ただし、それは空気を集め固めた空気の壁だ。空気で作られた壁なのでそれを視認することは難しい。

当然土蜘蛛にもその壁は視えず、そのままぶつかった土蜘蛛は動揺し怯み立ち止まった。その壁はすぐに壊れたが、ほんの少し時間が稼げれば十分だった。

その一瞬を見逃さずに、僕は土蜘蛛の脚を挟み込むように土壁を形成し、身動きが取れないようにした。六本全てにやったので疲労が激しかったが、いまにも土壁が壊れそうになっているのを見て、すぐに護身用と言われて持たされたナイフで土蜘蛛の頭へと飛び掛った。

「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

土蜘蛛の頭まであと数センチというところまでナイフがいったとき僕は成功したと思った。でも、現実というものは厳しいものだった。

あと数センチというところで土蜘蛛の口の辺りから何かが僕に向かって射出された。すでに僕はナイフを振りかざしており、避けるなんてことはできなかった。それは腹の辺りにまともに直撃し、その勢いのまま後方にあった木にぶつかった。

「カハッ！？」

腹部への強烈な一撃を受け肺から空気が一気に吐き出され転げまわろうとしたが、動けなかった。痛みに耐えながらもよく自分を見てみると糸らしきものが僕の身体を木ごと縛っていた。僕はそこで忘れていたことを思い出した。

『蜘蛛は糸を吐く』

当たり前のことを忘れていた。そのことも考慮しておかなければいけなかった。蜘蛛は尻から糸を出していた気がしたがこの際もうどちらでもいい。

つまり僕は失敗したのだ。

そうこうしているうちに土壁はビシッと音を立てて崩れ去り土蜘蛛は自由になっていた。しかも、自由を奪われていたせいか怒っているように見えた。そして勝利のおたけびとも取れる声を出した。

「ギャッシャァァァァァァ！！！」

「ハハッ、これはさすがに……終わったか…な。」

僕はひどく落ち着いた声でそう言った。こんな感じになったのは初めてじゃない気がする。

……そっか、あの事故の時と同じか…。

それは明確な死。あの事故の時もそれを感じ取ったとき冷静だった気がする。今回はまだ瀕死の状態でもないが直にそうなるだろう。でも、僕は以前のように今の世界に対して悲観的な思いは微塵もなかった。
この世界に転生してからの毎日というものは幸せ以外の何ものでもなかった。

いつも優しく僕のことを思ってくれた両親

永淋というすばらしい友達に出会えたこと。

たった数週間という短い日々だったが本当に幸せだった。心残りといえば僕が死ぬことで悲しむであろう両親と永淋のことだった。

そんなことを考えても事態は変わらず残酷にも鋭利な爪が振り下ろされようとしていた。それにたいして、僕は目をつぶりその死を待った。

……攻撃が来ない？そのことに疑問を抱き恐る恐る目を開けてみると、

土蜘蛛の脚の一本が吹き飛んでいた。

「ギョワァァァァァァ！？」

土蜘蛛も驚きそして痛みによって叫んでいた。何がなんだかわからなかった。当然僕は何もしてないし、さっきの反撃で能力が使えないほどに疲労していた。だから僕ではない。

なら誰が、と辺りを見渡してみると、土蜘蛛の少し離れた後方で弓を放った状態の構えのまま立っている永淋がいた。そしてそれから起こることに我が目を疑うこととなった。

永淋はすぐに第二射を放ちそれは見事脚に命中、そして吹き飛んだ。さすがに永淋の存在に気づいた土蜘蛛も向き直り反撃しようとしたが、目にも止まらぬ速さで次々と永淋は矢を放った。全ての矢は吸い込まれるように土蜘蛛に当たり大きな風穴ができていった。

狩る者と狩られる者の立場が完全に逆転し瞬間だった。

土蜘蛛は為すすべもなく、断末魔をあげること間なく、一瞬にして肉片へと変わってしまった。僕はその光景をただ呆然と見ていた。わぁ～～～すっげ、と心の中でつぶやいていると今度はこちらに永淋が弓矢を向けてきた。

「ちょ、ちょっと永淋待って、ストッｐ！！」

言い終わる前に矢が離れて、思わず目をつぶったが何も起きてないことを感じると土蜘蛛の糸が切れていた。そして、永淋がこっちに歩いてきた。

「ごめん、助かったよ。永淋ありがっ！？」

その言葉を言い切ることは出来なかった。永淋が抱きついてきたからだ。

「え、永淋？いきなりどうしｔ」

「……な…さい。」

「？」

「ごっごめ…んなさ…い。」

顔を上げた永淋の顔は涙でいっぱいになっていた。

「幸…生がこの森…のこと詳しくないの知って…たのに、分かれたりして……」

一言一言に後悔の色が伺える。よほど責任を感じているようだった。

「…永淋。」

「あの…土蜘蛛…の声が森の奥か…らき、聞こえてきて。すぐに幸生…が襲われ…てるって気がつ…いて。」

涙で顔をぬらしながらぽつぽつとつぶやいていく。

「もし…も、幸生がし、死んでたらとお、思うと。わっ私、私……。」

「……いいんだよ。」

「えっ？」

「二手に分かれようといったのは僕だし、夕方になる前には戻るって決まりを破ったのも僕。永淋は一つも悪くない。それどころか永淋は僕の命を救ってくれた。永淋が来てなかったら僕はきっと死んでた。だから永淋は悪くない。」

「でっでも、幸生の腕…けがを……。」

「これくらい…死ぬことに比べたら…ぜんぜん平気だよ。痛いけど永淋の心が痛んでいるのに比べたら……。」

「幸生…。」

「強く…なるよ。強くなって永淋が僕を助けてくれたように、今度は僕が永淋を守るよ。いつか…きっと……。」

僕はそう強い意志を持って永淋に言った。

「でも…とりあえず。」

「？」

「この傷永淋の薬で治してくれる？」

「……ええ、もちろん。任せてちょうだい。」

泣いたままだったが永淋はそう笑顔で答えてくれた。

それから永淋に手伝ってもらいながら永淋の家まで連れて行ってもらった。

おじさんは驚いた顔をしたがすぐに状況を理解しベッドに寝かせ僕の両親に連絡を取りにいった。永淋はというと帰ってすぐに傷薬を作り始めていた。僕の両親が来るころには完成し治療し終えていた。

父さんと母さんは僕の無事な姿を見るとほっとした顔をしていたがすぐに怒った顔になり、バシンッと父さんに打たれた。

「あれほど暗くなり始める前に帰れといっただろうが！！」

今までにないほど父さんが怒っていた。それは母さんにおいてもそ

うだった。初めて二人が怖いと思ったのはこのときだった。すると、さきほどまでの緊迫した空気はいつの間にか消え去り、泣きそうな顔で話してきた。

「お前の身にもしも…何かあったらと思うと…父さんは……父さんは…。」

「本当に無事で……よかった…わ。」

二人の表情からわかるもの。それは心配そのものだった。それを見ていると僕は我慢していたものがこみ上げて来るのを感じた。

「父…さん、母…さん。ごめん……なさい。ごめんな…さい。」

「お前が無事なら何もいうことはないよ。」

「おかえり、幸生。」

「……う、うっ。わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

僕はこの時初めて力いっぱい我慢することなく泣いた。それを見て二人は僕を優しく包んでくれた。そして、胸のうちで誓った。強く…なる。僕の愛する人たち全てを守れるくらいにいつかきっと強くなると……。

第４話　妖怪初遭遇：後編（後書き）

妖怪との初対戦。
結果は負け
危うく死ぬとこでした。

初っ端が土蜘蛛は無理でしたね

精進しないと：

第5話　感じる自分自身の成長、そしてうっかり？

森の中で一人薬草を採っている少年がいる。一通り集め終わったのか肩を回している。

「ふぅ、これぐらいかな？」

そうつぶやいたのは僕、新　幸生である。今日は永淋に頼まれ森の方まで薬草などを採りに来ていたのだ。こんな簡単なことはもちろん永淋ならできるのだが手の離せない実験をしているとか。さらに永淋曰く、

「面倒だから代わりに幸生が採りにいって♪」

とのことだった。まぁ僕も暇ではあったから別に問題はなかったのだが、

「絶対面倒だからっていうのが本音だよ、マジで。」

そんなことを考えながらも、頼まれたものはもう十分なほどに採っているので、さぁ帰るかと立ち上がったとき、

「ギシャァァァァ。」

後方に土蜘蛛が現れていた。初めて見たときのものよりもでかかった。おおよそ全長は3、4メートルぐらいだと思う。すでに先手必勝といわんばかりにご自慢の鋭い爪を振り上げながら突っ込んできていた。そのまま振りかぶった爪を僕に向かって振り下ろし殺ったと土蜘蛛は思っただろうが、

――ガキィィィン。

と突如現れた不可視の空気の壁により弾かれた。

「ハァ……、何度やっても懲りないやつらめ…。
……土壁――四囲(しがこい)。」

そう言って僕は足で地面を軽くタンッと踏んだ。すると、

ズァァァァ。

土蜘蛛の周りを四方で囲むようにして土で出来た壁がいくつも地面から生えてきた。
土蜘蛛の倍はあるほどの高さでだいぶ厚い。突然自分を囲うようにして現れた壁に驚いているのが感じ取れる。
すぐに壊そうとしてしているようだが、大きさ・厚さだけでなく強度も以前のとは比べ物にならないぐらい強固なものになっている。
そんじょそこらの妖怪ではびくともしない。

中の様子を見ようと僕は空壁を縦にではなく横倒しの状態にして出現させた。それに乗り、空壁を操って土壁の中が見える辺りまで浮上させた。中では未だに土壁を壊そうと躍起になっている土蜘蛛が見えた。閉じ込められたことに激怒しているからか頭上から僕が見ていることに気づいていない。その間も土蜘蛛は攻撃をしているのだがやはりびくともしていないし、削れもしていなかった。。

まぁ僕も土蜘蛛の無意味な頑張りを見ているほど暇ではないのでトドメの準備にかかった。
大きさ１０メートルほど、厚さ1メートルほどの空壁を目の前に構築。そして、それを分解していくつもの小さな壁にした。それはもう壁ではなく杭のようにも見える。
そこで、やっと僕が上空にいることに土蜘蛛は気づいたのだが、もう遅い。

「空壁弾――杭。」

そういい展開した杭を操り土蜘蛛に向けて全て射出した。土蜘蛛は逃げようとするが土壁に囲まれ逃げるどころか回避することも出来ない。

ズドドドドドドドドドッ！！

そして次々と杭は土蜘蛛に刺さっていき全弾撃ち終えたときには絶命していた。死んだことを確認した僕は地上へと下降した。

「う～ん、ちょっとやりすぎたかな。まぁそっちから襲ってきたんだから問答無用だよね。」

すでに息絶えているものに対して言っても仕方のないことなのだがとりあえず言っといた。初めて土蜘蛛に襲われてからもう十二年も経ち、僕は転生前の年齢と同じ十六歳になっていた。
背丈は１７０前半、身体はそれなりに引き締まっており、髪は肩にかからないぐらいの長さになっている。

土蜘蛛に襲われてからというもの、僕は永淋と一緒に能力などの修行をしていた。…いや、永淋には手伝ってもらったという方がいい気がする。能力については把握してから何度も使用して出来を確かめていた。

それとは別に霊力の修行もしていた。
能力を持っていたからか僕にも霊力が備わっていた。でも、その量は微量なものだった。
なので、霊力を上げるための修行も開始した。永淋が作った地獄の……ゴホンッゴホンッ、効率のいいメニューにしたがって毎日修行した。
その甲斐あってか今では中の上ぐらいまで霊力が上がった。それの影響か、『壁を操る程度の能力』もだいぶ扱えるようになった。おかげで、さきほどのように苦もなく退治できた。空も飛べるようになっているのだが、なんとなく浮遊感に慣れなかったのでほとんどは先ほどのように壁を使って浮上したりしている。早く慣れたいものだ。

最近は永淋も上層部の方からいろいろと命令が出ているらしく、あまり修行に付き合ってもらえていないのだが永淋が必要とされているのだから仕方ない。それに時間のあるときは付き合ってもらってるしね。
近頃は永淋直々に弓矢を習っている。永淋ほどうまく操れないが人並み以上にはできるようになっている。

「ホントに感謝するばかりだよなー。……あの地獄のg、ゴホンッ、……もとい授業はきつすぎたけど。何回か三途の川が見えた気がしたよ……。」

ハァ～、とため息をついた。

「あとはこの薬草を永淋に届ければいいのだけど……」

先ほどの戦いでも怪我はしていないのだが、土蜘蛛と戦うという予定外の運動もしてしまい少し疲れてしまい、このまま家に帰りたいというのが本音である。それにもうとっくに日は落ちかけている。急ぐといっても一日ぐらいなら大丈夫だろうと自分の中で決定し家に帰った。

家に帰ったころにはもう完全に夜になっていた。

「ただいま～。」

中に入るといつものように父さんが出てきた。

「おかえり、遅かったな。薬草とか採りに行っただけだろうに……。」

「いや～、本当ならもう少し早く帰れたんだけど、途中で土蜘蛛に襲われてね。それを退治してたら遅くなって。あ～、疲れた～。」

何でもないように言うと驚いたのか詰め寄ってくる。

「土蜘蛛に襲われただと!?お前身体は大丈夫なのか?怪我は?」

「大丈夫、大丈夫。少し疲れただけだよ。あと父さん顔が近い近い。もう何度も妖怪退治してるの父さん達も知ってるでしょ。それに僕、父さんより強いでしょ?」

以前に、

「お前がどれくらい強くなったか見てやろう」

と言ってきたので能力無しの組み手をしたのだが、ギリギリではあったが僕が勝ったのだ。あれから何年も経ってるので父さんには悪いけど完全に抜いてしまっているだろう。でも、能力ありの組み手はやったことがない。父さんと母さんも何らかの力があるらしいのだが、僕が何度聞いても見せても教えてもくれなかった。母さんにも聞いたがただ笑うだけで教えてくれなかった。結局何なんだろうな……、と考えにふけっていると、

「……。」

部屋の隅でいじけていた。一応父親の威厳というものがあったんだろう。負けたとき結構ショックを受けていた。そのことを思い出したんだろう。

「ご、ごめん、ごめん。」

「……まぁ今日も無事に帰ってきたからよしとするか。薬草は永淋ちゃんのとこに届けたのか？」

立ち直るのはやっ、しかもいいのかよと思ったがそれを言うとまたいじけてしまうので言わないことにした。

「いや、急ぎとは言ってたけど一日ぐらいなら大丈夫だって。それに今日は無駄に疲れたし。明日持って行くよ。」

「そうか。それにしても相変わらず二人は仲がいいな。」

「そりゃそうだよ。永淋とは昔からの友達だしね。」

「ほほ～う。友達ねぇ……。」

急にニヤニヤしながら僕を見てきた。

「な、何？」

「いや～別に～。何でもないよ～（ニヤニヤ）」

「…まぁいいや。風呂入ってくる。」

「はいはい。母さんにも遅くなった理由伝えとき。母さんも心配してたから。」

「了解。」

父さんの言動に疑問を持ちながらも風呂へと向かった。その後夕食のとき、母さんに父さんとの会話を話すと、何故か今度は頭に手を当てため息をした。

疑問が増えよくわからなかったが、疲れが出てきたのか眠くなってきたので僕はそのまま部屋に戻りすぐに眠った。

その後、僕が寝た後に「まだ永淋ちゃんの気持ちに気づいてないとはな～（笑）」、「幸生はあれでいて鈍感なのよね。ハァ、いつ気がつくかしら。」という両親の会話があったのは余談である。

翌朝、朝ごはんを食べてからすぐに永淋のところに薬草を届けに行った。家に着いてからおじさんにあいさつしてから永淋の部屋へとまっすぐ向かった。この家はかなり大きく、家というよりは屋敷に近いほど大きかったため初めのころは迷っていたが今ではもう慣れたものだ。部屋に辿り着くと軽くノックした。
すると「入って。」と返答があったので「失礼します。」と一言言ってから入った。

部屋に入ると永淋がこちらに向いたままいすに座っていた。身長はあり、胸も豊かになってきている。昔は肩ぐらいまでしか伸ばしてなかったきれいな銀色の髪も今では腰辺りまで束ねた状態で伸ばしている。服装は赤と青の二色のナース服のようなものを着ていた。
少しの間永淋に見とれていると、不思議に思ったのか尋ねてきた。

「なにか顔についてるかしら?」

「い、いや、何でもないよ。」

「?まぁいいわ。頼んでたもの採ってきてくれた?」

「あぁ、これぐらいでどう?」

「……えぇ。これだけあれば十分よ。ありがとね。」

「どういたしまして。にしても今度は何を作るの？……もしかしてまた科学兵器？」

怪訝な顔をすると軽く笑いながら頭を横に振った。

「今回のは違うわ。ちょっと作ってみようと思ってる薬があるのよ。まだ未完成の状態なのよ。今回頼んだのはそれの材料ってとこかしら。心配してくれてありがと。」

「毎回上のやつらが永淋にあれ作れ、これ作れと命令しまくってるからね。ずっと文字通り休むまもなく働いてるんだもん。身体を壊してないのが驚きなぐらいだよ。そりゃ心配にもなるさ。」

「…そんな事言ってくれるのあなたの家族と父上・母上ぐらいしかいないわ。ありがと、ホントに大丈夫よ。」

「ならよかったけど……、少しは身体を休めなよ。」

「わかったわ。ホントに幸生は優しいわね。」

満面の笑みで永淋はそう言った。そんなふうに言われると急に恥ず

かしくなった。照れ隠しのためにすぐ近くの机に置いてあった物を一気に飲み干そうとした。
このとき、気が動転してしまっていた僕は永淋の部屋、もとい研究室で何なのかよくわからない物を飲むのは危険ということを忘れてしまっていた。
永淋もすぐに気づいて止めようとしたが、すでに僕はそれを飲み干していた。

直後、僕の身体に異変が起きる。

「がはっ！！うう……グフッ。」

身体全体に今まで感じたことのないような痛みが走ったかと思ったら、吐血した。だんだん意識が朦朧としてきた。身体も痛みの代わりに寒く感じ、冷たくなっていくのがわかった。消えゆく意識の中永淋が何かを僕に飲ませようとしている。なんだろうと考える間もなく僕は意識をなくした。

目を覚ますと知らない天井が見えた。いや、よく見ると永淋の部屋の天井だった。どうやらベッドに寝かされていたようだ。身体に少

し違和感があったがまずは起きようと思ったら、なぜか布団の一部が重い。見てみると永淋がベッドにもたれかかって寝ていた。僕が倒れてからずっと看病してくれていたんだろう。

「また迷惑かけちゃったな……。」

昔から僕は永淋に迷惑かけっぱなしのような気がする。なんとも情けない。いつか永淋を守れるようになると誓っているのに……。しかし、なぜ僕は倒れたんだろう。まぁ原因は照れ隠しに飲んだあの薬しかないのだが…。こればっかりは永淋に聞いてみるしかない。とりあえず起き上がるとそれに気づいたのか永淋も起きた。

「あっ、ごめん。起こしたかな?」

「ん…、そうみたい。……ところで幸生、何かあなたの身体に変化もしくは違和感なんかない?」

心配そうな顔をして聞いてきた。

「変化はないと思うけど、少し身体に違和感があるかな。やっぱりあの時飲んじゃった薬かな~。あの薬なんだったの?」

何の気なしに軽く聞くと、言いにくそうにしている。

「えっと、言いにくいんだけど……、落ち着いて聞いてね幸生。」

「えっ何？やっぱりこの違和感あの薬？」

「いいえ、その違和感は別のもの。幸生が飲んでしまったのは……
……劇薬なの…。」

「……えっ？」

やばい薬だとは予想していたけど思わず驚いてしまった。
永淋はそのまま語っていく。

「実は上のほうから毒兵器を作れって言われてて、仕方なく今朝方
その毒薬を作ったの。ちょうど幸生が来た頃に完成したの。その毒
は人間ならわずか数分で死んでしまうほどのものだったの。……ご
めんなさい。」

永淋がすごく申し訳ないような顔をしている。

「でっでも、永淋が助けてくれたおかげで僕しっかり生きてるよ。
ほらこの通り。」

永淋に身体全体を見せるようにして手を広げた。

「だから誤ることないって。にしてもそれだけ危険度の高い毒薬を解毒させるような薬を一瞬で作るなんてやっぱりすごいな。」

そういうとさらに申し訳ないような顔をした。よくわからない。何が問題なんだろう？永淋は何か言うのを迷っているようだった。でも、覚悟を決めたのかついに口を開いた。

「……の薬なの。」

「えっ何？」

声が小さくてよく聞き取れない。

「…幸生に私が飲ませた薬は不老不死の薬なの……。」

今度こそ僕の中の時間が止まったと思った。頭の中が真っ白になり思考も完全に止まっていた。その間にも永淋は説明していく。

「さすがの私も一分間の間にあれほどの毒薬の解毒薬は作れなかったの。未完成だけどこの「蓬莱の薬」を飲ませるしか助ける方法が、」

「…ごめん、ちょっと外に行ってくる。」

何も考えないまま永淋の部屋からフラフラと出た。永淋が後ろでうな垂れているのが気配でわかったが、そんなことを気にする余裕など今の僕には全くなかった。

永淋の家を出てからも僕の頭の中は真っ白なままで途中知り合いに話しかけられてもわからなかった。気づいたときには僕はある丘の上にいた。ここは僕の中では一番心が落ち着く場所だった。だから、無意識のうちにここへ来てしまったのだろう。僕はそこで寝転がり空を見た。ここに来れば落ち着くかと思ったが僕の心が落ち着くことは無かった。むしろさらに真っ白になる。

永淋から聞いた話が今になって頭の中で響く。

≪蓬莱の薬≫

まさか自分があの薬を飲む羽目になろうとは思いもしなかった。

「（これで僕も人外かな。まぁ飲まなきゃいけない状況を作り出したのは僕だから自業自得なんだと思うけどね。というか永淋が言ってた未完成の薬って蓬莱の薬だったのか……。）」

僕は落ち着けてはいなかったが自分の状況に対して冷静に考えれていると思った。でも、

「ハァ……どうすればいいんだろう。」

これからのことはあんまり考えれていなかった。気持ちの整理まではできなかった。

知り合いに、永淋の両親に、父さんたちにどう話すべきかとかを考えようとするとまた頭の中が真っ白になる。どのように話せばいいのかわからない。僕はもう普通の人間ではないのだ。普通じゃないというだけで人は恐れを抱くものだ。それが僕は怖い。

そして永淋ともちゃんと話さないといけない。でも、少し時間を空けたいと思った。そうやってしばらくボーッとしていると、後ろから誰かが走ってくる音がした。

振り向いてみるとそこには永淋がいた。

ずっと走り続けていたのかハァ、ハァと息をはいている。

「……永淋。」

「やっぱり……ハァハァ……ここにいた。」

「心配して探してくれたの?ごめんね、急に飛び出したりして。でももう大丈夫だよ。」

嘘をついた。ホントは気持ちの整理ほとんど出来てないし、混乱している状態だ。
でも、これ以上永淋に迷惑をかけたくない。
永淋のせいだとか思って欲しくない。
だから、僕は今僕の出来うる限りの笑顔を見せながら嘘をついていく。

「でも、これで僕不老不死か。これで長生きできるってことはすごいね。見れるはずの無かったものもこれから見れるなんてホントついてるよ。これからどんなことするか決めとかないと。何をしy」

「無理しないで、幸生。」

でもその嘘は一瞬で見破られた。あせった僕はそれを否定する。

「……えっ。無理なんてしてないよ。さっき大丈夫だって言ったでしょ。だから」

「いや無理してるわ。小さい頃から一緒だった私にはわかる。その感じは幸生が無理してるときってことくらい。」

「……。」

「だから無理しないで。今思ってること全部吐き出して。全部私が受け止めるから。私には…もうこれぐらいのことしかないから……。」

後悔と責任を感じているような顔しながら永淋は言った。

「……ハハッ。永淋に嘘ついていつもばれるな……。蓬莱の薬を飲んだことはホントに後悔はしてないよ。それのおかげで僕はこうして生きてるんだから。ありがとう、永淋。」

「私は褒められるようなことなんか……。」

顔を俯け目をそらす。

「でも、父さん達にこの事どうやって伝えればいいのかわからないんだ。老いも死にもしない……。もう僕は人外なんだ。人間とは堂々といえない。きっとみんなも怖がって」

「人外なんかじゃない！！」

「！？」

「飲ませてしまった私が言うなんて資格はないかもしれないけど‥‥、幸生は幸生なのよ。それ以外の何ものでもない。だから、自分のことを人間じゃないなんて言わないで。幸生が壊れていくとこなんて……グスッ……見たくない。」

それまで我慢していたのか永淋の眼から涙がこぼれていく。

「でも……」

そうつぶやいて僕は目を背けてつぶった。どれくらいそうしていただろう。どちらも話しかけずただ経っていた。
そうしているとまた誰かが走ってくる音がした。
誰かと思い、顔を上げると

目の前に拳がせまっていた。
直後ゴンッと重い音が響いた。

「おごっ！？」

それをまともに食らった僕は一メートルほど吹き飛ばされた。痛む頬をさすりながらも殴ってきた相手を見るとそれは父さんだった。その顔には怒りが張り付いていた。後ろの方には母さんと永淋の両親もいる。皆怒っているように見える。きっと聞いていたんだろう。きっと僕を恐れているのだろう…。何を言われるのかと思うとすぐに逃げ出したくなった。
そう思っていると、

「ふざけたこと抜かすな!!!!!」

「!?」

ものすごい声で怒鳴られた。びっくりして何もいえなくなるくらいに。

「自分が不老不死の薬を飲んだからもう人間じゃない?人外になってしまったからきっとみんな怖がるだろう?ふざけたことをいうのもいい加減にしろ。」

「老いることがないからなんだ!!死ぬことがないからなんだ!!それぐらいのことで私達がお前から離れていくなど本気で思ったのか。そんなわけないだろう!!どんなことが起きても永淋ちゃんが言ったようにお前はお前だ。お前は私達の家族だ。大事な一人息子だ。それだけは絶対に変わらない。これからもずっと。」

呆然としたまま母さんのほうを向くと笑みを浮かべながらうなずいている。おじさんたちも同じだった。

……僕はなんて馬鹿なんだろう。こんなにも僕のことを想ってくれる人たちがいたというのに恐れられるなんて考えをするなんて…。

「…ごめん、父さん。」

「だったら早く永淋ちゃんになんか言いに行ってあげろ。お前を捜すのに必死だったんだぞ。仕方ないとはいえ不老不死の薬飲ませたことに責任を感じていたんだろう。」

「わかった、言ってくる。」

永淋の方を見るとまだ涙を流していた。
また泣かせちゃったな……、と思いながらも近づく。そして、永淋を抱きしめた。突然のことでびっくりしたのか泣きながらも慌てている。

「ちょっちょっといき……ぐすっ…なりどうしたの?」

「永淋の言うとおりだった。」

「えっ？」

永淋を抱きしめたまま話し続ける。

「僕が不老不死になって普通じゃなくなってもそんなことは関係ないってこと。僕は僕、それ以外の何ものでもない。ホントに心配してくれてありがとう。」

「……ええ、どういたしまして。」

永淋も涙を流しながらもそこでやっと笑ってくれた。

「やっぱり永淋は笑ってる方がかわいいね。」

「！！…からかわないでちょうだい／／／／／／／」

笑い声が周りからあがった。僕たちもつられて笑った。
ひとしきり笑った後永淋が思い出したかのように言ってきた。

「幸生、あなたが飲んだ蓬莱の薬のことなんだけどいいかしら？」

「うん、いいよ。なに？」

「今朝も言ったかもしれないけどあの薬はまだ未完成なの。だから完全な不老不死にはなってないの。不老なのは間違いないんだけど、それが起こるのは五、六年先だと思うわ。不死についてはたぶん死ににくい身体になってると思う。怪我をしたり、どこか体の一部が吹き飛んでも治るわ。でも、一気に消滅させられるような攻撃を受けたら死ぬわ。」

「いくらなんでも一気に消滅させられるような攻撃はそうそう受けないだろ。」

「まぁそうなんだけどね。最後にここにいてこの話を聞いた父上、母上、幸生のおじ様、おば様にお願いがあるんだけど。幸生に起こったことはくれぐれも内密に。騒ぎが起きたらまずいから。」

事の重大さは全員分かっているようですぐに返事は返ってきた。

「「わかった。」」

「「わかったわ。」」

こうして、この騒ぎもひと段落がつきいつもの日常へと戻っていった。そして、僕は改めて心の中で誓った。

何があっても、どんなことが起きようともこの大切な人たちを自分の手で守れるように強くなると。

第5話　感じる自分自身の成長、そしてうっかり？（後書き）

今回から会話文の行を二行分空けることにしました。

感想などもらえたら嬉しいです

第6話　月移住計画

僕が蓬莱の薬（仮）を飲んで半不老不死になってから6年が経った。

あれからというもの僕は誰も泣かせないぐらい強くなるため、修行を倍にした。意気込みは良かった。今でもそれは変わらない。

ただ、いくら半不老不死になったからと言って限界の壁を越えてみるものではなかった。

修行を倍にしてから一年もしないうちに過労により倒れてしまったのだ。意識が戻ってからすぐに怒られた。父さんとか永淋とか母さんとか永淋とかおじさんたちとか永淋とか…。特に永淋の怒りようが凄まじかった。新薬？の効力を知るために臨床試験しようとしたのだ。というかされた。薬の効力はなんだったかいうと……割愛させていただく。未だに思い出すだけでも背筋がぞっとするのだ。せめて表現だけでもいうのならば、初めて土蜘蛛に襲われたときよりもすごいことになったとだけ言いたい。

永淋コワイ永淋コワイ。

それからは無茶をしない程度に修業を増やした。そのお陰もあってかさらに二年ほど経ってこの街の守護隊長を任されるほどになった。仕事内容は街の境界線の所に僕特製の防壁を作り上げ妖怪の侵入を防ぐことだ。永淋が作ったバリアと織り交ぜた壁なのでまず破壊されることはない。現にこれまで一度も破壊されたことはない。自分

で言うのもなんだが自信作なのである。

隊長を任されてから一年った頃におじさんたちが死んでしまった。原因は事故だった。その場に居合わせなかったから詳しいことは分からないが転落事故だったらしい。

その知らせを受けたときの永淋の悲しみようはとても大きかった。仕事に手がつかず何日も一人になってしまった家に引きこもってしまった。久々に家から出てきた永淋の眼は真っ赤になりくまが出て、疲れた顔をしていたが、吹っ切ることが出来たのか僕に向かって弱弱しい笑みを浮かべていた。

それ以外は特にこれと言って変わったこともなくごく普通の、そして平和な日が続いていた。そんな時だった。永淋が僕に月への移住計画について話してきた。

「月移住計画？」

「そうなのよ。何でも地上には穢れが多い、だから穢れの一切ない月へと移住しようって計画らしいわ。それに今までこの街の流れる時間を操って遅らせる能力を持った人も限界らしくてね。」

「まぁその人は仕方ないよね。というかよく今まで広範囲に長期間行使できたね…。にしても穢れって、妖怪のことかな？いかにも上の連中が考えそうなことだけど……。」

「たぶんそれもあるのでしょうけど、月では時が進むのが遅いってうわさがあるらしいからそっちが本音でしょうね。」

「…ハァ、いかにもって感じだね。」

「まったくだわ、月へ行くためのロケット作るこっちの身にもなって欲しいものだわ。」

「大丈夫なのかい？あんまり無茶はしちゃ……。」

「大丈夫よ、無茶して倒れるなんてこと私はしないから。」

「うぐっ。」

なんか言葉が胸に突き刺さってくるよ。的確に中心を。

「幸生こそまた無茶してないでしょうね。してるんだったら今度はこの薬の臨床に…」

「してないしてない。無茶なんてしてないからその手に持ってる薬どっかにしまって！頼むから。」

永淋が今手に持っている薬の色が異常なほどにどす黒いのだ。あれを薬と呼んでいいのかと思ってしまうほどだ。僕の本能が全力で警鐘を鳴らしているんだよ、さっきから。
ぶるぶる震えていると信じてくれたのか薬?を下げてくれた。

「…そう。ならいいのよ。」

「(何でそんな残念そうな顔するのかな。やっぱりこわー。歳をとってくるとみんなこうな…)」

ビュンッ!!

僕の頬のすぐ横を何かが掠めた。見てみるとそれは矢だった。コンクリに深々と突き刺さっている。冷や汗をかいていると、

「何か言ったかしら?<ニコッ>」

「何も言ってないであります、永淋殿!!」

何の比喩もなくリアルに怖い、怖すぎる。半不老不死だからまず死ぬことないけど死ぬほど怖い。

「……まぁいいわ。それで幸生に頼みたいことがあるんだけど……。」

「…ブツブツ（永淋こわい永淋こわい永淋こわい永淋こわい永淋こわい）」

「ちょっと聞いてるの？」

「……ハッ。えっと何、頼みって？」

「（聞いてはいたのね。）ロケットを作るにあたって少し手伝って欲しいのよ。」

「僕が？ロケットのことは何にもわかんないよ。」

「幸生がわからないのは知ってるわよ。そうじゃなくてロケットの外壁と内壁を強化して欲しいのよ。幸生の能力ならうってつけでしょ。」

「まぁ確かにね。それぐらいなら僕でも出来る。引き受けたよ。っていうかそれ以外選択肢ないでしょ？」

「あら、わかってるじゃない。さすが幼馴染なだけのことはあるわ。」

「……どうも。そういえば一つ報告あるの忘れてた。」

「あら、何かしら？」

「街の境界線に張ってる防壁のことなんだけど、最近になって気になることがあったんだ。防壁そのものには異常はないんだけど、防壁破ろうとしてた妖怪たちが全く来なくなってるんだ。」

そうなのだ。僕と防壁はリンクしている状態なので現在どうなっているかが逐一わかるようになっている。これまではこの街にいる人間を食べようと攻めてくる無知な妖怪が防壁にぶつかっては帰ってぶつかっては帰ってと鼬ごっこをしていたのだが最近になってぷっつりと来なくなったのだ。

「やっと無理だと観念したんじゃないの？」

「だといいんだけど……。なんか嫌な予感がしてね。」

「…それぱかりは私でもわからないわね。気にしすぎじゃないの？」

「そうかな……。まぁ一応報告はしたよ。」

「ごくろうさま。」

「まぁこれも仕事のうちだからね。じゃ、また来るよ。」

「えぇ、今度来た時はさっきの薬の臨床試験やってもらおうかしら。」

「謹んで遠慮させてもらいます！！」

「あら残念。」

永淋……笑顔がまぶしすぎるよ…。

「じゃあ今度こそまたね。」

「えぇ、また。」

永淋の家を出てから歩き慣れた街を歩きながら先ほどの会話を僕は考えていた。そしてすぐに詰め所に寄ることにした。やはり、急に妖怪たちが来なくなったことが気になったためだ。だから、詰め所に戻ってから隊員たちに少し偵察に行ってもらおうと思ったのだ。今の時間なら隊員たちは外を監視しながら書類を書いたりしているはず。

詰め所に向かっていると馴染みの八百屋のおじさんが声をかけてきた。

「おう、幸生さん。調子はどうだい？」

「あっ、どうもです。問題ないですよ。それよりもさん付けはやめてもらえませんか？僕のほうがはるかに年下なのに・・・。」

「この街を守ってくれてる隊長殿に呼び捨てはできネェ、いやしたくない。お前さんと永淋さんのおかげで平穏なんだから。」

「そう言ってもらえるとうれしいです。頑張りますよ！！」

「おう、よろしく頼むよ。」

そういって八百屋のおじさんと別れて詰め所へと再び向かった。
僕のことをいや僕を含めて隊員達のことを信頼し感謝してくれることはホントにうれしいものだ。きっと疲れてる隊員たちもこれを聞いたら疲れなんて吹っ飛ぶだろう。少し休ませてやろうか・・・。まぁそれも偵察を済ませてからになるけど・・。

「皆も疲れてるだろうに……。申し訳ないな。」

今度何かおごってやろうと思いながら詰め所に入ると、

「よっしゃぁぁぁぁぁ!!後はおまへだけら～!!」

「くっほ～。まらまら～。そっひもおまへだけらろ～!!」

なぜか酒の飲み比べをしていた、全員がだ。床を見てみればダウンしたやつもちらほらいる。そして今生き残った二人、副隊長の守(まもる)と、閃(せん)が次のラウンドに入ろうとしている。

……これ怒っていいよね、僕隊長だし。
隊長なんだからちゃんと僕がやらないと……。
だから、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしなくちゃ。

右手の手のひらに霊力を溜めて球状にした。直径が三十センチぐらいになるまで溜めたところで馬鹿やってる隊員共に声をかける。

「お～い、君たち～。ちゅう～も～く。」

「何だよ、今いいほころ…！？」

二人は声が聞こえた方へと振り向きそこでやっと僕に気づき顔を青ざめ冷や汗をかいてる。だがもう遅い。

「僕がさっきまで思ってた言葉返せーーーーーー！！！！！」

射出と同時に詰め所にいる隊員たちの人数分に霊弾が分裂し向かった。床に転がっているやつから次々とあたって吹っ飛んでいく。生き残っていた二人は回避しようとしていたが無駄にホーミング機能も付けたので見事に命中。

おみごと！！

数秒後目標全て撃沈。まるで屍のようだ……。

「かっ勝手に殺さないで……ください。」

「おー、生きてた。」

みると他の隊員たちも意識が戻ったようだった。
とりあえず全員正座をさせる。

「さてと、何でこんな昼間っから飲み比べなんかしてたのかな？」

先ほどより少し大きい霊弾を手のひらに浮かせながら尋ねる。

「そっそれは……。」

「どうしたんだい？いえないようなことでも話してたのかい？＜ニコニコ＞」

「（どっどうする？［守］）」

「（どうするったって、話せるわけないだろ。よりにもよって隊長だぞ。［閃］）」

「（隊長に永淋さんの気持ちを伝えるか、何もせずに見守るかについて論争してたらこうなったとは言えないしな。言ったらまたやられるぞ…。［閃］）」

「（だけど何も言わなくてもやられるしな。［守］）」

なにやらこそこそと話しているようだが、今の僕は少しばかり沸点が低いからもういっぺんやっとくかと思ったところで隊員の優が挙手した。

「なんだい、優？」

「ハイ、隊長は永淋さんと付き合っているんですか？」

「（直球いったー、この天然め！！［守・閃］）」

「なんだそのことかい。僕は永淋と付き合ってないよ。そもそも僕と永淋は幼馴染で友達だよ。そうなるわけないじゃないか。」

そういうと何故か副隊長含め全員がこっちを遠い眼で見ながらハァ～と思いため息をついてきた。意味がわからん。

「（ホントに隊長って筋金入りの鈍感っぷりだよな…。［閃］）」

「（仕方ないよ、あの隊長だし。［守］）」

「まぁ今回のことは不問とする。それよりもみんなにやってもらいたいことがある。」

霊弾を消して、少し真剣さを増した声で言うと全員真面目な顔になり指示を待っている。

「最近襲撃しようとしていた妖怪たちが突然プッツリと現れなくなったのはわかってるな？奴らが諦めたとも考えたがそれにしてもやはり気になる。そこでだ、今から防壁との境界線を基準にして何か異常があるか街の周囲、及び森の中を捜索することにする。余計な仕事を増やしてすまないとは思うがみんな、やってくれるか？」

街の中からの監視だけの仕事なのに別仕事をさせられ、しかもわざわざ妖怪たちがいる森の中に行くのは嫌だろう…。断りはしないだろうが拒否の表情をさらすと思ったが、

「もちろんですよ、他でもない隊長から直々に俺たちに頼んでくれてるんですよ。［閃］」

「確かに仕事が余計に増えますし、危険もあります。でも、それ以上に隊長に頼ってもらえてるいるんですよ。自分たちにしてみたら嬉しいばかりです。［守］」

と言ってくれた。他の隊員たちも口には出していないが笑顔のまま頷いてくれている。

「ハハッ、ホントに僕はいい部下を持ったみたいだね。誇らしいよ。」

「そうでしょそうでしょ。」

「調子乗りすぎたり、はめをはずしたりするけど……。」

「すッすみません！！［閃・守］」

「まぁそれは置いといて、具体的な指示を出すよ。」

「はい。」

「まず、捜索するに当たって隊を三つに分けることにする。一つは

閃副隊長、君に任せる。」

「了解です。」

「二つ目は守副隊長に。」

「了解しました。」

「最後は僕ね。」

そういうと全員驚いた顔をしていた。

「隊長も出るんですか！？これぐらいのこと自分たちに任せてもらえれば…。それともやはり心許ないですか我々だけでは…。」

今度は沈んだ顔になった。みんなコロコロ表情が良く変わるなぁと思ったが、とりあえず誤解をとくことにした。

「違う違う。君達だけでも十分やってくれると思うよ。皆が優秀なのは僕が一番知ってるからね。みんな頑張ってくれるのに僕だけ待ってるのは性格上できないんだよね。それに僕隊長だし、みんなの身を預かってる身だからね。万が一のことがあってほしくないんだ

よ。」

「そういうことでしたか……。すみません、勝手に早とちりしてしまい。」

「全然問題ないよ。それじゃあ、先ほど言ったように隊を分かれて。何か異常、若しくは情報が入ったらここに戻るように。妖怪を発見しても襲ってこない限りは戦闘をしないように。これでいいかな？」

「わかりました！！！」

「よし。それじゃ、お仕事開始！！」

捜索を始めてからも４時間ほどが経った。やはり、妖怪たちがいなくなっていること以外は普段となんら変わりはなかった。

日はすでに東へと落ちかけて夕方が終わろうとしていた。さすがに夜になると危険度がさらに上がるのでとりあえず捜索は明日に回すことにした。それを他の隊員に伝えようとした所で、

「グラァァァァァ！！」

一匹の妖怪が襲い掛かってきた。
その攻撃を大きく後ろにジャンプして避けると同時に牽制気味に霊弾を放つ。空中に居たためか避けられずに命中し煙が上がった。煙が晴れると多少ダメージはあったようだが立っていた。姿からしておそらく熊の妖怪の様に見えた。
隊員たちが銃を構えたが、それを腕で制止し後ろに下がらせた。

「さぁて、今まで出てこなかったのにどうしたのかね？まぁ返事は期待していないけど…。」

「グルルルル……。ニン…ゲン、ヒサシブリノ……ニンゲン。」

意外にも返事が返ってきた。片言だが聞き取れる。

「イママデオサニ…イワレテガマン…シテキタ。デモ…モウムリダ。」

（長に言われて我慢していた？我慢の限界？
気になること言ってくれるねぇ、駄目もとで聞いてみるか…。）

「なぜお前たち妖怪は我慢していたのかな?」

すると馬鹿なのかすぐに答えてきた。そして、その返事に驚愕する。

「ワレラ…ヨウカイゼンインデオソウ。アトスウジツデココノニンゲンドモヲオソウ。ダガシンパイ……スルナ。オマエタチハココデクワレルノダカラァァァ!!」

言うだけいうと飛び掛ってきた。普段の僕ならくれぐらいの不意打ちは不意打ちにもなりはしない。だが、先ほどの発言に驚き対処が遅れたため、自分の体に障壁を張るのでギリギリだった。ガンッと鈍い音が聞こえ僕は五メートルほど吹き飛ばされた。それを好機と思ったのか鋭い歯で食いちぎろうと再度飛び掛ってきた。体勢を立て直すためにも今度こそ強固な壁を出そうとしたところで、

ダダダダダダダダッ!!!

後ろに控えさせていた隊員たちの持つ銃器が火を噴いた。僕の数十メートル後ろにいたとはいえそれに気づかなかった妖怪は為すすべもなく一瞬のうちに蜂の巣になった。排除したことを確認したのかみんながこちらへ来る。

「隊長!!大丈夫ですか!!お怪我は?」

「ああ、問題ないよ。ありがと、ナイスタイミングだよ。」

ほっとしたのか顔が緩む隊員たち。

「しかし、どうしたのですか？あの程度妖怪、隊長なら楽々倒してしまうはずなのに……。一体あの妖怪は何を話したのですか？」

「……一度詰め所へ戻るよ。事が事だけに今ここで話すべきじゃない。戻ったら話すよ。閃副隊長、守副隊長ももう戻っているはずだしすぐに戻るよ。」

「はい！」

詰め所に戻った僕の隊は戻ってきていた閃と守たちも含めて妖怪から聞き出した情報を伝える。全員が驚いていた。無理もない僕も思わず戦いの最中だというのに一瞬硬直してしまったほどだ。

「その情報が嘘であるということはないのですか？」

守が言ってくる。その顔には嘘であって欲しいという表情でいっぱいだった。無理も無い。

「そうであって欲しいけど…おそらくあれは本当だよ。あの妖怪の言動もそうだけど最近妖怪たちが襲わなくなってたこととも辻褄が合うからね。妖怪たちが総力をあげて襲おうとしてるんだからこれまでは集めるための準備期間だったんだろう。だから、襲ってこなかった。まぁあの妖怪はそれが我慢できなかったようだけどね。」

そういうと守も黙った。

「僕はこれから幹部の者たちにこれを伝えに言ってくる。そのあと、永淋に月移住計画のためのロケット作成を早める必要があることを伝えに行く。みんなはこのまま監視を続けてくれ時間ごとに交代制にしてやるんだ。守副隊長と閃副隊長はすまないけど詰め所からは離れず休憩を挟みながら監視に当たってくれ。動きがあったら閃副隊長頼むよ。」

「まぁこんなときに自分たちの能力はピッタシですしね。頑張りますよ。」

「だな。」

守には『感知する程度の能力』、閃には『転移する程度の能力』がある。何か動きがあったときには守がその動きを即座に『感知』し、それを早急に知らせるために閃が僕のいる所に『転移』して伝える。緊急連絡網としては最高なものだと思っている。だからこそ、二人を副隊長にしたのだ。戦闘時にも使えるそうなのでその辺りも心配はない。

「じゃあよろしく頼むよ。」

そう言って僕は詰め所を出て幹部の元へ向かった。情報を伝えるとすぐに永淋の所に行って状況を伝えた。初めは永淋も驚いていたがすぐに平静に戻りロケットの完成を急ぐと言った。この街の者達が全員乗れるほどの数を作るには少なくとも五日間はかかるらしい。そして出発するにはさらに半日ぐらいかかるらしい。この街にいる全員を連れていくとなるとそれぐらいはかかるだろう……。

（何とか間に合ってくれるといいんだけど……。）

それから五日が経ちついにロケットが完成したという朗報が永淋か

ら届いた。すぐに、永淋の所に行った。永淋は見れば一目でわかるほど疲れているようだった。

「だっ大丈夫かい、永淋？無理しちゃだめだって。」

「あら、……幸生もかなり無茶していたようだけどそれはどうなのかしら？一睡もしていないとか。」

永淋はフフッと小さく笑い意地悪そうな顔をしていってきた。

「うっ……一応寝たよ。」

「ほんとかしら～。＜ガクッ＞あっ。」

いきなりバランス崩して倒れてきた。それを慌てて抱きとめる。

「ほらっ、やっぱり無理してる。ロケットは完成したんだから、永淋は休んだほうがいいよ。」

「……。」

何も返事がない。抱きとめていて顔が良く見えないので覗きこんでみると顔を真っ赤にしていた。

「永淋、顔が真っ赤じゃないか。熱でも出たｎ」

「何でもない何でもない、熱出てないからとりあえず離して。」

顔を真っ赤にしたまま僕から離れて落ち着こうとしている。まぁ熱がないならいいんだけど。

「でも、妖怪たちが一斉に襲ってくる前に完成してよかったよ。これで脱出できる。」

「そっそうね。」

なんとかなると思ったら少しほっとした。とりあえず一息入れるかなぁと思った所で、

「幸生隊長！！」

僕の目の前に閃が転移してきていた。

「うぉっ!?びっくりした～。なかなか慣れないなそれ。……というか閃が転移してきたって事は!!」

「はい、守が妖怪たちが一箇所に集結していまにもこちらへ向かおうとしていること感知しました。」

「くっ、このタイミングで来るとは‥。永淋!!」

「わかってるわ、すぐに発射できるように準備するわ。」

「うん、お願い。閃!!」

「はい!!」

「すぐにこのことを幹部に伝え街の全域に知らせるんだ。混乱させないように誘導頼むよ。」

「了解!!」

すぐに閃は転移して消えた。
僕も永淋と別れて守がいる詰め所へと急いだ。走ると時間がかかる

ので飛んで向かった。
詰め所に着き守を探すと高台の上に座って眼をつぶって索敵を続けていた。

「状況はどうなってる。」

「はい、まだこちらへは向かってきてはいませんが妖怪たちがどんどん集まってきています。この軍勢で来られたら防壁が持ちませんよ！」

「そんなことはわかってる！！閃に知らせるように命令しておいたから各自住民をロケットへ誘導させるように、残ったものはこれから武装を固めておくように。」

「はい！！」

後の世代でこの戦いを人妖大戦と呼ばれた。

第6話　月移住計画（後書き）

少し遅れました。
あと新しいキャラクター出してみました。

第7話　人妖大戦（前書き）

だいぶ遅れたー

第7話　人妖大戦

妖怪襲撃の報せを受けた街の者達は一斉に荷造りし始め、すでに街には僕の隊を含む守護隊、永淋、そして一部の守護希望者以外には誰もいなくなっていた。きっと大半の人たちはもうロケットに乗り込んでいるだろう。

「守、いまどれくらいの数になっている？」

「すいません、妖怪たちの数が多すぎて把握し切れません……。」

「そうか……、引き続き感知を続けて。動いてきたらすぐに合図を。」

「はい！！」

「とりあえずよしとして……何で父さんたちがいここにいるのかな？」

すでにロケットに向かって避難しているだろうと思っていた、父さんと母さんが守護希望者の中にいたのだ。

「何でってそりゃあ、守護するため？」

「守護するためって……わかってるの父さん！！これはロケットが無事発射するように足止めするためっていうのは、つまり一番最後のロケットに乗るんだよ。それまでに死んでしまうかもしれないんだよ！！」

「それも覚悟のうえだ。ここに集まっているものはみんなそうだ。それに父さんも母さんも結構強いんだぞ。」

ムンッと力瘤を見せてきた。

（冗談かましてる場合じゃないのに…。）

永淋がこっちに来たので父さんたちから離れた。

「やっぱり残るって？」

「ご名答。ああなったら言うこと聞いてくれないからね。まぁこうなったからには死なせはしないよ。」

「そう…。私も残って一緒に戦うわ！！」

「いや、それは駄目だ。永淋はすぐにロケットに乗って脱出するんだ。みんなが永淋を必要としている。」

「そんなの絶対私は嫌よ。幸生やおじさま、おばさまを残して先に行くのは嫌。」

永淋の顔は決意と覚悟に満ちていた。

「そうか……、わかったよ永淋。一緒に戦おう。」

「ええ。そうだわ…幸生に渡しておきたいものがあるの。」

そう言うとポケットから小さなブレスレットを取り出した。赤と青の二色で彩られたものだった。

「永淋、これは?」

「なんでもないただのブレスレットよ。この際だから渡しておこうと思って。」

腕にはめてみるとぴったりだった。

「ありがと永淋……。そうだ、成功を祈っていっぱいだけ飲まないかい？」

「いいわね、飲みましょ。」

僕はあらかじめ用意しておいたコップに酒を注ぎ永淋に手渡した。

「じゃあ勝利を祈って…。」

「「乾杯！！」」

グイッと僕たちは一気に飲み干した。
そして永淋が前に進もうとしたと時、永淋の体がグラッと揺れた。

「！？幸生…、あな…た……まさか…。」

何が起こったかを瞬時に把握したようだったがそのまま永淋は倒れた。
原因はさっきの酒に無味無臭の睡眠薬を入れておいたのだ。それも強力なやつを…。

「ごめんね、永淋…。君だけは…、君だけには傷ついて欲しくない、死んで欲しくないんだ。」

倒れた永淋を見下ろしながら僕はそうつぶやいた。

「閃、永淋をロケットの所まで連れて行ってくれるかい？」

「…いいんですか、隊長？」

「……頼む。」

閃には今の僕がどんな風に見えたのだろう。淡く笑みを浮かべ、一礼してから永淋を抱きかかえロケットの場所まで転移した。しばらくそこに立っていると守が叫んだ。

「幸生隊長！！やつらがこちらへ動き出しました。衝突までおよそ十分！」

「そうか……。総員配置に付いて！民間人守護希望者の方々は後方で援護及び支援に徹してください！！脱出ロケットが無事発射されるまで持ちこたえるんだ。その後に僕たちも退却しつつロケットに乗りこの街を脱出する。この時、優先的に民間人の方から避難させ

る。」

「はい！！」

一斉に防具や光線銃などの武器を装備し、指示された配置へと次々付いていった。

静寂が街を包んだ。緊張と場の雰囲気によって誰もしゃべれない、いやしゃべられない。
ゴクリッと誰かが息を呑む。
そしてついにその静寂は破られた。

「来ます！！」

オオオオオオオッと雄たけびを上げながら数え切れないほどの妖怪たちが突っ込んでくるのが目視できた。

「僕が撹乱させるから各自それに合わせて！！」

そう言って僕は妖怪たちの群れの真下に突き上げるようにして巨大な土壁をいくつも出現させた。それにより三十体ぐらい撃破したがまだまだ残っている。減った気が
全くしなかったがこちらの思惑通り何が起こったかわからず立ち往生していた。

「突撃～！！」

「おおおおおおー！！」

戦いの火蓋が落とされ、人と妖怪が激突した。

僕も進むと熊のようなやつがいきりたってこっちに向かってきた。振り下ろしてくる爪を僕は後ろに後退して避けるのではなく、前進しつつ避けた。そして目の前の敵の顎に拳底をいれ、怯んでいるうちに土壁で突き上げる。それと同時に敵の頭上から空壁を下に伸びるように出現させ頭を挟みこみ潰した。

隙ありとばかりに後ろからの攻撃を瞬時に出現させた空壁で防いだ後、空壁を十個ほどに分解しその敵に向けて全射出。四角い風穴をいくつもあけて倒れた。

一対一では敵わないと思ったのか数十体で突っ込んできた。
それを見て僕は詰め所で隊員たちに放った霊弾を両手に溜める。
ただし、以前のように非殺傷ではなく殺傷状態にする・・・溜める濃度もどんどん濃くなっていく。
ある程度近づいてきた所で溜めた霊弾を両手を突き出して放つ。反応し切れなかった妖怪はそのまま消滅し、ギリギリ回避した者も放たれた霊弾から出たホーミングレーザーに頭を貫かれ即死した。

油断することなくすぐに自分の周りを確認した。
どこを見ても乱戦状態になっている。民間協力者たちのところまでは進まれてはいないがこの数だと時間の問題だ。戦いの中に再び身を投じようとしたところで閃が戻ってきた。

「すいません、遅れました。無事永淋さんをロケットに送り届けました。」

「うん、ありがと。それで、ロケットの発射時刻はあとどれぐらい？」

「約三時間ほどのようです……。正直言って厳しいです。」

「確かに…。だけどやるしかないんだよ。僕たちがやらないでだれがやる？」

「そうですね……。遅れたぶんがんばりますよ！！」

「その意気だ。守！！いるかい？」

「自分が連れてきます。」

そういうと閃は守の所に転移した。一度覚えた場所やよく知っている人物ならすぐにその場所へ転移できるらしい。某ゲームのテレポートみたいだ。

すぐに閃は守を連れて戻ってきた。

「よし、生きてるね。」

「だから、勝手に殺さないでくださいって。」

呆れた顔して守が言ってくる。

「閃、守。君たちが指揮を執りながら戦闘してくれ。僕は一人で行く。」

「幸生隊長、一人はさすがに…って隊長なら大丈夫か。（今までやってきたことを思えば問題ないでしょ。）」

「そうだな、なんたって隊長だし。（罰を受けさせてくるときの隊長ある意味鬼だし。）」

二人してウンウンと頷いている。あっこいつら今失礼なこと考えてる。

「失礼なこと考えてる二人にはこれが終わったらお仕置きするとして…。」

「「なぜバレタシッ」」

「もう一つだけ命令する。……生き残れ。」

「「…了解！！」」

「よしじゃあ逝け！」

「「字が違います！！」」

そうツッコミながらも二人は再び戦いへと戻った。

（よし、僕も行くかな。ロケット発射まで後約三時間。持ちこたえてみせる。）

そして戦場へと戻った。

「ハァ…ハァ…。」

あれからどれぐらい経っただろう……。何十体、何百体倒したかわからないがまだ妖怪たちは残っている。

こちらの被害がかなり出ている。他の隊はあまり残っていない。僕の隊も死傷者が出始めている。

だが、悲しむ時間も与えず妖怪たちは攻めてくる。残っている者たちも長時間の戦闘により時間とともに疲れと傷が増えている。

「まだでないのかロケットは…。」

そう愚痴っていると誰かが叫んだ。

「見ろ!!発射されたぞ!!」

その声を受け上空を見上げると確かにロケットが三機月へと向かっていくのが見えた。

「よし、撤退だ、みんな引け！閃、生き残っている者全員をロケットの所まで転移してくれ！！」

「む、無理ですよ。対象が多すぎてできません。一纏めに出来れば……。」

「要するに対象を一つに絞らせればいいんだな？みんな何とか広場の方まで集まってくれ！！」

「えっあっはい！！」

慌てて広場へと全員急いだ。
元より勝ち目などないのだ。あくまで時間稼ぎなのだから。

全員広場の一箇所に集まった所で、両手を前にかざしすぐに取り掛かった。

「いくよ～、空壁牢！！」

人々を閉じ込めるようにして空気の牢を作った。この空壁牢ごと転移するのであれば一つだ。

「なるほど、確かにこれならいけますが、大きすぎて時間がかかります。転移するまで待ってはくれませんよ、あいつら。」

閃は僕の後ろを指差したので見てみると無茶苦茶な数でこっちにせまってくる。２００はいるんじゃないだろうか。

「あれは僕がいますぐ消すよ。」

「でっでもどうやって…。」

「いいから閃はそっちに集中して。」

そういうと妖怪たちに向き直る。
うわ～たくさんいるね～。こういうときこそ多勢用に作った技使うか…。
まずは広場の入り口前まで引き寄せる。
まだ…まだだ！・・・・・・・・・・・・・・・・・・よし、今だ！！

「土壁挟撃！！」

両手を地面に叩きつけると妖怪たちの両脇に巨大な土壁が飛び出てきて、それが何なのか確認させる暇も与えずにそのままものすごい速度で挟み潰した。

グシャァァと何かを潰したような生々しい音が響き土壁の間から血が溢れ出ていた。

「妖怪サンドイッチの出来上がり～、食べないけど。」

（えげつな～。）

まだ妖怪は残っていたが今の攻撃を見て恐れを覚えたのか中々こちらへ来る様子はない。

「今のうちに！！」

「あっ、はい！」

我に返った閃はそこでやっと転移させた。
転移したのを確認してフゥと息が漏れた。

「大丈夫ですか、幸生隊長？」

「大丈夫。あの技けっこう強いんだけど体力の消費が激しいんだよね。結構疲れた。それはいいとして僕たちも行こう。そろそろ妖怪たちが来るよ。」

「はい、じゃあ行きますよ。」

そういって閃は一緒にロケットまで転移した。

ロケットがある場所まで転移したが、様子がおかしかった。
先に転移した人たちがまだだれもロケットに乗り込んでいないのだ。

「幸生隊長!!こっちに来てください、急いで!!」

一足早く到着していた守がロケットの前でなにやらあせった様子で呼んでいる。

「どうしたの?」

「これを見てください。」

言われた方を見てみるとなんとロケットの主要なケーブルがいくつ

も断線し、ブースターも壊れていた。

「なっ！？」

「そんな！永淋さんを連れてきたときにはこんな風にはなっていませんでした。」

状況がつかめないでいると不意にロケットに設置されていたモニターが起動した。そこには先に月へと向かった幹部たちが映し出されていた。

『やぁ幸生君。君たちのおかげで我々は無事脱出し月へと向かうことが出来た。まぁ感謝でもしておこう。』

「何ですかその言い方は！もっと言い方ってものがあるでしょう！！」

守が反論したが無反応だった。おそらく録画のようなものを残したのだろう。
そして次に発せられた言葉に驚愕した。

『だが君たちの役目をそこで終わりだ。君たちは穢れの象徴ともいえる妖怪と戦いより多くの穢れを吸っている。地上の穢れから逃れ

るために月へ行くのにその穢れたっぷり吸った君たちが月へ来てしまっては我々にも穢れが及ぶ。よって君たちは置いていくことにした。』

「ふざけるな!!それが必死に食い止めた僕たちにすることか!!!」

意味がないとわかっていながらも思わず叫んでしまう。この幹部いかれてる。怒りでどうかなってしまうのかとも思った。

『きっと怒っているだろうね。だけど幸生君、それは筋違いというものだよ。君たちには足止めをしてくれと頼んだ。だが、足止めした後に月へ来いとは言ってないよ。』

理不尽にもほどがあった。こいつらは最初から僕たちを捨て駒として使うことしか考えていなかったのだ。

ロケットが使えないとなるとなんとかして街の外へ行き遠くに逃げなければならない。
どうすればいいか考えているとモニターからさらに度肝を抜かれることを言った。

『だが、私たちにも慈悲というものがある。よって穢れ吸い取ってしまった君たちの身体を浄化するため妖怪たち共々殺すことが決定された。』

「！？」

『我々が住んでいた街を一瞬で消し飛ばすほどの爆弾をさきほど投下させてもらった。なに、穢れが消えるのだから問題あるまい？ああそれと、幸生君。君が前から気になっていたことを一つ教えてあげよう。』

『永淋殿の両親が死んだ件だがあれは事故ではなく私たちが殺した。』

「！？」

『あの二人が生きていると月に行ってからのことを考えると何かと邪魔になりそうなのでね。だから死んでもらったよ。』

「貴様ッ！！」

『それではさようなら。』

ブツン――とモニターが切れた。
周囲が静まり返っていた。

そして次の瞬間みんなパニックに陥った。あまりの絶望に泣き崩れるもの、発狂するもの、どこか出来るだけ離れようと走り去っていくものと状況は散々だった。

「「幸生隊長……。」」

守と閃もあまりの現実にショックを隠せないようだった。父さんたちの姿が見えないのが気がかりだが確かめないといけないことがある。

「外に出るよ、あの話がホントなら爆弾が見えてくるはず。」

「「……はい。」」

そう言って僕たちは外へと向かった。

外へ出ると街から出来るだけ離れようと叫びながら逃げていく人々でいっぱいだった。中には守護隊の者たちもいる。精神的にも訓練されている者たちだったがこの状況に耐えられなくなったようだった。

無理もない、僕たちでさえ困惑しているのだ。

「くそっ、爆弾はどこから……。」

降ってくるであろう爆弾探すため空を見上げ探していると、

「「隊長！危ない！」」

二人に突き飛ばされた。何事かと二人のいる方へ顔を向けると、

「だ、だいじょう…ぶです…か？」

妖怪の攻撃を庇って切り裂かれた二人がいた。
妖怪は未だ倒れない守たちに止めをさすために攻撃しようとしていた。

「せ…ん、右から…横なぎに……攻撃来る…。」

「りょう、かい！！」

守が『感知』したとおり右からの横なぎの攻撃が出された。それよ

りも早く閃が妖怪の後方に『転移』して回避した。そのまま後ろから二人は残った霊力を使って妖怪に弾幕を放った。
後ろからの突然の攻撃に対処できずその妖怪は倒れた。それと同時に守と閃も地面に倒れた。すぐに僕は二人の下へ駆け寄った。

「閃!!守!!」

「すい…ません、お手伝い……できそうに…ない…みたいで…す。」

閃が弱弱しく言った。

「そんなことはいい、すまない!!すぐに手当てを…。」

「いいん…です。これは自分たちが好きで……やったことです。それにもうだめだってこと…はわかるん…ゴフッ。」

血を口から流しながら守もそう言った。

「すいません、壁に…寄りかかさして…もらえますか?」

僕はゆっくり傷に響かないように二人を壁に寄りかからせた。弱弱しく息をしながら話してくる。

「隊長…私たち…はもう…ハァ…ハァ…だめです。でも、あな……たは生きてください。ハァ…死んでは…いけない、そんな気が…ハァ…ハァ…するんです。」

守は息が絶え絶えになりながらも懸命に僕に伝える。

「死んで……しまうことには…未練あります。でも、ハァ…ハァ…幸生隊長の部下だったことは…誇りです。だから……これまでの人生には悔いはないです。ハァハァ…あなたの部下で本当に…良かった。」

閃も微笑しながらいってきた。そうしている間にも二人から精気が見る見る消えていくのがわかった。

「二人とも死ぬな!!僕を……僕を一人にしないでくれよ。」

思わず涙が出てきた。

「泣かないでくださいよ、隊長が……それでは…どうするん…ですか?」

「そうです…よ…私たちの…上司なん…ですか…らもっとしっかり…。」

逆に励まされてしまった。今までもそうだった。いつもふざけてはいるが僕のことをちゃんと考えていてくれた。

「「ガハッ。」」

また口から大量の血が吐き出された。傷口からもさきほどから止めようとしているのだがどんどん血が溢れ出てくる。

「止まれ止まれ止まれ止まれ！！」

「「幸生…隊長、…後はおねが…い……します。」」

それを最後に二人は動かなくなった。
いつまでもこの場にいたかった。二人から離れたくなかった。でも、守と閃は最期にこう言った。

『『後はお願いします。』』

今僕が出来ることは爆弾を食い止めること。それしかない。

涙を拭って再び爆弾を探した。しばらくそうしていると、

「見つけた！！」

巨大な爆弾が街目掛けて落ちてくるのが見えた。もうすぐ街の上空の辺りに到達しそうだ。あれは着弾して爆発するタイプではなく時限タイプだったはず…。永淋が前にそう言ってた。

僕は意識を集中させ、迫り来る爆弾の目の前に今出来る最も大きく強固な空壁を展開した。

ズアッと大きな音を立てて爆弾の前に今出来るなかでの最大の空壁が出現した。

次の瞬間爆弾と空壁が衝突した。

ズンッとあたりに重い音が響き渡る。

「くっ！！おおお！！」

予想以上に衝撃が強く少しずつ押されてきている。落下地点を大きく逸らそうにも重量があまりにも大きいのと重力のせいでなかなかできない。

しかも先ほどからビキビキッというひびがはいるような音が空壁から聞こえている。

そしてさらに追い討ちをかけるように爆弾からピッピッピッピッピッと甲高い電子音が鳴り響いてきた。爆弾が作動しようとしている

のだ。時間がない。

「そ　れ　ろ――――！！」

込める力が自然と増え想いが届いたのか徐々に爆弾は逸れようとしていた。

（いけるか！？）

だが、その途中でピ――――と鳴り爆発したのだ。
その瞬間に僕は街を覆うタイプの障壁に切り替えた。

ゴォォォォォォォォォォォォォォ！！

キィィィィィィィィィィィン！！

ギリギリ間に合い一瞬爆風と障壁が拮抗するかのように見えた。しかし、妖怪との連戦でつかった大技、そして先ほどの空壁で霊力や気力かなり消費してしまい、障壁は徐々に侵食されていく。

「くそっ！！守るんだ、頼まれんたんだ、僕がやるしかないんだ――――――！！」

なんとか堪えようと自分の中に残るなけなしの霊力を全部注ぎ込んだ。
だが、バリィィィンという音と共に障壁は破壊されてしまった。
それまでせき止めていた爆風が一気にせまってくる。それに気づいた妖怪も人は逃げようとしたが瞬く間に呑み込まれ絶命していった。

「くっそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

（ごめん守、閃。約束守れなかった。今そっちへ行くよ。）

僕は迫ってくる爆風から逃げようともしなかった。いや、出来なかった。もう霊力も気力も体力も使い果たしてしまっていた。

僕は体から力が抜けて座り込んでしまった。
これほどの爆風ならおそらく半不老不死の僕でもおそらく死ぬだろう。爆風がどんどん近づいてくる。
そして僕が爆風に呑み込まれる死を覚悟した瞬間誰かが割り込んできた。

ドカァァァァァァン！！

音が鳴り止む。
爆風による煙が晴れて視界が元に戻ろうとしていた。
そしてそのことに僕は驚いた。なぜならこうやって状況が確認できるということは死んでいないのだ。
原因は呑み込まれる瞬間に割り込んできた何かだろう。それを確認するために眼を凝らした。そして煙が完全に晴れて出てきた姿にさらに驚愕した。

それはボロボロの姿へと変わり果てた父さんと母さんだった。

「……父さん?……母さん?」

二人を呼ぶ声が無意識に震える。心臓がバクバク鳴っている。

「幸…生…、無事かしら?」

振り返って母さんが聞いてきた。
手足は焼け爛れ顔にも体中から大量の血が出ていた。

「な…んで。」

予想だにしなかったこの状況にほとんど口が動かせない。

「お前を…探していた。見つけた……時に…はあの爆風が迫っていた。だか…ら…割り込んで能力を…使った。」

父さんを見ると母さんと同じぐらい、いやそれ以上にひどかった。

「私たちの…能力は『受け流す程度の能力』…よ。それをあなたに使ったの…よ。」

弱弱しく微笑みながらそう言う。全身に想像を絶する痛みが駆け巡っているはずなのに僕に微笑んでいるのだ。いつも我が家で僕や父さんに向けて笑っていたように……。

「ならなんで母さんたちがボロボロなの!!その能力使えばそんな体にならずにすんだのに!!」

泣きながら二人に向かって叫ぶ。そうしている間にも二人の体からおびただしい量の血が流れ出ている。

「お前を救うので限界だった。いくら半不老不死でも……死んでただ……ろうからな。」

父さんも無理やり笑みを作る。その笑顔はやはりいつも見る優しい父さんの顔だった。

「嫌だよ…母さんたちまで…。」

二人はよろけながらも僕の方へ近づきそしてギュッと力強く僕を抱きしめた。

「!?」

「幸生…この世で一番大切で大事な私たちの子ども。もっとあなたと……過ごしたかったけど、あなたを…残して……先にいってしまうことを……許してちょうだい。」

母さんは僕の頬に手を添えて涙を流しながら僕を抱きしめた。

「幸生……生きろ。これか…らいろんなものを……みて…感じるん……だ。父さん…が…いろいろと…おしえてやりたかったが無理な…ようだ。すまない…。」

父さんも僕の頭に手を乗せ撫でて同じように僕を抱きしめた。父さ

んの目にも涙で溢れていた。

「とおさんっ…ぐすっ…かあさんっ！！」

我慢できなくなり僕も二人を抱きしめ返す。

「「幸生……愛してる…。」」

そう言い残し母さんと父さんは表情に笑みを残したままゆっくりとまぶたを閉じた。

僕を抱きしめ涙を流しながしたまま二人は動かなくなった・・・・・・。

「うっ…うっ…、わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――！！」

焼け野原となった街の中に悲しみの声が響き渡った。

どれほど泣き続けていただろう……。僕はしばらく母さんと父さん

を抱きしめたままその場から動かなかった・・・。

すると突如辺りの地面からボコボコと何かが這い出してきた。

振り返ってみるとそこには妖怪たちがいた。

おそらく地中に潜り爆風をやり過ごしたのだろう。

そのうちの一体が僕に向かってきた。そして僕の腹部を獰猛に貫いた。

ドスッという音と同時に腹部に衝撃が走り大量の血が流れ出る。

妖怪は勝利の雄たけびのような声を出している。勝ったと確信したからだろう。

そしてその直後、僕の中で何かがプツンッと切れた音がした気がした。

次の瞬間その妖怪の頭が何かに押しつぶされた。

幸生がやったのだ。

霊力はないはずなのに回復しているどころか以前よりも数十倍増えている。再生速度も遥かに上がっており傷口もすぐに塞がったため痛みはすぐに消えた。

そして幸生の姿も変化が生じていた。

髪が腰の辺りまで伸び、黒だった髪の色も灰色一色になっていた。

そして眼の色も黒から赤黒いものへと変化していた。

さらに能力にも変化があった。

『壁を操りあらゆる付加を壁に与える程度の能力』

なぜ能力が突然変化したかはわからなかった。だが、今は何でも良かった。
この胸に渦巻く大きな悲しみを何かにぶつけることができるのなら……。

いきなり仲間が殺されたので妖怪たちは一瞬驚いていたようだったが、すぐに気を取り直し襲い掛かってきた。
爆風が去ってからきた妖怪も含めるとその数は最初に対峙したときの数十倍はいる。

それを見ても僕は無表情だった。他人が見ていたらその顔には悲しみしかうつってないように見えたであろう。

両手を横に突き出し大きさ2メートルほどのとても薄い空壁を出した。
そしてそれに『斬』を付加した。高速回転させた状態からそれを妖

怪の群れに投げた。
ものすごい速度で飛んでいき反応する間もなく次々と妖怪を切り刻んでいった。
今ので３００は消えた。

怯んでいる間に残りの妖怪たちを全て囲むほどの空壁牢を瞬時に作り出した。そしてそれを上空へと浮上させていった。

今までならこんな大きなものも出せなかったし浮上させることも出来なかったが今なら何
でも出来る気がする。

上空１００メートルほどのところで滞空させた。殴ったり火を噴いたりして壊そうとしているがびくともしない。
そして空壁牢の方向に手をかざし最後の仕上げにかかった。空壁牢に『滅』を付加した。通常ならその壁一枚一枚にしか付加した効果は適用されないが、いまは上下前後左右全てを空壁で囲って閉じ込めている。そうするとその空間の中にもその効果は発生させることが出来る。その状態で『滅』を付加するとどうなるか。

付加した瞬間、中にいた妖怪が全て一瞬で消滅した。
血も肉片すらも残さず本当に滅されていた。

戦いは終わった。
終わりはあまりにもあっけないものだった。
でも、残ったのは僕一人だけ。勝ったにもかかわらず何にも感じなかった。今の僕には悲しみしかなかった。
周囲を見渡す。
そこには守と閃、そして母さんと父さんの遺体が横たわっていた。

僕は土壁に遺体を乗せてある山の頂上まで行った。
せめて僕の手できちんと弔いだけでもしたかったのだ。

到着するとそこはとても見晴らしの良い場所で近くには洞窟があった。妖怪も全くおらず空気も澄んでいた。そして洞窟の入り口に穴を掘り四人を埋めて墓を作り墓石に文字を彫った。

「清く、尊い心持つ者たちここに眠る」

そして四人の冥福を祈った。

やるべきことを終わった。だけど、僕も疲れた。あらゆる意味で疲れた。墓に誰にも壊せないようにより強固な結界を張ってから洞窟に入った。
そしてその中で自分を土壁牢で囲み『封』付加して自分を封印することにした。
いつの日か新しい人々が現れるの待つために……。

そして僕は深い眠りについた。

同時刻、月でとある一人の女性の悲しみに満ち溢れた叫び声が響き渡った。

第7話　人妖大戦（後書き）

能力進化しました。チートですね、はいチートですとも。

テスト期間とかに入ったりするのでまた遅れると思います

第8話　時を経て、最初に出会うの神様だ

？？？ｓｉｄｅ

民たちからの貢物も例年通り滞りなく献上された。今日は特にこれと言って神事があるわけでもなく、参拝客も来ていなかった。ボーッとしているとミシャグジたちが一度くらい国の外へ出てみてはどうかと身振り手振りで（手は無いが）提案してきた。神である私が国をほんの少しとはいえ離れるのは良くないと思ったのだが今日中だったら自分たちが留守を預かると念じてきたので少し考えてからお言葉に甘えることにした。

私が神として統治するようになってから国を離れたことはなかった。なので、国の外には興味は前々からあったのだ……。

しばらく飛びながら風景を楽しんでいたが、なんとなくだが気になる山があったのでその山の頂上に降りたった。そこは見晴らしの良い場所で空気も澄んでいた。辺りを見渡すと、近くに洞窟のようなものがあった。

そして、その入口付近に［清く、尊い心を持つ者たちここに眠る］と彫られた四つの墓があった。その墓は問題ないのだがその墓を守るようして結界に似たものが張られていた。それもかなり強固な……。

あまりにも強固な作りだったので調べようと思ったところで洞窟の奥の方が青白く光り始めていた。そちらの方が気になってきたので洞窟へと入った。短い洞窟だったのかすぐに最奥まで来た。そこには青白く光を放つ四角いものが存在していた。

見た所封印されているようだった。完璧に封印されているのか中の情報が全くわからない。青白く光った靄のようなものがじゃまして見えないのだ。

このまま捨て置こうかとも思ったがこの山は私の国に近すぎるので放置するわけにはいかなかった。
だから、封印を解いてからすぐに叩き潰してやることにした。封印を解こうと四角いものに手を触れると、突然封印が解除され始めた。

その途端に押さえ込まれていたとてつもない量の力がブワッと放出された。その瞬間私の体から冷や汗が流れるのを感じた。おもわず後ずさりしそうになるほどだった。

だが私は神なのだ。威厳というものもある。
洞窟を出たいという気持ちを押さえ込み何者かを待ち構えた。すでに四角いものは無くなり青白く光る靄のみになっていた。

だんだんと靄が晴れていく。そして完全に晴れてそこにいたのは、

「ふぁ～～っ、よく寝た～。」

人間の少年だった。

幸生ｓｉｄｅ

「ふぁ～～っ、よく寝た～。」

伸びをしながら僕は眼を覚ました。
自分自身を封印したあの日からどれほどの月日が流れたのだろう。
文字通り封印していたので外部の情報は入ってこなかった。というよりは僕に意識が無かったので仮にわかるようになっていたとしても意味は無かっただろう。

封印が解けたということは誰かが空壁牢に触れたということになる。
妖怪以外の何者かが触れたと同時に封印は解けるようにしていたの

だ。

どのような人が封印を解いたのかと思い、ゆっくり眼を開けると

「なっ、なっ……。」

びっくりした顔になっている少女がいた。
紫色の服に蛙の刺繍、そして目玉の付いた帽子を被っている。これと一致する人を僕は一人しか知らない。
洩矢諏訪子(もりやすわこ)だ。

やがて我に返ったのかその容姿には似合わない厳格な口調で話してきた。

「貴様は何者だ?」

「何者だといわれましても……人間?」

「それは見ればわかるわ!!しかもなぜ疑問形?名前だ、名前。」

「そういうのはまず自分から名乗るものではないですか?」

言わなくてもこちらは知っているのだがそれはあちらからすれば不自然極まりないので先に名乗ってもらうことにした。

「……いいだろう。我は祟神ミシャグジ様を束ね、土着神の頂点である洩矢諏訪子だ。さぁ我は答えた。人間よ、もう一度問う。……貴様は何者だ?」

腕を組み神力を放出して僕を警戒しながらそう言った。
そんなに睨まなくてもいいのに…。

「大変失礼いたしました。ぼk…私は新幸生というものでございます。さきほど言わさせてもらったとおり種族は人間でございます。」

「ほう……、ではただの人間がなぜ封印されていたのだ?」

「……封印は自分自身で行いました。この地に新たな人々が現れるのを待つために…。」

そういうと怪訝な顔をしてきて尋ねた。

「新たな人間が?……待て、お前いつから封印していた。」

「え～っと、くわしい年代はわかりませんが一度この辺りの人と妖怪が全滅してしまったときですね。」

そう言うと驚いたのか目を丸くしている。かえる帽子の目まで見開いている。感覚共有でもしているんだろうか……。

「なっ！？ではあの人妖大戦でただ一人生き残りこの辺りだけでなくほかの地方から来た妖怪たちも全て殺したという人間はお前か！？」

あの戦争、人妖大戦って呼ばれてるんだ…。その前になんか詳しいな。知らないはずなのに…。

「その人物は確かに私ですが、なぜ知っておられるのですか？洩矢様はまだおられなかったはずでは？」

「人も妖怪もかなりの数があの大戦で死んでしまったようだからな、神の間でも有名なのだ。すでに文献としても残されているぞ。」

「そう…ですか。」

「入口にあった墓はお前が？」

洞窟の入口辺りを見ながら言ってきた。

「…はい、私の友人たちと両親が眠っています。」

言葉に出すと自然と思い出される。そして悲しみが蘇ってきた。この悲しみはそう簡単には消えてはくれそうに無いようだ…。僕は無意識のうちに涙を流していた。

「えっあの…その……。」

諏訪子が突然涙を流し始めた僕を見てうろたえている。

「……あ～やっぱりこの口調話づらい！！」

突然頭をかきむしって大声を出した。

「あ～う～、その…ごめんね。つらいことを思い出させてしまったみたい。」

急にその容姿らしい子供のような口調で話し始めた。

「いえ……すいませんこちらこそ。あれ？…洩矢様口調が……。」

「こっちの口調が素だよ。さっきまでのはまぁ神としての威厳…かな？さっきまでは警戒してたんだけど新は大丈夫そうだからね。」

言われてみれば先ほどまで僕に向けて放たれていた神力も出ていない。

「その…お詫びと言ってはなんだけど……私の神社に来ない？いろいろと話も聞いてみたいし、いく当ても無いみたいでしょ？」

「…よろしいのですか？私が本当のことを話しているともわからないのに…。」

「だから新なら大丈夫って気がしたんだよ～。それと敬語はいいよ。普通に話して。」

「ですが洩矢様。」

「諏訪子でいいよ。これ以上は言わないよ。」

「……わかった、諏訪子。じゃあ僕のことは幸生でいいよ。」

「わかったよ～。でも敬語直ってない。」

「昔から僕って言ってるからこればっかりは……。」

「ふ～ん、そっか。じゃあ行こう！！」

嬉しそうに諏訪子が歩き出した。

「なんか嬉しそうだね。」

「まぁね、こんな風に人と話すのはなかったからね。」

端から見てるとはしゃいでいる子供にしか見えないがまぁこれは心の内に秘めておこう……。

「そっか…。その前に最後に別れを告げてきてもいいかい？」

「…そうだね。いいよ。外で待ってるね。」

そういうと諏訪子は洞窟から出て行った。

目の前には四つの墓。手を合わせ祈った。

（父さん、母さん、閃、守。僕前に進むよ。いつまでもいじけてたら駄目だと思うんだ。だから行くね。）

そして立ち上がり諏訪子の元へ行こうとしたとき、

（（（（行ってらっしゃい。））））

後ろから懐かしい声が聞こえた気がした。振り向いたがそこには墓があるだけだった。僕は自然と微笑み諏訪子の元に行った。

「終わった？」

「終わったよ。」

「そっか……、じゃあ今度こそ行こっか。私の神社へ。」

「うん。」

父さんは言った。この世界のいろんなものを見て感じろと。だから僕は前に進む。自分自身のためにも……。

諏訪子ｓｉｄｅ

「なっ、なっ……。」

靄が晴れて出てきたのは人間の少年だった。妖怪だと思っていたばかりに驚いた。
ただ普通の人間と違い長髪の髪は灰色、眼の色は赤黒かった。そして内包している霊力の量がすさまじかった。
我に返るとこちらの方を見ていた。気を引き締めなおして尋ねた。

「貴様は何者だ?」

「何者だといわれましても……人間?」

「それは見ればわかるわ!!しかもなぜ疑問形?名前だ、名前。」

こいつふざけてるのか。私は神だぞ。
警戒ついでに神力を解放し放った。だが、そんなことも気にせず逆に尋ねてきた。

「そういうのはまず自分から名乗るものではないですか?」

むっ、確かにそうだ。

なのでこちらから名乗ることにした。

「……いいだろう。我は祟神ミシャグジ様を束ね、土着神の頂点である洩矢諏訪子だ。さぁ我は答えた。人間よ、もう一度問う、……貴様は何者だ？」

放出している神力をさらに増やしてさらににらみつけて尋ねた。ここで大抵の者は神である私に萎縮してしまうのだが、全くものともしていなかった。

「大変失礼いたしました。ぼｋ…私は新幸生というものでございます。先ほど言わさせてもらった通り種族は人間です。」

かなり礼儀正しかった。悪いやつではなさそうだがまだ警戒は解かない。私を上回るほどの霊力を持っているのだ、警戒するに越したことは無い……。

「ほう……、ではなぜただの人間が封印されていたのだ？」

そうだ、ただの人間が封印されるなど普通ありえないのだ。しかも封印が解かれたときのあの力…。普通ではない。

「……封印は自分自身で行いました。この地に新たな人々が現

れるのを待つために…。」

なるほど……、自分で封印したのか。いや、まて。いまこいつは気になることを言った。

「新たな人間が？……待て、お前いつから封印していた？」

「え～っと、詳しい年代はわかりませんが、一度この辺りの人と妖怪が全滅してしまったときですね。」

「なっ！？ではあの人妖大戦でただ一人生き残り、この辺りだけでなく他の地方から来た妖怪たちも全て殺したという者はお前か！？」

「その人物は確かに私ですが、なぜ知っておられるのですか？洩矢様はまだおられなかったはずでは？」

「人も妖怪もかなりの数があの大戦で死んでしまったようだからな。髪の間でも有名なのだ。すでに文献にも残されているぞ。」

そう言いながら内心ではかなり驚いていたと同時に納得していた。まさか本当にそんなやつがいるとは…。だがそれならあの力も頷ける。

「そう……ですか。」

気になることは全部聞いてしまおう。
まずは厳重に守られているあの墓だ。

「入口にあった墓はお前が？」

「…はい、私の友人たちと両親が眠っています。」

すると過去を思い出してしまったのか新は涙を流し始めた。

「えっあの…その……。」

心の古傷に触れてしまったようだ。まさかいきなり地雷を踏むとは……。
聞いてる限りでは悪いやつではないようだしなんだか悪いことをしてしまった気分になった。

「……あ～、やっぱりこの口調話づらい！！」

なんか威厳を含めた口調に疲れた。というかバカらしくなってきた。

「あ～う～、そのごめんね。つらいこと思い出させてしまったみたい。」

「いえ……すいませんこちらこそ。あれ？…洩矢様口調が……。」

「こっちの口調が素だよ。さっきまでのはまぁ神としての威厳…かな？さっきまでは警戒してたんだけど新は大丈夫そうだからね。」

「その…お詫びと言ってはなんだけど……私の神社に来ない？いろいろと聞きたいこともあるし、行く当ても無いんでしょ？」

「…よろしいのですか？私が本当のことを話しているともわからないのに……。」

逆にこっちが気遣われてしまった。新は本当に優しいようだ……。これだけでも信用するに値する。

「だから新なら大丈夫って気がしたんだよ～。それと敬語はいいよ。普通に話して。」

「ですが洩矢様。」

「諏訪子でいいよ。これ以上は言わないよ。」

「……わかった、諏訪子。じゃあ僕のことは幸生でいいよ。」

「わかったよ～。でも敬語まだ直ってないよ。」

「昔から僕って言ってるからこればっかりは……。」

変わってるな～とは思ったがそれも個性だということにした。

「ふ～んそっか。じゃあ行こう！！」

出口に向かって歩き出すと幸生が言ってきた。

「なんか嬉しそうだね。」

……どうやら顔に出てたようだ。まぁ隠す必要も無い。

「まぁね、こんな風に人と話すことはなかったからね。」

そういうと納得したようだった。

「そっか…。その前に最後に別れを告げてきてもいいかい？」

みんなとは墓に眠っている幸生の友人たちと両親のことだろう。その申し出を断る理由はどこにも無い。離れておこう……。

「…そうだね。いいよ。外で待ってるね。」

そういって先に洞窟を出て離れたところで待つことにした。

墓の前で手を合わせて祈っている。何を伝えているのだろう。しばらくすると幸生が戻ってきた。

「終わった？」

そういうと最初より少し吹っ切れた顔をしていた。

「終わったよ。」

「そっか……。じゃあ今度こそ行こっか。私の神社へ。」

「うん。」

すでに私はどんなことを聞こうかとわくわくしていた。こんな気持ちになるのも久しぶりだ。
そんなことを考えつつ私たちは洩矢神社へ向かった。

第8話　時を経て、最初に出会うの神様だ（後書き）

まだ原作キャラ二人しか出てネェ

こっからはどんどん出せるようにしていきます

第9話　やっとついたよ洩矢神社（前書き）

テスト終わったー

第9話　やっとついたよ洩矢神社

洩矢神社へ向けて出発してから一時間ほど経った。
諏訪子の後を追うような形で胡坐をかいたまま空を移動している。

もう一度言おう。
胡坐をかいたまま移動しているのだ。
どういう状況かというと一人乗れるほどの大きさの空壁を出す。それに座って飛ぶように空壁を操ればあら不思議、胡坐をかいて座った状態で空中を移動することが出来るのだ。前にエレベーターのように使ったことがあったのでどうかと思ったがうまくいった。

戦闘時には普通に自分で飛ぶ方が一番いいのでそうするが、そうでないときはリラックスした状態で空を飛べるのだ。操るのに疲れはなし、霊力も雀の涙ほどでいいため燃費もよろしい、普通に飛ぶよりも疲れないと文句なしなのだ。

リラックスしたまま飛んでいると先導していた諏訪子が急に止まりこちらの方に振り向いて　　ジ――――――ッと見つめている。正確には僕が乗っている空飛ぶ絨毯ならず空飛ぶ壁を見ている。

「……ねぇ幸生。それ楽？（ジ――――――。）」

「ん？…あぁ楽だよ。楽な体勢で移動できてリラックスできるしね。」

「そっか～。（ジ――――――。）」

「……諏訪子も乗るかい？」

「えっ、いいの！？」

「（うぉ！？食いつきがすごいな。）あ、あぁ、もちろんいいよ。」

「やったーー！！」

両手を上に上げてバンザーイする諏訪子。その姿はかわいいのだがホントに神様なのかなと少し考えたりしたりしなかったり。

「じゃあおじゃましま～す。」

そういって諏訪子は何故か僕の膝の上に座った。

「諏訪子、そこ僕の膝。座るところなら横にもあるよ。」

「あ～う～、まぁいいじゃん。細かいことは気にしない気にしない。私はここがいいの。」

「…まぁ諏訪子がいいなら僕はいいんだけど。」

「改めて出発進行―！」

（……ホントに神様なのかな…。）

ハァ～とため息をつきながらも神社へ向けて移動した。

「諏訪子～、あとどれぐらい？」

「ん～もう少しのはずなんだけど……あった。あれが私の神社だよ。」

指を指した方を見ると、

「これまた立派な神社だね～。」

大きくて大層立派な神社があった。下の方には里のような集落があった。おそらく諏訪子の信者たちだろう。

「でしょでしょー。」

諏訪子が無い胸を張って（ガンッ）……痛い。

「何するんだよ。」

「…いや、なんか今失礼なこと思われた気がしてつい。」

「ついってありえない音がしたんだけど。」

「気のせい気のせい。じゃ降りよっか。」

先に神社の方に降りていった。僕もそれに続いて降りた。降り立つと諏訪子は賽銭箱の前で中国の人がするみたいに袖に手をいれお辞儀してきた。

「ようこそ、洩矢神社へ。」

そこにはまぎれも無い神様がいた。先ほどまでとは違いなんというかオーラが出ているようにも感じた。いつもそうだったら威厳ありそうなのに…。

「じゃあ入ってー、幸生。」

「お邪魔しマース。」

先ほどまでの雰囲気とは打って変わって神様らしくない諏訪子に戻っていた。

神社に入ったことは一度も入ったことが僕は無い。しかも本物の神様がいる神社だ。中はさぞ神聖な空気を漂わせるほどきれいなんだろうな。そう思いながら期待を膨らまして神社の中に入ると、混沌状態だった。辺りにはゴミが散らかり同じような服もぐちゃぐちゃのしわしわの状態で何着も放置されている。

「……諏訪子?」

「ア、アハハハ。」

「ハァ、まずきれいにしよっか。」

「はい（ショボーン）」

少年、神様清掃中……。

「ふぅ、やっと終わった。」

数時間掃除しまくったおかげでやっときれいになった。

「あ～う～、ごめんよ幸生。」

「いいよ、掃除するのはどっちかというと好きだから。それで僕に聞きたいことがあるんだよね。」

「……あっ。」

今思い出したかのような顔をしている。

「…もしかして忘れてた？」

「すみません。」

「話し進まないしもういいよ。で、聞きたいことは？」

「そうだね。えっと、まず幸生は今何歳？」

「う～ん、ずっと自分を封印してたからわかんないんだよね。人妖大戦が起きたのは何年前かわかる？」

「確か１０００年ぐらい前だと思うよ。」

「じゃあたぶん１０００歳だな。」

諏訪子が呆けた顔でこっちを見てくる。

「ホントに私より何倍も長生きしてたんだ。霊力も大きいし勝てる気しないよ。」

「う〜ん、でもこれまだ全開じゃないんだけどね。今は5割くらいかな。」

呆けた顔に口が開いて驚いた顔に進化した。

「……ますます勝てる気がしないよ。じゃあ次。幸生は能力もちみたいだけど何？ちなみに私は『坤（こん）を創造する程度の能力』だよ。」

「僕のは『壁を操りあらゆる付加を壁に与える程度の能力』だね。」

「なにそれ、チートじゃん。」

「便利だよねー。まだ試してないことがたくさんあるから使い道はまた後かな。」

「ハァ、聞けば聞くほど幸生すごいね。じゃあ次で最後。これからどうするの？」

「そうだな、特に考えていなかったな。」

う〜ん、と考えていると諏訪子が意を決したかのようにして言って

きた。

「じゃあ…さ、ここに住まない？」

「えっ。」

「ここなら部屋も余ってるし、それにずっと一人だったから。話せる人がいて欲しいなって。幸生は敵意も悪意もないし。」

「…いいのかい、諏訪子にはまだ言ってなかったけど僕は普通の人間じゃない。半不老不死の人間だよ。それでもかい？」

「関係ないよ。幸生は幸生じゃん。」

「そっか。……じゃあこれからよろしくお願いします。」

「ってことは。」

「ありがたくここに住まわしてもらうよ。」

「やった～！！」

こうして僕は神である洩矢諏訪子の神社、洩矢神社に居候することとなった。

第9話　やっとついたよ洩矢神社（後書き）

やっとテスト終わったー
これからどんどんかけるようにしていきたいです

第１０話　神と半不老不死とミシャグジさま

洩矢神社に居候するようになってからもう１００年ぐらいが経った。
えっ、流れる時間が速すぎやしないかって？そんなこと気にしたら負けだよ君……

ともかくだいぶ月日が流れた。さすが半不老不死というべきか１００年も経ったというのに僕の姿は蓬莱の薬を飲んだときと全く変わっておらず背も前と同じ１７５センチぐらいだ。

唯一変わったといえば、人妖大戦のときに変化した僕の赤黒い眼と灰色一色となり長髪になったことぐらいだが、これも今では変わってない。ただ放置しておくと髪が少し邪魔になったので首の辺りで結んでポニーテールのようにした。
僕は切ってもよかったのだが、諏訪子がどうしても結んでくれと涙目アンド上目遣いで言い寄ってきたのでそうしたのだ。

あれは反則だと思う。僕はロリじゃないけどあんな涙目アンド上目遣いで落ちないやつはいないと思う。だから断じてロリじゃない！！かわいいと思ったけどもっ！！

諏訪子は誕生してから５００年、今は６００年だが背丈は全く成長していなかった。そのことを口にすると祟りをバンバン飛ばしてくるので何度か危なかった。
しかも心の中でそれを考えていても勘が鋭いのかその度に祟りが飛んでくるのだ。恐いったらありゃしない。

まぁそんなこんなで（そんなこんなでってどんなだよ）それ以外は

特に何もなくごく普通の日々が過ぎていた。
今諏訪子は僕の横にはいない。信仰者たちからのいつもの貢物を受け取りに本殿の前で神気を出しながら迎えている頃だろう。神気を出しながらというのもまぁ理由はあの容姿で、なめられるので威圧している状態なんだろう。

ということで出る幕のない僕は今現在むちゃくちゃ暇である。修行をするにも信仰者たちに気づかれるわけにはいかない。こんなとこで目立つのは僕の本意ではない。
僕の得意分野である料理にしても今の時刻は申の刻、つまり午後４時前後ぐらいなので夕食を作るにはまだ早い。

何をしようかと神社の縁側に座って考え込んでいると、向かい側の森から何か出てきた。
白い大蛇が出てきた。ここで普通なら驚くか、撃退するかをしているのだが諏訪子から前に聞いていたのでこいつが何か知っている。
ミシャグジさまだ。１００年もここにいたのに顔を合わせたのは今日が初めてだ。

「ミシャグジさまですか？」

そう聞くと首を縦に振って頷いた。
そのまま僕の目の前まで来て、諏訪子がいる方角を見てから「シャ～～～。」と人間で言うため息のようにしているので試してみたかったことをしてみることにした。

僕はもちろん人間なので動物や植物とは話せない。相手が人語を話せるのなら別だが……。そこで僕能力『壁を操りあらゆる付加を壁に与える程度の能力』の出番だ。今回は付加はしないが壁を操る。
操る壁は言葉の『壁』。

外国人とかに遭うとお互い相手の言葉がわからず言葉の『壁』というものを感じたことがあるだろう。
やったことはないが１００年経った今、ただでさえでかかった僕の霊力は修行したことによりさらに膨大なものになっていた。だからできるはずだ。永淋も昔言ってたし。

ミシャグジさまに手をかざしてさっそくやってみた。ミシャグジさまのほうは何をしているのかわからなかったので「シャ～？」と言いながら首を傾げようとしたが、

「何してるんですか？ってあれ私しゃべれてる！？」

わぁーいという表現がぴったりなほど蛇の身体をクネクネさせている。見事に人語をしゃべれた。声の感じからしてメスなのかな。

「うん、成功だね。」

「幸生様、これはあなたがしたのですか！？」

少し落ち着いたのか僕に聞いてきた。いきなり自分が人語を話せるようになったのだから無理もない。

「まぁそうだね。ミシャグジさまの言葉の『壁』をちょこっと操ってみたんだ。」

「ちょこっとって……、諏訪子様から聞いてはいましたがホントにでたらめですね幸生様は…。」

「でたらめといわれると少し傷つくんだけど、なんで様付けしてるの？」

「それはまぁお客様ですし。」

「う～んでも様付けは勘弁してもらえるかな？なんかこうこしょばゆいんだよね。」

「では幸生さんで。私のこともミシャグジでお願いします。」

「わかった。それでミシャグジはなんで諏訪子のほう見てため息ついてたの？」

「それは…その、……言わないでくださいよ？」

「言わない言わない。僕はこれでも口は堅いよ。」

「そうですね、では。……いつもあのように威厳があればなぁと思いまして。」

「あーなるほどね。それはわかるよ。いつもはその容姿のまんまだもんね。そりゃ長年一緒に居たんだから尚更だよね。」

「そうなんですよ、オンオフができてるいるのはいいことだと思うんですよ。ただそのギャップが激しいというか本能赴くままといいますか。」

「そうだよねぇ、僕の髪を切るか切らないかの時もな涙目に上目遣いだよ。自分の容姿フル活用じゃないか。」

「そうですか。でも私も切らずにそんな風に結んでいる方が幸生さんには似合っていると思いますよ?」

「それはどうも。ともかくどうにかならないかねホントに。」

「ですねー。」

「「ハァー。」」

二人同時に深いため息をついた。
その次の瞬間叫びながら突っ込んでくる諏訪子がとび蹴りを放ってきた。

「何失礼なこと話してんの――――――!!」

「おごっ!!」

「幸生さん!?」

最初いた場所から数十メートル離れたところまで吹っ飛び、ボコォンというありえない音とともに止まった。

「すっ、諏訪子。普通の人だったら今の死んでたよ?」

不意なとび蹴りで衝撃はあったが僕は無傷。常時展開してる霊壁結界がこんなとこで役に立つとは少し悲しいのは気のせいだと思う。

「幸生ほぼ不老不死だから大丈夫。それにいつも霊壁結界自分に張ってるんじゃん。」

ふんぞり返ってとんでも発言する諏訪子。

「そういう問題じゃないのだが…っておわっ、あぶなっ。」

弾幕とともに岩が飛んできた。

「避けたら駄目！！」

「避けないと死ぬって！！」

「半不老不死だから大丈夫だって！！」

「そういう問題じゃないって言ってるでしょぉおおおおお！！」

さすがにガマンならないので眼前に空壁出現。それに反射を付加させた。

「反射壁！！」

反射壁に当たった弾幕や岩そのまま諏訪子に戻っていった。

「いやぁぁぁぁ！！」

ドドドドドドッ、と全弾命中した模様。煙が晴れるとそこには自分の弾幕によりぴくぴくしている諏訪子がいた。

「諏訪子……。君の死は無駄にはしない。」

敬礼した後手を合わせ合掌。

「あ～う～、死んでないって。勝手に殺さないでよ。相変わらずすごいね、幸生は。」

ムクリと起き上がりながら諏訪子が言った。

「ホントですね。諏訪子様から聞いていた通り、いやそれ以上ですね。」

「でしょでしょ～。ってミシャグジさまがしゃべってる！？」

「あっ、はい。さきほど幸生さんにしゃべれるようにしてもらいました。」

「ホントでたらめだね。」

「ですね。」

「うう〜、二人してそんないわないでちょうだい。」

いいことしたはずなのになんか悲しいよ。
少しかわいそうだと思ってくれたのかポンポンと肩をたたき慰めてくれた。

「ごめんって。それより幸生〜、おなかすいた〜。」

「?…あぁもう酉の刻か。わかったからさきに食器とか出しといて。」

「わーい!」

嬉しそうな声を出しながら神社の中に消えた諏訪子を見てからミシャグジを見る。すると同じことを思っていたのかミシャグジもこちらを見ていた。

「「ハァ～。」」

諏訪子よ、少しは直す努力してくれ……。

「さてと僕はこれから夕食作るけどミシャグジはどうする？」

「なにがですか？」

「ミシャグジも食べるかどうかってこと。どうする？」

「食べたいですけどこの姿じゃ…。」

そういって祟神であり大蛇である自分の身体を見下ろしうなだれる。

「人化はできないの？」

「……そうですね、やろうと思ったことがないので出来るかわかりませんがやってみます。」

とぐろを巻いて眼をギュ～っとつぶり妖力を集中させている。するとボンッと煙が出た。煙が晴れるとそこには人間の姿に近い姿にな

ったミシャグジがいた。

背は僕よりは低いが女性にしては高く１６５センチほどありぱっと見は高校生ぐらいをイメージさせる。眼は黒く、髪は白く肩を過ぎるぐらいの長さ、顔は整った顔立ちでかわいいが、耳は少しとんがっている。胸は大きすぎもせず小さすぎもしないというものだった。そして後ろには蛇の尻尾が生えていていた。

「なんとかできましたけど、この姿に慣れるのは少し時間がかかりそうです。それで……どうですか？」

上目遣いで不安そうな顔をして聞いてくる。

（だからそれ反則だって、もう。しかも諏訪子以上にかわいい。）

「うんよくできてるよ。初めてなのにうまいじゃないか。」

表情には出さず努めて平静な声でそういった。
頭を撫でてあげると嬉しそうに目を細めされるがままになっている。

「ただなぁ。」

「どこかまずいとこありましたか？」

「いや問題ないんだが諏訪子がこれ見たら……。」

口は災いの元とはよく言ったものだ。
直後待ちきれなくなった諏訪子が戻ってきた。

「幸生～まだなの？いい加減つくって！？」

言葉の途中でフリーズする諏訪子。
視線の先には自分よりも背が高く胸もあってスタイルもそこそこいい姿へと人化したミシャグジさま。

何故かはわからないがこの時、時間が止まった気がした。僕は冷や汗ながしっぱなし。ミシャグジはよくわかってない様子。そして諏訪子はというと、

「真っ白に燃え尽きたよ……。」

「諏訪子ぉぉぉぉぉぉぉ（さまぁぁぁぁぁぁぁぁ）！！」

ズーンという効果音がつくぐらいのショックを受けたようで、両手

を床に着き諏訪子が崩れ落ちた。その後、諏訪子が元に戻るまでに数刻かかったのはいうまでもないというのは余談である。

第１０話　神と半不老不死とミシャグジさま（後書き）

ミシャグジさま擬人化したぜ
反省はしているが後悔はしていないぜ
つぎは戦争になるかな？

簡単に主人公紹介

新（あらた）幸生（こうせい）

年齢　肉体的には２２歳。精神的には約１１００歳。

種族　人間（半不老不死）

性別　男

一人称　通常は僕である

呼び方　初対面の者には敬語、親しいものにはだいたい呼び捨て。
ぶちぎれると極まれにに貴様と言うことがある。

性格　温厚で平和的な思考が多い。

能力　壁を操りあらゆる付加を壁に与える程度の能力

事故で死亡し遥大昔に転生してきた。手違いで未完成の蓬莱の薬を飲み、半不老不死に。人妖大戦にて永淋と別れ、両親・部下を失う。その後１０００年ほど封印。諏訪子に封印を解かれ現在居候中。神主装束が今の服装のお気に入りらしい。

簡単に主人公紹介（後書き）

今更ですが主人公紹介してみました。

次本編に戻ります。

第１１話　大和の国からの果たし状

諏訪子のショック事件？からまた一年が経った。諏訪子が私だって成長すればとかミシャグジさまずるいよとかブツブツ言っていた気がしたが一応慣れたらしい。（時折ブツブツ言っているが）

ミシャグジも人化にようやく慣れたのか今ではどちらの姿も自分の意思一つで変われるようになったらしい。戦闘時は基本諏訪子のサポートらしいのでその時は大蛇へと戻るようだ。

一方僕はというと、まぁ例によって修行をしていた。基本は霊力の底上げ。何をするかといえば走りこんだり、滝に打たれたり、瞑想したり。後は諏訪子との模擬戦である。

戦ってみてわかったことだけど、諏訪子の『坤を創造する程度の能力』はかなり強かった。坤とは地のことで、諏訪子は地を支配することが出来る。だから地面から鋭利な岩石を飛ばしたり僕と同じ、いやそれ以上の土壁を作ることなどが出来る。僕も土壁を使ったりしたが逆にその土壁を操って石の槍が出てきたときはかなりあせった。そして今の時代では最新の鉄の輪を使ってきた。油断してたら、僕の壁がスパッとやられた。やはり強い。

他にしていたことといえば能力の応用を試しにやっていたことぐらいだ。あらゆる付加と言ったが本当にいろいろ出来た。空壁牢に治

癒を付加すれば時間はかかるが傷は治るし、冷気を付加すれば冷蔵庫やクーラーに早変わり。普通の壁に高熱を付加すればコンロのようになって役立つし、風呂を沸かすのも楽など挙げればきりがない。

えっ、後半日常生活にしか使ってない？気にしない気にしない、使えるものは使う、これ僕のモットーです。

そんなある夜、縁側で月を見ていると諏訪子が本殿に来いと言ってきたので、行くことにした。

「諏訪子―、入るよ。」

「うん、入って。」

障子を開き入ってみるといつものはしゃいでいる諏訪子ではなく信仰者たちの前に現れるときの神そのものの諏訪子が待っていた。横にはミシャグジもいる。二人とも神妙なあるいは深刻な顔つきだ。

「何かあったのかい？」

「さすが、幸生。察しが早くて助かるよ。じゃあミシャグジさま、説明を。」

「はい。私がいつも通り国の境界線を巡回していると、神と名乗るものが現れたのです。その神は八坂神奈子と名乗っていました。」

「ふむ……。」

いつか来るだろうとは思っていたがついにきたか八坂神奈子。ということは時代はもう諏訪大戦まで来ていたんだ。
おそらく目的は諏訪子が治めるこの国だろう。直接攻め込まず、ミシャグジのところに現れたのは交渉のためかな。

「その神は大和の国から来たと言っていました。「我々大和の神々はこの地の信仰が欲しい。だが、こちらとしても戦争は避けたい。よって交渉の場をつくりよきにはからいたい。」とのことです。」

「そうなんだよ。私だってこの国を手放すわけにはいかない。けど、戦争はこっちも望ましくない。だから…」

「僕に交渉役として大和の神々の元へ行って欲しいってことかな?」

「!?ほんとに幸生は察しがいいね。つまるところそういうことなんだよ。これは神と神の事情。関係のない幸生を巻き込むことはしたくないんだけど…」

「そんなことないよ。」

「えっ？」

「ここに来てからもう百年以上経つよね。いろいろあったけど諏訪子もミシャグジにもホントに世話になった。ホントの家族がいるみたいに楽しかったよ。だからその家族のために出来ることが僕にあるなら喜んでやるよ。」

「幸生（さん）……。」

それを聞いてか、諏訪子とミシャグジの眼にはうっすら涙が浮かんでいた。

「うん、うん。ありがと…幸生。」

「いいって事よ。それでその交渉の日時と場所は？」

するとミシャグジが言った。

「はい。日時は今日より一日後、羊の刻、つまり明日です。場所は

ここから西に５０キロほど離れた所にある廃神社のようです。」

「そうか……。それだとあと少ししたら行こうかなゆっくり行きたいし。」

「わかりました。それでは急いで準備します。」

「よろしく頼むよ。」

賽銭箱前で待っていると準備を終えたミシャグジと諏訪子が来た。

「はい、これ。お腹すくと思うから握り飯入れといたよ。」

「ありがと。じゃあ行ってくるよ。なんとかいい方向で話しつけてみるよ。」

目の前に空壁を出しその上に乗ろうとすると、何かが僕の袖を引っ張った。

諏訪子だった。その表情は不安と心配が入り混じっているようだった。その姿を見て僕は微笑み諏訪子の頭を撫でた。すると少し和らいだのか目を細めた。

「ホントに諏訪子は優しいなぁ。だからこそこの交渉頑張るよ。」

すると諏訪子が抱きついてきた。そして言った。

「どんな結果になっても幸生を恨んだりしない。だから……気をつけてね。」

「わかった。じゃあ行ってくる。諏訪子のこと頼んだよ、ミシャグジ。」

「はい、心得ました。」

「あと帰ってくるときはここに転移壁を置いてくからそこに出てくるのでよろしく。」

手をかざし空壁を出現させ、そこに転移を付加させた。これで帰ってくるとき同じ転移壁を出せばゲームでおなじみのワープのようなものが出来る。僕にしか使用できないから誰かに使われる心配もない。

ミシャグジが頷くのを見てから僕は空壁に乗り、交渉の場へと向かった。

洩矢神社を出てから十時間ほどが経った。不器用ながらも作ってもらった握り飯を微笑みながら食べながら、飛んでいたのだが、中々目的地が見えてこない。

「う～ん、方角と距離からしてこの辺りだと思うんだけどなぁ。」

そうやって辺りを見渡していると向こう側から何かが飛んでくる。
それは僕の目の前で止まった。
青い髪に背中にしめ縄を担ぎ、上は赤い服で中心には鏡のようなもの、下は黒いスカート。
おそらく八坂神奈子だ。

「貴様何者だ?」

威厳たっぷり、神としてのオーラがビシバシ伝わってくる。

……本物だ。

「私は諏訪大国を治め、洩矢神社の神である洩矢諏訪子に居候をさせてもらっております新幸生です。この度は交渉役として参った。」

「人間が神の社に居候？交渉役？……まぁいい。我は大和の神々のうちの一人、風の神の八坂神奈子（やさかかなこ）だ。よく来られた。交渉の場はこちらだ。ついてこいといいたいのがその前に…」

「？」

「お前が乗っているそれはなんだ？」

そういうと僕が乗っている空壁を指を指した。どうやら気になるようだ。

「あぁ、これは私のまぁ乗り物ですかね。普通に空を飛べるんですがこの方が楽なんですよね。乗ります？」

「……いや、いい。」

そう言うと来た方角へと飛んでいったのでついていった。

廃神社へと到着し、中に入るとすでに他の神々がすでに座っていた。僕はその向かい側に座り八坂神奈子は他の神のところに座った。なんとなく優しそうな感じがする。

「改めて自己紹介をば。私は諏訪大国からの交渉役、新幸生です。」

「ふんっ、人間風情が…。」

……訂正、かなり嫌な感じだ。

「おい、やめろ失礼だとわからないのか!!」

八坂神奈子がその神を注意したが、全く気にも留めてないようだった。

「交渉に入りたいのですが……」

他の神がおずおずと発言した。

「あ、あぁそうだな。では書状を新に渡してくれ。」

八坂神奈子が先ほど注意した神に促した。

「これが我々が出すそちらにとって一番よい条件だ。ありがたく読め。」

とりあえず渡されたものを読むことにした。その内容は、

1. そちら側の信仰の9割をこちらへ譲ること。
2. 貢物の9割をこちらへ譲ること。
3. 国をこちらへ無条件で渡すこと。
etc. ……

なんだこのふざけた内容は。怒りで体中がブルブルと震えた。

「なんだ、うれしくて震えているのか？」

あの神がニヤニヤと笑っている。

ごめん諏訪子、ミシャグジ。こいつら最初から交渉する気なかった

みたいだ。
そして次の瞬間、僕は机に拳を振り下ろした。

ドゴォン！！

机を突き抜けて床まで達し、その床も突き抜けてボロボロになった。

「！？どうしたというのだ新？」

様子を見る限り八坂や他の神はわけがわからないという顔をしていた。どうやらこの内容はあのふざけた神が独断で考えたようだ。いや違うか。

「これを見ろ！！」

書状を八坂に見せる。そして最後まで読むと顔を真っ青にしてふざけた神を見る。

「なんだこの内容は！！これではあちらが呑むわけがないだろう！

！」

「ククク。これでも譲歩したほうですよ。」

「新！待ってくれ今からちゃんとした書状を「もういいですよ」えっ？」

「いくらなんでもそこにいるふざけた神だけで考えたものじゃないでしょう。こちらとしてもこんな内容を呑むわけにはいかない、交渉決裂です。」

八坂が周りを見ると何人かの神が目を逸らす。

「待つんだ新！！」

「戦場でまた会うことでしょう。それでは。」

そういって僕は転移壁を出して、それを通り抜けて廃神社をあとにした。

神奈子ｓｉｄｅ

新が突然机と床をぶっ壊した。見ると新は怒りに震えている。霊力が解放されている。なんて霊力の大きさだ。

「!?どうしたというのだ新?」

「これを見ろ!!」

丁寧な言葉を捨てて書状を渡してきた。それを見ると新が憤慨した理由がわかった。

「なんだこの内容は!!これではあちらが呑むわけがないだろう!!」

「ククククッ。これでも譲歩したほうですよ。」

こいつ初めからわかってたな。

「新!待ってくれ今からちゃんとした書状を「もういいですよ。」えっ?」

もういいとはどういうことだ？まさか！？

「いくらなんでもそこにいるふざけた神だけで考えたものじゃないでしょう。こちらとしてもこんな内容呑むわけにはいかない、交渉決裂です。」

よく周りを見てみると私から目を逸らすものが何人かいた。共謀してたとは身内なのに気づけなかった。気づいていればこうはならなかっただろうに……。
いやまだ……。

「待つんだ新！！」

「戦場でまた会うことでしょう。それでは。」

そういうと新は何か壁のようなもの出して通り抜けると消えていた。こうなると戦いは避けられないだろう。できれば争わずに済ませたかった。新は普段はあのように憤慨などしない性格なのだろう。ほんのわずかとはいえそれはわかった。それだけに戦うのは嫌だったがこちらも引き下がれないのでやるしかない。

転移壁を通り抜けるとそこはいつもの洩矢神社だった。そして目の前には諏訪子とミシャグジが待っていた。

「……いつからそこに？」

「「1時間ぐらい前から。」」

二人そろって口に出した。どうやら予想以上に心配をかけていたらしい。

「それで……交渉どうだった？」

「……すまない、交渉は決裂した。」

交渉の場で起こったこと、あちらが出してきた条件など順におって説明した。

「…というわけなんだ。いくら内容がひどかったからと言ってこっちから交渉を断ることはなかったのに…。ごめん。」

そういって深く頭を下げた。いい方向へ持っていってみると言ってしまったものだから本当は合わせる顔がないのだ。
それを見て、諏訪子は慌てるように言った。

「そんな幸生が謝ることないって。そんな条件出されたら誰だってそうなるよ。私が行ってもそうなったと思う。」

「私もです。」

「幸生はよくやってくれたよ。私たちのために怒ってくれたことが実は嬉しいんだよ。それに出発する前に言ったよね。どんな結果になっても幸生を責めたりしないって。」

二人は笑みを浮かべながら慰めてくれた。

「……そう言ってくれるとありがたいよ。」

「よし、幸生も元に戻ったことだしさっそく戦いの準備しないとね。ミシャグジさまはこっちのほかの神々に伝えて。≪大和の神々がこの地を攻めてくる。戦争が始まるので至急集まれたし。≫って。」

「わかりました。」

すぐに大蛇へと戻り森の中に消えていった。

「私は最新の武器、鉄の輪を増量・研磨しとこうかな。」

「監視は僕に任せてくれ。来たらすぐ知らせる。……あと僕も出るよ、戦争に。」

「でも幸生は「言ったよね。」」えっ？」

「これは僕のせいでもあるし、何より家族が戦うんだ。関係ないとは言わせないよ。」

「…うんそうだね。みんなで頑張ろうー！」

「おー！」

こうして大和側も諏訪側も戦争の準備をし、着実に戦いのときが迫っていた。

第１１話　大和の国からの果たし状（後書き）

ガンキャノンでましたよ。他の神の名前がないのは思いつかなかった。すんません！！

つぎは諏訪大戦です。

だれか転移壁とか反射壁とかの他のいい技名あったらおしえてください。

第12話　諏訪大戦　前編

交渉決裂から3日が経過した。すでに洩矢神社には洩矢諏訪子とミシャグジを筆頭として、他の神々が集結していた。

里の者たちにはすでに通達されており、家から出ないようにしている。それだけでは流れ弾が飛んでこないとも限らないので、神力遮断結界を張った。これで里の人たちに危害が及ぶことはないだろう。

結界を張り終わると諏訪子の下へ戻った。

「里の者達はどうだった、幸生？」

「怯えてはいるけど、≪諏訪子様、ミシャグジさま、そして僕がいるから大丈夫≫だって。」

「ハハハッ。幸生も頼りにされてるね。そのうち信仰されて神になったりしてね。」

「それは遠慮するよ。僕は神って性質じゃないからね。」

「お二人とも、お静かに……。来ましたよ。」

ミシャグジによる通達でその方向を見ると、八坂神奈子を筆頭として大和の神々が来ていた。こちらの何倍もの軍勢でだ。

「あれはいくらなんでも多すぎやしないかい……。」

諏訪子を見るとあまりの多さに逆に呆れてしまっている。
八坂を見るといかにも不機嫌ですという表情をしていた。おそらく本意ではないのだろう。

「……そうだね、これはこっちの神が戦うのはちょっときついね。というわけで八坂神奈子と他の神を切り離すよ。諏訪子は八坂を、僕は残りを引き受けるよ。」

「いくらなんでもそれは……いや幸生ならいけるかも。じゃあお願い。」

「諏訪子、頑張って。」

「そっちこそ。」

最後に一度だけ眼を合わせて頷くと僕は足場を壁で作るとそれを勢いよく蹴って、一気に八坂の背後に立った。

「何!?」

前方にいたはずの僕がいつの間にか自分の後ろを取っていることに驚いているようだった。

「3日振りだね。生憎僕はあなたと戦うつもりはない。それは諏訪子の役目だ。だから、戦力を切り離させてもらうよ。」

八坂は何か言いたそうだったがとりあえず戦場なので無視。

「転移牢(ワープキューブ)」

僕と大和の神々を空壁牢で囲み即座に別の場所に転移させた。
そこは洩矢神社から数十キロ離れた見晴らしもよく周囲に人もいないまさにちょうど言い場所だ。

いきなり場所が変わって動揺していた神たちは目の前にいる僕を敵とみなし臨戦態勢に入っていた。神力を放出して威圧してきている

が、僕にとってこれぐらいでは威圧にもなりやしない。これだったら、諏訪子やミシャグジ、そしてあの八坂のほうが桁違いに強い。おそらく諏訪子と八坂の実力は互角。どちらに転ぶかはわからない。持久戦になることだろう。

しばらくじっとしていると誰かが前に進み出てきた。確認してみればあのふざけた条件を突きつけてきた神だった。

「少しは力があるようだがこの軍勢には勝てまい。泣いて許しを請えば今なら許してやらないこともないぞ？」

ククククッ、と笑いながら言ってきた。あぁ、3日も経てば少しは変わるかと思ったがむしろうざさが割り増しになっていた。なので挑発してみることにした。

「ふふふっ。はははははっ！！」

「？急に笑い出してどうした？ついに狂ったか？」

「ふふふっ。いや狂ってやしないよ。ただおもしろかっただけだよ。」

「何がだ？」

「大口叩いているわりには、君の神力が他の誰よりも弱いように見えたのでね。それがおかしくておかしくて。」

「なっ！？こいつ塵も残らんと思え！！」

「どちらが塵になるのやら……。それでは人間代表、新幸生……参る。」

霊力と神力がぶつかり突風が駆け抜けた。

こうして人間と神の戦い始まった。

諏訪子ｓｉｄｅ

幸生が相手の神たちを連れてどこかに消えた。おそらく人気のない場所に移動したんだろう。相変わらずホントに幸生は優しいよね。

「みんなは手を出さないで。こいつはわたしがやる。」

いつ戦闘が始まってもいいように神力を解放して構えた。そして前に出ようと「待て！」八坂神奈子が叫んだ。……なんだ？

「あいつは一人でも大丈夫なのか？あの軍勢に一人など自殺行為だぞ。」

「あいつ？……あぁ幸生の事ね。大丈夫だよ幸生なら。幸生、私よりずっと強いし。たぶんあんたよりも強いと思うよ。」

「ほう……それはぜひ戦ってみたいものだな。」

「それは私に勝ってからいいな。」

「ではそうさせてもらうことにしよう。どの道お前を倒さないとこの国は手に入らないようだからな。最後に一つ聞いていいか？」

「何かな？」

「そこまであいつを信頼できるのはなぜだ？」

ふっ、わかりきったことを聞いてくれる。そんなの一つしかない。

「幸生は強いとか以前に私の家族だ。その家族を信頼しないはずがないだろう？」

そういうと少し驚いた顔をしていたがそれはすぐに笑みへと変わった。

「そうだねそりゃそうだ。さて…、それではあっちの方も始めたようだしこっちもやろうか。」

言われてみるとそのようだった。遠くの方で霊力と神力がぶつかり合っているのが伝わってくる。

「大和の神が一人、八坂神奈子。潰れてしまうがいい！！」

「土着神の頂点、洩矢諏訪子。祟られ死んでしまうがいい！！」

その言葉によって戦いの火蓋が切って落とされた。

ついに、後の世代でも語り継がれる諏訪大戦が始まった。

第１２話　諏訪大戦　前編（後書き）

ついに諏訪大戦勃発です。
次からは戦闘シーンがかなり入る予定です。と言うか戦闘シーンなかったら戦争じゃないないし。

まぁ頑張ります。

第１３話　諏訪大戦　後編

戦闘が始まったと同時に大和の神たちは数に物をいわせ、弾幕をこれでもかというばかりに放ってきた。弾幕ゲームに必須の抜け道なぞどこにもなく、後ろに下がろうにも『集』ではなく『円』で放ってきているため回避は出来ない。

ならどうするか？

答えは簡単、避けなければいい。その身に降りかかる攻撃を防いでしまえばいいのだ。

とはいうもの、常時展開している霊壁結界ではさすがにこの量は防げない。防げるかもしれないがわざわざ危険な道を選ぶこともない。身体に密着させるようにして展開しているから破れたときはモロにくるのだ。まぁ半不老不死だから食らっても再生するけど……。

「反射壁×４！！」

最初に目の前に自分に向かってくる弾幕を全て撥ね返す。これですでに防御できているのだがそれではおもしろくない。これを利用する。

反射したことにより様々な方向へ飛んでいこうとするのを残りの3つの反射壁で内側へと反射させる。

「空壁牢！！」

内側に反射した弾幕を空壁牢で閉じ込める。
中では反射を付加しているため絶えず反射し続けている。そして徐々に空壁牢を縮小させていく。
すると中の弾幕はどうなるか？

反射する間隔狭まり、速度をどんどん上げていく。大きさがおよそ5メートルぐらいまで縮小された頃には、中の弾幕は密集しすぎて一つの塊にしか見えないが、反響音が凄まじい速度で鳴り響いている。

大和の神たちはあれだけの密度の攻撃を無傷で、しかも簡単に防がれたことに唖然としていたが、今やってる僕の行為の真意には気づいていないようだ。

「さて、大和のみなさんにここで問題です？」

「？」

「僕が今右手に浮遊させているのはあなた方が先ほど僕に放った弾幕を閉じ込めたいわば箱です。中では反射を繰り返させています。あれほどの量の弾幕をこの大きさの箱に閉じ込めたまま反射させています。」

「まぁ中は音を聞けばわかるように凄まじい速度で反射しています。……この箱をそちらへ放り込んで解放させた場合一体何が起きるでしょう?」

「!?マズイ、あれを今すぐ破壊しろ!!若しくはあいつを吹き飛ばせ!!」

問いかけの意味に気づいた神がいたようだったがもう遅い。
問いかけたように実行した場合どうなるか。大量の弾幕を無理やり小さな箱に閉じ込めた上に絶えず反射し続けていたものが解放されればどうなるか?

僕は右手を振りかぶり最速スピードで敵のど真ん中に放り込んだ。

「爆裂『荒れ狂う弾丸』」

解放された瞬間、閉じこまれていた弾幕があらゆる方向へと凄まじい速度で炸裂した。まるで手榴弾のようだ。
近くにいた神はもちろん、離れた場所にいた神もそのあまりの密度とランダム性、速度に反応することが出来ず次々と被弾し、墜落していった。

固まっていては駄目だと思ったのか、残った神たちは周囲を囲むようにしてばらけた。そして突っ込んできた。

僕は両手に2メートルサイズの空壁を出して、向かってくる拳を受けるのではなく受け流すようにして対処し、体勢が崩れた所を空壁で叩き落す。

背後から二人剣を振りかざしてくるのを、あらたに2つ空壁を出現させ防ぐ。そして相手が動揺している間に振り向きざまに空壁を腹に叩き込み再び地上へと叩き落す。

少数では無駄だと判断したのか今度は一度に数え切れない人数で攻めて来た。
そこで僕は近づかれる前に敵の目の前にまた2メートルの空壁を出し、それを操り回転させた。回転速度は次第に上がっていきそれを中心にして風が集まり始めた。

「旋符『塵旋風』」

いつしか巨大な竜巻ができ、神たちを全て巻き込み地上へと落とした。

地上を眼を凝らして見てみると、だいぶ減っていたが今ので全部とまではいかなかったようだ。傷を負ったものを含めて（傷を負っていないやつはいなかったが）およそ３００人ぐらいは残っているようだ。

結構残っていたがそれも想定範囲内。だからこそ一箇所に集まってしまうように塵旋風を放ったのだ。

あちらが動く前に僕はすぐに仕上げにかかった。

「多重土壁牢！！」

通常の土壁牢に対してさらに3層ぐらい追加して強固なものに神たちを全員閉じ込めた。土壁牢に『弾幕を放てる』事を付加した。

「囲符『暗闇の四面楚歌』」

発動した瞬間中から悲鳴があがった。
中では四方八方から大量の弾幕が次々放たれているはずだ。弾幕速度も遅く設定していない。空壁牢と違い、土壁牢は完全に光を遮断しているので中は真っ暗である。その状態で避けれるものはまずいないだろう。

5分間ぐらいして解除してみると誰一人立っている者はいなかった。ピクピク動いているようなので死んではいないようだ。周囲を見渡しても誰一人死んでいないようだった。
そこで思わず安心した。いくら敵でも神殺しだけはしたくなかったのだ。

こっちの戦いは終わったので諏訪子の下へ戻ることにした。もしも歴史どおりならば諏訪子は八坂に負けてしまうだろう。だが、あくまでも僕は手を出さない。諏訪子がやらなきゃ意味がないからだ。

とりあえず気絶した神たちを適当に一箇所に集めておいて僕は転移壁で洩矢神社へと戻った。

戻ってみると目を疑うぐらいに変化しているとこがあった。神社は僕が結界張っておいたから問題なし。里の方も同じ理由で問題なし。だが、湖がいつも見るものとは全く違うものになっていた。違うというのも巨大な御柱が何十本も湖に突き刺さっているのだ。

想像してみるといい…、湖にそんなものが刺さっている光景を……。なんかシュールというか、違和感がありすぎて仕方がない。

その湖の上空を見ると諏訪子と八坂がまだ戦っていた。諏訪子は自分の周囲にいくつもの岩石を展開し、八坂は両手と背中に御柱を装着している。

（う～ん、確かにあの姿を見るとガンキャノンに似ていると言われても仕方がｎ）

ブォン！！

ドゴォン！！

……なんかすんごいでっかいのが掠めたような。冷や汗流しながら

も横を見ると御柱が刺さっていた。

「あ、危ないでしょ！？避けてなかったら死んでたと思うよ！！」

八坂は八坂で反省はしていないのかこういってきた。

「いや……なんかかなりイラつくこと思われた気がしたからつい。」

「ついで投げないで、ついで！！」

必死に訴えてみたが無視され諏訪子と話している。

「にしても予想以上にやるじゃないか、洩矢諏訪子。ここまで苦戦したのは初めてだよ。」

「そっちこそ大口叩くだけのことはあるね、八坂神奈子。」

「お互いそれほど力は残っていないだろう。次で最後だ。」

「そうだね、じゃあ決めさせてもらうよ。」

そういうと諏訪子の体がぶれた。
姿を見失った八坂は辺りを見渡している。

「こっちだよ!!」

「なに!?」

気づけば諏訪子は八坂の後ろに移動していた。

「これで終わりだよ!!神具『洩矢の鉄の輪』」

両手に鉄の輪を持ちクロスするようにして切りかかった。

これは勝ったかと思った瞬間、八坂はニヤリと笑いその直後しめ縄が淡く光りだした。すると諏訪子の鉄の輪が赤茶色く錆びていき崩れてしまった。
それを見て動揺する諏訪子。そしてそれを見逃すはずもなく八坂は御柱をバットのように振って諏訪子を湖へと叩き落し、湖に巨大な水柱が立った。

ドボォォォン!!

水柱が消えると諏訪子が浮いてきた。死んではいないようだが、すでに気を失っているようだった。八坂もそれに気づいたのかすぐ近くまで近づき御柱を振りかざした。殺させるわけにはいかないので諏訪子を守るようにして空壁牢を出した。

ガキィィィン！

「……何のつもりだ、新よ。」

「勝敗はすでに決しています。諏訪子が負け八坂神奈子、あなたが勝ちました。これ以上の戦いは必要ありません。それでもやるというのだったらここからは僕が相手になりますよ？」

八坂は少し考えるそぶりを見せてから首を横に振った。

「いや、やめておこう。ただでさえ力をほとんど使ったからな。それにおそらくお前には勝てそうにない。他の神たちはどうした？」

「あぁそれでしたらさっきまで戦ってた場所で仲良く気絶してますよ。全力じゃなかったので誰も死んでないですよ。」

「……やっぱり戦わないことにしてよかったよ。あれだけの人数相

手にして勝って、しかも全力じゃないって。」

「じゃあ戦争はこれでおしまい。……お～い、諏訪子。起きろ～。」

諏訪子の顔をペチペチ叩いて眼を覚まさせる。すると、気がついたのか諏訪子が眼を開けた。

「ん……。あ～う～、幸生～。負けちゃったよ～。」

泣きながら抱きついてきた。それを見て八坂は顔を引きつらしている。

「……新よ。さっきまでのとギャップが激しいんだが…。」

「八坂さん。気にしたらたぶん負けですよ。あと僕のことは幸生でいいですよ。」

「まぁ気にしないことにするよ。私のほうも神奈子でいいぞ。」

「じゃあ神奈子、さきに言っておかないといけないことがあるんだけどこの国の人たちの信仰を奪い取

るのは無理だと思うよ。」

「そんなことはないはずだ。私はこの諏訪大国の神に勝ったんだ。」

「まぁ百聞は一見にしかずとも言うし、里の人たちのところに行ってみれば？」

「よくわからんが言われなくてもそうするつもりだ。」

そう言って神奈子は里へ向かっていった。

――――２０分後。

「≪今まで信仰してきた諏訪子様からあなた様に変えるなんてできません。そんなことをすればミシャグジさまに祟られてしまう≫って言って聞く耳持たなかったよ……。」

「そういうことだよ。諏訪子はミシャグジを操れる祟神でもある。民たちはミシャグジの祟りを恐れながらも信仰してきた。５００年以上前から。だから信仰が根強いんだよ。いくら神奈子が諏訪子に勝ったからといっても民が祟りを恐れる限り無理だと思うよ。」

「むぅ……、しかしそれではどうすれば……。」

「そこらへんは神社で話そうか。空中で話すのもなんだし。」

「わたしはそれでいいが勝手に招いてもいいのか？」

「問題ないよ。それに当人がこれじゃ…。」

「グゥ――――。」

会話に入ってこないと思ったら、いつの間にか抱きついたまま諏訪子は寝ていた。

「そ、そのようだな。じゃあ招かれよう。」

最終的には信仰の流れをごまかすこととなった。
洩矢神社から守矢神社へと名前をもじって表では神奈子が、裏では諏訪子が今までどおり民から信仰されるという形で収まった。両神とも納得しており神奈子もこの神社に居つくこととなった。
そして、今は戦争も終わり新しい家族が出来たことなどの理由により神社で宴会もどきをしているのだが……。

「なんでこうなったし…。」

「幸生～、ほらどんどんのんれぇー。」

「そうらよ、こんらときぐらい、ろまなきゃそんらよ～。」

今まで一番だといえるくらいに諏訪子と神奈子が絡み酒をしてくる。
すっかり出来上がっているようだった。

「ミシャグジ、頼むなんとかして!!」

少し離れた所にいるはずのミシャグジ助けを求めた。が、

「むにゃむにゃ…。もう無理ですって、えへへ～。」

「もう酔いつぶれて寝ちゃってる！！」

「ほらほら～、ろんろんのんれ～。」

「さっきより飲んでｒガボガボ！？」

そんな感じでその日は過ぎていった。

翌日二日酔いに全員が悩まされたのは言うまでもない。

第１３話　諏訪大戦　後編（後書き）

諏訪大戦終了～

戦闘シーン難しすぎる！！技名のセンスなしです。頑張ります

第１４話　新たな旅立ちと忘れ傘

修羅場というのにふさわしい宴会から１ヵ月が過ぎた。
最初は多少ギクシャクしていたが今では家族同然である。たまに喧嘩はするけどそれも遊びの範囲内…

「この老け顔め！！」

鉄の輪が飛ぶ。

「カチン（怒）…この胸も背もペッタンコな幼女め！！」

御柱が飛ぶ。

「なにを！」

「なんだ！」

……遊びの範囲なのはずなんだけど毎回鉄の輪と御柱を投げあうのはやめてほしい。いやこれマジで。処理するの結局僕だからね。

まぁこのように諏訪子は諏訪子でもう慣れているようだった。ミシャグジも今は巡回でここにいないが慣れたようだった。

……うん。これなら僕がいなくてもやっていける。この二柱の神が力を合わせれば大丈夫だろう。

「諏訪子、神奈子。そろそろその辺にしてご飯食べよ「よしやめるか。」「わーい、幸生のご飯―。」…切り替え早いね。」

先ほどまでの険悪な雰囲気はどこへやら、ふたりは一目散で神社の中に戻っていった。
…大丈夫かなー、なんか少し心配になってきた。主に威厳的なことについて。

ハァ～とため息をついているとミシャグジが帰ってきていた。

「あぁお帰りミシャグジ。どうだった?」

「はい、問題なかったです。そちらも…［周囲を見渡す］お疲れ様です。」

「ハハハ。…ごめん、これ片付けるの手伝ってくれる?終わったら昼食にするから。」

「わかりました。」

「ありがとね、いつも。諏訪子たちも片付けてくれれば「「幸生まだー？」」……怒っていいよね、これ？」

霊力は僕の感情に反応しあふれ出てき始めた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

「幸生さん、お、落ち着いて。」

「……わかってる、冗談だよ。」

（冗談には見えないぐらい霊力出ていたんですが…。）

「片付けはあの馬鹿二人に任せることにしよう。」

「はい。（あっやっぱり怒ってる。）」

荒れた境内をほっといて僕たちも神社へと戻っていった。

「「「ごちそうさま」」」

「おそまつさまでした。」

満足したのか諏訪子と神奈子は食って早々に寝転んだ。
…神奈子、諏訪子はともかく君の威厳はどこへ行った。

ミシャグジはミシャグジで思う所があるのかその光景を見て苦笑いしている。

「3人とも、話しがある。ちょっと聞いてくれるかい？」

「「「？」」」

「僕は……ここを出て行くことにするよ。」

「「「！？」」」

3人とも突然のことだからか驚きを隠せないようだった。

「な、なんで？さっきの喧嘩のことならもうしないよ。」

「そ、そうだぞ。もうせんぞ。」

「……。」

ただ一人ミシャグジだけが黙っている。

「君は何も言わないのかい？」

「…いえ、いつかは旅に行かれるのかなとは思っていました。あまりにもタイミングが突然すぎたので驚きましたが。」

「そうか……。諏訪子、神奈子、何もさっきのが出て行く理由じゃあないよ。あれぐらいで出て行くならとっくに出ているからね。毎回修理する僕の身にもなってほしいよ。」

「うっ。」

「申し訳ない。」

「まぁそれが理由じゃないって事はほんとだよ。理由はミシャグジが言ったように旅に出たいと思ってたからだし、それにもう僕がいなくても君たちが今のように協力し合っていけるなら大丈夫だと思ったからさ。」

「……そっか、そうだよね。私たちだっていつまでも幸生に頼りっぱなしじゃ神の名が廃るもんね。」

「だな。ここまで信頼されているんだ。ここで反対したらそれこそ駄目だ。」

二人とも納得してくれたのかウンウンと頷いている。

「まぁ、一生会えないわけじゃないし、転移壁もあるから一瞬で来

れるよ。だからまたね。」

「そうだ、幸生。ちょっと待ってて。」

そういうと諏訪子は自室へ走って何かを取りにいった。

しばらく待っていると、諏訪子が何かが入った包みを持って戻ってきた。

「はい、これ。持って行って。」

「諏訪子、これは？」

包みを開くとそれはよく見る銀色の鉄の輪だった。

「それはね、私の鉄の輪だよ。」

「それにしては小さいけど…。」

「あんなでっかいの持ち歩けないでしょ？だからこれは髪留めにしてほしいんだ。似合うと思うんだけど……。」

髪留めの用の紐をはずしてそれに髪を通してみるとぴったりで、しっかり髪留めとして機能していた。

「うん、いい感じ♪ありがと、諏訪子。」

御礼代わりに撫でてあげると嬉しそうに目を細めていた。

「なら私かも餞別だ。」

そういって神奈子が渡してきたものは、酒だった。それもかなり上等というかお神酒だった。

「神奈子、これはもらえないよ。神が飲むものなんだよ。お神酒って。」

「大丈夫大丈夫、その神がいいって言ってるんだから。」

「う～んなんか納得いかないけど、じゃあ大事に飲ませてもらうよ。」

「私からはこの笛を。暇なときにでも使ってください。」

そういうと木でできた笛を渡してきた。

「ありがと。じゃあ行くね。」

「荷物は？」

「昨日のうちに最低限のものだけまとめてあるから大丈夫だよ。」

「そっかじゃあまたね。」

「いつでも歓迎するぞ。」

「お待ちしています。」

「うんそれじゃ。」

空壁に乗り守矢神社をあとにした。行き先は特にないがブラブラ旅をするというのもいいかもしれない。

守屋神社ｓｉｄｅ

「行っちゃったね……。」

「そうだな。」

「お二人とも。しんみりするのはこの境内をきれいにしてからにしてください。」

「げっ。」

「忘れてた。」

逃げようとすると肩をガッとすごい力で掴まれた。

「逃がしませんよ？」

「「ひいいいいいいい！！」」

余談だがその日から数日後、二柱の神が神社の中でピクピクして動

けなくなっているというのは誰も知る由もなかった。

「おばちゃん、もう1セット追加で！！」

「はいはい。」

ところかわって守矢神社を出て数日が経った今僕は山道に偶々あった団子屋にいる。空飛んでたらなんか甘いにおいがするので辿ってみればここに着いたのだ。

「おまちどうさん。にしてもおにいさん変わった髪の色してるね、それに眼も。異国の人かね？」

「ありがとうございます。いえ違いますよ、これは…モグモグ…まぁ生まれつきです。モグモグ。」

「そうかい、まぁゆっくりしていきんさい。」

「ありがとう…モグモグ…ございます。」

おばちゃんが店に戻っていくのを見てから自分のことを考えた。確かにこの髪と眼の色は今の時代からしたら明らかに異質であるといえるだろう。今のおばちゃんのような人ばかりなら問題ないのだが、都に行ったりしたら歓迎されないだろう。

（そこらへんもなんとかしないとなぁ…、にしても団子がおいしい。）

注文したものを全部食べたのでそろそろ行くことにした。

「おばちゃん、お勘定。あとお持ち帰りで3セット団子お願い。」

「はいはい。ありがとね。」

団子を取りにおばちゃんが店へ戻ったので待っていると、ふと店の隅に置いてある唐傘が眼に入った。

その唐傘は柄は黒と普通なのだが傘の方が紫一色という中々インパ

クトのある傘だった。少し妖気が感じられたのでおそらく化け傘なのではないだろうか……。

なぜこんなものがこの店にあるのか気になったので戻ってきたおばちゃんに聞いてみることにした。

「はい、おまちどうさん。」

「ありがと。失礼ですけどあの傘はここの店のものですか？」

隅にある傘を指差すとおばちゃんは困った顔をしながら首を横に振った。

「違う違う、ありゃうちの傘じゃないよ。だいぶ前に来たお客さんが忘れていったんだよ。まぁたぶんあんな色の傘使いたくなくなったからここにわざと置いていったんでしょう。私だってあんなもん使いたくないからね～。」

「ふむ……。おばちゃんじゃああれ売ってくれる。」

「えっもらってくれるのかい？」

「はい。」

雨が降ったときとか実は困っていたのだ。壁で防ごうにも急に角度を変えてくるのでこの頃ずぶぬれになっていたのだ。まぁこの唐傘は化け傘だが傘としてはちゃんと使えるしもし襲ってきたら退治すればいいだけのことだ。

それに僕としてはこの色は結構好きだ。

「だったらタダであげるよ。こっちとしてはいい厄介払いができるんだから。」

「そうですか、じゃあ頂いていきます。」

そういって唐傘を手に取る。大きさも重さもちょうどよく満足だ。

「じゃあどうも。」

「またのお越しを～。」

またいつものように空壁に乗って移動していると雨が降ってきた。さっそくもらった唐傘を差す。……うん、雨漏れもないし大きさが丁度いいから雨の降る角度が変わっても問題ない。いいものもらった。

なんだか気分がよくなったので唐傘を差したまま神奈子からもらったお神酒とさっき買った団子を取り出した。こうして食べると風流な気がする。

「～♪～♪。」

軽く鼻歌をしていると急に誰かが泣くような声がした。

『グスッグスッ。』

泣き声の発生源が中々見つからない。
もしかしてこの唐傘かと思った所で、唐傘の柄の先に足のようなものが生えた。それはその場でジャンプしたと思ったらボゥンという音とともに煙が出た。

（やはり襲ってくるか、気に入ってたのになぁ）

いつ来てもいいように構えた。
そして煙が晴れた先にいたのはさっきまで使っていた唐傘を持った少女だった。

唐傘はさっきまでとは違い長く太い舌、そして一つ目が出ていた。
少女の方は髪は水色で右眼が青、左眼が赤だった。服装は腕は袖にフリルのついた白物、胴体の方は髪と同じ水色。ボタンの代わりにか紐を×印のようにしてある。下はスカートで薄い水色で下駄をはいている。

というか思いっきりあの多々良小傘だ。二つ名で［愉快な忘れ傘］といわれていたはずだ。

話しかけてみようとするといきなり泣き始めた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁん！」

「お、おい。いきなりどうした？」

「傘として私を使ってくれてる～。わぁぁぁぁぁぁん！」

この状態では埒が明かないので一度地上に降りることにした。
地上に着くと肝心の傘が「うわぁぁぁぁぁん。」あの状態なのでとりあえず空壁牢をだして雨宿りしながら小傘が泣き止むのを待つことにした。

――――10分後。

「落ち着いたかい？」

「グスッ、はい。ありがとうございます。」

まだ少し眼が赤くはれて傘を抱きかかえているが大丈夫なようだ。

「まぁとりあえず自己紹介といこうか。僕は新幸生、一応人間だよ。」

「わちきは多々良小傘（たたらこがさ）です。この唐傘の化け傘、付喪神です。」

「そうか……。で、何で急に泣き出したの？」

「それはご主人様がわちきをちゃんと傘として使ってくれたことが嬉しかったからです。」

本当に嬉しそうな顔をしてそういってきた。

「わちきはこの傘の色のせいか一度も使われずにあの店に置いていかれました。何年も何十年もあの店にいるうちに化け傘になっていました。それからは夜は能力を併用しながら人を驚かせに行き、朝になるとあの店に戻り、誰か使ってはくれないかと待っていました。けど、だれも見向きもしなかったんです。」

「そんなある日ご主人様があの店に来てわちきをくれないかと言ったんです。一瞬耳を疑いました。しかもその後捨てずに雨が降ってから傘として使ってもらえあまりに嬉しくて泣いてしまいました。」

未だに幸せそうな顔をしている。

（かわいいな……。純粋というか単純というか。その前に）

「小傘の事情はわかった。じゃあこっちから2つほど聞くよ。」

「はい！」

「まず1つ目、人を驚かせに行ったときに能力を併用したって言ったけど小傘の能力は？」

「わちきの能力は『人を驚かせる程度の能力』です。ただ徐々に何ですけどわちきを見ても驚かない人もたまにいるんですよ。」

少し沈んだ顔をする小傘。まぁたしかに驚かせるのが生き甲斐だからなぁ、化け傘は。

「じゃあ2つ目。これが僕にとって一番重要なことなんだけど、なんで僕のことご主人様って呼んでるの？」

「えっだってご主人様じゃないですか。」

あたかも当然のように言う小傘。ハァと頭に手を当てる。

「もしかしてわちき捨てられます？」

不安そうに上目遣いで涙をうっすら浮かべ恐る恐る聞いてきた。その瞬間勢いよく僕は後ろに顔を背けた。

（だからそれ反則だって！！しかも不安そうにっていう要素が増えてるし。）

とりあえず気持ちを落ち着かせることにした。素数を数えよう。2、4、6、8、10…あっこれ偶数だ。まぁ落ち着いたからよしとする。

「捨てはしないよ、そんなことしない。ただ小傘、君はいいのかい？僕の傘として一緒にいるということは前ほど自由じゃないと思うし、危険なこともあるよ。」

「……それでもわちきはご主人様のそばに居たいです。わちきを使ってくれるのはご主人様しかいないです。」

「そうか、ならいいよ。まぁ基本自由にしてもらっても構わないし、危害が及ばないようにもするよ。あと人の驚かせ方も時間があれば教えてあげるよ。」

「本当ですか！？ありがとうございます、ご主人様！！」

眼をキラキラさせて何度も頭を下げている。よほどうれしいんだろう。唐傘のほうも心なしか眼が笑っているようにも見える。

「ただ…そのご主人様っていうのはやめないかい？そういうがらじゃないんだけど……。」

「ご主人様はご主人様です。それだけは譲れません！！」

「じゃあせめて様はやめておねがいだから。」

「ムゥ……わかりました。じゃあご主人！！これからよろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく小傘。雨のときとか話し相手頼むよ。」

「はい、お任せください。」

こうして僕の旅に愉快な化け傘が加わった。

退屈になることがなさそうでこれからが楽しみだ。

第１４話　新たな旅立ちと忘れ傘（後書き）

小傘いいですよね
ついだしちゃいました
がんばっていきます

第１５話　化け傘の仕返し

小傘が旅に加わってから3日ほど過ぎた頃、僕はふとあることを呟いた。

「家……ほしいな。」

「何か言いましたか、ご主人？」

聞き取れなかったのか小傘は首を傾げている。

「いやな、今までは一人だったから野宿も気にならなかったんだけど今は小傘もいるからねー。ずっと野宿ってわけにはいかないでしょ。」

「そんな気になさらなくてもいですよ、ご主人。わちきはもともと野宿していたようなものですし……。」

手を前に出しわたわた振っている。

「遠慮しなくていいよ、小傘。それに小傘は唐傘お化けといえど女の子なんだから身だしなみもきれいにしたほうがいいし。」

そう言われ小傘は自分を見てみると髪はボサボサ、服も煤などの汚れが目立っている。
無理もないだろう…。いままで放っておかれたうえに洗うことなど機会がなかったに違いない。

「うう……、それはそうなんですけど。」

小傘も気にはなっていたようでもじもじしている。

「家を建てればいろいろと便利なるし僕もそのほうが都合がいいと思うんだ。どうかな?」

「ご主人がそう言ってくれるならお言葉に甘えます。」

「よし、そうと決まればまずは家を建てる場所を「グゥ〜〜〜。」……そのまえにご飯でも食べようか?」

急に鳴った音の発生源を探すと小傘が顔を赤くしてお腹を押さえている。

「／／／／／／／…はい。」

よほど恥ずかしかったのか消え入りそうな声で答えた。

近くの川で魚を捕って焼いて食べた後、家の話へと戻った。

「火なんかは僕が代用できるからいいとしてやっぱり水回りが目下の問題かな。」

「そうですねー、そしたらいつでも水が飲めるし体も服も洗えますし。」

「やっぱり気になってたんじゃないか、遠慮せずに早く言ってくれたらすぐにでも造ったのに…。」

「いや～えっとすいません。わちきがご主人の傘になってからまだ日が浅かったのでそういうのはどう…かなって……思ったの……

……ですけ……ど。」

「どしたの？急に歯切れが悪くなって。」

少しおかしかったので尋ねたが、どこかを見てそれに釘付けになっているのか、聞いても耳に入っていないようだった。

小傘が釘付けになっている方向を見てみると、その先には一人の男が歩いていた。その男はこちらには気づいてはいないようだった。まぁ理由は僕と小傘を中心として、視覚と気配を遮断する隠形陣で囲っているからだ。ちなみに一人一人に付けれるものもある。

まぁそれはおいといて小傘はさっきからその男を見ている。この角度からだと顔は見えないためどんな表情をしているのかはわからない。だが、ふと小傘の手を見ると血がにじみ出るほど硬く握り締めている。
さらによく見れば、何かを抑えているのか小刻みに体を震わせていた。

「小傘！！」

「はっ！え、えっとどうしました、ご主人？」

振り返った小傘はいつもの笑顔だったがぎこちなかった。

「どうしたじゃないだろう、あの男を知ってるのかい？」

「い、いえただ見てただけですよ。」

「……。」

「ホントですって。」

「……。」

「何にもないですって。」

「……。」

「…わかりました。話します。」

「よろしい。」

観念したのか諦め顔でハァとため息をついた。

「あの男は……わちきの元ご主人です。」

「……は？」

「何十年も会ってませんがあの顔つきは忘れません。間違いないです。」

顔をゆがめて一言一言言う小傘。よほど憎いのだろう……。自分を色や形がいやだから捨てた張本人が目の前にいるのだ。
よく襲わずに我慢したものだ。

「で、でももう大丈夫ですよ。あいつが捨ててくれたお陰で唐傘お化けになってご主人と巡り会うことが出来たわけだからむしろ感謝ですよ。」

「……よし、あいつに仕返ししよう！！」

「はい？だからもういいって…。」

「いや、いいわけない。確かに化け傘になったお陰で僕は小傘と会えた。それは僕も嬉しいよ。でも、あの男が捨てたせいで僕と会うまで小傘は一人きりだったんだ。いいわけがない。」

「でも、殺すのは……。」

ここでまだ相手のことを考えている時点で小傘は本当にやさしいと思う。

「大丈夫、ほんとに襲うわけじゃないから。」

「？」

「小傘が一番得意なことってなんだい？」

「えっ、それは……あっ！」

「そう、人を驚かせることでしょ？その得意さを生かしてあいつを死ぬほど驚かせてやればいいんだ。いっとくけど本当に死なすわけじゃないからね。」

「はい！！じゃあ行って来ます！！」

「ちょっと待って。その前にどんな驚かせ方をするか見せてくれるかい？確認しておきたいし、興味もあるしね。」

「もちろんいいですよ。わちきの驚かし方に腰を抜かさないでくださいよ。」

――――5分後。

「そ、そんな…。」

「これはなー。」

まさか驚かし方が「バァ～。」だとは思わなかった。そういう意味では驚いたけど、これではただかわいいだけだ。

「というか今までよくこれで少しでも驚かせたね…。」

「わちきの渾身の一発だったのに…。」

よほど自信があったのか地面に崩れ落ちている。なんだかこれではこっちが悪いことした気分になってくる。

「……仕方ない、僕はそっちの専門じゃないけどちょっと驚かせ方を教えてあげよう。」

「ホントですか!?」

顔をガバッと勢いよくあげて気体に満ちた顔で見つめてくる。

「今日一日教えれることを出来るだけ教えてあげるからそしたら明日こそ仕返しだ。」

「はい!!」

「じゃあまずは……。」

その日は日が暮れてからもひたすら教えることとなった。

翌日

「うん、これなら普通の人間ならまず驚くよ。後は小傘次第だね。」

「はい！！なんか自信出てきました。」

「決行は夜だからとりあえず寝ておいた方がいい。起こしてあげるからそれまではねてていいよ。」

「でも、ご主人も昨日は寝てないですよ？」

「1日ぐらいなんとでもなる。まぁいいから寝てなって。」

「……じゃあお願いします。」

「うん、おやすみ。」

時は過ぎて子の刻（今でいう夜中の１２時頃。）

「ふぃ～、今日も飲んだ飲んだ。」

ある男が田舎道を歩いていた。

「さっさと帰ってまた明日来るとしますかね～。にしても暗くて見えないね～いつもここは。」

そう思いながら男は歩いていると、向こう側から灯りが近づいてきている。

「おっ、これは助かる。貸してもらおう？……ん？」

そこで男は違和感を覚えた。灯りがあるということはそれを持つ人間がいるはず。なのに足音が聞こえない。しかも、その灯りの下には誰も映っているようには見えない。極め付けにその灯りは青白い火に見えた。

男はだんだん酔いがさめていくのを感じた。男の脳裏にあることが浮かんだ。

（あ、あれはまさか……人魂！？）

そうこうしているうちにその明かりは近づいてくる。しかも数をどんどん増やしている。

「ひぃぃぃぃぃぃぃ！」

男は慌てて逃げ出すが人魂の方が数倍早く、あっという間に追いつかれ囲まれてしまった。人魂の数も１０個以上漂って男を囲んでいる。

男は怖さのあまりに頭を抱えうずくまってしまった。

（命だけは命だけはお助けを――――！！）

そうしていると前方から足音がジャリ、ジャリと聞こえた。その足音は男の前まで行くと止まった。

うずくまる男の目には足だけが見えた。下駄を履いた実体のある足が見えた。男はそこで同じ人間が来た。

これできっと助かる。

男はそう思った。実際助けがきたとしてもこの状況で助かるかどうかなんてことは確率的に低い。だが、男は恐怖のあまり頭が回っていなかった。

しかし現実はさらに酷なものだった。

男は助けに来たはずであろう者を見ようと顔を上へ上げようとしたところで、

ベロンッ。

なにかに舐められた。それも普通では考えられないほどの大きさであろう舌に。

男はガクガクとさらに震えだした。上げようとした顔が上がらない。脂汗がブワッと体中から吹き出る。

拒否する体を無理やり、けれどゆっくりと顔を上げた。そしてそこにいたのは、

「うらめしや～。」

人魂を従え化け傘を持ち禍々しいオーラのようなもの纏わせた少女のようなものがいた。よく見ればこの化け傘は自分が捨てたものによく似ていた。

そこで化け傘にもう一度その大きな舌で舐められると、男は恐怖と驚きが臨界点を突破して、口から泡を吹き出しながら失神してしまった。

そしてその少女はそれを見るとスゥッと人魂と一緒に消えていった。

「「いぇーい、大成功♪」」

現場からだいぶ離れた遥か上空で僕と小傘は手を合わせて喜んでいた。

「ご主人!!見たあいつのあの驚きと恐怖の顔。」

「あぁ見た見た。小傘がうまくやれたからこそだよ。やるじゃないか。」

そう言いながら頭を撫でてやると嬉しそうに眼を細める。

「えへへへ。ご主人が考えてくれたからだよ。」

僕が考えた方法というのは、まず男の向かい側に青白い弾幕を小傘に出させる。もちろん小傘は隠れている。男が人魂ではないかと疑い始めた頃にその数増やしていく。
男が逃げてはじめたところで一気に追いつき男を囲む。頭を抱えうずくまりろくに周りが確認できないような状態になってから、小傘が近づき、男が確認してきそうなところで化け傘の大きな舌で舐める。恐る恐る顔を上げてこちらを完全に見てきた瞬間妖気を視覚化させて「うらめしや～」といいもう一度舐める。
そして茫然自失となっている男の目の前からスゥッと消えるという手順になっていたのだが…。

「まさか失神までするとはね～小傘の演技勝ちだな。どうだ、気分は晴れたかい？」

「はい！！それはもう気持ちのいいぐらいスッキリと。ホントにありがとございましたご主人！！」

「まぁこれでも小傘の主人だからね。これぐらいなんてことない。ただ今回に限らず一度驚かせるとその人に同じ驚かせ方は聞かない。だからいろいろな驚かせ方を覚えないとね。時間があれば妖怪としての実力あげの修行もしてあげるよ。」

「はい、肝に銘じておきます。」

「さてと、じゃあ帰りますか？」

「はい！！」

いい返事だと思いながら地上に戻ろうとしたとき小傘が急に「あっ！」と言った。

「どうしたの？」

「……ご主人、まだわちきら家ないので帰るとこないです。」

「あっ、……忘れてた。」

結局小傘の仕返しは大成功したが家を造るのを忘れていたのでその日も野宿となった。

第１５話　化け傘の仕返し（後書き）

小傘の口調がこれでいいのか不安です。

まぁ頑張ります

第１６話　家を建てようと思っただけなのに・・・

小傘の【仕返し大作戦☆】に集中しすぎて家を造ろうという話しが出ていたことを忘れていた僕たちはさっそくまずは家を建てるにふさわしい場所を探すことから始めた。

僕たちは建てる大まかな場所は山の中でいいと思っている。というか山の中のほうが僕たちにとって都合がいい。

小傘は唐傘お化けだから人里では暮らせない。ずっと唐傘のままでいれば大丈夫だが、そんな窮屈な思いをさせるのは僕としては好ましくない。

僕はというと知ってのとおり（知られても困るのだが）半不老不死だ。だから、月日が流れても老いもせず死にもしない。人里で暮らそうとすれば明らかに怪しまれる。そうなると転々と移動しなければならない。まぁ旅に出たりもするからずっとそこにいるわけじゃないけどそれでもいやだ。
それに半不老不死を抜きにしたとしてもこの眼と髪の色ではどこに行っても駄目だろう。山なら他の妖怪もいるから早々人間も近づいてこない。

まぁそういうことで山の中というのは決定しているのだが生活する

のに必要な水の供給源を確保できる場所がまだないのだ。

かれこれ何時間探したかわからないが未だにいい場所が見つからない。今日もまた野宿かな～と思っていると小傘が戻ってきた。

「小傘～、どうだった？見つかったかい？」

「はい！！かなりいい場所見つけましたよ！」

顔を輝かせて言う小傘を見て思わず僕もうれしくなった。

「ホントか！？じゃあ早速そこに案内して。」

「はい、こっちです！！」

傘を回しながら先導する小傘についていった。

「ここですよ、ここ。」

「なるほど、ここか……。」

小傘が案内した場所は大きな川がそばにある開けた場所だった。その開けた場所は家を1軒建てても十分、むしろ余るぐらいの広さがある場所だった。
しかも、そこはこの山の入口にも近く比較的人里にも近い。人間が来てしまうこともあるかもしれないがまぁいいだろう。小傘だって人を驚かせに行くこともあるだろうからちょうどいい。
そしてそのそばには川がある。その川はとても澄んでいて飲んでも問題なさそうだ。

「うん、今まで一番良い場所だね。よくこんなとこ見つけれたね。」

「はい。最初はただ山の中を闇雲に探してたんですけど先に川を見つけることにしたんです。それからその川を辿るように探してたら見つけれました！！」

「なるほどその探し方があったか……。なにはともあれお手柄だよ、小傘。ここなら申し分ない。」

いつものように頭を撫でてやるとうれしそうにする。

「とりあえずずっと洗ったりしてなかったんだから体でも洗っとくと良いよ。僕は木材でも探してくるから。」

「えっ、でも……。」

「大丈夫大丈夫。覗きゃあしないよ。じゃ行ってくるよ。っと、その前に。」

「二重空壁牢。」

すると小傘がいる地面から川の所までを二重重ねした空壁牢が囲んだ。

「感知『壁の知らせ』」

さらに最初の障壁を包み込むようにして赤い障壁を張った。

「隠符『隠形陣』」

最後に隠形陣でそれらを隠した。

「ご主人、これは？」

小傘がいるであろう場所から声が聞こえる。

「最初に発動したのが、小傘のみを守るためのもの。二つ目のは、外敵が来たことを僕に知らせる障壁。それは耐久力はないけど破壊されたと同時に僕にそれを伝えるようにしてあるから。最後のは小傘も知ってるだろう？」

「えっここ襲われるんですか？」

「襲われないとは言い切れないからね。まぁこれで大丈夫だよ。じゃ行ってくる。」

「あっはい。頑張ってくださ～い。」

手を振り見送っているであろう小傘を背に森の中に入った。

――――３０分後。

「う～ん手ごろな木、見つからないな。」

まだ３０分ぐらいしか経っていないとはいえこんだけ木が生えているのだからすぐに見つかるだろうと思っていたが甘かったようだ。

まぁこんだけ多い山なら何とか見つかるだろうと思っていると

――ピキーン――

という音が脳裏を駆け巡った。

「!?さっそくきたの!?」

どうやら何者かが攻撃してきているようだ。しかもまずいことに一人ではなく１０人ぐらいいるようだ。

来たとしても多くて4、5人だと思っていたが……ぬかった。

「そんな大勢でやられると不安になるでしょうよ！！」

転移壁で急いで小傘のいる場所に戻る。

戻ってみると上空から何者か達が弾幕を雨あられと放っていた。
なにやら侵入者だとかあそこから声が聞こえるぞ！！とか言ってる。

（しまった、音まで消すと離せないからと思ったんだけど裏目に出たか。）

「小傘は！？」

弾幕が放たれている方向を見ると小傘の慌てる声が聞こえた。

「あわわわわわわ。」

意識を集中させて空壁牢を調べるとすでに一層は破られもう一枚もひびができているようだ。

「小傘――！！大丈夫か！？」

「ご主人！？い、今のとこは大丈夫です。」

「今から何とかするからそこに「あそこにも侵入者がいるぞ！！」っあぶな！！」

声を張り上げたことにより僕まで見つかってしまった。僕はあほか。そうこうしているうちにも小傘のいる方向へと次々弾幕が放たれる。姿が見える僕よりも見えない小傘のほうが脅威だと勘違いしてしまっているようだった。助けにいこうにも地味に攻撃が邪魔をする。

そしてついに空壁牢が破られた。

パリィィィィィン！

「きゃあああああ！」

破られたと同時に水しぶきと土ぼこりが上がった。煙のせいで小傘がどうなったか見えない。

「小傘！！無事なら返事して！」

「けほけほっ、大丈夫です。」

しっかりした声が返ってきたのでほっとした。
しだいに煙が晴れていく。そしてそこにいたのは、

自分の服を持ったまま立っている裸の小傘がいた。
しかも、後ろを向いているためお尻が見えてしまっている。

「ブッ！！」

おもわず顔を赤くして噴出し音速で顔を背けた。襲撃してきたやつらも全員顔を背けている。

「あっご主人。……ってきゃああ／／／／／／！！」

自分が何も着ていないことを思い出したのか顔を真っ赤にして川の中に身を沈めた。もう水浴びは終わっているだろうと思っていたのだけどどうやら服も洗っていたようだ。

「とっとりあえず小傘こっち来てすぐに着替えて。」

顔を背けたまま小傘の目の前に転移壁を出した。

「／／／／／は、はい。」

5秒もしないうちに小傘が僕の背後に出てきてイソイソと着替え始めた。

「も、もう大丈夫です／／／／／／／。」

ゆっくり振り返ってみるといつも通りの小傘がいた。ただまだ顔を真っ赤にしたままだったが。

「えっと見たことは後で誤るからとりあえずあいつら何とかしてくるよ。だからここにいて。」

「はい。」

そういってから上空に上がる。戦闘が考えられるので今回は自力で飛んでいる。

近くまで行ったところでやっと襲撃者達の正体がわかった。

一本下駄を履き頭には山伏帽子、背中には鳥とも思える翼が生えていた。おそらく天狗だろう。犬のような耳に犬のような尻尾を生やしたものもいる。こちらは白狼天狗だ。
その中の一人がすごい剣幕で話してきた。

「ここが妖怪の山と知ってのことか!!侵入者よ、即刻立ち去れ!!」

この山の名前を聞いて思わず頭に手を当ててしまった。

(あちゃ〜、ここ妖怪の山か。確か天狗たちは縄張り意識が強いから侵入者に対して友好的じゃないんだよな〜たしか。)

「あの、すいません。まさかここが妖怪の山だとは知らなかったもので侵入したつもりはなかったんです。」

そう弁明したつもりだったのだが、その言葉によりさらに怒ってきた。

「ここがどういうところか知らなかっただと！貴様我々を馬鹿にしているのか！！」

「いやそんなつもりはｎ「問答無用！かかれ！！」……話ぐらい聞いてよ。」

聞く耳持たずとはこのことで一気に襲い掛かってきた。
こちらも黙ってやられるつもりはないので弾幕で迎撃した。

ほとんどの連中は命中し落ちていったので終わったかと思ったら二人ほど無傷の者がいた。

一人は鳥天狗というだけあってスピードには自信があるようで簡単に避けられお返しに紅葉の葉のような団扇から風の刃のようなものが飛んできた。
もう一人は白狼天狗で回避できてはいないが左手に持っていた大きさ５０センチほどの盾で防ぎ右手に持つ幅が大きい太刀で斬りかかってきた。

驚きはしたがこれぐらいなんともなかった。風の刃は空壁で弾き、太刀のほうは防がず霊気と障壁を右手に纏わせ思いっきり掴んだ。

「「！？」」

止められると思っていなかったのか鳥天狗はよほど驚いている。白狼天狗のほうは掴まれた太刀を何とか振り払って鳥天狗の横に戻った。その顔にはやはり驚きで彩られている。

「「……貴様何者だ？」」

「普通そういうのは自分から名乗るものだとおもうけど？」

そういうと苦虫をつぶしたような顔をしたが、しばらくすると渋々答えてきた。

「私は鳥天狗の射命丸（しゃめいまるあや）　彩だ。」

「…白狼天狗の犬走（いぬばしりもみじ）　紅葉。」

（ふ～ん、射命丸に犬走か……。なんとなく誰かに似てると思ったら文と椛の先祖か親かな？名前一緒で似てるけど違う感じするし…。）

「僕は新幸生。一応人間だよ。で、あそこにいるのが唐傘お化けの多々良小傘だね。」

「なぜ妖怪と人間が一緒にいる？」

「まぁいろいろありまして。」

「まぁそんなことはどうでもいいが…。」

「（なら聞くないでよ……。）」

「我らは侵入者を排除するのみ。」

「覚悟！！」

「ハァ仕方ない…か。」

そうして戦闘が再開された。

彩は自慢のスピードで撹乱しながら、紅葉は彩の撹乱に合わせるようにしてきた。

こちらが動き回る彩を狙おうとすれば紅葉がそれを狙っていたかのように攻撃し、それを防ぐと今度は彩が縦横無尽に駆け回り風の刃

が無数に飛来し、僕を切り刻もうとしてくる。
それらを防ぎながらもいいコンビネーションだと感じた。よほど意気が合っていないとできる動きではなかった。

「ずいぶんといいコンビネーションだね。油断するとやられちゃいそうだよ。」

「そのわりには余裕そうだな。」

「いやいやけっこうギリギリだよ?」

「ぬかせ!!」

横一閃に紅葉が斬ってきたのを後ろへとび避け、大きく距離をとった。

「う~んこれじゃきりないな。」

そういうと2人は汗だくだくになりながらニヤッと笑った。

「ハッ…ハッ…、どうだ…観念…したか?ならおとなしく」

「きりがないのでこれで終わりにしよう。」

「は？」

２人が呆けている間に僕は一度パンッと拍手（かしわで）をうった。

「？何も起きない…。はん、ハッタリか？ならこちらから」

「ハッタリなんかじゃないよ。周りをよく見る。」

「？なっこれは！？」

２人が気づいたときには僕の空壁牢に閉じ込められていた。

「彩さん、閉じ込められています！！」

「ええい、そんなこと言わなくたってわかってます！！こんなのすぐ…。」

「さっき小傘を守っていたのよりも格段に強いからねそれ、壊れな

いと思うよ。それにそんな時間を与えるつもりはない。」

「包符『袋叩き』」

前にやった四面楚歌のスモールバージョンだ。つまり空壁牢から弾幕がどんどん出るわけで、

「「ぎゃあああああ！！」」

文字通り袋叩きにあっていた。
解除すると2人は力尽きたのか落ちそうになっていた。なのでとりあえず落ちていく前に二人を抱えていた。

「……なにをしている？」

彩は気絶していなかったのか不審そうに聞いてくる。

「まぁ見ての通り助けたんだけど…。」

すると呆れたような顔をした。

「襲ってきた我らを助けるとは……変わったやつだな。」

「そうかな？」

「……まぁいい。どのみち早くこの山から出て行ったほうがいい。じきに我らの上司が…。」

「上司というと天魔かな？」

「いや、それより上…だ。」

そこまで言うと彩も気を失った。
最初は意味が良く分からなかった。天魔よりも上？そんなやつはいないはずと考えたところで僕は青ざめた。

彩と紅葉を地面に下ろすと急いで小傘のいる場所まで走った。

（やばいやばい、そういえば昔の妖怪の山にはあれがいるんだった！！）

「ご主人、大丈夫でしたか？」

僕が勝つと信じていたのかその声に不安そうな感じはない。

「問題ないけど問題ありだよ！！」

「はい？それってどういうことですか？」

「詳しく話してる暇ないから簡潔に言うとここにいるとまずいってこと。いいから早くこの場から…。」

「その必要はないよ。」

背後から突然放たれた言葉に思わず身を固める。

「いや～遠くから見てたけどあんた強いね～。」

「確かにそうだね。あの2人は天狗たちの中でもかなり強いんだよ。それを簡単にあしらうとは君も相当強いんだね。」

背後から聞こえる声は2つ。そのどちらも他の奴らよりも明らかに

感じる妖気が桁違いだ。
小傘を見ると妖気にあてられて地面に尻をついて震えている。

「そんなことないですよ、私は普通の人間ですよ。」

もうすでに無駄だとはわかっているが誤魔化してみる。が、

「いや～普通の人間にあの2人は倒せないよ。」

「その通り！！だから…」

僕は思い切って後ろを振り向いた。そしてそこには、

「「あんたと戦いたいねぇ。」」

鬼の伊吹（いぶきすいか）　萃香と、星熊（ほしぐまゆうぎ）　勇儀がいた。

第１６話　家を建てようと思っただけなのに……（後書き）

入り込んだ山が実は妖怪の山でした。
文と椛の両親ｏｒ先祖も出してみました。（先祖か親なのかはいずれ出します。）

次回から鬼とバトル！！さぁどうなるか！？

今回は戦闘描写がうまくできなかったので次頑張ります。

第17話　鬼との決戦？

―昔、有名な鬼という種族の妖怪がいた。
そしてその四天王であると言われる熊童子、虎熊童子、星熊童子、金熊童子もいた。

鬼の頭領といわれる酒呑童子。
鬼は特徴で言えば頭から角が生えているといわれ、喧嘩と酒が好きで、人間を攫い食うとされている。
幾人の人間たちが立ち向かったが、鬼は人間どころか他の妖怪よりも比べ物にならないほどの怪力の持ち主で、誰も太刀打ちできるものいなかったそうな。

その力によっていつしか天狗が治める妖怪の山にも進出して、現在ではそこの山では鬼が頂上とされている。

そして今、僕の目の前には二人の鬼がいる。

1人は金髪のロングヘアーで体操服風の服に流水と紅葉の模様が彩られたスカートを着ていて額の一本角には星のマークが付いていて、

手には酒が並々と注がれた杯を持っている。
おそらく四天王が一人星熊童子こと星熊勇儀だろう。

もう1人は立派な角を頭に2本生やし瓢箪を持っている。そして両腕とオレンジ色の長い髪を結っているところに丸・三角・四角の形をした錘をつけている。
これが鬼の頭領でこの山の頂上である酒呑童子こと伊吹萃香だろう。

どちらもその辺の雑魚妖怪とは格が違う。

目の前の2人は僕に戦えという。僕としてはこんな大妖怪とは出来れば戦いたくない。だからいろいろと考えを張り巡らしたが、だめだった。どの道小傘を守りながら逃げるなんて無理なんだからここでケリをつけておくしかないだろう。

「……わざわざ鬼の四天王の一人星熊童子様とその頭領酒呑童子様がいらっしゃるとは……。他の四天王の方は?」

どこかにまだ潜んでいるのかと警戒して聞いたのだが、それに対して萃香は感心した風な顔をした。

「へぇよく私たちの事知ってるね。ただ1つ違う。金熊のやつはもうずいぶん前に死んだよ。だから私を入れて鬼の四天王だよ。あとの2人はなんか面倒だとか言って来なかったよ。」

「そうですか……。やはり僕と戦うんですよね？」

駄目もとで最後にもう一度聞いてみたが勇儀に何を当然なという顔をされた。

「そりゃもちろん！！早速と行きたいとこだけど…。」

喧嘩の好きな鬼のことだからすぐにでも始めるのかと思ったがまだなにかあるようだ。

「なんですか？」

「あんた、いやあんたらか。なんであんなとこにいたんだ？水浴びしに来たわけじゃないだろうに。」

「それは…その…。」

本当のことを言ってまたさきほどの天狗たちのようにそんなことで入ったのかといわれるかと思いゴニョゴニョ言った。

「早くいいなよ、はっきりしないのは鬼は嫌いだよ。」

「……あの場所に居を構えようかと思っていたんです。」

正直に白状すると萃香と勇儀はしゃがみこんでひそひそと話し始めた。やがて話がまとまったのか立ち上がって勇儀がこんな提案をしてきた。

「今から戦うわけだけどこちらから提案がある。これから私たちひとりずつで戦ってもらう。こっちが2人ともあんたに負けたらここに住んでもいいよ。天狗たちにもそう言い聞かせる。」

「!?それは本当ですか?」

こちらとしては出来るかどうか分からない提案だったがもし出来たならばこれ以上ないほどいい条件であると言える。

そういうと気持ちのいいぐらいの笑顔でニカッと笑いながら言ってきた。

「ああ鬼は嘘はつかないよ!!もしも私たちに勝てたらだけどね…。とりあえずその反応は了承したとみていいんだね?」

「はい。たとえ了承しなかったところであなた方が逃がしてくれるとは思えませんし、それなら勝ってここに住むしかないです。ただ…。」

チラリと小傘のいる後ろを見る。

「僕が負けた場合僕はどうなっても構いません、敗者ですから。でも小傘だけは逃がしてやってはもらえませんか？」

「ハッハッハッ！！人間の割りに潔いいし、肝っ玉も据わってるようだ。しかもこの状況で他のものの心配をするとは…。いいだろうその約束は守ろう。」

「絶対ですよ？」

「言っただろう、鬼は嘘はつかない。安心しろ。」

「じゃあ少し待ってください。」

そういうと未だに腰を抜かせている小傘へと向き直る。

「小傘、いまからこの鬼たちと戦うから少し離れておいて。近くにいて守れる保障がはいから。」

すると我に返ったのか慌てて僕を引き止めるようにして言った。

「だ、だめです。相手はあの鬼ですよ!!いくらご主人が強いからといってもこれではご主人が…。」

その先を口にするのが憚れるのか口をつぐむ。

「大丈夫、仮に僕が負けても小傘の身の安全は保障してもらったから。」

「わちきのことを言ってるんじゃないです!!わちきはご主人が心配で「大丈夫だよ。」えっ?」

いつの間にか小傘は涙を流していた。それほどに僕のことを心配してくれているのだろう。一緒に旅をし始めてからまだ日は浅いのにこんなにも僕のことを想ってくれている。

「確かにあの2人は強い。僕でも勝てるかはわからない。だけどきっと…いや絶対に勝つよ。だってこんなに僕のことを慕ってくれる人がいるのに死ぬわけにはいかないだろう?だから、信じててくれ

るかな?そしたらきっと勝てるよ。」

「……わかりました。ご主人を信じます。でも死なないでください。わちきのご主人はあなたしかいないんです。」

そういって小傘は危険の及ばない所まで下がっていった。

「…すいません、お待たせしました。」

「いや構わないよ。ずいぶんと大切にしてるんだね?」

小傘がいるであろう方角を一度だけ見て僕は言った。

「はい。こんな僕をご主人と慕ってくれる子ですから。」

すると2人が急に笑い出した。わけがわからない…。
萃香が謝罪しながら言ってきた。

「いや~ごめんごめん。ここまで正直に自分の気持ちを話してきた人間も随分と久しぶりだったんでね。鬼は正直者が好きだよ。」

褒められているのだろうか…。笑われながら言われたので僕としては少々複雑な思いだ。

「それはどうも……。それでどちらから僕と戦うんですか？」

「もちろんこの星熊童子こと星熊勇儀が相手だよ！！」

ズンッと一歩前に踏み出し僕の前に出てきた。一歩踏み出しただけでかなりの威圧感を感じた。妖力も相当だ。おそらくこれでもまだ全開ではないだろう。

ふぅ――――と息をはいて心を落ち着かせる。

（相手の気合で呑まれちゃ駄目だ、落ち着いてやるんだ。）

「新　幸生、いかしてもらいます！！」

「来な！！」

勇儀が拳を放ち、それを僕が空壁で受け流す。

「2人とも気が早いねぇ。それじゃ一応改めまして……。」

どうやら最初は戦わない萃香は審判的なものをやるようだ。

「鬼の星熊勇儀　対　人間の新幸生……始め！！！」

「「うおおおおおお！」」

こうして人間と鬼の決戦の火蓋が切られた。

第17話　鬼との決戦？（後書き）

この話で戦わせるはずだったのに……
次から始まります

第１８話　鬼との決戦？　ＶＳ星熊勇儀

戦い始めてまず思ったことは、

「ホラホラホラホラ！！守ってばっかじゃあ私には勝てないよ！！」

（……強い。）

スピードは遅いほうではないかと踏んでいたのだが、繰り出される拳は速く、避けるたびに拳ではそうそう起きることのない音とともに風圧を感じる。避けるたび、空壁で受け流すたびに冷や汗が流れる。常に死と隣り合わせでいる気分だ。

ドゴォン！！

ギリギリで回避できたが、その代わりに拳を受けた地面は地割れを起こしクレーターもどきが出来上がっていた。

「余所見とか考え事してると次は当たるよ？」

「は、はい…。」

あんなものがモロに食らってしまえばひとたまりもない。
僕は少しだけ距離を離し再び両手に空壁を出した。これはあくまでも受け流すためのものだ。真正面から攻撃を受けるための壁ではない。

理由は勇儀のあの攻撃力だ。もしかしたらあれぐらいなら僕の壁でも防げるかもしれない。きっとすぐ近くにいる萃香でもあれぐらいの芸当は出来ると思う。
ただ勇儀は萃香も含めて他の鬼とは力の度合いが違う。それは勇儀が持っている能力が原因だ。

『怪力乱神を持つ程度の能力』

怪力乱神とは僕もよくわかっていないが要は無茶苦茶なぐらい力が強いって事だと思う。おそらくそのおかげでどの鬼よりも力で彼女に勝てるものはいないだろう。
僕の壁でも難なく突き破ることが出来るだろう。
壁に『滅』を付与することもできる。そうすれば勇儀の拳が空壁に触れた瞬間拳が滅されて拳が吹き飛ぶか消える。それもこちらの霊力が勝っていればだが…。勝っていなければ完全に消えることはないだろう。

だけどその手は使うつもりはない。そもそもこちらは殺すつもりはないのだ。あくまで勝ってここに住んでもいい許可をもらうための決闘だ。その許可をもらう相手を殺しては元も子もない。

「さっきから避ける受け流すの一点張りだね。観念でもしたのかい。」

少々呆れたような顔をする勇儀。

「観念するわけないじゃないか。そろそろこちらからもいかしてもらうよ！！」

両手にある空壁を高速回転させ始める。さらに空壁を限界まで薄くさせて『斬』を付与させた。以前人妖大戦の際に、最後に使った技

だ。

「斬符『付き纏う刃』」

放たれた空壁は高速回転しながら勇儀へとまっすぐ向かっていく。

「ふん、こんなもの殴れば…！？」

突如何かに気づいたのか振りかぶっていた右腕を止めて横に飛ぶようにして避けた。目標を失った空壁はそのまま勇儀がさっきまでいた場所を通り抜ける。途中大木や大きさ7メートルぐらいの大岩があったが空壁に触れた瞬間豆腐を切るかのようにスパッと斬れた。

「よく気づきましたね。」

土を払うようにして立ち上がると僕の方に向き直った。

「危ない危ない。危うく私の拳があれみたいに斬れるとこだった。やるじゃないか。」

「いえいえ、それほどでも。でもまだ終わってないですよ。」

「？それはどういう……。」

わけがわからないという顔をしていると勇議の後ろから風を切るような音が近づいてくる。

「なっ！？」

あと1メートルというところで勇儀はなにかに気づきすぐにしゃがんだ。その直後、僕が投げた空壁が戻ってきたのだ。勇儀は避けることに成功したのか髪を少し切られるだけで終わった。

「戻ってくるとは中々きついことしてくれるじゃないか。まさか戻ってくるなんてね。」

「ただ戻るだけじゃないですよ。ホーミングついでに通った後には弾幕付きですよ。」

その言葉を合図に2枚の空壁は再び勇儀へと向かっていく。しかも今度は弾幕をランダムにばら撒きながらというおまけ付き♪

「くっ！！」

迫り来る空壁を避ける。一息つく間もなく弾幕がその後を追うようにランダムにばらまかれそれを掠りながらも避けていく。
このまま終わるかと思ったところで勇儀がこっちに突っ込んできた。

「自分の技でやられな！！」

僕の目の前まで来てギリギリまで空壁をひきつけるとそこでおおきくジャンプした。そしてその後から空壁が僕目掛けて飛んできた。

（なるほど…自分の後をつけてくるならギリギリまでひきつけて避ければ2枚とも僕に飛んでくると思ったのか。考えたね…。）

「でも甘いよ。」

指でクイッと上を指すと空壁は突然向きを変え上へ飛んだ。その後再び勇儀を追った。

「考えはよかったんですけどそれ僕自身も操れるんで。」

「ますます厄介だね。なら…。」

ふいに勇儀が立ち止まった。

「これならどうだっ！！」

迫ってきた空壁をしゃがんで避けて、自分の真上に来たところで空壁の真正面からではなく面の広い側面を殴った。
するとあっけないほど簡単に壊れた。

「どうだ！！次はこっちの…。」

勇儀が前を向くと、そこにはすでに右手を振り上げた僕がいた。

ドゴンッ！！！

僕の拳は見事に腹にクリーンヒットし、勇儀は数１０メートル吹っ飛んでから止まった。
だがあまり効いていないのかすぐに起き上がってきた。

「いい追撃だ。思わずもらってしまったよ。」

「イテテテッ。霊力と障壁纏わせて殴ったのに殴ったこっちが痛くなるなんて。鬼の硬さは尋常じゃないね。」

殴った方の手を振りながらさきほど『付き纏う刃』を破ったときのことを考えた。

「それにしてもよくわかりましたね、あの空壁は実は側面の方はかなり脆いってことに。」

「そうだったのかい?私はただ殴りやすいところを殴ってみただけなんだが……。」

頭をかきながらそう言ってくる。そんな理由で破られるとはさすがと言うべきなのかな、これは?

「でも、そこ危ないですよ?」

今度は何がとか気づかせる間を与えず勇儀のいる所に空壁牢を出し囲んだ。そして、それに『炎』を付加した。

「炎獄『灼熱空間』」

直後空壁牢の中は燃え盛る炎で満たされた。あまりの炎の密度により中は目視することが出来ず熱が外に伝わるほどだ。
これは対象を燃やし尽くすまで発動し続ける。

「これでさすがに「バリィィン！！」……これも力技で破りますか。」

壊れる音とともに炎は消え去り中から勇儀がスタスタ歩いてきた。

「さすがに今のは効いたよ。あれは熱いね～。」

勇儀の言葉通り、ところどころ火傷をしていて服も焼けて穴が開いてる。場所によっては危うい所が見えたり見えなかったり。おっと、煩悩退散退散。

「今のはいけたと思ったんですけどねぇ。」

「いやいや、追撃に追撃を重ねるとは、やっぱりやるねぇ。だけど…」

急に空気が、いや雰囲気が変わった。妖力が上がっていく。あれで

まだ本気じゃなかった
のか……。

「こっからが本番だよ。」

小傘はちゃんと離れた場所にいるだろうかと一瞬別の方に向いた。
そしてすぐに向き直った。その間およそ1、2秒。だが向き直った
ときには勇儀はいなかった。

「余所見とか考え事してると当たるって忠告したぞ?」

「!?」

気づけば勇儀はもう3メートル前ぐらいまで近づいていた。だけど
この距離ならまだ避けれるはず!!

「避けれるとか考えてるだろ?だがこの技はこの距離なら避けれな
いよ!!」

妖力が拳へと急激に収束していく。あれはやばいっ!!

「四天王奥義『三歩必殺』」

「一歩！！」

最初の一歩を踏み込むとズゥゥンと音がして地面が揺れ、回避しようとしていた僕はバランスが取れずその場を動くことが出来ない。震脚だ。

「二歩！！」

僕が身動きが取れない間に二歩目を踏み込む。すると今度は僕の周りに小さい岩から大きい岩が僕の左右と後ろに巻き上がった。退路が完全に断たれた！！

「まずっ！！！重符『多重剛壁』」

最後の三歩目を踏み込まれる前に自分の目の前に何枚もの空壁を出し、今僕が出来うる限りまで強度を上げた。そして、

「三歩ォォォォォォォ！！！」

岩のように硬く握り締められたその拳を僕に向けて放った。
そして勇儀の拳と僕の壁がぶつかり合った。

両者は一瞬拮抗したがそれも束の間、僕の壁は次々と破られた。
そして最後の一枚が破られついに僕の腹へと命中した。

ドゴォォォォォォォン！！

僕の体から普通ではありえないような音がした。そして勢いよく吹っ飛ばされた。

「私の怪力乱神の前にはそんな壁意味ないよ！」

ようやく止まってくれたのかいつの間にか止まっていた。そして一気に痛覚が蘇った。

「クッ……ガハッ！！」

たまらず口から吐血する。腹を見てみると貫通はしていなかったが腫れるどころか赤黒くなっていた。感覚的に肋骨もかなりやられた。ただ少しずつだが直っていくのが感じた。
未完成とはいえさすがは蓬莱の薬。一応機能していた。ただやはり治癒するのに霊力を消費するようだ。

「さ…すがに効くな……これ。」

痛む体で何とか起き上がる。そして前を向く。……どうやらかなり吹き飛ばされたみたいだ。体を動かすたびに軋む。じきに直るだろうけど……。

そして元の場所まで戻った。

「お待たせ。」

僕が現れると勇儀は驚いた顔をした。

「あれを食らって生きてるとは…。手ごたえは確かにあったんだけどねぇ。あんたホントに人間かい？」

「もちろん人間ですよ。ただちょっと丈夫で治癒力が高いだけですよ。」

「それは普通じゃないと思うが……。まぁいい、次で楽にしてやるよ。」

「いえ、それには及びません。僕が決めますから、次で。」

「ほう、言うじゃないか。だができるのかね？傷はだいぶ治ってるようだが、そのために霊力を消費しているように見えるぞ。」

「知ってます?僕の保有量って無茶苦茶あるんですよ?それに本気出してもらったというのにこっちが本気出さずに終わるのは申し訳なのでね。」

そう言って僕は霊力を解放した。だが、全開ではない。まだ次も控えているのだ。ここで全開になるべきじゃない

「なるほど…確かに本気じゃあなかったみたいだね。でもそれも本気じゃあないだろう?」

「まぁ次の方も控えているんで。」

「鬼を舐めるんじゃないよ!!」

怒ったのか勇儀が突っ込んできた。さすがにさっきの技は二度ともらいたくない。死にはしないが意識がぶっ飛ぶ可能性が高いし。

「土壁牢!」

突っ込んできた勇儀を土壁牢が閉じ込めた。

「だからこんな壁私には無駄だといったろう!」

拳一発で風穴が開く。そして出てきたがすでに僕はいない。
真正面から壁で防いでも無駄なのは身をもって知っている。今回は目眩ましが目的だ。だからこそ透けて見える空壁牢ではなく土壁牢にしたのだ。

そして僕は今空にいる。自分で飛ぶのはすこしきつかったから空壁で上昇した。僕の姿を見失っている間に周囲にどんどん空壁を何枚も出していく。
僕が上にいることにやっと気づいたようだ。だが遅い。

「流星『降り注ぐ飛行物体』」

周囲に浮遊する空壁。
その数およそ百枚。
その全てに『音速』を付加した。そして音速の速度をもって勇儀へと降り注いだ。もちろん音速などという速度に反応できるはずもなく全弾命中した。

もくもくと土煙があがり様子が見えなくなる。おそらくかなり効いているとは思うがまだ倒していないだろう。勇儀がいるであろう場

所に空壁牢を展開。もちろんばれないように『透化』を付加した。
煙が晴れるとフラフラしていたがまだ戦えるようだ。

「くっ、今のは……ホントに効いたよ。だがこれじゃあ…私は倒れないよ…。」

「すいません…これで終わりです。……突き上げろ土壁!!」

その声により勇儀の真下から土壁が飛び出した。上空にいる僕に意識が向いていたため真下からの攻撃に反応することが出来ずモロに食らった。しかも空壁牢に囲まれているので上に跳ね上げられず空壁牢と土壁により挟み込まれた。

ドグシャァ!!

挟まれたことにより威力は上がり、さらに意識外からの攻撃だったためさらに威力が増加。土壁と空壁牢を解除するとついに力尽きたのかそのままドサッと落ち立ち上がることはなかった。
どこにいたのかわからないが萃香がやってきて勇儀を確かめる。

「勇儀、大丈夫か?」

「萃香…か？いや～負けたよ。だけど久しぶり強いのと戦えたから満足…だな。」

「そうか、それは楽しみだよ。勇儀にそこまで言わせるなんてね。」

「あいつは強いぞ。」

「わかってる。今まで見てたし、勇儀に本当に勝つとは思ってなかったしね。」

なにやら話しているので僕も2人の所に降りた。
僕が降りてきたのに気づくと勇儀が起き上がった。まだやれるのかと構えると気持ちのいいぐらいの声で笑ってきた。

「ははははははは。いやもう立つ力は残ってないよ。この勝負あんたの勝ちだ。」

「そうか…ふぅ～やっと終わった。」

おもわず地面に座った。

すると萃香が近づいてきた。

「いや～ずっと見てたけど強いね、新は。まさかホントに勇儀に勝つなんてね。」

「こっちには負けられない理由があるんでね。」

「そっかそっか。勝利の余韻に浸りたいかもしれないけどまだ私がいること忘れてないよね？」

「もちろんだよ。君たち2人を倒したときこそ僕の勝利だからね。」

「よしじゃあやろうか。さっきからあんたと戦いたくてウズウズしてるんだよ。」

「それはどうも。」

構えると勇儀が待ったをかけた。

「じゃあここからは私が審判するよ。」

スゥーと息を吸い込んで大きな声で宣言した。

「これより鬼の伊吹萃香　対　人間の新幸生の決闘を始める。……始め！！！」

こうして第2試合、最後の決闘が始まった。

第１８話　鬼との決戦？　ＶＳ星熊勇儀（後書き）

なんとか書くことが出来たと思います。

勇儀の技一つしか出せなかった。すんません

これからもよろしくお願いします

第１９話　鬼との決戦？　ＶＳ伊吹萃香

開始の合図が出されると同時に僕は萃香に突っ込んだ。そしてまずは一撃。一撃を入れることだけを考えた。

勇儀との戦いでは最初に一撃こそもらってはいなかったが勇儀から攻め始めてなかなか反撃することが出来なかった。試合の流れというかペースというかそういうものがあの時は勇儀のほうに向いていた。だからこその先手必勝だ。

そして萃香に最初の一撃を放った。だが、それを紙一重で避けた。僕はそのまま間髪いれず拳のラッシュを放った。もちろん鬼の皮膚の強固さは勇儀との戦いでわかっているので霊力と障壁を最初の倍ぐらいの強さを込めて纏った。

萃香はというと攻撃せずにただギリギリで避けて続けている。そのことに思わず歯噛みしてしまった。ギリギリで避け続けるということは僕の拳を見切っているということにほかならない。

「さっきと違っていいラッシュじゃないか。」

「そんな簡単に避けてる人…じゃなくて鬼に言われたくないですよ！！」

「じゃあそろそろやろうっかな！！」

突き出した拳をいともたやすく掴み取り、背負い投げの要領で地面に叩きつけようとしてきた。

「どっせい！！！」

「！？転移壁！！」

地面に叩きつけられる寸前で転移壁を出した。そのおかげで地面にクレーターを作ることなく少し萃香から離れた所に転移した。

いくら勇儀に比べれば力が弱いとはいえ相手は鬼だ。それも頭領だったのだからそんなものまともに食らえばただではすまないだろう。

萃香はというと自信があったのか頭をかきながら残念そうな顔をしている。

「う〜ん、今のはいけたと思ったんだけどねぇ。あれを回避できるとはさすがにやるねぇ。まぁすぐに終わってもおもしろくないからそのほうがいいけどね！」

「そりゃどうも。こっちとしては長引くよりさっさと終わってくれると助かるんですけどね。」

「そんなつれないこといわずに〜、こっち来な。」

おもむろに萃香は手を前にかざした。弾幕でも出るのかと身構えたが、全く違った。手のひらに黒い球体が出たかと思うとその球体に引き寄せられるように僕の体が向かった。

（これは僕を手のひらの方へ萃めているのか！？）

萃香のほうを見れば右腕をブンブン振って今から思いっきりぶん殴りますよといわんばかりの構えを取っている。

「さ、せ、て…たまるかぁ！！」

完全に引き寄せられる前に萃香の手のひらにある黒い球体を極小の空壁牢で囲み、滅した。すると引き寄せられることはもう無かった

がすでに止まったときには萃香の射程範囲内だった。

「よいしょお！！」

「空壁――重剛！！」

拳があたる寸前でギリギリ間に合う。

ズンッ！！！

大きな鈍い音が辺りに響いたが破壊されるまでには及ばずなんとか防ぎきれていた。だが、萃香は気にも留めずそのまま押し切ろうとしてきた。次第に強くなってくる力に対し思わず空壁に手を当て支えた。

ベゴンッ！！

地面が萃香の力に耐え切れず、僕の足場がクレーターのようにへこんだ。だが、まだ力が上がっていく。

「オオオオオオオオオッ！」

雄たけび一つして、ついに萃香が拳を振り切った。こっちもなんとか耐え切ったが１０メートルほど後ろまで空壁ごと下がらされた。

「いや～硬いね新のその壁みたいなやつ。今まで殴って壊せなかったものなかったのに。」

「いや結構ギリギリですから。」

冷や汗が流れる。防ぐことは出来たものの、すごい衝撃だった。まさか押し切られるとは……。

だが、驚いている暇も無いので即座に今度は弾幕を自分の周囲に展開した。

「おっ、今度は弾幕かい？じゃあこっちはこれかな？」

「さぁどうでしょうね？…いけ！！」

掛け声とともに全ての弾幕が放たれた。萃香はそれに対応するため構えたが、弾幕は萃香には向かわずその目の前に着弾した。

ズドドドドドドド！！！

大量の弾幕が地面に当たり、同時に土煙が大量に舞い上がり、萃香の視線を遮った。

（へぇ…、考えたね。攻撃にではなくて目眩ましに使うなんてね…。さぁどこから来る？）

土煙で視界が確保できないと入っても対処のしようはある。土煙が舞っているところに人が突っ込めば当然風が生まれる。その風が生まれることによってどこから来るという前兆が見えるのだ。そこまでわかっていればあとは自分の目の前に相手が来ることによって生まれる風で判断し迎撃すればいい。（＊普通はそれでは反応が間に合いません。）

萃香はどこから来ても問題ないといわんばかりの顔で待ち構えそして、

何の前触れも無く後ろから新が出てきてぶん殴られた。

ガンッ！

鈍い音が萃香の顔からしておもわずよろける。

（よし、成功した。）

そして僕はすぐに姿をくらました。

おそらく今頃萃香はわけがわからなくなっているだろう。萃香は確かにどの方向から僕が来ても反応できるぐらいの状態だった。無論僕が現れた後方も意識を向けていた。なのに、なぜ反応できなかったか？答えは簡単転移壁を使用したのだ。そのまま土煙の中を突っ込み萃香に攻撃しようとすれば萃香の目の前に出る前に何かしらの考えに基づいて迎撃されただろう。だけど、ワープのようにいきな

り現れるこの方法ならばれないと思ったのだ。結果は見事成功。

土煙が晴れるまではこれでいこうと思った。
今度は萃香の右側に音も無く出現させた。そしてそこに転移した。
萃香はさっきと変わらずこちらに気づいている様子はない。大きく振りかぶった拳を萃香に放った。

が、その拳は当たることなく突き抜けた。というかいつの間にか萃香の姿が見当たらない。
辺りを探そうにも自分が起こした土煙によって探すことが出来ない。

（とりあえずこの土煙から出よう。）

一度元の場所に戻ることに決め転移壁に戻ろうとした。そこで、

ドゴンッ！！

「！？あぐっ！」

背中にとてつもない衝撃が襲った。
僕はそのまま受身も取れず吹っ飛んだ。ゴロゴロと地面を転がってからやっと勢いが止まった。

「いった…い、なにが……？」

状況がつかめなかった。確かにあの時僕の視界は遮られ萃香の姿を確認することが出来なかった。だけど、僕みたいに突然現れるようにでもしないと無理なはずなのに攻撃された。

そう考えていると土煙の方で変化があった。
僕が起こした土煙は相当でかかったようで未だにもくもくと煙が上がっている。だが、その一部分というべきなのだろうか？土煙の中から霧のようなものが出てきて、次第にそれは一箇所に集まり始めた。そしてしばらくすると、そこには萃香がいた。

萃香は頭から少量の血を流しながらも笑っていた。

「土煙に加え、別の所に瞬時に移動できる技を併用してくるとは一発もらっちゃったよ。」

「……まさか避けられるとは思いませんでした。今の霧みたいなのは能力ですか？」

「その通り。『密と疎を操る程度の能力』。それが私の能力だよ。」

「なるほど…。自分の密度を薄くして霧状になったり、僕を引き寄せたのは手のひらに周囲の空気の密度を上げるために僕ごと萃めたってわけですか。」

「ご名答。まぁそういうことだから簡単に私を殴れると思ったら大間違いだよ。」

「そのようですね。でもそっちの一発とこっちの一発……割が合いませんよ……。」

「気にしない気にしない。じゃあ続きやろうか。」

そして萃香が突っ込んできた。

「くっ。」

両手に空壁を出し、構える。萃香が殴ってくるのを防がず受け流しその流れに乗って空壁で殴りつける。だけど、あたる寸前で霧化し空振る。
しばらくその光景が続いた。

（もう一回少し離れたとこで霧化してくれたらいけるかもしれないんだけど…。）

「斬符『付き纏う刃』」

「無駄無駄。」

鋭い空壁を投げるが霧化され通り抜ける。だが、ホーミングも付いているため何度も何度も萃香に向かっていく。さすがに鬱陶しくなってきたのか一瞬だけ拳を出して空壁を殴った。
すると、簡単に壊れた。そして突っ込んでくるかと思ったら自分の拳を見つめている。

（なんだ急に…。自分の拳を見つめるなんて……。まさか気づかれたか!?）

すぐにもう一度『付き纏う刃』を投げた。萃香は拳に意識がいっていたためか霧化して回避しただけだった。

（よし、今だ。）

勇儀のときは駄目だったが霧化している状態の萃香になら！！

「炎獄『灼熱空間』」

瞬時に霧が漂っている所に空壁牢が展開され燃え盛る炎でいっぱいになった。鬼にはそこまで効かないかもしれないが今の萃香は霧化している。いくら霧といってもそれは霧状になった萃香だ。小さくなっている今なら通常よりも効くはず！！

「あちちちち。あっつっいーーーーー！！」

「よっしゃ！！」

中から熱がってる萃香の声が聞こえた。どうやら予想以上に効いているみたいだ。「バリィィィン。」……もう出てきたよ。勇儀の時よりも火傷の範囲が広く結構ダメージが与えれているみたいだ。

「出てくるの早いですね。」

「あんなとこいつまでもいたくないよ!!でも今の一つ確信できたことがあるよ。あんた……その壁みたいなのに毎回能力付けているみたいだけどそれ壁に一つしか付けれないでしょ。」

「!?」

「新を引き寄せて殴ったときは思いっきり殴ったのに防がれた。それほどまでにあれは堅かったからねぇ。で、次にあの切れ味のいい追ってくるやつを殴ったら楽ってわけじゃなかったけど防がれたときより脆かった。そしてさっきのあっつい空間。やっぱり同じだった。」

「……。」

「図星と見て間違いなさそうだね。まぁわかったところでどうにかできるかはわからないけど…。」

そう、まさに萃香が言っている通りなのだ。今まで何度か修行中に一つの壁に一個以上付加してみようとしたことはあったが、何度やってもうまくいかなかったのだ。それは今でも継続中だ。確かにバレタところでどうにかなってしまうわけではないがバレルとは思わなかった。

「にしてもさっきのはホントに熱かった。だからお礼に鬼の火をみ

してあげるよ。」

「鬼火『超高密度燐禍術』」

萃香の口から強烈な熱量を持った炎が僕に向けて吐かれた。

「水陣壁!!」

空壁に『流水』を付加した。火なら水でなんとか…と思った。だが、当たった瞬間ジュワと音を立てたかと思うと蒸発して消えうせた。

「鬼の火を簡単に消せると思ったら大間違いだよ!!」

すでに炎は目の前まで迫ってきていて今からでは壁は間に合わない。

「くっ!!」

体をひねるようにして横へ飛んだ。だが、広範囲だったためか避けきることができず左腕に当たってしまった。

「ガァァァァァァ！！！」

思わず左腕を押さえつけてしまうほどの激痛だった。見てみればブスブスと煙をあげており、黒く炭化している。時間が経てば治癒するがこれではすぐには無理そうだ。要するに僕は片腕が封じられたのだ。

「ぐぅぅぅぅ！」

「やった私がいうのもなんだけど痛そうだねぇ。さすが私の鬼火。」

自分の技の成果に満足そうに頷く萃香。

「まぁ見た感じ結構きつそうだしこれで終わりにしてあげるよ。」

「鬼符『ミッシングパワー』」

言い放った直後、萃香がとてつもないほど大きくなった。２０メートルぐらいはあるんじゃなかろうか。
あまりの大きさに呆気にとられていると、何か言ってきた。

「これを人間に使うのは初めてだよ。新はそれだけの強さを持ってた。誇っていいよ。私にこれ出させたのそうそういないんだから。じゃ、バイバーイ。」

萃香はそのあまりにも大きすぎる拳を振り上げて僕に向けて放った。近くに木があろうが岩があろうがお構い無しに迫ってくる。避けようにも拳がでかすぎるし、なによりさっきの鬼火による痛みで反応が遅れてしまった。

「受けきって見せる!!多重重剛壁!!!」

勇儀の時よりもさらに空壁の枚数を１０枚に増やし、『耐久力』を限界まで引き上げた。

そしてお互いがぶつかり合う。だが、あまりの質量と威力により残り一枚までに一気に破壊された。
そしてその最後の一枚も「ピキピキッ。」ひびがはいる音がしている。
残った右腕をかざし、霊力を注ぎ込む。だが、亀裂が止まらない。
そして、

バリィィィィィン!!!

ついに最後の一枚も破壊された。そして、その拳は僕に当たり、また吹っ飛ばされてしまった。

「なん…とか、いきて……るみたいだね。」

意識が朦朧とする中つぶやいた。

あの拳が当たる直前に真横から空壁で左に突き飛ばし避けようとし

たのだ。結果は避けきれず無事だった右腕の方が砕けてしばらく使い物にならなくなったものまともに食らわずにすんでいる。もしまともに当たっていたならばもしかしたらマジで死んでいたかもしれない。

正直体を動かそうとするたびに筋肉やら骨やらが悲鳴をあげている。いくら半不老不死とは言ってもベースが人間だから霊力うんぬんのまえに体の限界が近いのかもしれない。

だけど、やるしかないのだ。僕が死んでしまえば小傘が一人きりになってしまう。今まで
一人きりだった小傘。やっと僕という主を得たのにまた孤独にさせるなんてできない。

僕はゆっくりと、でも確実に起き上がった。

それに勝機が無いわけではないのだ。さっき萃香の拳を避けるために自分に放った空壁。あのとき僕は速さと弾くことを求めた。駄目もとで求めたのだ。すると思いがけないことに2つの付加が成功したのだ。だからこそ空壁によるダメージは無かった。なぜ急にできるようになったのかはわからないがこの事実を萃香はまだ知らない。

とりあえず萃香のところまで戻ろうと思っていると巨大化したまま萃香がこっちに来た。目線を合わせるため空壁に乗って浮上した。

「……どうも。」

「お～、あれを食らって生きてたか。さすがだね。」

「…勇儀にも言いましたけど…丈夫さが取り柄なんで……。」

「そうかい。でもこのミッシングパワーには打つ手が無い見ただけどどう「ありますよ、打つ手なら。」……なに？」

「今ならなん……とでも出来る気がしますよ……、そち…らの攻撃なんて。」

「……いくらなんでもその発言は鬼をなめてやいないかい？」

「仕方ない……でしょう、事実なん……ですし。」

「私の攻撃も防げないのに大口を叩くな―！！！！」

怒り心頭で全力の拳を放ってきた。

（落ち着け…できるできるできるできる！！）

「重剛空壁――弾きの型」

「さっきのと何が違う！！枚数が少なくなってさらに弱弱しいぞ！」

笑いながらそのまま拳を僕の方へと向かわせる。
そしてぶつかり合ったその瞬間、

萃香の巨大すぎるその拳が弾かれた。

「な、なに！？」

「できた、いける！！」

弾くだけでは耐久力が足りない。耐久力を上げるだけではあまりに

巨大すぎる力には数十秒しかもたない。
なら組み合わせればどうなるか？
そうすれば持ちこたえている間に弾く能力が働く。だからこそできる！！

萃香を見ると何が起きたかわからないという顔をしていた。このまま流れに乗る！！

「重力『堅すぎる重荷』」

萃香の左右と後ろに今の萃香と同じくらいの大きさの黒い壁が現れた。途端に萃香の動きが急激に鈍くなる。

「これはっ…重さがかかっているのか！？」

それでも重さに負けじと無理やり体を動かして壊そうとしたが『重力』と一緒に『堅さ』を最大限まで上げた上で付加しているので、壊すことが出来ない。

「くそっ……体が重くて動かせない。」

萃香が無理に動かそうとするたびに血が噴き出る。

「さらに『重力』を付加したんです…けどさすが……です…ね。でも今度こそ…終わりです。」

「吸着『離れない脅威』」

身動きが取れなくなっている萃香の体中に空壁を何十枚も貼り付けていく。

萃香もこれがなにかはわからないがヤバイと思ったのかなんとか剥がそうとするがぴったり張り付いて剥がれない。しかもこの状態では無理だろう。

「3、2、1……吹っ飛べ！」

カウントダウンとともに萃香の体中に貼りついていた空壁が一斉に爆発した。『吸着』と『爆発』を付加していたのだ。

ドッガァァァァァァン！！！！

ありえないほどの轟音が響き渡った。あまりの音の大きさに山はビリビリと震え、反響している。

一枚一枚が5メートルほどの大きさの爆弾を体中に何十枚もいたるところに貼ったのだ。その威力は計り知れないだろう。

重力壁を解除し、きのこ雲のように煙をあげている萃香のほうを見た。そして、ゆらりと煙の中から出てきたと思ったら、そのまま倒れて地に伏した。

ズズゥゥゥン。

倒れる音が辺りに響いた。次第に萃香の体が元の大きさに戻っていくのが見えた。元の大きさに戻ったのを確認してから、僕は萃香のところに降りた。

死んではいないが完全に気を失っていた。起き上がる様子も無い。

勝ったと叫ぼうとしたときふいに体がぐらっと揺れ、まともに立てなくなってきた。

（あっ、これ……やばい…かも……。）

急激に意識が朦朧とし始め、そして僕は萃香の横へと倒れた。

第１９話　鬼との決戦？　ＶＳ伊吹萃香（後書き）

なんと書けました。

戦闘シーン難しすぎる。

幸生君辛くも勝利！！

次回は宴会だー

第２０話　終わりよければすべてよし

「ご主人～、はいあ～ん。」

「幸生～、ほらもっと飲みなよ～。」

小傘がご飯を、萃香はお酒を飲ませようと両脇から半ば強制的にやってくる。

「どうしてこうなったし……。」

時間は萃香との決着が着いた直後まで遡る。

暗い。

どこまでもそこは暗く僕は闇に包まれていた。

「おーい。」

声を出すがどこからも誰からも返事は返ってこなかった。

（僕……どうしたんだっけ？）

今の今まで何をしていたのかわからなかった。しばらくすると氷が解けるかのように思い出してきた。

（そっか…そういえば鬼と戦っていたんだっけ…。）

覚えているのは萃香が僕の最後の決死の攻撃によって倒れ、勝ったと思ったところまでは覚えている。ただ、そこからは何も覚えていない。

（もしかして僕…死んじゃったかな…。あんだけ無理したからかな

ぁ。……小傘、大丈夫かな…。）

そう考えているとふいに頬に暖かい何かが当たった。なんだろうと思った瞬間暗闇の中に一筋の光が生まれそこに僕は引き込まれていった。

ポタポタと頬に何か液体が落ちてくる。暗闇の中で感じた暖かい何かと同じ暖かさだった。ゆっくりと目を開けるとそこには涙をボロボロと流す小傘がいた。暖かい何かは小傘の涙でそれが僕の頬に当たっていたのだ。

「……小傘。」

「ご主人!!ご主人!!死んじゃやだ～!」

どうやら僕は死んだと思われているみたいだ。

「…小傘。」

「ご主人～！！」

「小傘、声大きいって。」

「ふぇ、ご主人？……ご主人～！！」

僕が生きていることにやっと気づいた小傘はガバッと飛びついてきた。まだ治癒中のボロボロの体にだ。

「ぎゃーーーーー！！いだだだだ、痛い、小傘痛いって！！！」

「よかったです～、ホントによかったです～。」

あまりのうれしさに僕の声が耳に届いていないのかますます力が強まっていく。

（まっずっ、このまま小傘にやられるー！）

地味に二度目の死の危険を感じ始めたところで助けが入った。

「あ～こらこら、お前さん自分の主を殺す気かい？私たちとの連戦でかなり重症なんだよ。」

助けに入ってくれたのは勇儀だった。肩には萃香をかついでる。呆れた顔しながら僕にしがみついている小傘を引き剥がした。

「あっ。す、すいませんご主人！あんまりにもうれしくてつい……。」

テヘヘと頭をかきながら言った。でもすぐに暗い顔になった。

「……ホントに死んだかと思ったんですよ。何度も何度もものすごい音がするし、終わったみたいだったから行ってみたらご主人が血まみれで倒れてるし……。」

「小傘…。」

「わちきのご主人はもうご主人以外にはいないんです。大切にしてくれるご主人しか…。だからご主人が生きてさえくれればそれでいいんです。」

「ごめんね、いっぱい心配かけたね。」

頭を撫でようとしたが激痛が走ったかと思うと動かなかった。見てみれば右腕は肩が砕けて、左腕は炭化している。最初よりはマシな気がするが他のどの傷よりも損傷が激しかったせいか治癒が遅いようだ。

「あ～、こほん。そろそろ話しに移りたいんだけどお前さんらいいかい？」

「あ、はい。すいません、お願いします。」

「ほら萃香、そろそろ起きな。」

勇儀が萃香の頭をバシバシ叩いて覚醒を促す。

（…勇儀、萃香も爆弾当たりまくって結構重症なんだからもっと優しく。）

「う、う～ん。イタタタ、ここは？……そっか私負けたのか？悔しい～！！」

勇儀の肩の上でじたばた暴れる萃香。鬼ってホントにタフだな～。あんだけの攻撃食らっておいてもう元気なんだもん。（＊通常これを空元気という。）

「萃香、悔しがるのは後にすればいい。また戦うときに勝てばいいじゃないか。」

「確かにそうだね！新！！次は負けないからね！」

「もう二度とやりたくないですよ……。」

いくら半不老不死でも毎回あんなのやりたくない。というか半不老不死の体なのに死を覚悟させられる勝負なんてホントにやだ。

「おっと、また話しが逸れるとこだった。この勝負の結果についてだ。この勝負は新…お前さんの勝ちだ。」

「えっ、でも僕も倒れましたよ。」

「それは「私のほうが先に気を失って倒れたから私の負けだよ！！」だそうだ。だからあんたの勝ちだよ。よって私たちは約束どおりこ

の妖怪の山に住む許可をお前さんらに与える。」

「願い聞き届けてもらいありがとうございます。」

「約束だからな。あと敬語やめないかい？これから同じ妖怪の山の一員として暮らすんだから。」

「……そうだね。じゃあこれからよろしく、勇儀、萃香。」

「「よろしく！！」」

いろいろあったけどなんとかここで小傘とやっていけそうだ。

「よし、まずは戻って今から宴会だね。」

「えっあの休みたいんだけど…。」

「そうだね、この妖怪の山に新しい仲間が増えるんだし歓迎も兼ねて宴会だー！酒呑むぞーー！！」

だめだこいつら！！人の話を聞いちゃいねぇ！！しかも、後半やっ

ぱり酒かよ!!

僕たちは（僕重症、特に両腕。）２人に引きづられて鬼の住まいに連れて行かれそこで宴会が行われることとなった。

「そして現在に至る。」

「ご主人何言ってるんですか?」

「いや、なんでもないんだけどその小傘も楽しんできていいよ?だから食べさせてくれなくても…。」

「駄目ですよ、しっかり食べたほうが直るのも早くなるかもしれません!でもご主人いま腕をえっと……ぎぷす?とかいうので固定して動かせないんですからわちきが食べさせてあげます!」

恥ずかしげもなく平然と言う小傘。純心な子って時と場合によるけど恐ろしいねいろんな意味で…。

「いや、…そのなんていうか恥ずかしいからいいって。」

「何を恥ずかしがることがあるんですか？わちきとご主人はいわば主と従者。別におかしくないですよ。」

「そうなんだけど……っていうかさっきから無理やり酒を飲まそうとするなって萃香！！休ませて欲しいって言ったよね！」

「え～いいじゃん。酒のみゃ直るって、傷ぐらい。」

「そんな特殊機能付いてないからね、僕！！だからやめ、「難しいことは置いといてとりあえず飲めって。」ガボガボッ！！！」

「げほっげほっ。ゆ、勇儀。なんとかしてくれ、こいつ。」

「あはははは。」

笑うぐらいなら助けろよっ！！と言おうとしたが右から小傘に料理を、左から酒を口に入れられて塞がれたため言えなかった。

（まずい、僕このままじゃ2人にやられる！！）

「て、撤退!!転移壁。」

ブゥゥンという音とともに（無音で出せるがそこまで気を配る余裕無し）転移壁が現れ、転がり込むようにしてそこから脱出した。

「な、なんとか脱出成功。」

今僕は宴会場から少し離れたところにある丘にいる。

「ここならだれもいないはず「あれっ、幸生さんじゃないですか。」…ここにもいたのか。」

声がする方向を見るとそこには射命丸彩と犬走紅葉、そして見知らぬ顔の子が2人の後ろに隠れるようにしていた。

「幸生さんなんでこんなとこにいるんですか?」

「そうですよ、今回は幸生さんの歓迎会みたいなものですから主役がここになんでいるのですか？」

「いや、僕は休みたいからいるだけだよって念押ししたのに料理を小傘が食べさせようとするやら、萃香が無理やり酒飲ませてくるやら。」

「「あ～なるほど。」」

得心がいったのか2人とも頷く。

「小傘さんは知りませんけど鬼の方たちは強引なとこありますからね。」

「ですよね、昔私と彩さんもやられましたね。」

なるほど、すでに経験済みだったか。そりゃ納得してくれるわけだ。

「それより、なんか初めに会った時と口調が違わない？」

「普段はこっちの口調が本当ですよ。あの時は侵入者だったのでそ

れ用の口調だったんです。すいませんでした。」

耳をペタリと下げて頭も下げてくる紅葉。かなり礼儀正しい。

「いや、こっちこそ知らなかったとはいえごめんよ。だから頭上げて、ね？」

「そうですよ、紅葉。いつまでも気にしてたらだめですよ。」

「彩さんは逆に少しは気にしてください。」

「あややや、これは手厳しい。とりあえず酒飲みます？」

「ごまかさないでください！！あと幸生さんにまで勧めない！さっき無理だって言ってたじゃないですか。」

いつの間にか2人でぎゃーぎゃー騒いでいる。まぁ紅葉が一方的に彩に振り回されているというかからかわれているというか……。

「なんかいいね、こういうの。で、さっきから隠れてる君は誰？」

そう言うと2人の陰に隠れていたなにかがビクッと動き、そおっと出てきた。上下が繋がってる水色のスカートのようなものを着ていて髪は青色ので肩までそろうくらいの長さだ。ちなみに結んではいない。

「あなたは……人間？」

「まぁ一応人間だよ。」

「……いじめたりしない？」

「何で僕がそんなことするんだい？そもそも仮にしようとしてもこんな腕じゃ何も出来ないよ。」

それを聞くと安心したのかやっと僕の前まで出てきてくれた。

「聞いてるかもしれないけど一応自己紹介。僕は新幸生。幸生でいいから。」

「私は河城きとり、河童だよ。じゃあわたしもきとりでいいよ。」

下の名前はともかく河城で河童か…。ということはにとりの先祖か

親ということになるだろう。

「きとり。きとりは彩と紅葉とも仲よさそうだけどどういう関係なの？」

「彩と紅葉は一応彩が上司で紅葉が部下だよ。今見ての通り、いつもあんな感じで紅葉が彩に振り回されてるよ。で、私は物を作るのが仕事で趣味なんだ。私たち幼馴染だからよく3人で集まって話したりしてるんだ。」

「へぇ～そっか。」

そう呟きながら未だに騒いでる彩と紅葉を見る。彩は黒い翼を羽ばたかせ、紅葉は尻尾をぴんと立てたりしている。それを見ていてふと思った。

（あの羽と尻尾触ったら気持ちよさそうだな……。触ってみたいけど手動かせないし。）

諦めようとして自分の腕を見る。でも、ラッキーなことに左腕の方はもう治っていた。どうやら肩の骨が元通りになったようだ。前より治癒力が上がっている。右腕はまだ動かせないがだいぶ元の皮膚に戻ってきている。まぁ要するに…

（左腕でなら触れる！！）

試しに左腕をブンブン回したり手を開いたり閉じたりしてみたが動きに支障はないみたいだ。

「あれ？幸生腕動かせないんじゃ。」

「ん？あぁいま左のほうだけ治った。」

そういうときとりは若干顔を引きずらせながらびっくりしていた。

「幸生って人間だよね？なんか治るの早すぎる気がするんだけど。」

「僕って半不老不死だから。そこらへんの人間とはちょっと違うんだ。ところできとり、もう1つ聞きたいことがあるんだけど。」

「なに？」

彩の翼と紅葉の尻尾を指差して言った。

「あれってやっぱり触ると気持ちいい？」

するときとりは急に考え出した。そしてニヤッと笑うと、

「前に触ったことあるけど結構気持ちよかったよ。ボソッ（反応もおもしろかったし。）」

「なんか最後のほう聞こえなかったけど？」

「なんでもないなんでもない。まぁ気になるんだったら触ってくれば？」

「じゃ行ってきま～す♪」

彩と紅葉に近づいたが2人は2人でヒートアップしているのか零距離まで近づいてもまだ僕に気づいてない。

（まずは明らかにモフモフしてそうな紅葉の尻尾から……。）

モフモフ

「ひゃん！！こ、幸生さん！？」

「おお、やっぱモフモフしてて気持ちいい。しかも手触り抜群。」

モフモフモフモフ

「あは、あははは。ちょ幸生、さんくすぐっひゃい、あっ、ひゃん！」

「紅葉が変な声出してる！！眼に焼き付けねば「次はこっちを。スリスリ。」ひゃあ！！」

彩の翼を触ってみると羽の1枚1枚が滑らかで、こちらも手触り抜群。

「こ、幸生さん。やるのは紅葉だけに、あははは！！」

スリスリスリ

「あはははは!!だめですってそこは、あひん!!やめ、あははははは。」

「やばいなどっちも癖になるぐらい手触りがいい。」

――――5分後。

「「ハァハァハァハァ。」」

くすぐったかったのか笑いすぎたのかなぜか彩と紅葉は疲れ果てている。どうしたんだろう、2人とも?

「きとり。すごく手触りよくて気持ちよかったよ。……きとり?なに笑ってんの?」

「くくくくっ。いや久しぶりにおもしろいもの見たよ。」

「？まぁいっか。彩、紅葉もっかい触ってもいい？」

「「ハァハァ、駄目です！！」」

すごい剣幕で言ってきた。しかも何故か顔が2人とも赤い。熱でもあるんだろうか……。

「わかったわかった、もう触らないよ。（ちぇいいじゃん、減るもんじゃないし。）」

「「そういう問題じゃないです！！！」」

「うぉ！？心読まれた！？」

きとりはきとりで地面を手で叩きながら大爆笑している。

「えっと、まぁこれから妖怪の山に小傘と一緒に住まわせてもらうけど改めてよろしく。
彩、紅葉、きとり。」

「「……よろしく。」」

「ハハハハハ。はぁ笑いつかれた。うん、よろしく。」

それからは3人でちびちびと酒を飲みながら、夜空を見ていた。

「こういうのもいいかも「「いたー!!」」やべっ見つかった。」

声の主を確認することなく逃げようとすると両脇から手が伸びてガシッと掴まれた。

「彩、紅葉その手早く離して!!十中八九この声の主はまずいんだって!!」

「どうしましょう彩さん?」

「そうですねぇ、ここはお迎えの方たちに引き渡すのがいいんじゃないかしら?」

ニヤニヤしながらとんでもないことを話している。

「ちょ！？もしかしてさっきのことまだ根に持ってるの？」

2人ともわざとらしい顔で知らないといわんばかりの顔をした。

「きとり！！助けて！！」

最後の頼みの綱に懇願。

「まぁあきらめなよ、骨は拾ってあげるから、盟友だし。」

「そういうのは盟友じゃ「ガシッ！！」……（終わった。）」

ギギギギギッ擬音が付きそうな感じで振り返るとすでにできあがってしまった小傘と萃香が満面の笑みで立っていた。

「ご主人～、左腕動かひぇるようになってりゅじゃないれすか～。これへ料理食べれますね♪あっ食べにくくても手伝うんで大丈夫ですよ～。エへへへへ。」

「幸生～探し回ったんだぞ。腕動くようになったんなら酒も飲めるね♪さぁ行こう！！」

萃香が両手で僕を持ち上げて連行していく。

「お助けーーーー！！！！！」

「「「お達者で～。」」」

向こうの方で3人がどこから出したかわからないがハンカチのようなものをだして振っている。

「ヒィィィィィィ！！！！」

翌朝、1人の人間が酔いつぶされたうえに腹をぽんぽんにされた結

果、体の調子が悪くなり傷は治ったが数日間寝込むこととなってしまったとさ。

第２０話　終わりよければすべてよし（後書き）

今回は宴会のみでいってみました。

妖怪の山ならやっぱにとりに繋がるキャラも出さなくてはと思ってきとりを出してみました。

またがんばっていきます。

第２１話　家を建てよう

地獄の宴会から一週間が経った頃

「う、う～ん。……ここどこ？」

寝ぼけた頭を掻きながら僕は起きた。

「あっ、ご主人。起きましたか？」

正面の障子が開かれそこから小傘が入ってきた。

「宴会してから一週間も経つのになかなか起きないから心配しましたよ？」

「宴会？……あぁ思い出した。確か、萃香にゃ酒を、小傘には料理をどんどん食べさせられて……。」

そうだ、いつのまにか気を失った気がする。

（ウップ、思い出すだけで気持ち悪くなってきた。）

「あの、わちきもしかしてなにかしたんですか？」

「えっ、覚えてないの？」

「はい、最初にちょっとだけお酒を飲んだのは覚えてるんですけど後は覚えてないんです？……やっぱりなにかしたんですか？」

「えっ、いや……何にもないよ。それより台所あるかい？顔洗いたいから案内してほしいんだけど。」

「はい、こっちです。」

僕を起き上がらせると手を引いて連れて行く。
案内されながら改めて思ったがこの家、鬼の家はホントに大きい。
最初見たときはこんな大きい家というかもはや屋敷に住んでいるのかと思ったがほとんどの鬼たちがここで寝泊りしているというのだからそれも仕方のないことなのかもしれない。

「着きましたよ。」

「あぁ、ありがと。」

すぐに洗い場を見つけてそこで未だに眠たいのと気分が悪いのを払拭するため冷たい水で顔を洗った。
多少スッキリした所で自分が寝ていた所へ戻ると、すでに何人かが部屋にいた。

「幸生さん、おはようございます。」

「あややー、一週間ぶりですね。」

「幸生元気してかい？」

「起きたなら酒を飲もう！！」

「いやまず喧嘩だな。」

紅葉、彩、きとり、萃香、勇儀だった。

「みんな久しぶり。あと後半2人は出てくか黙ってて。」

「なんだよそれー、ひどいぞ。」

ブーブー文句言ってるが無視無視。

「で、なんでみんな集まってるの？」

正直言って集まってる理由がわからない。萃香と勇儀は暇だったからかもしれないが他の3人はそれぞれ仕事があるはずだ。
そう思ってると予想に反して勇儀から答えが返ってきた。

「おいおい、何のために私たちと決闘したのか忘れたのか？」

「えっ、それはこの山に住むためだったな。」

「わちきもそうだったと思います。」

すると今度は彩が言ってきた。

「あややや、忘れてますねーものの見事に。ほら、私と紅葉があな

たたちを襲撃したときのことを思い出してみてください。」

う〜んと小傘と顔を向き合わせて考える。

「確か〜小傘が裸で」

「そこは思い出さないでください！！！」

ベコッ！！！

「おごっ！」

言った瞬間小傘に傘でおもいっきり頭を殴られ、畳とキスしてしまった。

小傘はというとそのときのことを思い出してしまったのか顔を赤くさせながら息を荒げている。

その光景に苦笑いを浮かべつつも紅葉が訂正した。

「えっと、そうではなくて、私たちが幸生さんたちを襲撃したときあの場所で幸生さんたちは何をしようとしていたかを思い出してみてください。」

痛む頭をさすりながらももう一度思い返してみる。

「あっ、家だ。」

「やっと思い出したかい？幸生って年寄りみたいだね。」

「年寄りってのはまぁ否定しないけどいろいろあって仕方ないでしょ。」

「ちょ、ちょっと待ってください。今微妙に聞き捨てならない言葉を聞いた気がするんですが……。幸生さんちなみに今おいくつですか？」

「そうだなー、約１１００歳とちょっとぐらいじゃないかな。それがどうかした？」

周りを見ると鬼組みは笑い、天狗・河童組みは唖然とし、小傘は眼をキラキラ輝かせている。

「あはははは。そりゃ強いわけだ、そんだけ生きてりゃ。」

「「「私たちよりも長く生きてるなんて…。」」」

「ご主人、すごいです！！」

「そこまでびっくりすることでもないと思うけど……、まぁいいや。で、家を建てようとしてたことは思い出したけどそれとみんながここにいることって何の関係があるの？」

「それについては私が答えるよー。」

ハイッハイッと無邪気というのがぴったりなぐらいな勢いで萃香が手を上げた。

「その家をね……、私たちが作ってあげることにしたからだよ。」

「なるほどなるほど……っていやいやいや、それは悪いよみんなに。」

確かに家を建てて住む許可をもらうために戦ったが、そこまでしてもらうと逆に心苦しい。

「なぁに言ってんのさ。もう同じこの妖怪の山に住む仲間なんだからそれぐらいさせてもらいたいね。
それにここにいる天狗と河童も望んでやりたいと自ら言ってきたんだ。遠慮しすぎるのもよくないと思うね。まぁここはこっちの好意に甘えなよ。」

ここで断ると確かにせっかくのご好意を無碍にする形になる。僕としてもそれはいやだ。

「…じゃあよろしく頼むよ。」

「じゃあ段取りについて説明するよ。」

説明を始めたのはきとり。手にはなにやらいろいろと複雑そうなことが書き込まれていそうな紙を持っている。

「彩と紅葉は他の天狗と一緒に木材を運んで。鬼の方たちはその木材で家を建てる。私はもう設計図はあるから、その指示通りにやってもらいたのですがいいでしょうか？」

後半の問いかけは萃香と勇儀に対してだ。この山では鬼がトップなのだから確認を取りたいのだろう。

「あぁ私たちはそれで構わないよ。」

「じゃあぼくも手伝「それは駄目。」えっなんで?」

「それはもちろん驚かせたいからじゃないか。完成する前からわかっていたらおもしろくないでしょ?」

「……わかった、楽しみにするよ。一応希望なんだけど和風な家であまり大きすぎないようにしてくれるとありがたい。」

「了解~。じゃあ今から始めるけどたぶん完成は2日後ぐらいかな。」

「恐ろしく早いね。」

「まぁできたら呼ぶから来ちゃ駄目だよ?」

「わかったよ。小傘もそれでいいね?」

「はい！」

「じゃあ2日後ね～。」

一斉にみんな出て行った。ほんとみんな良い人だよな。あっ間違えた、良い妖怪だよな。

――――2日後。

「おーい、できたよ！！」

ガラッと勢いよく障子が開けられきとりが駆け込んできた。急いできたのか若干息が荒い。

「ついにできたか、さっそく見に行っても良いかい？」

「もちろんだよ。」

「小傘起きろー。」

「……むにゃむにゃ、もう無理ですって。」

…なんの夢見てるんだろう。

「ほら起きろ小傘。家が完成したらしいぞ。」

ガバッ！！

「ホントですか！！」

「おぉ！？びっくりした。出来たらしいから今から行くよ。」

「はい！」

「じゃ着いてきて。」

そう言うと一足先にきとりは飛んでいった。その後に続くように僕たちも空壁に乗って着いていった。

「おおー！！これは立派な…。」

「すごいです！！」

そこには立派な和風の家があった。そこらへんにあるような民家ではなくうまく表現できないがとにかく立派だ。家の大きさも少し大きい気がしなくもないがそんなのは問題にならないぐらいよかった。家の周りには竹のようなもので作った囲いもありわざわざ四季折々の木々も植えてくれてあって風流もある。川も近いし、井戸まで作ってくれている。

「なんかいたせりつくせりすぎて言葉が出ないよ。ねぇ小傘？」

「わぁーーーー（キラキラキラキラ）。」

めっちゃ眼輝かしてる。その気持ちはよくわかる。

「ありがと、きとり！！僕にはもったいないぐらいいいよこの家。」

「そういってもらえるとこっちもうれしいよ。」

喜びあってると彩、紅葉、萃香、勇儀たちも来た。

「どうですか、家の出来栄えは？」

「紅葉、私たちが手伝ったんですからいいに決まってますよ。」

「うん、ありがとな。」

「ふぅ疲れた。酒が飲みたいねー、萃香。」

「酒～酒～酒～。じゃあ帰るね～、また後で～。」

「お疲れ様。ゆっくり休んでて。小傘もみんなに御礼をして。」

「ありがとうございました。」

勇儀たちは振り向かずにこっちに手を振りながら帰っていった。

「じゃあご主人お先に～♪」

よほど嬉しいのか走って引き戸を開け家の中に小傘が入った。すると突然きとりが、

「あっまだ家の機能について説明してないよ。」

なに機能って？と聞こうとしたとき玄関先のほうでポチッとスイッチを押したような音がした。

ヒュン！！カッ！！↑（壁に刺さる音）

直後、頬を何かがものすごい速さで掠めた。頬から一筋の血が流れた。恐る恐る小傘が振り向くと矢が壁に刺さっていた。

「ヒィィィィ！」

すぐに家から出ようと何気なく障子のような造りの引き戸を掴むと後ろからさらに手裏剣のようなものが飛来してきた。
小傘は慌てて避けるがバランスを崩しおもわず何故か天井から吊るしてあった紐に掴まり引っ張ってしまった。すると、

ガァァン！！！

「あうっ！」

天井が開きそこから鉄かそれ以上の硬度をもっていそうタライが小傘の頭に落ちてきた。しかも重さもかなりあったのかかなり頭がくらくらしているようだ。

倒れそうになったのか玄関横の木製の壁に手を当てるとガコンッと音を立てて手を当てた部分が奥に引っ込んだ。そして次の瞬間小傘の足元が自動ドアのように開き落とし穴のようなものが出てきた。当然つぎつぎとよくわからん仕掛けが出て重量級の堅いタライを頭に受け混乱してる小傘には対応することもできるはずもなくドップラー効果を残しつつそのまま落とし穴に落ちていった。

「あああああああぁぁぁぁーーーー！！！！」

一方外ではというときとりを除いて僕と彩と紅葉はびっくりしてただただその光景を見ているしかなかった。そして、彩がやっと口を開く。

「……きとり、いろいろ言いたいけど結構掘りましたね。」

「腕によりをかけたよ。」

「しかも出てきませんよ、彩さん。」

僕はというと目の前で起きたあまりの出来事に言葉を発せず、３人を見るとどうやら彩と紅葉も知らなかったようだ。

「……きとり、これはどういうことかな？」

「じゃあ改めて紹介するよ。これが幸生たちの家、『からくり屋敷』だ！！」

両手を腰に当てどうだといわんばかりに胸をはる。

「…なぜにからくり？」

「だってふつうだとおもしろくないじゃん。だったらせっかくだしいろんな仕掛けを付けてみようと思って。」

「なるほど、だから矢とか手裏剣とかいろんなもの必要だったのね。」

「私も気づきませんでした。」

ウンウンと彩と紅葉は頷きあってる。

「そこは気づいてよ!!……ちなみにあのからくりは玄関だけ？」

「そんなわけないよ。家のいたるところに付けてみたよ。これなら退屈しないでしょ？」

ニカーッと笑顔で言ってくる。

（まずい、ここでなんとかしないとこの危険極まりない家に住まないといけなくなる!!）

「……きとり、お願いだからこの家にあるさっきみたいな仕掛け全部とって。」

「え～、でもこういうのがあったほうが「ホントにお願いだから!!」…う～ん仕方ないなぁ、そこまで言うならはずすよ。」

「ホントに絶対だよ。」

「わかったよ。……ねぇ、からくり扉ぐらいは「ぜ・ん・ぶ!!」

ちぇ全部はずせばいいんでしょ。終わったらまた呼びに行くよ。」

「よろしく頼むよ。さてと……小傘は「きゅ～～～。」まぁそうなるよね。」

落とし穴を覗いてみると下のほうで眼を回して気絶していた。そこから小傘を出してやるとそのまま萃香たちのところに戻った。

後日、からくりなどの仕掛けが全部取り払われた家を改めて見せてもらったがそのとき小傘が怖がって中々入ろうとしなかったのは無理もないだろう。

こうして僕と小傘の新しい立派な家は無事?完成し、そこで住むこととなった。

第２１話　家を建てよう（後書き）

やっとのことで目的達成！！ですがきとりのからくり屋敷で危うかった。

次は少し物語りの中の時間が飛びます。

第２２話　スキマ妖怪

家が無事？建ってからはや２００年が経った。僕と小傘の家はやはり住み心地抜群だった。適度な大きさの部屋がいくつもありよかった。井戸も川もすぐ近くにあるので炊事・洗濯・風呂などに使う水が困らなくてとても助かる。そして季節が変わるごとに見られる木々の変わりようも楽しめる。

とはいってもこの２００年ずっとのほほーんとしていたわけではない。妖怪の山に住むのだから自分も何かしたいと思ってこの山に入ろうとする者たちを入山しきるまえに警告・追い払う仕事をこれまでしてきた。山全体を監視するのはいくらなんでも無理なので山の入口的なところを主に監視している。

ここに入山しようとする妖怪は基本的に縄張りを乗っ取ろうとするものばかりでそういうのは何度か警告を与えてそれでも聞かないようなら、物理的にはるか遠くまで吹っ飛ばした。

人間もたまに入ろうとするのだが、さすがに人間を殺すのは同じ人間として出来ないので転移壁で無理やり適当な所に飛ばした。薬草がどうしてもいるなどの場合は僕が取ってあげたりはしている。

ただ１つだけ変わってきたことがある。記憶だ。転生前の記憶がどんどん磨耗していっているのだ。転生前の記憶はろくなことがなか

ったから問題ないけど、それと一緒に東方の知識も今ではあまり覚えていない。中途半端に覚えていると嫌なのでだいぶ前に記憶を消す空間を作って東方に関する少しだけ残っている原作知識を全て消した。このほうが東方キャラとあってとき嘘偽りなく接することが出来ると思ったからだ。

「まぁそんなこんなで比較的平和に過ごしてるんだけど……。」

「なにブツブツ言ってるんですか?」

反応したのは彩だ。
今いる場所はきとりの家というか工房にいる。
もちろんきとりの家なので本人もいるのだが、きとりはいま目の前で紅葉と将棋をしている。この山に来て５０年ぐらいしてから何か暇つぶしにと将棋盤と駒を作ったのだが、これは何かときとりと紅葉に聞かれルールを教えて、２つ作っていたので一式あげたらどうやらはまってしまったらしい。
なので、２人は集中しきっていて話が耳に入っていないようだった。

「いや、何でもないよ。ただそろそろかなって思って。」

「なにがです?」

「そのことは後で話すから今日の夕方にでも家に来てくれないかな

？もちろんきとりと紅葉も。」

「ここならどうだっ！！（ピシッ！）」

「むっ、そこに来ますか……ウ～ン。」

「あややや～、２人とも聞いてない見たいので私が後で一緒に連れてきます。」

「よろしく頼むよ。じゃあ萃香と勇儀に連絡取るかな。」

目の前に手のひらサイズの空壁を出してから『通話』を付加した。
そして口を近づけてそれに話しかけた。

「あーあー、萃香、勇儀？聞こえるかい？」

１０秒ほど反応を待っていると声が返ってきた。

『この声は幸生？聞こえてるよ～。』

「萃香かい？勇儀もそこにいるかな？」

『あぁここにいるよ。しかしこれはなんだい？前に置いていってから気になっていたが…。』

「お互いが離れた場所にいても話が出来るようにした小型の空壁だよ。便利でしょ？」

『なんか奇妙なもの作ったね幸生よ。で、用件はなんだい？』

「あぁ今日の夕方に話があるから2人とも家に来てくれるかい？」

『話なら今でもいいんじゃないのかい？』

「他のみんなも呼んでるから一緒に聞いて欲しいんだ。いいかな？」

『わかった、夕方頃に行くよ。』

『幸生～、お酒用意しててね～。』

「はいはい、わかったよ。じゃあまた後で。」

そこで空壁を消して会話を終了させた。じゃあ帰るかと思い振り返ると彩がこっちを見ていた。

「どしたの？」

「いえ、幸生さんの能力ってつくづく便利ですよね。」

「まぁね、『風』と『熱』を付加すれば早めに洗濯物が乾くし、『光』を付加すれば灯り代わりにもなるしいろいろ使えていいよ。」

「家庭的過ぎますよ、幸生さん……。」

若干呆れ顔の彩。そんな顔されても使えるもんは使ったほうがいい。

「じゃあまたあとでね。」

「はい、夕方頃に。」

そう言って僕は転移壁で家に戻った。

数時間後――――。

「……遅い。」

「遅いですね。」

「遅いね～。」

「遅いな。」

今僕の家にいるのは上から僕、小傘、萃香、勇儀の４人だ。もう日が落ちかかって夜になろうとしているのだが、未だに彩、紅葉、きとりの３人が来ないのだ。

「う～ん、あんまり遅くなられるとちょっと困るんだけどなぁ。…仕方ないもう一回行って「すいませ～ん、遅れました。」やっときたか、なにしてたの？」

「なかなかきとりと紅葉の将棋が終わらなくて動いてくれなかったんですよ。」

「「すいません。」」

「……まぁいいや。今からちょっと大切な話するからちゃんと聞いてよ。」

その言葉に真剣さが伝わったのか、みんな真面目な顔になる。

「僕と小傘は……しばらくまた旅に出ようかと思う。」

「「「「「!?」」」」」

小傘以外びっくりしている。そりゃそうだろう。２００年もここに住んでいたのにいきなりこの山を出て旅に出るというのだから驚いても無理はない。小傘には前もって言っておいたので驚きはないが若干暗い。

我に返って彩、紅葉、きとり、萃香が口々に言った。

「ど、どうしてですか!?はっ、もしかして今までからかいすぎたことですか!?」

「幸生さんのおかげで私の管轄の部分が楽になったからってきとりと将棋をやりすぎたからですか!?」

「毎回毎回からくりをつけようとしたからなの!?」

「幸生のとこのお酒飲み干したから!?」

「違う違う別にみんなが何かしたから旅に出るってわけじゃないよ。」

「じゃあどうして?」

「単純にこの世界をいろいろと見て回りたいんだよ。自分の目でね。……勇儀は何も言わないんだね。」

さっきから黙っている勇儀に話しかけた。

「……まぁなんとなくだがあんたがいつか出るんじゃないかなとは思ってたさ。あんたの人生だし好きにするといいよ。」

「…勇儀らしいというかなんというか。ありがと。」

「礼を言われるようなことしちゃいないよ。」

手をぱたぱた振りながらもう片方の手にある杯から酒をグビッと飲む。

「……そうですね、幸生さんの人生ですしね。でも少しこの山もさみしくなりますね。いつ出るんですか？」

「荷物はまとめてあるからもう出るよ。」

「そうですか……。」

さびしげに言うのでとても悪いことをした気分になってしまった。

（えっとなんとかこの空気を……そ、そうだこれするんだった。）

「そこでなんだけど、今から記念写真を撮ろうと思います。」

「「「「「「？」」」」」」

なんのことかはわかっていないみたいだ。

「とりあえずみんなこっちに来て、並んで。」

みんななんのことだかわからないようだったが、とりあえず従った。
小傘が中心で右にきとり、左に彩
と紅葉をしゃがませる。後ろのほうに萃香と勇儀を立たせた。
並んだのを確認すると僕はみんなの正面にカメラを設置した。このカメラは人妖大戦の時に偶々回収しておいたものだ。ただ一回きりしか写せない。

「ご主人なんですかそれ？」

「いいからいいから。……よし、みんなこれに向かって笑って。」

タイマーをセットすると急いで小傘と彩の間に入りしゃがんだ。あと5秒。

「ホントになんですかこれ？」

「いいからみんな笑って。」

そういうとみんなとりあえずカメラに向かって笑顔を向けた。そして、

パシャッ！！

「「「「「わっ！？」」」」」

予想通りびっくりしているがとりあえずうまく取れているか確認。…よし、ちゃんと撮れてる。

「今のはなんだい？眼がチカチカするんだけど。」

「ちょっと待ってよ。あとは焼き増し機能で……できた。はい、みんな。」

そう言ってできた写真をみんなに渡す。

「彩さん、ここに私たちがいますよ！！」

「ほんとですね！！私たちはここにいるのにこの中にもいる。不思議です。」

「それはね写真って言って紙のようなものに自分たちの姿を書き込めるようなものだよ。で、こっちがカメラ。別にこれで会うのが最後ってわけじゃないしまたここに戻ってくるけど、こうしたらお互いの顔忘れないですむでしょ。」

「「「ありがとうございます！」」」

「「大切にするよ。」」

「わちきも大切にします！」

「うん、喜んでもらえてなにより。じゃあもう行くね。何十年、何百年かかるかわからないけどまた帰ってくるから。」

そう言って僕と小傘は妖怪の山を出た。

「～♪～♪。」

「嬉しいのはわかるけどいつまでそうしてる気だい、小傘。」

「いつでも皆さんの顔が見れるっていいじゃないですか。」

「失くさないようにな。」

妖怪の山を出て数日、今僕たちは蝦夷つまり現代でいう北海道に向かっている。理由は特にない。ただ行きたくなっただけだ。

「蝦夷ってどんなとこなんですかご主人？」

「そうだね、寒い所だよ。小傘は見たこと無いと思うけど雪っていう白くて柔らかく冷たいものが降っている場所だよ。」

「へぇ～、早く見てみたいですね！！」

「そうだね、でもまずいまある問題から解決しようか？」

「なにがです？」

「いや小傘じゃないよ。……そろそろ出てきたらどうです？名も知らぬ妖怪さん。」

「あら、ばれていましたか。」

突然目の前から空間を裂くようにして一人の女性が出てきた。紫を基調とした服を着ており、頭にはドアノブカバーのような帽子を被っている。そして、扇子広げたまま口元に当てている。

突然現れた妖怪に対して小傘は臨戦態勢を取ったが手を横に出し止めた。いくら下級妖怪を軽く倒せるほどになったとはいえ相手はおそらく大妖怪。小傘の敵う相手ではない。それにこの妖怪はほとん

ど思い出せないが知っている気がする。

「いつから気づいておりましたの？」

「3日前ほどからあなた、僕たちをその空間から顔だけ出して覗いていたでしょう。僕が警戒しないまま旅をしていると思いましたか？」

そう言って周囲からいくつもの空壁が手元に戻ってきた。それには今目の前にいる者の姿が映し出されている。

僕は妖怪の山を出てからすぐに半径一キロの範囲にいくつもの監視用の空壁を巡回させていた。『監視』と『隠形』を付加しているので見つけられることもなく周囲を監視できる。何か不審なものがあればすぐに見れるようにしてあったのだ。

「なるほど、わたくしが見ているつもりでしたのにこちらが見られていると思いませんでしたわ。」

「そんなことはどうでもいいんですよ。問題は僕たちに何の用があるかってことです。」

ゴゴゴゴゴッ！

霊力を全解放しそれを女性に向ける。解放しているだけなのに大気がビリビリしている。妖怪の山に住み着いてからさらに修行していたら霊力が増えるだけでなく、威圧として使うことが出来るようになったのだ。
小傘には向けていないので大丈夫なようだが、先ほどまであった女性の余裕は消し飛んだのか若干顔が青ざめている。

「!?……気に障ったのでしたら…すいませんでしたわ。わたくしには最初から敵意は…ありませんの。」

「そうかい、じゃあ用はあるんだね？でもその前にいくつか質問しようか？」

それと同時に霊力の解放を止めて自然体に戻った。ちなみに自然体のときの霊力の割合は全力時の5割ほどだ。
霊力が向けられなくなったからか女性は心なしかほっとしている。

「まずあなたの名を聞こうか？」

「わたくしは八雲（やくもゆかり）紫。お察しの通り妖怪ですわ。」

「ふむ…、さっきの空間を裂いたあれは何？」

「あれはスキマと呼んでいますわ。わたくしの能力で出せますの。『境界を操る程度の能力』。それがわたくしの能力。」

「それはなかなか強い能力だけどそこまで教えてもよかったのかい？能力を教えることは自分の手の内を晒すようなものですよ？」

そう、能力を教えてしまえばある程度の対策ができてしまうものだ。それを簡単に教えるとはよほど自信があるのか、それとも……。

「これから頼みごとをする相手に隠していては駄目だと思いましたの。」

ホホホッと扇子で口元を隠しながら笑う女性。

「じゃあその頼みごととは？」

「…わたくしはあなたが妖怪の山にいる頃から何度かあなたを観察していましたの。」

「うんそれも知ってる。」

それを言うとさらに驚く女性。まさかそこまで見つかっているとは思っていなかったのだろう。

「あなたは人間ですわね？」

「半不老不死だけど人間だよ、れっきとした。」

「その人間のあなたがそこにいる化け傘や天狗、河童、さらには鬼とまで仲良く過ごしている。人間と妖怪が見事に共存している光景を見ましたわ。
わたくしは……人間と妖怪が共存できるそんな場所を作りたいと思っていますの。」

「人間と妖怪が……なぜ？」

「今は人間よりも妖怪の方が強いというのが多いけどいずれは人間が妖怪を超えるようになりますわ。
そして世界から妖怪が、いえ神も消えていく。あなたも人間の未知なる力をご存知でしょう？」

確かにそうかもしれない。転生前は妖怪なんて存在していなかったし、過去に人妖大戦が起きたのも人間が力をつけすぎたことも理由のひとつだったはずだ。

「でも多くの妖怪は人間を襲い食べる。人間はそれを恐れ対抗しようとする。共存は望めないと思うけど？」

「だからこそのあなたですわ。妖怪と仲間同然のように暮らしていたあなたなら、その架け橋になるとわたくしは思っておりますわ？それに…。」

「僕がいれば妖怪側だけが強いのではなく人間側にも実力者がいるというストッパーになるからってとこかな、理由としては。」

「！？その通りですわ。わたくしの願いきいてもらえます？」

今までの話、そしてその真剣さから八雲が本当にそんな理想郷を実現しようとしているのが伝わった。

「あなたは変わった妖怪だ。妖怪なのに人間との共存を望むなんて。」

「えぇ、昔からよく言われますわ。」

「……新　幸生です。『壁を操りあらゆる付加を壁に与える程度の能力』です。」

「えっ？」

「これから協力するのに僕のことを教えないのはおかしいでしょう？」

「じゃ、じゃあ。」

「その理想郷の手伝い、喜んで手伝おう。それでいいね、小傘も？」

「はい、ご主人に賛成です。わちきはご主人の化け傘で、多々良小傘です。」

そこで八雲はやっと心からの笑顔を見せた。少しだが涙も見える。

「やっぱりあなたがたに言ってみてよかったですわ。」

「こちらとしても相談してくれて嬉しいよ。あっ、敬語はもういい

よ。そのしゃべり方疲れるでしょ？後僕のこと幸生でいいから？」

「そう？じゃあ私のことも紫でいいわよ。」

「じゃあ…。」

紫の方に僕は手を差し出した。紫はこの手が何を示しているのかわかっていないようだった。きっとそういう経験が今までなかったのだろう。

「握手だよ。協力者として、そして友人として。」

そういうとこれまでで一番驚いた顔をした。そして笑みを浮かべた。

「えぇ、これからよろしく幸生。」

「あぁよろしく紫。じゃあこれを持ってて紫。」

そう言って手のひらサイズのものを渡した。

「これは？」

「僕の現在地がわかるものだよ。また何か相談したい時はそれで見つけてからスキマで来るといいよ。」

「えぇ、ありがと。じゃあまた何か決まったり相談があるときはよろしく頼むわ。」

笑みを浮かべながら紫はスキマの中へと消えていった。

「なんか不思議な妖怪でしたね、紫さんって。」

紫が消えた所を見ながら小傘がそうつぶやいた。

「そうだね、妖怪にしては確かに変わってたね。」

すると突然僕の顔を見ながら小傘がふふふっと笑った。

「僕の顔になんか付いてる？」

「違いますよ。だってご主人とても嬉しそうな顔してるんですもん。」

どうやら知らず知らずのうちにそんな顔をしていたようだ。

「いや、僕と同じようなことを考えている者がいたと思ったらついね。……じゃあ改めて出発しようか、蝦夷へ！」

「はい！！」

同じ理想を持った新しい友人ができたことを喜びながら僕たちは蝦夷へと向かった。

第２２話　スキマ妖怪（後書き）

スキマ出しました。でも半分ぐらいしか書けなかった

原作知識を消したりするなどの無理やり感があったかもしれません
がお見逃しを。

また次回で。

第２３話　海辺で出会う少女

紫と別れてから3日。今僕らは陸奥と呼ばれる場所にいる。陸奥とは現代でいう青森・岩手・宮城・福島の各県と秋田県の一部にあたる旧国名だ。その中の青森に位置する場所の蝦夷側の方にいる。

さらに詳しく現在地を言うと港のような所から少し離れた山中にいる。

なぜそんなとこにいるかというと、海を渡るための準備が必要だからだ。

そんなのいつものように空壁に乗って海超えて蝦夷まで行けばいいじゃないかと思うかもしれないが、そうもいかない。

そこは他の人間も海を船で通るわけでその上空を何かが乗って飛んでいるのを見たとなると明らかに怪しいだろう。下手したら妖怪と間違われて攻撃されるかもしれない。ゆったりと行きたい僕としてはそうなるのは嫌なので船に乗ることにするのだ。

だけどここでも2つほど問題が発生した。1つは小傘だ。服装にしろ眼にしろ髪の色にしろどこを見ても怪しいし（人間から見た場合）、小傘は化け傘だ。そのまま乗るわけにいかない。退魔師のようなやつがいたら祓われてしまうかもしれない。まぁこれは小傘に唐傘の状態に戻ってもらえば少し変わった唐傘というだけで済む。妖気

ぐらいなら僕が隠せるし。

問題は2つ目だ。それは、僕の眼と髪だ。奈良時代でこの眼と髪の色は明らかにおかしい。だからこそ小傘も唐傘になってもらったのだ。だけど生憎僕は唐傘にはなれない。

隠形陣を使えば誰にも見つからないがそれだったら空壁に乗って行けてしまう。それでは駄目なのだ。実の所船に乗りたいのだ。

だからなんとかしようと山中でやっているのだ。……やっているのだが、

「ハァハァ……で、できない。」

見事に詰んでいた。霊力を込めたり、上げたり、放出したり、某金髪の宇宙人みたく霊力でオーラみたいにやってみたが、ただ周りの木々がなぎ倒されていくだけで全く変化がなかった（＊環境破壊です）。

「はぁ…。諦めるしかないかな～。」

「あの～ご主人。」

「でも船乗りたいんだよな～。でも方法が思いつかないし。」

「ご主人～。」

「いや、ここで諦めてなるもの「ベロンッ。」うひゃああ!?」

何事かと思い思考を止めて見てみると小傘が傘に付いている大きな舌で舐めたのだっだ。

「いきなり何なんだい、小傘！用があるなら声掛けてよ！」

「さっきから呼んでました!!それよりさっきからご主人が悩んでる件なんですけど…。ご主人の能力って『壁を操りあらゆる付加を壁に与える程度の能力』でしたよね?」

「そうだけどそれがどうかした。今悩んでるこの事案には使えないと思うけど……。」

「で、現在付加できる数は2つ。」

「そうだよ。でもこれには使えないって。」

「じゃあ『誤認』というのは付加できませんか？そうすれば他の人からは別人のように映りますよね？
あとこれはわちきの希望なんですけど、わきちにも障壁をつけて『誤認』を付加してもらって『隠形』で妖力だけ隠してもらえればわちきもふつうの人間に見えるんじゃないでしょうか？」

「……おぉ、その手があったか。」

混乱して頭が回っていなかったみたいだ。

「確かにそれならすんなり出来るよ。ありがと、小傘。希望通り小傘にもしてあげるよ。」

「わーい！」

よほど嬉しいのかジャンプしながらバンザーイしている。やっぱり自分も唐傘の状態でなく人型の状態で船に乗りたかったみたいだ。
小傘にとっては初めての船だしね。

「よしさっそく、やってみよう。まず小傘から。」

小傘に障壁を付けてから『誤認』と『隠形』を付加した。その瞬間妖力が感じられなくなった。そして小傘の姿が一瞬ぼやけたかと思

うと、そこには黒髪で眼の色も黒というこの時代にならどこにでもいる普通の女の子がいた。ちなみに霊力があるということも『誤認』させた。

「どうですか？わちきふつうの人間に見えますか？」

「誰が見ても人間だよ。何なら見てみるかい？小傘の感覚も『誤認』させたから。」

そう言って空壁に『鏡』を付加して見せた。

「わぁ～ホントに人間の女の子に見える。」

「持ってる傘の方の眼と口は消しておいてね。あと服も人間が着るような服着といて。じゃあ僕も…。」

自分の障壁に『誤認』を付加した。自分自身にも『誤認』させているのでなんとなく変わっていくのがわかる。
そして鏡壁で自分の姿を見た

髪の長さは肩の辺りまで短くなり眼も髪も小傘と同じように黒くなっていた。とりあえずは成功したみたいだ。不安なので小傘にも確認を取ってみた。

「たぶん出来てると思うけど小傘から見てどうかな、この姿？」

「はい、前からご主人は人間ですけどさらに人間っぽく見えます。問題無しです。」

親指をビシッと立ててＯＫサインを出す小傘。

「誰かに僕たちのことを聞かれたら兄妹ってことでいくからね。…じゃあ準備も出来たことだし行きますか？」

「はい！！」

さっそく港町のような場所へ入るとそこはそれなりに活気があるところだった。奈良の平城京にいる人たちのよう高そうな服ではなく

動きやすさ重視のような服が多い。海に近いこともあってか漁師のような人が多いようだ。

「おっ、お兄さん方。焼き魚はいらんかね？」

声を掛けられたほうを向くとおそらく自分で捕ったものであろう魚を焼いて売っているおじさんがいた。

「いりますいります。小傘も食べてみるだろう？」

「食べたいです！」

僕たちが頷くのを見てから気のよさそうなおじさんは焼き魚を渡してくれた。

パクリッ。

「「おいしい。」」

「そいつはどうも。お兄さん方は兄弟かなんかかい？」

「はい、妹と2人で各地を回ってるんです。今回は蝦夷に行こうかと思って。ここって定期船って出てます？」

「あぁそれなら海のほうに向かっていったらいくつか定期船があるからそれに乗るといいよ。」

「ありがと、これは御礼のつもりで…。」

そう言ってお代よりも少し多めにおじさんにお金を払った。

「まいどあり～。」

手を振って見送ってくれているおじさんに手を振り返してから、言われたところに向かうことにした。奥へ向かうほどに海から発せられる特有の潮の香りが漂ってきた。

「ご主人、なんか奥から食べ物とは違うにおいがしてきます。」

「これはね、まぁ簡単に言うと海のにおいだよ。」

「はやく海見てみたいです！！」

「もうすぐ見れるよ。んっ？……なんだろ、あれ？」

１０メートルほど先のほうで男が４人ほどで女性を囲んでいるのが見えた。歳はだいたい１５、６歳ぐらいだろうか。明らかに少女が男たちにからまれているように見えた。さらに近づいてみると、だんだん声が聞こえてきた。

「なぁ～ちょっとつきあってくれるだけでいいからさ～。」

「やめてもらえますか。私これから船に乗って仕事しないといけないんで。」

「つれないこと言わずに。」

「離してください！！」

バシンッ！！

おぉ～ナイスビンタ。なかなかに痛そうな音がした。だが、それは男を怒らせただけのようだった。

「この女、調子に乗りやがって！！」

男のうちの1人が彼女に向かってぶっとい腕を振り上げた。当然少女の方は対抗手段持っておらず迫り来るであろう男の拳におもわず目をつぶった。そして男の拳は少女に当た……らなかった。理由は1つ。振り上げられた腕を僕が掴んでいるからだ。目の前で明らかに非がないものが暴力を受けられそうになっているのにほっとくほど僕は甘い性格はしていない。

男は男で突然自分の腕を掴まれたので一瞬驚いたが、止めたのが僕だとわかると怒りの矛先を僕へと変えた。

「てめぇ何邪魔してんだよ！！」

「君たちこそ大の男が寄ってたかって女の子をいじめるとは感心しないよ？」

「……いい事思いついた。今からお前の身包みを剥ぐことにしよう。やっちまえ！！」

その声を合図に合図した男も含めて4人の男が一斉に襲いかかってきた。

「小傘、手は出さずに後ろにさがっといて。」

「はい、ごしゅj：兄さま。」

小傘が後ろにさがったのを確認するとまずいきなり殴りかかってきた男の手を受け流しつつ取り、そのまま背負い投げの要領で地面に叩きつけた。
次に棍棒のようなもので殴りかかってきた男の攻撃をしゃがむことによって避けそのまま足払いした。体勢が崩れて倒れた男の顔面に死なない程度に本気で殴って気絶。これであと2人。

接近戦は不利だと思ったのか拳以上の大きさの石を思いっきり投げてきた。これに対して僕は避けずに先ほどの男が持っていた棍棒でその石を打ち返した。男は一瞬呆けた顔をしてそのまま顔面に直撃。あと1人。

最後の1人は合図を掛けた男だった。男は慌てて懐からあるものを取り出した。ナイフほどの大きさの刃物だった。刃物を出したことによって周囲がざわめいた。男もその反応に満足したのかニタァと笑った。そしてそれを持って突っ込んできた。その様子に僕は慌てることなく腹や顔面ではなく刃物を持っている右手に向けて棍棒を振り落とした。当たった瞬間男は顔を痛みでゆがめおもわず刃物を取り落とした。慌てて取ろうとしたが僕が刃物を蹴って飛ばして阻止。

持っていた棍棒を後ろへ放り投げるて男を一瞥してから言った。

「お仲間はみんな寝ちゃってるけどどうすんの？」

「くっ、黙れやぁぁぁ！！」

立ち上がってから男はとび蹴りを放ってきた。僕はそれを避けなかった。僕に当たったと思ったのか男はまたニタァと笑ったがよく見ると当たっておらず僕は男の足を掴んで受け止めていた。そして僕はその足を掴んだままその場で回転し始めた。十分回転した所で瓦礫がある方向に男を放り投げた。

「さいなら～。」

「ひぃぃぃぃぃぃ！！！」

ドカァァァンと大きい衝突音とともに煙がもくもくとあがった。煙が晴れるとそこには目を回して気絶している男がいた。

ふぅと一息つくと小傘が戻ってきた。

「お見事です、兄さま。」

「そりゃどうも。でもその兄様ってなに?」

「兄妹なのですから当然でしょう?」

「まぁね。さてとさっきの女の子は…。」

無事を確認するため少女のいる方へ振り向くと周囲から歓声と拍手が巻き起こった。

「やるねぇ、おにいさん。」

「スカッとしたよ!!」

「ざま~みろ~!」

よくわからなかったが感謝されているようだ。周囲の歓声と拍手に僕と小傘が戸惑っているとさっき助けた少女が近づいていた。

「あの…さっきは助けていただきありがとうございました。」

「どういたしまして。怪我はなかった？」

「はい、おかげさまで。あの助けていただいた御礼がしたいので家まで来てもらえますか？」

「いいよ、御礼が目的で助けたわけじゃないし。」

「それじゃ私の気が治まりません。あとあなたたちのお名前も聞いてもいいですか？」

「はぁそこまでいわれるとかえって悪いかな…。名前は新幸生だよ。」

「わちきはたたｒ……新小傘です。」

「（お、おい小傘！名前までもかい！？）」

「（やるなら徹底的にです。）」

「ありがとうございます、それじゃ家に案内しますね。あ、申し遅れました。私の名前は……。」

「村紗水蜜（むらさみずみつ）です。」

第２３話　海辺で出会う少女（後書き）

まさか村紗登場です。
しかもまだ船幽霊じゃなくて生きてて人間です。

出してみたかったんですよ

第２４話　助けられた恩

「こっちですよ。」

村紗水蜜と名乗った少女は僕たちより数メートル先を歩いて手招きしている。彼女が襲われていた理由を道中でいろいろと考えていたがまぁ単純にかわいかったからではないだろうか。
服装を見たところ別に高級そうな服を着ているわけでなく昔風の童子が着るような服だった。お金を持っているというわけでもなさそうだし彼女から喧嘩をふっかけたようにも見えなかった。

「ここです。」

「ん、あぁ。」

考えているうちにどうやら家に着いてたようだった。家は予想通りどこにでもあるような普通の民家だった。

「どうぞ、入ってください。」

「じゃあお邪魔します。」

「お邪魔しまーす。」

家の中に入るとやはり普通の家だった。違う所があるとすれば、浮き袋だったり網だったりなど海に関係するものが多くあることだった。

「お茶どうぞ。」

「ありがと。」

ズズッと飲みながらもう一度家の中を見渡し、気になったことを聞いてみた。

「村紗さんのご両親は、仕事かな?」

「……父と母は数年前に亡くなりました。それ以来1人で暮らしています。」

「…ごめんね、そっちの事情も知らずにそんなこと聞いて。」

「大丈夫ですよ。1人の生活にも慣れましたし、親方たちがいろい

ろと面倒見てくれたりてしてもらってるので。」

「親方？」

「はい。船で働かせてもらっているんです。そこの親方に雇ってもらったんです。仕事は大変ですけど楽しいですよ。なにより海に出れますから。」

ニコッと笑って嬉しそうに話した。

「村紗さんは海がすきなんだね。」

「はい！！それよりさん付けはやめません？助けてもらったのにこっちが丁寧な言葉で対応されると……。なのでふつうに村紗って呼び捨てでいいですよ。」

「ふむ……困らせるのもあれだからそうしようかな。じゃあ僕のことは上の名前じゃなくて幸生でいいよ。そっちのほうが聞きなれてるし。」

「わちきは小傘で。」

そう言うと村紗はをわたわたと振って首をブンブン振った。

「そ、そんな呼び捨てなんてできないですよ、せめて幸生さんって呼ばせてください。」

「そんなに気にしなくてもいいと思うけどなぁ。まぁ好きに呼んでくれていいよ。そういえば仕事があるからとか言ってたけどいいのかい？」

「あ、はい。なんかさっきの騒動が親方にも伝わったみたいで今日は休んどけってことになりました。」

「じゃあ幸生さん。改めて言わせてください。助けてくれてありがとうございました。」

莫蓙の上に正座してかしこまって頭を下げてきた。

「いいよ、いいよ。こっちも勝手にやっただけだし。」

「それでなんですけど……。」

下げていた頭を勢いよく上げたかと思うと、

「何か御礼をさせてください！！！」

「だから御礼が目的じゃないんだけど…。」

「それじゃあ私の気が治まりません！！なにかして欲しいこととかないですか？」

「ウ～ン別に欲しいものとかないしなぁ。この地に来たのも蝦夷に行くために船に乗ろうと思っただけだし。」

「船って定期船のことですか？あの船は乗船許可証がないと普通の人は乗れませんよ。」

「「えっ！？」」

「知らなかったんですか？」

いきなり驚愕の事実。あのおじさんそんなこと一言も言ってなかった。

髪の色とかで悩んだりする以前の問題だったとは。悩むだけ無駄だったのか。

ズーンと効果音が付きそうなぐらいに落ち込んだ僕を見て若干引き気味に村紗は苦笑いをした。

「あは、はは…。でしたら私が親方に頼んでみますよ。たぶん親方なら多めにみてくれるはず。」

「本当!?」

「はい、見た目怖いですけど優しい人ですから。」

「それは助かるよ。ありがと村紗。（これが駄目なら飛んでいかないといけなかった。）」

「えっ何か言いましたか?」

「い、いや何も言ってないよ。」

「?それでなんですけど出航は明日の昼になると思うので良かったら今日はここに泊まっていきませんか?」

「いいのかい？船の面倒だけじゃなく宿の面倒までみてくれるなんて、迷惑じゃないかい？」

「そんな迷惑だなんて…。もちろんいいに決まってますよ。（それに一緒にいたいし…。）」

「何か最後に言わなかった？小さくてよく聞こえなかったんだけど。」

「い、いえ何も言ってないです／／／／／／／／／。」

なにやら村紗が顔を俯かせて赤くさせている。どうしたんだろう？……まっいっか。

「そうかい？えっとじゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「はい！！幸生さんと小傘ちゃんはここまで2人で？」

「そうだな、ずっと2人で旅してた。な、小傘？」

「はい…じゃなかった。うん！」

「良かったらここに来るまでの旅の話聞かせてもらえますか？」

「それぐらいお安い御用だよ。」

それからは夕食を食べたりしながら僕たちの旅の話や村紗の海での体験談で話に花を咲かせ、わいわいと話しながら夜中になっても話し続けていた。

翌朝眠くてなかなか起きなかった僕を小傘と村紗の2人がかりでいろんな方向に揺さぶられて起きれた代わりに、船に乗る前から酔ってしまった事は余談である。

後に新幸生は当時のことを思い出しながら人里の子供たちに真剣な表情でこう語ったという。

「みんな夜更かしは駄目だよ。」

第２４話　助けられた恩（後書き）

今回は短くなりました。
多分次回も短くなります。

あとムラサ編は次でとりあえず終わりです
また次回で。

第２５話　初めての船旅

みなさん、毎度おなじみの新幸生です。村紗の計らいのおかげもあって蝦夷行きの船に乗ることが決定し、今朝の船で出航します。ついに船に乗って蝦夷に行けるから今楽しい気分であると思われるかもしれませんが、今の僕はそういう気分ではないです。ちなみに今の僕の気分はというと、

「……ウップ。…気持ち悪い～。」

船に乗る前から見事に酔って吐き気がするような気分です。まぁ理由としては朝の目覚ましが女の子２人による目覚まし。それだけを聞いたならば羨ましい、妬ましいと思う人もいるかもしれない。でも、２人がかりで同時に体を思いっきり揺さぶられてみてください。結果は現在の僕の状態になってしまうのです。

「す、すいません。だって何度声掛けても幸生さん起きてくれないから…。」

「そうですよ、兄さまが起きなかったのが悪いんです。」

「いや僕がちゃんと起きなかったのが悪いから村紗は気にしなくていいよ…おぇ。あと小傘は少しは反省して。」

「はぁ〜い。」

そんな話をしながら歩いてるとだんだん潮の香りが強まってきた。
そして、

「着きましたよ。これが海です。」

「「お〜。」」

波の音、潮の香り、太陽の光を浴びてキラキラと反射する海面。転生して以来久しぶりに海を見たが、やっぱり海はいつ見てもきれいだ。

「幸生さん、こっちです。親方〜！」

「ん？おう、村紗か。昨日は大変だったみたいだな。」

「いえ、幸生さんが助けてくれたので全く問題ないです。後ろにい

るのがその幸生さんです。その横にいるのが妹さんの小傘ちゃんです。」

親方といわれた人は５０歳ぐらいの男性で身長が１７０ぐらいで一般男性よりも筋肉質で肌が太陽の光によって黒く日焼けしていた。まさに親方っぽかった。

「おう、村紗を助けてもらってすまなかったな。兄ちゃん強いんだな！！」

ガハハハハ！と背中をバシンバシンと叩いて豪快に笑いながら言ってきた。

「いえ、そんなことは。」

「親方それはもういいですから。それで親方にお願いがあるんだけど幸生さんたちはこの海の向こうの蝦夷に行きたいみたいなんです。乗せてってあげられませんか？」

その村紗の言葉に親方は少しだけ考え込むように眉間のしわを寄せたがふいにその表情は消え、清清しいほどの笑顔で言ってきた。

「確かに普通は乗船許可証がなけりゃあ、わしも乗せはしないんだ

が村紗の恩人の願いとあらば人肌脱ごうじゃねぇか！！」

親指をビシッと立ててこれまた見事な笑顔で返してきた。

（うわぁ～、この人……漢だ！！）

「ありがとうございます、こちらの無理な願いを聞き届けてもらい。」

「いいってことよ。あと少しで出航するから船に乗った乗った。村紗はいつも通り海の流れ見てくれ。お前らも持ち場について準備しろ！！」

親方が船員たちに向けてそういうとオオオオー！と大声を上げて一斉に動き出した。

「なんか元気というか活気があっていいですね、みなさん。」

「それがうちの船員どものいいとこでもあるからな。航海技術もピカイチだから安心しな！村紗がいれば少々の海の流れじゃあ問題ないからな。」

「そうなのか、すごいな。」

「親方、大袈裟すぎますって。」

「大袈裟なことあるもんか。お前がいるから今まで海が荒れても無事だったんだぞ。もっと自信もて。」

バシンバシンと村紗の背中を叩く。……親方もう少し優しく叩いてあげて。

「それは確かにすごいですね。村紗も海が好きなだけはあるね。」

人を褒めた時に頭を撫でる癖が若干ついてしまったのかここでも村紗の頭を撫でてしまった。
やった後になってさすがに馴れ馴れしいかと思ったが、特に嫌がるそぶりも見せずむしろ嬉しそうな顔をしているのでホッとした。

そんな村紗の様子を見てか、親方は村紗の方を意味深な顔で見ていた。

「ほぉ～なるほどねぇ。村紗もやっぱり女だな。ガハハハハ！！」

「／／／

見事に船酔いしていた。船は揺れやすい。しかも小傘は海も船に乗るのも全てが初めてだからおそらく小傘は酔うじゃないかと思っていたが……。

見てるとこっちにまで酔いが伝染してしまうかと思ったので背中をさすってあげた。

「大丈夫かい、小傘？」

「う～、ご主人能力でなんとかならないですか？」

「2つ以上はまだ付加できないからどれかはずさないと無理だね。まぁもう少しで着くらしいし我慢我慢。」

「はぁ～い。う～。」

そのまま小傘の背中をさすっていると村紗がやってきた。

「どうですか、船の乗り心地は？」

「うん、僕としてはいいよ。景色も良かったしね。ただ小傘がね。」

チラッと目線だけ小傘のほうを向きどんな状態かを見せた。

「見事に船酔いしてますね、まぁ仕方ないとは思いますけど。まぁあと少しで着くのでそれまで頑張ってもらうしかないですね。すいません、何も出来なくて。」

「何も出来ないだなんてそんなことはないよ。船とか海については僕は知識がないからよくわからないけど親方の言うとおりなら村紗のおかげで無事ここまでこれたってことじゃないか。」

「そういってもらえるとうれしいです。それじゃあ……」

そう言い残して村紗は戻っていった。

そして数十分後、小傘がリバースしてしまう前になんとか目的地、蝦夷へとたどり着くことが出来た。そして着いてからの第一声は、

「さむっ！！」

「酔いがまだ醒めないし寒い～（ブルブル）」

わかってたつもりだったけど予想以上に寒かった。現代と比べれば今着ている服は遥かに防寒着としての役割を果たしていないといえるだろう。

寒さに震えていると後ろからその寒さを吹き飛ばすかのような笑い声とともに親方がやってきた。

「ガハハハハ、まぁ初めて来たやつらは寒いだろうなぁ。わしたちは何度も往復しとるからもう慣れたがな！」

この寒さを慣れで克服するとはすげぇと思っていたら向こうの方で近くまで寄らないとわからないが小刻みにブルブル震えている船員たちが何人かいた。というか全員だった。

（……そりゃ普通慣れでなんとかなるもんじゃないよね。）

「ところでお前さんたちすぐにどっか行くのかい？」

「いえ、今日はもう日も暮れますしこの辺りで宿を取ろうかと思ってますけど。」

「だったらお前さんらもわしたちが泊まる宿に来るといい。わしらも夜はさすがに航海できないからの。」

「いいんですか、そこまで世話になって?」

「そのほうが宿を探す手間も省けるだろうそれに……。」

チラッと後ろのほうを親方が見る。つられて見るとこっちに走ってくる村紗がいた。

「ここで別れたら当分会うことが無くなるだろうからな。まぁこれも縁だと思って、な?」

「じゃあお言葉に甘えさせていただきます。僕としても皆さんともう少し居たかったですし。」

「よぉし、じゃあ決まりだ。」

「何が決まったんですか親方?」

こちらにやってきた村紗が首を傾げる。

「お二人さん今日はわしたちと同じ宿に泊まるってよ、よかったな！！」

「えっほんとですか！？」

ものすごく嬉しそうな顔をして確かめてくる。しかも顔が近いって。

「う、うん。そうさせてもらうことになったよ。」

「じゃ、じゃあ今から宿で宴会みたいなのやるので行きましょう！！」

「ちょっと待ってね、まだ小傘が気分悪そうだからここで少し休んでから。」

「さぁ行きましょう行きましょう！！（ガシッ）」

なぜか僕の声が耳に届いていないのか右手を掴むと宿があるであろう方向へと一気に引きずっていく。

助けを視線で求めたが小傘はグロッキー、親方はなぜかニヤニヤ笑っていて立っているだけだ。

「え、ちょ、待ってえええぇぇぇーー。」

村紗と幸生が見えなくなってから親方は呟くように言ってからいつものように笑った。

「青春ってのはいつの日もいいもんだな、ガハハハハ!!!」

酔いがやっと醒めてやっと思考を取り戻した小傘は小傘で親方の横でブルブルと震えながら、呟いた。

「兄さま～どこですか～？（ブルブル）」

ニヤニヤしながら笑う男と、ブルブル寒さに震えている女の子が並んでいる光景は第3者から見るとなかなかに異様な光景に映ったという。

第２５話　初めての船旅（後書き）

親方が男前！！

次回は一騒動あります。どうなってしまうのかはお楽しみに。

それではまた～。

第２６話　海での別れ

楽しい時間というものはすぐに過ぎていくものであり、僕と小傘の送別会ともいえた宿での宴会はあっという間に終わったように感じたが久しぶりにみんなとワイワイやってとても楽しむことが出来た。そして夜が明け、朝日が昇り、親方たちは眠りから目覚めるとあんなに酔っていたのが嘘のようにきびきびと動いて出航の準備をしていた。さすがプロだ。

その中で親方と村紗が一緒に居るのを見つけ、近寄った。

「短い間でしたけどお世話になりました。」

村紗たちが元の港に戻る前にもう一度挨拶しておきたかったのだ。すでに出航の準備はできているようで後は親方とその横にいる村紗が乗ればいつでも出航できるようだ。

「いやいや、こっちも旅の話聞けて楽しかったのぅ。見かけによらずなかなかの知識をもっておるからこっちにとってもためになる話だったわい。」

「それはこっちも話した甲斐があるというもんですよ。でも、見かけによらずってのはひどくないですか？」

「ガハハハ、そりゃすまん。まぁまた会うことでもあればその時は話を聞かせてくれるかのぅ？」

「僕の話なんかで良ければ喜んで。」

「次が楽しみだわい。で、お前さんはさっきからずっと黙っておるがなんかしゃべらんのかい？」

話を向けられたのは村紗でビクッと肩が震えた。昨日の宴会の時とは違い顔が暗い。

「……どうしても行っちゃうんですか？」

ポツリと呟くその言葉には出会ってからのあの元気な声でしゃべる村紗の面影がない。

「村紗……。」

「もっといろいろ話したいし、一緒に居たいですよ……。」

顔を俯かせ拳をギュッと握り締め小刻みに震えている。
そんな村紗の様子を見て僕は少し笑みを浮かべて村紗の頭を撫でた。

「僕もまだ一緒に居たいけど僕もいろいろの場所に行ってみたいんだ。村紗が海で船の仕事をしたいように、僕は旅がしたいんだ。それはわかるね？」

「……はい。」

「何もこれで会うのが最後になるわけじゃないさ。この蝦夷を見るだけ見たらまたこの港に戻ってくる。そしたら、またこの船に乗せてくれると嬉しいな。」

「…また戻ってくるんですね？また会えるんですよね？」

「あぁ会えるよ。約束するよ。」

その言葉に安心したのかやっと顔を上げた。そこには出会ったときの村紗がいた。

「…じゃあ幸生さん、お元気で。」

「村紗も親方もね。また会う日まで。」

「よぉし、野郎共出航だー！！！」

「「「「「オーーーーー！！！」」」」」

それからは船が見えなくなるまでずっと僕と小傘は見送っていた。
そして見えなくなってからもしばらくそこに僕と小傘は立っていた。

「…いつまでもここにちゃ始まらないしとりあえずこの港町で必要物資を買っておこうか。」

「はい。」

ここにはいろいろと品が揃えてあるようで食べ物だけでなくここでは間違いなく必要な防寒着のようなものも売っていた。そこで必要な物だけ買うことにより補給した。

「ふぅこれだけあれば大丈夫かな？」

「ですね。防寒着も買いましたし、これで大丈夫ですよ、ご主人。」

「そうだね、それでも寒かったら、能力使って温まればいいしね。それよりもこの姿の時は僕のこと兄さまって呼ぶんじゃなかったの？」

「いや～もう村紗さんたちもいませんし正直疲れましたよわちき。それとも兄さまのほうが良かったですか？」

からかうようにして言う小傘。

「アホ。んなわけないよ。じゃあ行くか。」

「はい！」

準備万端になったところでその港町を出ようとした時、急にざわめきが後ろの店のほうから聞こえた。

「何かあったんですかな、ご主人？」

「さぁ？まぁ時間もあるわけだし聞いてみるかな。」

何かの話の種にもなるかもしれないと思いざわめいてる人たちの所

にいった。

「何かあったんですか？」

「あぁ、何でも海坊主が昨夜ここからちょいと離れたところでまた出たんだってよ。」

「へぇ～海坊主が。」

――海坊主

海に出没し、多くは夜間に現れそれまでは穏やかだった海面が突然盛り上がり黒い坊主頭の巨大なものが現れて船を破壊するとされている。群れをなし船を襲うことが多いとされている。大きさは多くは数メートルから数十メートルである。

「でな、その海坊主に出くわしたやつら命からがら逃げ延びたらしいんだが、逃げられたことが悔しかったのか唸りながら消えたんだってよ。その海坊主がこの近くの海で見たってやつがいたらしいんだよ。珍しいことにな……」

なんだろう、この先に続くであろう言葉に対してだんだん嫌な予感

がしてきた。

「さっき見たんだってよ。」

嫌な予感がほぼ確信に変わりつつあった。

「その話詳しく言ってください！！！」

僕の言葉に鬼気迫るものを感じたのか少し驚きながらも言った。

「お、おう。そいつが言うには海で漁をしてたら目の前の海面が急に盛り上がって黒い何かが出てきたんだってよ。これは運が良かったとしか言いようがないんだがたまたまその黒いのはこっちには気づいていなかったみたいでな。そのまま進んでいったらしい。」

「どの辺りに向かって進んでいったんですか！！」

「大まかなことしかわからねぇようだけどたぶん定期船がよく通る所じゃないか問いいているようだ。もし、定期船が出くわしたとなれば気の毒としか言いようが……お、おい兄ちゃんどこに行くんだ！？」

気づいた時には僕と小傘は海のほうへと駆け出していた。
さっきの話が本当なら村紗たちの船と出くわす可能性が高い。いくら村紗が海に詳しくても妖怪となればまた別の話になってくる。

「ご主人、誤認障壁外して万全の状態で行きましょう。船じゃ間に合いませんし、ご主人の空壁のほうが早いです！！」

「わかってる。今解くよ！！」

足を止めてから、僕と小傘に誤認障壁を解除した。すると、髪と目の色が僕は灰色の髪に赤黒い目、小傘は水色の髪に赤と青の目になり服装もいつもののへと戻った。その瞬間周りにいた人たちが驚いて悲鳴を上げたがその声を無視し、空壁に乗って村紗たちが行ったであろう航路へ全速力で飛んでいった。

村紗ｓｉｄｅ

「グウォォォォォォ！！！！」

何がなんだかわからなかった。幸生さんたちと別れてからいつも通りの航路で陸奥へと戻っていたらいきなり前方から巨大な黒い坊主頭のようななにかが現れて私たちの船を襲った。
あまりにも突然でだれも動くことが出来なかった。親方がいち早く立ち直っていたけどどうすればいいのか親方でもわからなかったようで右往左往していた。そうこうしているうちにその妖怪に船を攻撃され船は木っ端微塵になり私も含めて全員放り出された。

たまたま私には衝撃が少なかったからか、木片と化した船の一部に掴まることによって溺れずに済んだ。でも、周りを確認したけど今の一撃でみんな動かなくなって海面に浮いている。親方もだった。
私も木片に掴まるだけですでに限界だ。。

そして今に至る。

「みんなぁ、しっかりしてよ。親方…逃げなきゃ。」

しゃべっても誰からも言葉は返ってこない。その声に気づいたものはいた。ただしそれはあの黒い何かだった。
こっちに手を伸ばしてきた。逃げようにも海で自由が利かない上、運よく生き残っていたとはいえ衝撃により体が動かせず、そのまま捕まった。妖怪は自分の目線まで私を上げると掴んだ手に力を加え始めた。

ゆっくりと、ゆっくりと。

まるでいたぶるかのように。

「――――――――――ッ！！！！！」

声にならない悲鳴が上がる。体の節々から骨が砕けるような音がする。体が圧迫されていくことにより内出血が起こり、おもわず血を吐いた。

意識が朦朧とし、死を間近に感じながらある人のことを思い出していた。

（約束……果たせなかったなぁ…。会えそうにないです。……ごめんなさい、幸生さん。）

一筋の涙が頬を伝うのが感じた。さらに力が加えられていく。想像を絶する痛みでもう考えることも出来なくなってきた。そして最後の一握りが来るのを感じて目をつぶった。

つぶって…つぶって…いつまでたっても覚悟した死が来なかった。そこで目を開けて確認しようとする前に急に加えられていた力が緩みその腕ごと海へと落ちた。でも私が海に落ちきる前に誰かが優しく抱きとめてくれた。ゆっくりと目を開けるとそこには、

「大丈夫かい！！！村紗！！！」

「幸……生…さん。」

死を間近に感じた時に頭によぎったあの人がいた。

幸生ｓｉｄｅ

猛スピードで航路を辿っていくと前方に巨大な黒い坊主頭がいた。海坊主だ。どうやら一匹だけのようだ。そして、海坊主は何かを掴んでいる。

村紗だった。

「小傘！！腕を切り落とせ！！」

「はい、ご主人！！」

小傘は自分が持っている唐傘を高速回転させると海坊主脳でめがけて投げた。唐傘は勢いよく放たれ村紗を掴んでいた左腕を根元から切り落とした。

「グウォオーーーーー！？」

その瞬間海坊主は雄たけびではなく悲鳴を上げた。腕は村紗を掴んだまま海へと落ちていってる。落ちきる前に村紗をなるべく少ない衝撃で済むように優しく抱きとめた。
抱きとめて村紗の体を見ると酷いものだった。

体のあちこちから外から見てもわかるほどの大きな内出血、そしてこの様子だと骨も折れたり砕けていたりしていそうだ。

すると気がついたのか村紗がゆっくり目を開けた。

「大丈夫かい！！！村紗！！！」

「幸……生…さん。」

とても村紗の声とは思えないくらい弱弱しい声音で僕の名を呼んだ。

「姿…違うけど……感じでわ……かります。この…感じは…幸生……さんだぁ。」

今現在も体中に激痛が走っているはずなのに弱弱しく僕に向かって笑った。さらに、その直後に笑みから心配の表情へと変わった。

「幸…生さん、早く……逃げてくだ…さい。死ん…じゃいます……よ。」

「!?……僕の心配してる場合じゃないだろう!!」

自分が今にも死にそうな状況で他人のことを心配出来る人間がこの世に何人いるだろうか…。そんな子を、この海坊主は……。周りをよく見ればお世話になった親方たちがすでに死んでいた。

心の奥底からふつふつと怒りがこみ上げてきた。以前大和の神々との交渉の場でもおもわずぶちぎれたことがあったがそれとは比べ物にならないくらいの怒りが僕の中で膨れ上がっていく。

村紗を抱きかかえたまま後ろを振り返る。そこでは海坊主と小傘が戦っていた。今の今まで海坊主からの攻撃がこっちにこなかったの

は小傘が食い止めていたからだ。
だが、少し小傘が押され気味だ。もともと小傘が敵う相手ではない。小傘が下の上ならば、この海坊主は中の中くらいだろう。最初の一撃も不意打ちだったため成功した。腕を切り落とされてもやや海坊主のほうが上回っている。

「小傘、こっちに来い。」

その声にすぐに反応し僕の元に戻ってきた。若干息も荒く、ところどころ傷もある。

「村紗を連れて少し離れた所にいて。」

空壁を出してそこに村紗を乗せた。

「はい、危険がないところまでこれで移動したらわちきも「小傘もそこにいろ。」えっ？」

「危険が及ばない所まで行ったらそこで村紗と待っていろ。」

「で、でも2人でやっとほうが早く終わり「…小傘。」は、はい！」

徐々に霊力を開放していくことにより、ゴゴゴゴゴッと空気が振動していく。

「二度は言わないよ。……離れてろ。」

自分でも内心で驚くほど低く重い声で言った。

「!?は、はい。わ、わ、わかりました。」

ひどく動揺しながらも小傘は村紗を空壁に乗せて離れていった。十分離れたのを確認しながら海坊主に向き直る。

海坊主は小傘に切り落とされた左腕を拾い、くっつけていた。そして、僕を見つけると敵とみなし、その巨大な体で突っ込んできた。その巨大な腕で潰そうと拳が迫りあと1メートルという所で突如現れた壁にゴォォォォンという轟音とともに防がれた。海坊主は気にせずあらゆる方向から殴り始めた。

「……空壁牢。」

その前に幸生は空壁牢で自分を囲み全方位型の防御をした。しばら

くの間そのまま海坊主の攻撃を受けていた。他人から見たらいつ破壊されるだろうかと思ってしまうほど海坊主の攻撃は続いた。
だが、幸生の一言でそれは終わった。

「……弾け。」

その瞬間海坊主の両腕が大きく弾かれあまりの衝撃に後ろへと倒れた。
海坊主を見下ろすように空中に浮かぶ幸生。その体の周りには青白い靄のようなものが出ていた。これは幸生が霊力を全解放したためそのあまりの大きさに視覚化されて出来たものだった。

つまり幸生はいま本気を出しているのだ。
通常時の7割が今では勇儀と戦った時の8割。現在の8割は萃香と戦った時の本気。そして今現在の本気はそれをさらに上回るほどに妖怪の山での200年の生活と修行により成長した。

だが、別に今対峙しているこの海坊主があの萃香よりも強いから本気を出しているわけではない。ただ目の前にいるこの海坊主確実に塵も残さずこの手で殺すために本気を出している。倒すのではない、殺すのだ。

僕は海坊主を見下ろしながらこう告げた。

「…貴様、塵も残らんと思え。」

手を前にかざした瞬間、海坊主の周囲に何百個もの空壁が音も立てずに展開された。そしてその全ての空壁に『炎』と『貫通』を付加し、空壁全てを同時に操って杭のようになるぐらい伸ばした。伸ばした先には海坊主がいる。
薄い青色だった空壁は全て深紅へと変わり海坊主に次々と突き刺さり貫通していく。

「ガァァァァーーーー!?」

貫かれた痛みと内部から焼かれる痛みに絶叫している。なんとか自分の身に突き刺さっている何百本もの杭を抜こうと手を当てるが、想像を絶するほどの熱で一瞬触っただけで海坊主の手が干からびていった。本来なら触れてしまうと徐々に炭化していくのだが海の妖怪だからか水分が多くその水分が蒸発してしまったようだ。
貫通した杭は海にも到達しているが着水している部分から蒸気が出ている。水中からは沸騰したかのように気泡が次々と浮かんでくる。

それほどに高温なのだ。

ほんの少しだけ僕はその様子を見ていた。そして、目の前に5メートル四方の空壁を5つ出した。その空壁に今度は『斬』と『音速』を付加させ、それぞれを両足、両腕、胴体、首にめがけて放った。

当然音速の速さで飛来する刃をましてや身動きが取れない状態で避けれるわけもなく、海坊主は首と胴体がセット、そして右腕、左腕、右脚、左脚に切り分けられた。そして、それらを海に落ちる前に1つ1つ空壁牢で囲った。

僕はその空壁牢のそばまで近づいた。中を見れば、まだ海坊主は生きている。切り落とされた腕を再度くっつけるぐらい再生力が高かったのだからそれも納得できる。首つまり頭が閉じ込められている目の前に僕は浮かんだ。

「海坊主、貴様に最初言ったことを覚えているか？……塵も残らんと思えとな！！！」

全ての空壁牢にそれを合図にすることにより『滅』を付加した。付加した瞬間、両脚がまず滅され次に両腕が滅された。
最後にどうなるのか海坊主も理解したのか空壁牢の中で初めて恐怖の色が入った悲鳴をあげた。そして、悲鳴を上げながら最後の首と胴体がこの世から滅された。

小傘ｓｉｄｅ

離れた所で自分のご主人と海坊主の戦闘を見ていた。……いやあれは戦闘じゃなかった。何もかもが圧倒的、一片のためらいもなく自分のご主人は攻撃していた。ご主人の傘となってから約２００年。本当に、本当に今日初めてご主人が怖いと思った。ご主人はそれほどまで怒っていた。いつもあんなに優しいご主人をここまで恐ろしいと思うことがあるとは思いもしなかった。

だけど恐ろしいと思いながらもやっぱりご主人は優しいと思った。ご主人があそこまで怒ったのは自分の大切な人たちが殺され傷つけられたからだ。それこそがご主人が心の底から怒る理由なのだ。

いつの日だったかご主人になぜすでに強いのにいつまでも修行をしたりしているのかと聞くと、こんなことを言っていた。

『僕はね、小傘。ずぅっと昔にね、何が何でも自分の力で、この手で守りたい人たちがいたんだ。でも、その時の僕はまだ弱くて結局守ることが出来なかった。

だからね、僕は力が欲しいんだ。もちろん、ただ力を求めるだけじゃ駄目で心も常に鍛えないといけないんだ。ただ力を求めるだけなら誰にでもできる。大切なのはその力を何のために使うのかってことなんだと思うんだ。
だから、僕は小傘たちのような僕にとって大切なものを守れるほどの力が欲しいんだ。それが僕の理由さ。』

いまなら確信できる。ご主人はだからこそ強く、優しく、大きい人なんだと。

幸生ｓｉｄｅ

文字通り塵も残さずこの世から海坊主が消えたのを確認してからすぐに小傘の元へ戻った。

「終わったよ。小傘、村紗の状態は？」

「はい、かなり傷がひどいです。止血だけはしたんですけど……。」

「上出来。とりあえず応急処置ぐらいにしないと……。」

僕は急いで懐から包帯を出して傷のある箇所を迅速に巻いていった。『治癒』でも付加できればいいんだけどどうにも昔からそれだけはできなかった。だが、今はできないことを言っても仕方ない。できることをするだけだ。

「村紗、聞こえるかい？」

「…はい、聞こえてますよ。」

「このままじゃあまだ危険だから今から港町に戻って医者を探すからね！！」

「…はい、ありがとう…ございます。」

新しく空壁を出して僕たちはそっちに乗り移った。村紗は寝かしてある。

村紗に負担を掛けない程度での全力で港町まで飛んだ。すると、村紗が口を開いた。

「幸生さん…あと…小傘ちゃんに聞きたいことが…。」

「なんだい？」

「…人間ですか？」

「……小傘はね唐傘お化けっていう妖怪だよ。そして、僕は人間だよ。ただし…半不老不死だけどね。かれこれ１２００年は生きてるよ。」

「……。」

「僕たちが怖いかい？」

そう言うと弱弱しく笑いながら首をわずかに横に振った。

「幸生さん…たちは…幸生さんたちです。怖いわけ…ないじゃないですか。」

「そうか…ありがとう。もう着くから頑張って。」

そしてついに蝦夷の港町が見え、すぐに地上に降りた。

そして村紗を抱きかかえて振り返ろうとしたところで、石が僕の頭に飛んできて当たった。

「ぐっ、一体誰が……。」

今度こそ振り返るとそこには石や棒切れ、鍬、包丁など様々な凶器をもった港町の人々がいた。

「化け物たちめ！！さっさとどこかへ行ってしまえ！！」

「ここは化け物が来るとこなんかじゃないんだよ。」

「ちょ、ちょっと待ってください！僕たちは化け物なんかじゃ…。」

「嘘だ！人が空飛べるわけないし、お前とそこの傘持ったガキの目と髪の色。明らかに人間のものじゃあねぇよ！！！」

「そうだそうだ、さっさとここから出て行け！！」

「……じゃあせめてこの子を助けてあげてください！！この子は海坊主に襲われて重症なんです！！」

「嘘言え!!どうせそいつも実は化け物なんだろ!そんなやつに治療してやるわけなぇだろ、消えろ!!」

そういって男は拳大の石を村紗に投げてきた。ぼくが背中を向けることでギリギリ村紗には当たらずに済んだがまた僕の頭に当たった。頭から一筋の血が流れる。

「ご主人!!人間め…よくも!!」

「やめろ小傘!!僕は大丈夫だから。時間がない、他のところへ行こう。」

「…はい。」

「……。」

後ろから聞こえる罵声を全て無視し、空壁に乗って移動した。この近くで他に村があるか知らないが何とかして探すしかない。

そう思ったところで村紗が口から血を吹き出した。

「村紗ッ!?まずい、早く見つけないｔ「…いいですよ、幸生…さん。」えっ?な、何を言ってるんだ。諦めちゃ駄目だ!!」

「いいん…です。なんとなく……ですけどわかるんです、もう…駄目だってことが。それに…幸生さんたち…は十分すぎるほどやってくれ…ました。ゲホッ。」

ピシャピシャと口からまた血が出る。

「本当なら、ハァハァ……。私はあそこで死んでいました。ハァハァ。それを…幸生さんたちが助けてくれたんです。十分やって……くれました。ハァハァ……、幸生さん、手を…握ってもらっても……いいですか?」

「…あぁいいよ。」

そう言って僕は村紗の手を強く握り締める。

「幸生さんの手……暖かいなぁ…大きいなぁ。」

だんだん村紗の息が浅くなっていく。血の気もどんどん失せていく。
そして、突如村紗の目から大粒の涙がボロボロ流れ出てきた。

「…もっと生きたかったなぁ。……船で……もっと……海を……泳いだり…渡りたかったなぁ。」

その言葉を最後に村紗は息を引き取った。体が冷たくなっていき、もうすでに村紗の眼には光はない。
僕は涙を流しながら村紗のまぶたをゆっくりと閉じた。振り向くと小傘もえぐえぐ言いながら泣いていた。

「小傘……村紗はさ最後まで海が好きだったんだ。海の底で静かに眠らせてあげよう。」

「うっ、うっ、は、はい。」

棺桶サイズの空壁牢を作り出し、そこに村紗をゆっくり、そして優しく入れてあげた。そして、僕たちも他の空壁牢に入って海の底まで行った。そこに村紗の入った棺桶を置くとしばらくそこで黙祷した。１０分ほど経ってから僕たちはそこをあとにし、海上へと上がっていった。

海上に上がってからも僕はしばらく空壁の上でボォーッとしていた。何十分、いや何時間が経ったのだろうか?それがわからないぐらいずっとそうしていた。するといきなり何かで叩かれるような衝撃が頭にきた。

「……小傘、何しているんだい？」

「いい加減いつものご主人に戻ってください！！！」

普段の小傘からは思いもしないほどの声で叫んだ。

「確かに村紗さんが死んでしまったのは本当に悲しいです。わちきだってまだ悲しくて悲しくてたまりません。でも、もう村紗さんは帰ってこないんです！！ご主人とわちきは生きてるんです。前を向いて生きていかないといけないんです。そうでないと村紗さんに申し訳が立たないじゃないですか！！村紗さんもきっと前に進んで欲しいと思ってるはずです。」

「小傘…。」

だんだん声が小さくなり叫び声から泣き声へと変わろうとしていた。

「ご主人がいつまでもそんな姿でいるのはもう見てられないんです。だから、わちきは…わちきは……わぁぁぁぁぁぁん！」

そしてついに泣き出してしまった。いや泣かせてしまった。

僕はわずかに笑みを浮かべて小傘の頭を撫でた。

「そうだね、僕がいつまでもこんなんじゃ村紗もきっと心配するし、小傘の所有者失格だね。ごめん、だから前に進もう。今までどおり一緒にね。」

「は、はい。」

これからもまた今回のようなことが起きてしまう日があるかもしれない。それを何とか食い止めることができるようにならねばと改めて思った幸生だった。

第２６話　海での別れ（後書き）

村紗編は終了でございます。でもまた出てきますよ。

次回からは今度こそ蝦夷です。

それではまた～。

第27話　銀狐

ここは蝦夷。おそらく日本で一番寒い場所。他の場所では見られないほど雪が大量に降り注ぐことにより地面に降り積もる。そうなることで、一面白銀の世界と化す。
それは、見事な雪景色で見るものが見れば美しいというであろう。

ただし、それだけの余裕があればの話しだが……。つまり僕たちは今、

「「さ、寒い！」」

寒すぎて全く景色を楽しめていない。

「ま、まさか現地で買った防寒着が通用しないとは…へぶしっ！」

「ご主人なんとかしてくださいよ～へくちっ！」

「しようとしたけど文句言ったのは小傘じゃな、…ハ…ハ…ハクションッ！！」

防寒着だけでは駄目だと僕たちは思って僕が『暖』を付加したのだが、これが温度調節が難しく寒いからと言って温度を上げれば上げすぎて自分たちが熱さで苦しみ、やりすぎたと思って温度を下げれば結局最初に逆戻り。結果的に断念したわけである。

「そりゃそうですけど（ぶるぶる）」

そんなことを話してるうちに本格的に吹雪いてきた。何メートルか先が見えなくなってきた。

「マズイな…。仕方ない今日はこの辺りに野宿するか。」

「野宿!?ここでですか!?い、いやです、こんなとこで寝たら間違いなく死んじゃいます!!」

「ばか。このままの状態で寝るわけないでしょ。なんとかするからここで少し待ってて。」

そう言うと僕は転移壁を出し、最初の港町のはずれのところに転移した。
無事転移するとそこには誰も住んでいないであろう1つの民家があった。港町に到着した時偶然この家を見つけたのだ。そのことをさっき思い出して、じゃあこの家をさっきの場所に転移してしまえば

いいのではないかという我ながらグッドアイディアが浮かんだわけである。

さっそく僕はその民家を空壁牢で囲んだ。最後に家の中に人がいないことをしっかり確認した後僕もその家に入って僕ごと転移した。すると転移が成功したのか先ほどいた場所とは明らかに違う寒い風が引き戸の隙間から入り込んできた。まぁこの寒さもずっと外にいるよりは何倍も暖かいと思う。囲炉裏もちょうどあるし火を点ければ大丈夫だろう。

旅用の家としてなんとか持ち運びする方法ないかなと考えながら外にいるであろう小傘を中に呼ぶため扉を開け外に出た。

扉を開けると一気に雪が中に降って入ってくる。さっきよりもだいぶ吹雪いている。寒いからさっさと小傘を中に入れようと思って前方を見ると小傘がいたであろう場所にその本人がいない。

（小傘の性格からしてフラフラせずに僕が帰ってくるまでその場にいると思ったのだけど……。）

もう一度よく眼を凝らしてみてみた。すると、確かに小傘はいないのだがいたであろう場所に小さい雪の山が出来ている。そう、ちょうど小傘ぐらいの大きさの。

「ってやばい！？小傘―！！」

その山まで近づいて雪を取り払ってみると案の定そこには見事にカチンコチンに固まった小傘がいた。
僕は大急ぎで家の中に戻り、扉を閉め、火を点けて小傘を暖めた。
迅速に行動したお陰もあってかすぐに寒さによる体の固さはほぐれて意識を取り戻した。

「…ハッ！？今そこに大きな河が！！」

「（結構危ないとこまで行ったな…。）大丈夫それ夢だから。でも夢でもそういう河は渡っちゃ駄目だよ。」

「？はい。ところでここどこですかご主人？見たところ民家みたいですけど…。」

「ん？あぁこれは港町まで戻って空き家を１つもらってきた。外にいるよりは何倍もいいでしょ？」

「はい、そうですね。これなら安心して眠れます。」

そう言うとよほど眠たかったのかさっき気絶していたばかりだというのに（気絶は関係ないかもしれないが）眼を瞑ったかと思うとす

ぐにすぅすぅと静かに寝息をたてながら小傘は寝た。

「そのままこんなとこで寝たら間違いなく風引くのに……。仕方ないなぁ。」

僕は立ち上がって押入れの中から家ごと転移する前に一緒に入れておいた布団を出してそこに小傘を寝かせた。
僕はというとまだ目がさえているので囲炉裏に火をいれて家の中を暖めることにした。さらに家の外に出てから、家の周りを空壁牢で囲んでから『暖』を付加した。これなら密着するタイプの障壁の時のように温度調節をあまり気にする必要がない。

やることを終えたので自分と小傘ように暖かいスープでも作っておこうと思い、家の中に戻ろうとして外に背を向けた。すると、空壁牢の外側の方から何かが倒れるような小さな音が聞こえた。振り返ってみるが特には見当たらない。
…見当たらないのだけど一度気になると確かめたくなる性分なようで音のしたあたりまで行ってみた。

少し歩いていくとそこに何かが倒れているのをあらわすかのように雪の山が出来ていた。シルエットが人に似ていたので大急ぎで雪をどけた。人だった場合運が悪ければ死んでしまう。

そして掻き分けてそこにいたのは女性だった。歳は見かけだけで言ったらたぶん僕と同じ２０歳ぐらいだが、おそらくというか間違い

なく人ではなかった。
１つ目に銀色に輝くきれいな長い髪、そして次が決定的なのだが彼女の頭と腰には獣耳と長く大きな尾があったのだ。そしてわずかにだけど妖気が感じられた。つまり妖怪、いやこの場合は妖獣か。

そのようなことを確かめているとその妖獣が淡く光、その光が消えると１匹の狐がそこにはいた。黄色ではなく髪の色と同じ滑らかで美しい銀色の毛並みだった。だが所々に切り傷などがあった。

そして僕は少し考えてからこの銀狐を助けることにした。理由は特に何もない。ただなんとなく、他の言い方をするならば気まぐれだ。

僕はその銀狐を抱きかかえると家へと戻った。

家へ戻るとまだ小傘は気持ちよさそうにすぅすぅと寝ていた。家の中の温度もちょうどよくなってきたからだろう。一度銀狐を床に置いてからバッグから包帯と傷薬を出して簡易的に治療した。そして僕は押入れからもう一式布団を出してそこに銀狐を横にした。
そしてそれにしても……、

（ホントきれいな毛並みだ。おもわずみとれるぐらいに…。光に反射してキラキラしてるし。なんで怪我をしてあんなとこにいたのかはわかんないけどまぁ起きてくれた時にでも話してくれると良いんだけど……。あっでも今狐の状態か。）

「さてと、んじゃあスープでも作るかな。やっぱり眠くならないし。」

――――数時間後

「ふむ、まぁこんなものかな。味も……よし、おいしい。」

作ったのは至ってシンプルな魚介スープだ。港町で買っておいた魚を冷蔵庫より少し小さめの空壁牢に入れてそこに『凍結』を付加して冷凍保存しておいた。それを使ったのだ。ちなみにそんなものを持ち歩けないので持ち運べそうにないものは基本的には妖怪の山のほうにある本当の家に転移壁で転移しているのだ。
これなら必要最低限のものだけ持てばいいのでだいぶ助かる。いつのまにか食材とかの量が減っているのが玉に瑕だが。（大方勇儀とか萃香とかが勝手に食べているのだと思うけど…。）

すると匂いにつられたのか小傘が目をゴシゴシしながらムクリッと起き上がった。

「ん～なんかいい匂いがする～。」

「起きたかい、小傘？スープできてるけど飲む？暖かいよ。」

「あ、飲みます。ありがとうございます、ご主人。」

ズズズッと飲んでいく。

「……どう？」

自信がないわけではないのだがやっぱり他の人に飲んでもらうのは緊張する。

「…おいしいです！！やっぱりご主人の作る料理っていつ食べてもおいしいですよね。」

「そっか、ならよかった。」

ホッとすると小傘が言ってきた。

「ご主人の料理がまずいわけないじゃないですか。妖怪の山にいた時もずっと作っていたのはご主人じゃないですか。もっと自信持っ

てくださいよ。」

「それはそうなんだけど初めて作るものに関してはやっぱりね……。」

それを言うと何故か驚いた顔をした。

「これ初めてなんですか？なら尚更自信持ってくださいよ。初めてでこんなにおいしいのはそうそう作れませんよ。」

「そ、そうかな？」

「そうですそうに決まってます！……ところであそこで寝てるきれいな狐なんですか？」

「あぁ、あの狐は…まぁ…なんというか…家の前で倒れたから助けた。」

「でもあの狐、妖獣ですよね？明らかにわずかですけど妖気が感じられますし。何で助けたんですか？」

「う～ん……なんとなく？」

そう言うとハァとため息をつかれた。

「ご主人って結構お人好しな部分ありますもんね。まぁそういうご主人だからこそわちきはそれがいいんですけどね。」

「そりゃどうも。ん、起きたかな？」

小傘の後ろを見ると銀狐が布団から起き上がっていた。いまいち状況がわかっていないのかあたりをキョロキョロと見回してる。

「そんなに不安がらないでもいいよ、ここは安全だから……妖獣さん。」

そういった瞬間ボウンッという音とともに人化してかなりの速さで僕の背後にまわり、長く鋭くとがった爪を僕の喉元に当てた。

「！？ご主人っ！」

「ストップ小傘。そのままでいいよ。」

喉元に爪を当てられたのを見て手に持つ唐傘を持ち駆け出そうとした小傘を止めて銀狐の妖獣に話しかけてみた。

「何があったかは知らないけどさっきも言った通りここは安全だよ。別に君を退治しようとも考えてない。それでも不安なら好きに出て行ってくれてもいいよ。ただし、その傷が治ってからね。」

「……なぜ私を助けた？お前は人間だろう。」

「もちろん人間だよ。普通の人間とは違って少々変わってるけど。」

「そんなことは聞いていない。質問に答えろ。」

爪に妖気が込められる。威嚇にしてはやけに妖力が小さすぎる気がしなくはないが…。

「まぁあえて言うなら……なんとなくかな。それ以外には特にないよ、理由は。」

「人間、ふざけるなよ。」

首元に当てられていた爪がわずかに肌を切り、そこから一筋の血が

流れた。

「いい加減に……。」

それを見た小傘が少しキレて妖力を全開にした。それにより、銀狐はわずかに怯む。ここでも違和感を感じた。いくら小傘が本気を出したとしてもまだ下の上クラスだ。それで怯むということはこの銀狐、それより下か。ぱっと見ではそれなりに永くいきていそうなのだが……。

「小傘いいから。……まぁとにかく君に何かしろの事情があるにしてもその怪我が治るまではここにいてもらうよ。」

「ふ、ふん。人間の言うことなど聞くものか！」

「……もう一度言うよ。治るまではここにいなさい。」

5割ほどの出力で霊力を解放した。クラスで言うと……わからない。自分のことには少々疎いのだ。
でも、5割といえど銀狐を遥かに上回るのは確かで解放しただけで震えながら首に当てていた爪を元の大きさに戻して首から離した。

「わかっていただけたようで結構。まぁその傷が治ったらどこに行

ってもいいから、それまでの間ね。それはそうとこんなに寒いからスープを作ったんだけど飲むかい？暖まるよ。」

持っていたお椀にスープを注ぎ手渡す。なされるがままにそのお椀を受け取った銀狐はそれを見つめ、まだ警戒しているようだ。

「毒なんて入ってないから。なんなら僕が飲んでみようか？」

もう1つお椀を出して注ぎ目の前でスープを飲んだ。それを見てから銀狐はもう一度自分の手にあるスープの入ったお椀を見つめ、スンスンと嗅いでからにズズッと少し飲んだ。

「どうだい？率直な感想を聞きたい。」

「……おいしい。」

そう言うとまた口元まで持っていきスープを飲んでいく。どうやら好評なようだ。

「気に入ってもらえたようで良かったよ。僕たちは各地を旅してるわけだけど君の怪我が治るまではしばらくここにいることにするからね。小傘もそれでいいかい？」

「……。」

「わちきはご主人がそれでいいなら全然いいですよ。」

「よし。それじゃあ僕はちょっと眠るね。なんか急に眠くなってきたから。あっ、まだスープ飲みたかったら飲んでいいからね。あと布団は小傘と君が使って。僕はこの毛布があれば平気だから。」

そう言って僕は片足を立てて座り毛布を自分に掛けてから、目をつむった。そして寝てしまうのにそんなに時間もかかることなく僕は眠った。

第27話　銀狐（後書き）

新たなオリキャラです。一応主要キャラにしていくつもりです。

後この銀狐になにかいい名前を思いついた方は教えていただけると幸いです。

それではまた次回～。

第２８話　修行

銀狐を助けてから翌朝。

首をコックリさせながら気持ちよく寝ていた僕は吹雪の音が止んだからか目を覚ました。確かめに行こうかと思ったけど、まだ眠いので却下却下。そしてもう一度目をつむり、眠気に身を任そうとした。

直後、脛の辺りに激痛が走った。当然一気に覚醒。

「～～～～～～～ッ！！」

脛を押さえながら床をゴロゴロ転がりまわる。弁慶だって泣く所だ。

感覚では何かに殴られたような気がする。なんとか痛みをこらえながらも周りを見てみると、原因が判明した。小傘だった。
寝相が悪いせいか手に持った唐傘で（持ったまま寝るのもどうかと思うが）僕の脛を殴ってしまったようだ。

（昔から寝相悪いからな～小傘は…。）

脛を押さえて涙を浮かべ、横たわりながら小傘を見た。
そこでさらに寝ている小傘から唐傘による第二射が放たれた。その軌道はさっきと同じだと思われる脛の高さだった。
ただ残念なことに今の僕は座っておらず横たわっているためその高さにあるのは僕の顔である。つまり、

「～～～～～～～～～～～～～～～ッ！！！！」

見事に顔面にヒット。脛と顔を押さえながらさらにゴロゴロと床をのた打ち回る。

ハァハァと二重の痛みをなんとかこらえながらとりあえず小傘から離れた。次はいくらなんでも無理。そして立ち上がる。小傘はまだ唐傘を振り回している。

（今度から寝る前に唐傘をどこか離れたとこに置いてもらおう。）

起こそうとも思ったがまた殴られるとたまらないので自然に起きるのを待つことにした。そして小傘の近くで寝ているはずの銀狐を離れたとこに移動させてあげようと思って見ると、すでに離れたとこにいた。家の隅のほうに布団を移動させて寝ている。

（これは……まだ警戒しているってことかな？まぁいきなり信用しろなんて無理なのかもしれないけど……。）

「まっ、考え方も心構えも人それぞれだしね。あっ、この子妖怪か。んじゃ久しぶりに軽く修行でもするかな。」

そうつぶやいて家の外に出た。吹雪は完全に止んでおり太陽がサンサンと輝いている。

「さぁ～て始めますか。」

小傘ｓｉｄｅ

「ふぁ～～。よく寝た。」

ん～っと伸びをしてから起き上がった。なんかモグラ叩きみたいな夢を見ていたせいか爽快感がある。しかも妙に実感がある。まぁ考えてめんどくさいからや～めよ。

「ご主人は…いない、と。そとにいるのかな？あの銀狐は…。」

見てみるとすでに起きたのか、布団にはいなかった。扉も開いている。ご主人はいつも戸は閉めるからきっと外に出たんだと思う。

（…もしかして出て行ったのかな？ご主人がせっかく助けたのに機嫌悪かったし、ご主人に一瞬だけど威嚇されてたし…。）

だとしたらまぁ仕方ないとは思う。あの威嚇はあれでもかなりご主人は抑えてたと思うけど、大概の妖怪は一目散で逃げるか、萎縮してその場を動けなくなるものだ。

そんなことを考えつつもご主人がいるであろう外へと出た。

外へ出ると太陽がまぶしいほど輝いていた。昨日の吹雪が嘘であったかのようだ。そして視線を前へ戻すとあの銀狐が人化して少し先に立っていた。人の姿の方がいいのだろうか？

「どっかいっちゃったかと思ったよ。なにしてんの？」

そういうとビクッと肩を震わせ、こちらへ振り返った。声を掛けられると思ってなかったようでわずかだけど驚いたような表情をしていた。

「別に……なにも…。」

「でもわちきには何か見ていたように見えたよ?」

銀狐は少し押し黙りそしてこう尋ねてきた。

「あいつは…なにをしているんだ?」

「あいつ?……あぁご主人のことね。」

「ご主人?」

「そっか、あなたは知らないもんね。わちきは化け妖怪で唐傘お化け。ご主人の傘として一緒に居るんだよ。それでご主人なにかしてるの?」

そういうと銀狐は指を指す。その方向を見てみるとご主人がいた。

そこは平地になっていて地面は雪で覆われていたが除雪したのかそこまで積もってない。そこにご主人は立っているのだがたぶん1メートル四方ぐらいだろうか?それぐらいの大きさの空壁がいくつも周囲に漂っている。

「ご主人また修行してるんだ…。」

「修行?」

「そう修行。たぶんもう少ししたら始まると思うから待つといいと思うよ。」

意外にも銀狐はわちきの言う事を素直に聞きご主人をジッとみつめた。

そして数分後。

銀狐がそわそわしはじめて頃についに修行が再開された。

ご主人の周りに漂っていた空壁がご主人の周りをランダムに動き始めた。その動きは次第に早くなっていきこちらからは視認できなくなってきた。その高速移動していた空壁から弾幕が放たれた。ご主

人はそれを必要最小限の動きで避ける。だが、空壁からの攻撃は泊まらない。

今度は1つだけでなく全ての空壁がランダムに高速移動しながら弾幕をご主人に放った。さっきより動きが少し大きくなったけど全て避けきっていた。さすがわちきのご主人。そして今度は縦横無尽にランダムで高速移動している空壁を自分の弾幕で打ち抜いていった。寸分違わず空壁の真ん中に命中している。

「……あんなのよく避けれるなあいつは。回避の修行か？」

「たぶんそうだと思うけど回避と命中精度の修行だと思う。こんなのご主人ぐらいしかやらないよ。それに最初はうまくいかずに全弾被弾ってことが何回もあったしあの壁に当たりもしなかったんだよ。他にも色々な修行してるよ。」

「……やっぱり強いのか、あいつ？」

「当たり前だよ。あなたに昨夜威嚇したのだって手加減してたんだよ。」

その言葉を受け銀狐は驚愕していた。まぁそれはそうだろう。あれで手加減だとして本気になるとどれほどのものになるのか計り知れない。前の海坊主の件だって本気を出したと後でご主人は言ってたけどたぶん実際にはそうじゃないと思う。無意識的にリミッターを

掛けているんだと思う。

「なっ！？あれで手加減なのか！？……お前のご主人は人間なのに恐ろしいな。」

「恐ろしくはないけど強いよ、ご主人は。」

銀狐はそこから食い入るようにご主人の修行を見ていた。

「ご主人も修行やってることだしわちきも久しぶりにやってみよう。」

「おまえもあんなのやるのか？」

「無理無理。あれはご主人専用だから。わちき用に考えてもらった修行をするんだよ。自分の妖力を全開にしてそれをいつまで持続できるかっていう修行。ご主人いわく、何度もやっていけば持続時間が延びるし、自然と妖力も上がっていくんだって。」

そう説明すると急に眼の色を変えて迫りよってきた。

「その修行私にもやらせてくれ！！」

「えっ、でもあなた怪我人だし傷には響かないと思うけど結構疲れるよ？」

「それでもいい、頼む！！」

なんかよくわからないけど随分と必死な様子だ。

「う～ん、じゃあ少しだけだよ。無理させちゃったらわちきご主人に怒られるし。」

銀狐が頷いたのを見て今回は2人で修行を始めることとなり、家の裏の方へ移動した。

小傘ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「ふぅ～、これぐらいで終了にするかな。」

頭の中で念じると空壁は動きを止め、消えた。相変わらずこの修行は難しい。毎回難易度を少しずつ上げて慣れてしまわないようにしているからだけど。慣れると変な癖がつくからだ。

（あの銀狐の傷が治るまではここにいるつもりだからあと霊力底上げの修行もしないとな。）

「はい、どうぞ。汗がダクダクよ。」

後ろからタオルのようなものが差し出された。そのタオルを受け取り汗をふき取りながら言葉を返した。

「ありがと。で、今日はどうしたんだい、紫？」

「もう、あなたぐらいよ私に気づくのもこの現れ方に驚かないのも。」

タオルを差し出したのはスキマ妖怪こと八雲紫だった。あの目がいっぱいある空間、スキマから上半身だけ出していた。

「気配を消すならもう少しちゃんと妖気隠した方がいいよ。あとはまぁなんとなくわかるんだよね。」

「妖気のほうは改善するとしても私のスキマ、なんとなくでバレタの…。」

少しショックだったようだ。なんか悪いことした気がする。

「ま、まぁ僕の勘だっていつも的中するわけじゃないし、紫もまだまだ強くなるだろうからね。すでに並みの妖怪なら紫には敵わないし。」

そう言うと紫は多少復活したのかブツブツ「そうよね、自信持っていいわよね。」とか言ってる。自分の力を過信しすぎるのもいけないよと言おうと思ったがこれ以上落ち込ませると今日来た理由が聞けなくなりそうなのでやめておくことにした。

「で?ホントに今日はどうしたの?あれから数十日しか経ってないからさすがに『理想』が完成しているとは思えないけど。」

「あっ、忘れるとこだったわ。」

忘れそうだったのかよ。

「あなたの言うとおりまだ何も出来ていないわ。今回は現状報告ってとこかしらね。今は幸生のように賛同してくれるような人間・妖怪とかを片っ端から当たっていってるの。」

「結果は?」

「全然駄目だわ。こんな理想を聞いてくれたのは幸生しかまだいないわ。」

「でもやるんだろう?そんな夢みたいな理想を。だったら頑張るしかないよ。幸い妖怪の君にも半不老不死の僕にも時間ならたっぷりある。あせらずやっていこう。僕のほうも探してみるから。」

「えぇ、ありがとう。そういえば話は変わるけどあなた昨夜狐保護したのね。妖獣の。式にでもするの?」

「あほ。怪我してたから傷が治るまで保護しているだけだよ。」

「あら、それは失礼したわ。お詫び代わりと言ってはなんだけどその狐とあなたの傘、家の裏でなんか微妙に大変なことになってるわよ。」

「えっ？」

「じゃあまたね～幸生。」

最後に無茶苦茶気になる言葉を残してスキマの中に消えていった。
とりあえず急いで家の裏へと向かった。

（大変なことってなんなんだよ、全く。）

やっと家の裏へとたどり着くと倒れた銀狐を抱えた小傘がいた。見たところ傷が開いたとか襲われたと言うわけではないようで目を回して気絶していた。

「小傘、何があったの？」

「す、すいません。ご主人が修行していたのでわちきも久しぶりにご主人が考えた妖力全開にして持続時間と妖力が上がっていくはずの修行をやろうとしたんですけどその修行をどうしてもやりたいっていうから少しだけやらしてあげたんですけど…。」

申し訳ないような顔をして誤ってくる小傘。とりあえず頭を撫でて安心させた。

「でも、その修行なら目を回して気絶するほどきついものじゃないはずなんだけど。」

「そうなんですけど、始まって３０秒ぐらいでいきなりギブアップしたみたいで。」

「それは早いな。起きたらそこらへん聞いてみるしかないかな。小傘、この子家の中に運び込んでおいて。」

「はい。」

――――３０分後。

「ん……。ここは？」

「家の中だよ。きみ途中で気絶しちゃったらしいね。小傘から聞い

たよ。」

顔を赤くさせ、俯く。

「まぁ病み上がりってこともあったのかもしれないけど、大丈夫かい？とりあえず白湯でも飲む？」

コクンと頷くのを見てから、手渡す。それを少しだけ飲んで、また押し黙る。

「小傘が言うにはどうしてもあの修行、妖力の持続時間延長・妖力上昇の修行がしたいって必死に頼んできたって言ってたけどそこまで必死になる理由はなんだい？君がよければ話を聞かせてもらえないかな？」

だが、俯いたまま銀狐は黙っている。小傘と顔を見合わせハァと息をつく。

まぁ、知り合って1日そこらで話してくれと言うのも踏み入りすぎかと思って諦めようと思った。すると俯いたまま小さな声でポツポツと話し始めた。

「……私は、私の一族の中で一番弱い。それも極端に妖力が低かった。それでも生きていけば、年月が経てば上がると思ってた。親も一族のみんなも。だけど１００年、２００年経っても妖力は極わ

ずかで生まれた頃とほとんど変わらなかった。」

ポタッと涙が膝元へ落ちた。よほどつらいのだろう。これまでもこれから話していくことも。

「同じ頃に生まれたみんなは年月が経つごとに妖力が上がっていった。私だけだった。何故かは知らないけど人化だけはできた。でもそれ以外は全く出来なかった。次第に一族のみんなは落ちこぼれと言い避けるようになった。親も私を見るときはいつも失望の色をした目だった。」

言葉を一言言うごとに涙が零れ落ちてゆく。

「そしてついに追い出された。行き先なんて何もなかった。彷徨っているときに低級妖怪に襲われた。対抗しようにも私はそいつらよりも弱かった。狐並みの走力だけはあったから逃げ出せたが傷が深かった。そして、お前に助けられた場所で倒れた。」

話し終えたのかまた銀狐は黙った。

（なるほど…。それで小傘の修行を自分にもさせてくれと言ったのか。）

僕は少し考えてからいま自分の中で考え付いたことを提案してみるため話しかけた。

「君は…強くなりたんだよね。」

「……あぁ。」

「強くなって君はその力でどうするの？復讐でもするのかい？それとも見返したいのかい？」

「…違う。そんなことは望んでいない。私はただ…一族のみんなに……親に見直してもらいたい。認めてもらいたい。そしてその力でみんなの役に立ちたい。ただ…それだけだ。」

それを聞いてこの狐は妖怪にしては心の優しい娘だ。大概の妖怪は自分のその力を私利私欲、若しくは暴力のためにしか使わない。そうじゃない妖怪はいないわけではないがかなり少ないものだ。なのにこの狐は自分を落ちこぼれと言い一族の輪から遠ざけたみんな、失望の眼差しで見た親を恨まずみんなの役に立ちたいと言う。

「そうか。……君に提案がある。僕の下でしばらく修行してみないかい？もちろんこれは君さえよければだけどね。」

するとガバッと顔を上げ信じられないとでも言うかのような顔をした。

「なっ、そ、それは本当か!?」

「妖怪と人間じゃあ少し勝手が違うかも知れないけどこれでもいままで小傘に教えたりしてた身だからね。きっと教えて上げられると思うよ。」

「で、でも本当にいいのか?私は…その……妖怪だぞ。お前を襲うかもしれないんだぞ。」

「まぁ襲われたら襲われたで対処するさ。それに君はそんなことしないと信じるよ。まぁ昨夜はやられたけどこれからはね。で、どうする?決めるのは君だよ。」

「……頼む。いや、お願いします。私を強くさせてください。」

「よし、じゃあ決定だね。にしても急に敬語になったね。」

「私はあなたにこれから教えてもらう身です。だからそれなりの話し方に変えようと思いまして。」

「好きにしていいよ。ところで君の名前はなんだい？いつまでも君じゃあ呼びづらいし…。」

「……私には名前はないです。まだつけてもらえてないです。」

「そうか……。だけど名前がないとこれから色々不便だしなぁ。……よし、じゃあとりあえず仮の名としてコンって呼ぶよ君のこと。いいかな？」

「コン…コン……はいわかりました。じゃあこれからよろしくお願いします…えっと…。」

「そういえば名前教えたなかったね。僕は新幸生。幸生でも幸生さんでも呼び方は何でもいいよ。で、こっちが自己紹介があったかもしれないけど多々良小傘。こんな僕の傘として仲間として一緒に旅してる子だよ。」

「よろしく～。」

「はい。幸生さん、小傘さん、よろしくお願いします。」

「うん、よろしく。早速修行といきたいとこだけど今日は倒れたし、

怪我の治療し始めてまだ1日しか経ってないから明日ぐらいからにしよう。」

「すいません、お手数掛けます。」

「いいよそれぐらい。じゃあ明日から修行ってことにする。小傘にも色々手伝ってもらうよ。二人ともいいかい？」

「「はい！！」」

こうして短い間になるだろうが新しい生活が始まりを告げた。

第２８話　修行（後書き）

とりあえずコンは仮の名です。次までに考えておきます。

次回で。

第２９話　修行？

「よぉ～し、ではこれより修行を始めるよ。」

「「はい！！」」

翌日にコンはやるつもりだったが怪我がある状態でやって悪化したらいけないので完治するまで待った。そして１ヶ月後、予定通り小傘とコン（仮）の修行を始めることとなった。

「じゃあとりあえず今日１日はコンの修行見ることになるから小傘はこの修行をやっておこうか。」

そう言って僕はある程度平地の場所に空壁を何枚か漂わせた。

「ご主人、これは…まさか。」

「小傘がやるのは弾幕避けかな。避けるなり受け流すなり防御するなり自分に当たりさえしなければ何してもいい。でも空壁は壊れないようにしたから壊そうとしても駄目だよ。」

「む、無理ですよ。これっていつもご主人がやってるメニューじゃないですか。」

「大丈夫。一応小傘レベルに下げてるから。（まぁ途中から一気にレベル上がるけど…。）」

「ご、ご主人なんか最後に不穏な言葉を聞いた気がするんですけど…。」

「気のせいだよ。小傘の場合は妖力を上げていくことも重要だけど回避・防御・受け流しを覚えることも重要だ。攻撃は妖力が上がっていけば自然と高くなるし技も考えていけばいい。でも、妖力上げるだけじゃあ技術までは上がらない。だからこそのこの修行だよ。心配しなくてもこの修行、妖力も上がるから。」

「はい……。」

納得したのか空壁が漂っている中心へ入っていった。

「…被弾しても大丈夫ですよね？終了するだけですよね？」

ふと思い出したかのように最後の不安を打ち明ける。

「大丈夫だよ。被弾したら1分ほど気絶する程度の威力だけどね。後、被弾したらまた最初からだからね。」

「えぇーーーー!?今日の修行いつもより厳しいですーー!!」

「そろそろ次の段階にいってもいいしね。それよりもう始まってるよ?」

「えっ?わ、わ!?ちょ、ちょっとご主人―!!」

「じゃあコンと僕は昨日と同じ家の裏の方で修行しようか。」

コンのほうへ向き直ると顔を引きつらせている。

「どしたの?」

「い、いえ。あの…小傘さん大丈夫なんですかあれ。」

「大丈夫だよ。それなりの小傘も強くなってきたしあれくらいなら…。」

「アーーーーッ!!」

ピチューン!

「……。」

「じゃあ行こうか。」

「スルーですか!?」

なんかピチュった音がした気がするけどこれからたぶん何度も聞こえると思うから気にしないことにした。
そして家の裏の方まで着いたところでコンに修行内容を説明した。

「コン、とりあえず君がどれくらいのことが出来るかみせてくれるかい?」

「ほとんどないですよ。この人化と…。」

狐の姿に戻ってまた人獣の姿になった。

「速さです。」

家の周りをかなりの速さで一周した。

「ふむ…。妖力弾作ってみて、こんなふうに。」

そう言って手のひらにひとつ拳大の霊力弾を出した。
頷くと眼をつむって「ん～～～～ッ。」と強く念じた。２０秒ほど経った頃にやっとコンの手のひらに妖力弾が生み出された。だけどかなり小さかった。かなり消耗しているようにも見えた。

「大丈夫かい？」

「だ、大丈夫です。次は？」

あまりにも遅く小さかったからやる気をなくすかと思ったがそんな

ことは全くないようだ。

「次は昨日小傘とやったと思うけど今ある妖力を全開にしてみて。」

コクンと頷くと同時にコンの妖力が少し上がった。が、上昇はそこで止まった。コンの限界のようで汗がかなり出ている。３０秒経ったぐらいでフッと妖力の放出が止まり前に倒れそうになったので受け止めた。

「ハァ…ハァ…すいません。」

「いいよ、無理させてこっちもごめん。でもこれで一応コンの力量が大体わかった。厳しいけど確かに普通の妖怪よりも劣っている。」

真正面から言われてグッと歯をかみ締めたがそれ以上は何もせず黙って僕の話の続きを待った。

「まず妖力全開についてだけど放出の仕方が悪いかな。何も考えずに外へ出したらどんどん漏れていくばかりで自分自身に反映されない。ただ放出するんじゃなくて自分の中の妖力を凝縮して身に纏うイメージをするそして一気に……外へと放出する！！」

ドンッ！！と言う音とともに僕の体から霊力が立ち昇ったかと思う

と次の瞬間自身の体へと纏われた。ゆらゆらと白色の霊気が僕の全身から凝縮された状態で出てきた。

「これが僕が知っている中での一番効率がいい放出の仕方だよ。まぁ他の方法もあるかもしれないし、さっきのコンみたいに放出しても一応問題はないんだけどね。」

「はぁ～～～～、す、すごいです。でも私にこんなこと出来ますか？」

「大丈夫、これはちゃんと練習さえすればできるし、そのために僕がいる。それにコンなら出来ると思うよ。」

「はい！」

「次に妖力弾について。これはまぁ何度もやってみるしかないね。出す感覚としてはやっぱり最初は頭の中で強くイメージすることが大事だと思う。そうすれば時間をかけずにすぐに出せると思うし強くイメージしなくても意思１つで簡単にいくつも出せるよ。大きさもね。」

ブンブンと力強く縦に首を振る。

「じゃあ修行を始めるとしよう。でも今日は最初に説明した2つの方法はやらないよ。この2つは明日からは今からやることをやる前のメニューとするよ。」

「はい。じゃあ今からやるのは？」

「ん？これだよ。」

手をかざしてコンの周囲に空壁を2枚出した。

「幸生さん、まさかこれ？」

「そうだよ、レベルは一番低くしてあるから大丈夫だよ。これも妖力上げていける修行でもあるから頑張って。とりあえず時間制限なし、限界まで続行。被弾したらたぶん気絶するからそしたらほんの少し休憩してからまた再開。」

「幸生さん！？いきなりハードすぎｒ」

「それではスタート。」

開始の合図と同時に2枚の空壁が光って弾幕をコンに向けて放った。

まぁ弾幕と言っても一番低いレベルなので1個ずつ吐き出してるだけだけど。そのかわり速度だけは少し速め。なのでコンは慌てながら避けていく。

「慌てずにどの方向、どれだけの速度かを見極めて必要最小限の動きだけで避けて。」

「は、はい！！」

時間が経ってその日の夕方。

「はい、今日は終了。」

手をパンと叩くと空壁が消え弾幕も消えた。コンはというと息も荒く汗もだくだく、かなりの疲労が見えたがちゃんとやりきった。コンの今の実力でここまで出来ればこれからもなんとかなるだろう。

「じゃあコンは先に戻って風呂にでも入ってくるといいよ。僕は小傘を回収してくるから。」

「はい、すいません、じゃあお先に…。」

フラフラと家のほうに向かったの見てから小傘のとこにいった。倒れてるかなと思ったが意外にも立っていた。かなり疲れは見えたがそれほどでもないようだ。

「ご、ご主人～。なんとかできました～。」

「よくできました。明日からも頑張りな。」

「あ、あしたもですか！？」

「もちろんっていうか明日だけじゃなくてこれからもだよ。何度もやることに意味があるからね。」

「とほほ……。」

「まぁお疲れ様。小傘もコンと風呂入っておいで。コンは先に行ってるから。」

「はぁ～い。」

コンよりはしっかりとした足取りで小傘は家へと向かった。

小傘もだいぶ強くなったと思う。唐傘お化けが強くなる必要があるのかと思ったこともあったけど、本人たっての希望だったから昔からやっていたがやればできるものだ。

長年連れ添った自分の傘の成長を感じながら僕も家へ戻った。

「「ごちそうさまでした。」」

「お粗末様。」

風呂に入り、夕食も食べ終わりくつろいでいた。食器を片付けてから戻ると目の前の光景に若干違和感を覚えた。目の前にいるのはもちろん小傘とコンだ。なんかさっきと違う気がする。特にコンから違和感を感じる。すぐ近くまで近寄ってジーッと見てみた。

「何か私の顔についてますか？」

コンの言葉にも耳を傾けずそのままジーッと見続けた。そして、確信は持てないが気になることを発見した。

「……ねぇコン、君なんかさっきより小さくなってない？それに初めて会ったときよりも妖力が間違いなく上がってるんだけど。小傘はどう思う？」

「う～ん、言われてみればそんな気もしますけど…。」

そう、よくわからないがコンが小さくというか、前より少し見た目が幼くなっているように見える。しかも妖力が上がってる。いくら修行を始めたからといって1日で上がることはまずない。

「えっ、ホントですか？」

「……。コン、今すぐにその術を人化できる必要最低限のレベルまで下げて。」

「えっ、はい。」

そう言ってコンは目をつむると徐々にコンの姿が小さくそして幼くなっていった。それが止まるころにはコンの姿は小傘と同じくらいの１２、３歳ぐらいの見た目になったそしてそれ以外にも変化があった。

「わ、わ。小さくなりましたよ、私。」

「それだけじゃないよ、じぶんの妖力確かめてみて。さっきよりも遥かに上がってるから。」

「えっ、……ホントです、上がってます！！なんでですか？」

小傘までとはいかずとも下の下から下の上くらいまで上がってる。

「さっきまでの僕と同じくらいの見た目の姿って最初っからあの姿

だったの？」

「はい、大人たちの姿を見ててあんな姿になれたらと思って人化したらなりました。こんな姿になったのは初めてです。」

「そっか、たぶんコンはわざわざかなりの妖力使ってあの姿になったんだと思う。無意識でね。そのせいで成長しても妖力は人化のほうへと消費されて上がらなかったんだと思うよ。君と同じくらいに生まれた狐たちも今の君のような姿だったんじゃないかな？」

「……そういえばそうです。ということはこれが私の本当の実力ってことですか！？」

「まぁそうなるね。人化の術も普通ほとんど自分の力を使わなくても出来るらしいからそのままでいればこれで今日いったようなことはかなりやりやすくなると思うよ。ボソッ（予定変更してもう少し修行
難しくしよう。）」

「今最後不穏な言葉が聞こえた気がするんですけど！？」

「気のせいだよ。じゃあ小傘もコンも寝る。明日からは本番だからね～。２人とも覚悟するように
～。」

「気のせいじゃなかったー！」

「わちきもー！？」

「おやすみー。」

二人の教え子達から切実な声が聞こえたが無視してさっさと寝ることにした。明日はさらに新しいやつ追加してみようかなと思案しつつもその日は眠った。

次の日からの修行はかなりきつくしたので、毎回終わるごとに疲れ果ててばてるから僕が家まで運ぶということがしばらく続いたが、それでも2人は辛うじて食らいついて修行についてきた。なんだかんだいってもやればできるのだ。やる気があるからこそだと思う。

僕もそれに応えるように手は抜かなかったし、2人が寝静まってから自分の修行も欠かさず行った。修行ばかりでなく、丸々1日休みの日を作ってくつろいだりする時を何度も作った。

そんな日々がしばらく続いたのだった。

第２９話　修行？（後書き）

今回は修行のみでいきました

次で銀狐編を終了させますので、今度こそコンの名前を出します、すんません。

ではまた次回～

第３０話　雪上の戦い、そして新たな時

本格的に修行を始めてはやくも５０年後が経った。

コンは本来の妖力を取り戻したおかげで弾幕作りや全妖力を効率よく解放する方法も比較的早く覚えた。それからは妖気を纏わせる応用とか妖獣の狐なら誰でも使う狐火をうまくコントロール・応用をしていた。たまに一緒に修行している小傘と模擬戦をやらせたりした。コンはかなり苦労もしたが１つずつゆっくりと着実に覚え、強くなっていった。

「はい、そこまで。」

「「はぁ、はぁ。終わった～。」」

「２人ともお疲れ様。随分と強くなったね、妖力も技術も。特にコン、尾も3尾になってよかったね。」

「はい、ありがとうございます！！！」

「ご主人～、わちきのことも褒めてくださいよ。」

「もちろん小傘も前より強くなってるよ。」

そう言ってから2人の頭を撫でる。小傘もコンも嬉しそうな顔をしている。

「じゃあ家に戻ろうか。先に行って風呂にでも入っておいで。」

「「はい。」」

2人が家に向かうのを見ながらあることを考えていた。

(もうそろそろかな。さみしくはなるが……。)

その日の夕食時。

「えっ、修行はもう終わりってどういうことですか!?」

いつもの修行を終えたコンに僕は突然だったかもしれないが修行の

終わりを告げた。

だけど、今のコンはすでにそこらの下級妖怪にはまず負けることはないぐらい強くなった。戦いようによっては中級妖怪とも戦えるほどになった。元々、妖力は普通の量があったからか尾も3本になっていた。それにコンは努力家だったからどんなに厳しくしてもめげずにひたすら頑張っていた。

まだまだ教えることは色々とあったがもうここを出て一族の下へ戻っても問題ないと思った。きっとコンを認めるだろう。あとは仲間の下でいくらでも強くなれる。

「そのままの意味だよ。今日でコンの修行は終わり。そこまで強くなれば誰も文句はいあわないと思うよ。昔のコンを知っている者が見れば間違いなくね。よくここまで頑張った。」

頭を撫でてやるとコンの目から涙が出てきた。そして頭を下げた。

「ぐすっ……ひっく……今まで…本当にありがとうございました。」

「ほら泣かない。小傘も何か言ってあげたら?」

「……コンちゃん。……元気でね。…ぐすん。」

「うん、小傘ちゃんもね。」

涙を流しながら2人は抱きしめあった。この５０年間で2人はいつも一緒に修行した。友達にもなっていた。そうなるとさびしくなってしまうのだから仕方ないとも思った。

それから数十分経ってからコンは銀狐の姿に戻り、玄関口まで行った。そこまで行って、こちらを振り返った。

「本当にありがとうございました、幸生さん。いつかまた会う日があれば必ず恩をかえさせてもらいます。」

「その気持ちだけで僕は十分だよ。さぁいきな。５０年も留守にしたんだ。早く帰って安心させてあげなよ。」

「…はい、それでは。」

最後に頭を深く下げてからコンは走り去っていた。その姿はすぐに周りの雪景色に紛れ見えなくなった。

「行ったか……。ここも少し寂しくなるな……。」

「ぐすん…。あれご主人もしかして泣いてます?」

「ば、ばか。泣いてないよ僕は。これは、その、あれだ、えっと、雪が顔に当たって解けたんだよ。ほら中に戻った戻った。今日はコンがうまくいくことを祈って温まるおいしい物でも作ろうかな?」

「いいですねそれ。あっ、でもどうせならコンちゃんが行く前にすればよかったですね。」

「す、過ぎたことを行っても仕方ない。それとも食べるのやめるかい?」

「食べます!!」

「じゃあそこで座っててね、もう少ししたら作るから。」

コンｓｉｄｅ

もう５０年も一族のみんなのところに帰ってないから道がわからないかと思ったけど私の記憶どおり昔のままだった。みんなの顔が見たくてたまらなくなりさらに駆ける速度を上げた。そして駆けながら幸生さんのことを考えた。

初めて会った時は変な人間だと思った。妖怪の私を助けるし。でも、自分の身の上を聞いてもらって修行をつけてくれると言ってもらえた時は本当にうれしかった。修行が出来ることもうれしかったけど、私の話を信じてくれ、真摯に話を受け止めてくれた。それが何より嬉しかった。修行は今まで厳しかったけどその中にも優しさはあり、とても暖かい日々を送れたと思う。

そんなことを考えながら走っていると、前方に何かの集団が見えた。私はすぐに何の集団かに気づき駆け寄った。一族のみんなだ。そこで人化した。

「みんな！！ただいま！！」

「ん？……あぁだいぶ前に出て行ったやつか。今頃戻ってきてどうした？」

冷たい反応に少し傷ついたがそれを顔に出さなかった。

「いえ……昔の私は本当に弱かったので強くなるまではと思っていたのです。」

「……待っていろ、長老を呼んでくる。」

そう言って私が話しかけた男は集団の奥へと消えた。そして数分後、長老が出てきた。

「ふむ、久しいのぅ。５０年ぶりぐらいか？ふむふむ……確かにこれなら今からの作戦に参加させれるのぅ。」

「あの…長老。その作戦とは何のことですか？」

「うむ。実はの、わしらは今からある人間と妖怪を殺しに行くとこだったのじゃよ。そやつらはちょうどお主がおらぬなった頃ぐらいに海坊主を退治したようでの。おそろしく強いようでのぅ。だから

戦力を集めておったのだ。じゃからお主も参加しろ。」

「…はい、わかりました。この力お役に立つのであれば…。その者達の人相は、どういったものでしょうか?」

「妖怪の方は水色の髪だったかの。今のお主の人化の状態と同じくらい少女で、妙な唐傘を持っている。そして人間のほうは、２０歳前後で灰色の長髪に赤黒い眼というのが特徴らしいの。それでの作戦内容じゃが…」

私の中で時間が凍結してしまったのを感じた。長老の声が遠くから聞こえるかのように小さくなっていくのを感じた。その特徴にピッタリ合う人物たちを知っている。それどころか感謝してもしきれないくらいの人たち。その２人をみんなは殺しに行くと言う。それに私も参加しろと。

（私は幸生さんに強くしてもらったこの力でみんなの役に立ちたい。でも、みんなの役に立とうとすると幸生さんと小傘ちゃんが殺されてしまう。）

「……という作戦じゃ。理解したならばお前もはｙ「…できません。」…なんじゃともう１回言ってみよ。」

「その作戦に参加することは出来ません。この５０年間、私をここ

まで心身共に強くしてくださった幸生さんと一緒に修行してきて友達になった小傘ちゃんを裏切り、ましてや殺すなんて恩を仇で返すようなことはできません。」

「そんなばかげたことを言わんと。それよりもお主知り合いだったか。なら好都合じゃ、今からもう一度戻って笑顔でも浮かべながら隙を突いて殺せ。お主にピッタリｎ『ザシュ！！』うがぁぁぁ！？」

気づいた時には私は長老を妖気を纏わせ伸ばした爪で切り裂いていた。

「ぐぉぉぉ！？お、お主いま自分がやったことをわかっとるのかぁ！！！」

「えぇ、長老。しっかりと理解していますよ。恩人を守るためにみんなここで食い止めるってことです。」

「ばかめ、人間に飼いならされてしまった一族の恥さらしめ！！これだけの数を貴様１人で食い止めれるわけがないだろう。」

「数だけが勝利を決めるんじゃない。それに私は勝たなくていい。動けないようにするだけだ！！」

３本へと増えた自分の尾を逆立てて尾の先に青白い火、狐火を灯した。そして私にある全妖力を解放し、凝縮させてから全身に纏った。紫色の妖気がゆらゆらと纏うようにして動いている。そして両手の爪も長く鋭く伸ばして、爪と脚に重点的に妖力を込めた。

「皆の者！！まずは一族の恥さらしにして、裏切り者殺せ！！！」

倒れたままの長老が合図するのと同時に私に向かってきた。数はおおよそ３００弱。正直な話、多すぎる。でも、やらせるわけにはいかない。

灯した３つの狐火をさらに肥大化させ集団へと放った。
それを見て大人たちはタイミングを合わせて避けようとした。が、急に３つの狐火の速度が上がり避ける前に着弾した。命中したのを確認すると私は一気に駆け出した。私が自分達のところに来るのを怯みながらも大人たちは確認されたがその顔にはまだ余裕がある。きっと距離があるからそれまでに体勢を整えられるとでも思っているんだろう。

それも構わず私は駆ける速度を急激に上げた。そして一瞬で近づいた私はそのまま小柄な姿を生かして縦横無尽に駆け回りながらも足の腱を切り裂いて動けないようにしてからさらに意識も断っていった。

何が起きたかわからずに次々と倒れていった。浅くハァハァと息を

吐きながらも自分の能力を扱えていたのでホッとした。そう私の能力。

『速度を操る程度の能力』

修行を重ねた結果目覚めた私の能力だ。幸生さん曰く色々な事柄に対して使えるらしい。まだ今の私では自分に対してしか使えないけどそれだけでもかなり使える。

一度密集地帯から脱して広いところで私が止まったのを見ると、一斉に大量の狐火が放たれたが、走る速度と回避速度を上げてそれを避けた。だけど今私が上げられる速度の限界では避けきることができず、何発か浅かったが当たってしまい当たった箇所から煙が上がっている。

皮膚が焼ける痛みをこらえながら私は弾幕を展開し弾幕の速度を操って緩急つけながら放った。かなりの人数に命中したが避けきったものやこらえきった者達が一気に近づいてきて鋭利に尖った爪で幾たびも襲い掛かってきた。回避速度を上げたり自身の爪で防御し受け流したりもしたが数が多すぎて受けきれず、次第に私の体に火傷と切り裂かれた痕が増えていった。

「ハァ…ハァ…。」

「一気にいけるぞ、かかれー！！」

私の周囲を大勢が取り囲んで飛び掛ってきた。

「ハァ…ハァ……、まだ…まだー！！！」

尾の先に再び狐火を灯し、それを今出来る限界まで大きくさせた。そしてしゃがみこみ尾を上へ向けてから限界まで大きくさせた３つの狐火を同時に弾けさせた。それはまるで花火のように周囲へとばら撒かれ飛び掛り空中にいた者たちは全員まともに食らって地に伏した。

（幸生さんは確か夜明けが来たら出発しようかと言ってた。夜明けまでにはあと……どれぐらいなんだろう。ははは……私それまで持つかな。……いや、持たせて見せる。幸いみんなは幸生さんの現在位置を知らない。それならあるいは…。）

そう考えていた所でその考えは打ち砕かれた。

「隊長！！ここにこいつがここに来るまでの足跡があります！！」

「でかした！！雪も降ってないないから目標までしっかりと続いているはずだ。先に行け！！」

「はい、了解しまｓ「行かせない！！」ぐわぁぁぁ！」

私の足跡を見つけて辿ろうとしていた同族を移動速度を上げてなんとか回りこみ腱を切り裂いた。そしてそこに私は立ちふさがった。

（行かせない、絶対にここだけは行かせない。私の命を賭けても！！！）

「何をしている、相手は小娘一匹。あれを殺せば目標まで一気に行けるんだ。一斉にかかれーーー！！！」

「オオオオオオーーーーッ！！！」

「ここだけは行かせるわけには行かないんです！！！」

そして私達は再び衝突した。

「ガハッ！！……ハァ…ハァ…ハァ。」

（もうどれぐらいの時間が経ったんだろう。）

やっぱり多勢に無勢で体中に決して浅くはない切り傷が出来ていた。所々黒くなっている所もある。自慢の尾もボサボサのボロボロになっている。妖怪としての治癒速度も上げているがそれも現状では雀の涙ほどもない。あまりにも消耗しきっていたからだ。今でさえすでに限界寸前だ。

対する一族は、私の攻撃によって無傷でいる者はほとんどいなかったが、あまり減っていないように見えた。きっと半分も減ってない、約２００弱といったとことか。元々私は3尾。あっちはそれ以上の強者が何百人といるだろう。ここまで持ちこたえれているのが自分でも不思議なぐらいだ。

（フフフ……。これも…幸生さんの……おかげかな。）

本当に限界、いやもしかしたらすでに限界を超えているのかもしれない。でも、私を田一説にしてくれたあの人たちだけは絶対に傷つけさせない。そう再度心の中で念じて、次の攻撃を待った。

（……？攻撃が…止んだ？）

が、急にあちらからの攻撃が止まった。弾幕も狐火も直接攻撃も全て止んでいた。だけど、今この段階で攻撃をストップさせる理由が見つからない。私をさっさと倒して足跡を辿って行くはずなのだからここでストップするのは私が得するだけの状況のはずだ。そう考えていると長老が前に出てきた。最初に切り裂いた傷が浅かったせいか多少顔を青くさせているだけのようだ。

「いや～お主はよくやった。お主1人に対してこの人数、よくここまで持ちこたえたものだ。本当に強くなった。じゃからもうええぞ。」

「…何を言われようと行かせはしません。」

「じゃからもうええと言っておる。……目的地には到着したようじゃからのぅ。」

「えっ！？」

急いで後ろを振り返ると何百メートルか先に一軒の家があった。そう、５０年間過ごしてきたあの家が。
あまりのことに言葉が出せずにいると残酷な説明をしてきた。

「お主は自分の足跡が見つかってからずっとそれを守るように前へ立ち塞がっておった。おぬしはあの家がある方向を背にしておったということじゃ。じゃからお主に気づかれぬように少しずつ後ろへと追いやっていたのじゃ。気づかんかったじゃろう？」

「あ…あ…あ…。」

「こっちも苦労したんじゃぞ。途中から雪が降ってきたから足跡が消えてしまう。じゃから唯一あの家の道を知っておるお主を死なせるわけにはいかない。死なせずに気づかれずに案内させるのは骨じゃったわい。それじゃあ……全員あの家を囲め！！」

茫然自失になっている私の横を残っていた全員が通り過ぎていった。そして、全員通って行ったところでやっと我に返った私は急いで幸生さんに伝えようとした。しかし、それは阻止された。長老が後ろからレーザー状の妖力弾を私に放って腹部を貫いたのだ。

「ガハァッ！？」

「お主はそこで黙ってみておれ。家ごと一瞬で焼かれ消えていく様を。」

長老の言葉を無視して立ち上がろうとしたができなかった。そして気づいた。自分の体がダメージの限界をついに達したということに。

そうこうしているうちに家は完全に包囲され全員が狐火を自分達の尾に灯して妖力をこめていった。そしてそのうちの1人が準備が出来たことを合図した。

「やめ、やめ…て。あの人たちを…殺さないで。」

涙を溢れさせながら長老に懇願した。でもそれは無駄だった。

「安心せい、お主もあやつらと同じ所へじき送ってやるわい。……やれ!!!」

「やめてーーーー!!!」

私の悲痛な声は届かず幸生さんたちがいるであろう家に一斉に全ての狐火が放たれた。壁や屋根などを突き抜けて一瞬で家が火達磨になったかと思うと次の瞬間には灰となって消え去っていた。呆然としていると後ろから長老に思いっきり家があったところまで投げら

れた。投げられても受身を取ることは出来ず地面に達してから石ころのように転がりちょうど家の真ん中だった所で止まった。

「ううっ……！？」

地面につけていた顔を上げ、前を見るとそこには今日私が出て行く前まで着ていた服の袖であると思われる切れ端が見えた。直後、視界が溢れる涙でぼやけた。泣いたってどうしようもないのに涙が後からどんどんあふれてくる。

「幸生さん…幸生さぁん！！」

その切れ端を握り締めながらあの人の名を呼んだ。でも、その返事を返してくれる人はもうここにはいない。あの優しく、強く、そして尊敬できる人はもうこの世に存在しないのだ。

「さて、そろそろお主にも死んでもらおうかのう。３尾の狐ごときがよくも少しではあるが被害を与えおって。あの世であの人間たちと仲良くやっとれ。……やれい。」

その合図に隊長格の者が目の前に進み出て私の首を持って持ち上げた。そして空いたほうの手の爪を伸ばし妖気を込め始めた。

（幸生さん……小傘ちゃん……。私もいまそっちへ逝きます…。）

そしてついに妖気が込め終わり私を真っ二つに切り裂かんと振り下ろされた。それに対し私は静かに目を閉じ、間もなく訪れる死を待った。が、

ガキンッ！！

それは訪れなかった。音も肉が切り裂かれる音ではなく何か堅い物が爪を防いだような音がした。恐る恐る眼を開けるとそこには、死んだはずの小傘ちゃんが割り込んで唐傘で攻撃を防いでいる姿が見えた。

「なっ！？貴様その傘にその容姿、死んだはずだ！！」

「残念ですけどわちきはピンピンしてますけど、なにか？」

「くっ、傘ごときに俺の攻撃が防がれるはずがっ！？」

「わちきの唐傘をそこらの傘と一緒にしないでください。それじゃさよ～なら～！！！」

「うぼぉ！？」

私を掴んでいる手を叩き落として怯んだ所を小傘ちゃんは大きくためて唐傘で腹を思いっきり殴りものすごい勢いで後ろに控えていた集団へとその隊長格は吹っ飛ばされていった。

「ふぅ、コンちゃん大丈夫？ギリギリ間に合ったみたいで良かった。」

「えっ、な、なんで。し、しんだかと……。」

「まぁわちきも最初は何がなんだかわからなかったけどね。家の中にいたと思ってたらいつの間にか家の真上のとこにいたから。しかも今度は家が燃えるし、一瞬で消えちゃうし。でもその後コンちゃんが飛ばされてきて殺されそうになってたから、今に至るんだけど。」

「じゃ、…じゃあ幸生さんも？」

「もちろん。じゃなかったらわちきも死んじゃってたと思う。ご主人がいち早く気づいて転移牢（ワープキューブ）で移動したみたい。」

小傘ちゃんは置いていた唐傘を再び手に持って立ち上がった。

「じゃあコンちゃんはここにいてね。わちきはご主人を手伝いに行ってくる。」

「だ、だめだよ。いくら2人でも……逃げて！じゃないと…。」

再度確認するために取り囲んでいはずのみんなを見ようとした。すると驚くことにみんな倒れていた。全員がうめき声をあげたりピクピク動いているのを見るとどうやら死んではいないらしい。その光景を小傘ちゃんもみると頭をかいて苦笑いしていた。

「あ～、わちきが手伝う必要もなかったか。まっ、ご主人なら当然か。首謀者も捕まえたみたいだし。」

小傘ちゃんが見ているほうを見るとそこには尻もちついて座ってる長老を見下ろして立っている幸生さんがいた。

「ば、ばけものめ。」

「どっちがばけものだか。僕は人間だよ。コンをあんなめに遭わせたのは万死に値するけど見る限り身内みたいだからね。すぐにここから全員立ち去るんだったら殺すのだけはやめたげるよ。ただし……。」

幸生さんの霊力が急速に上がり軽く大気が振動している。ゆらゆらと体から霊気が漏れ出ている。

「また僕達を襲うまたはコンを襲うようなことがあったら次は…ない。」

「ひいいいいいいいい！！！」

長老は狐の姿に戻り一目散に逃げていった。他のみんなも後を追うように次々となんとか起き上がり逃げていった。
すると危険が去ったのを確認したためか急に視界が明滅し始めた。
そしてそのまま私は意識を失った。

ｃｏｎｓｉｄｅｅｎｄ

狐達が逃げていったのを確認したからコンのとこに戻ろうとした時にコンが意識を失った時はどうなることかと思った。幸いコンは妖怪だからかけっこう丈夫でしかも無意識下で治癒速度を上げていたようでかなりの重症ではあったが自前の包帯と治療薬で助かった。

「コンちゃん大丈夫ですか？」

「あぁもう大丈夫だと思うよ。じき目を覚ますんじゃないかな。」

「良かった。にしてもご主人って治療関係に詳しいですよね昔から。」

「……遠い昔に薬とかそういうのに誰よりも詳しい人が近くにいたからね。「……ここは？」ん、起きたみたいだ。」

コンは目を覚ましたのか痛がりながらも起き上がった。

「コン、寝てなって。助かったとは言っても重症なんだよ。」

「いえ、大丈夫です。……今回は本当にすみませんでした。まさかみんなが幸生さんたちを殺そうと計画してるなんて。しかも最後は家まで……ってあれ？家無くなったはずじゃ。」

「また空き家になってたのをもらったんだよ。それはともかくコンが謝る必要はないよ。むしろ僕達が謝らないといけないくらいだ。僕達のためにそんな体になるまで食い止めようとしていたなんて。」

頭を床につけて土下座するとコンは慌てるようにして言った。

「そ、そんな顔を上げてください。私の好きでやったことなんですから。」

「そうかい？そう言ってくれると僕もありがたいよ。さてとそれじゃあ本題に入ろうか。コン、これから君はどうする？こんなことになった今一族の下へ戻るという選択肢はまずなくなったとみて間違いないと思う。」

コンがとった行動はとても勇気ある行動ではあったが一族からしてみれば明確な反逆行為だ。戻ることは出来ないだろう。

「はい……。」

「僕としてはコンさえよければこれからは一緒に旅をしようと思うんだけどどうだい？」

「い、いいんですか、本当に？」

「こんな状況にしたのは僕のせいでもあるしそれにコンならいつでも大歓迎だよ。ね。、小傘。」

「はい、ご主人！」

「ありがとうございます！！あの、でしたら1つお願いしてもいいですか？」

「ん？」

「私を……幸生さんの式にしてください！！！」

「えっ！？コン、君を僕の式神にかい？」

「はい！！」

「コン、言ってる意味分かるかい？僕の式になるということは僕の命令には従わないといけないから今までのような自由が束縛されることが多くなるってことなんだよ。他にもいろいろ制約がつくと思うし。それでも君は僕の式になりたいかい？」

「…本当は少し前から思っていたことなんです。戻らないといけなかったから一時は諦めてましたけど。優しくて、強くて、賢くて、何でも出来て、そして何より心から尊敬できたんです。できることならこの人を支えたいと。だからお願いします！！」

コンがどれほどそれを願っているのかが雰囲気から、表情から、言葉から感じ取れた。それを受けた僕はしばらく沈黙した。そして答えた。

「……わかった。僕はコンが言うほどだいそれたもんじゃないけど僕は君を僕の式にするよ。僕にはもったいないくらいだけどね。それに最初に忠告したほど僕は束縛するつもりはないからね。意思も尊重する。」

「あ、ありがとうございます！！」

「良かったね、コンちゃん。」

「うん。」

「それじゃあ契約の儀式をしようと思うけど今日は疲れてるだろうし明日にするかい？」

「いえ、私なら大丈夫です。出来れば今すぐにでも。」

「わかった。じゃあ儀式を始める前に君に新しいちゃんとした名前を与えよう。」

「名前ですか？」

「そうだよ。今までのは呼ぶ名がないからとりあえずってことだったからね。ちょっと待ってよ。……よし決めた。今日からは君は雪花（せつか）だ。」

「雪花……。私の名前……。ありがとうございます！！こんなにいい名前もらって嬉しいです。」

「気に入ってくれてよかったよ。僕の苗字である新は雪花が一人前になったら新の名前をあげるよ。じゃあ始めるよ。きついかもしれないけどそこに正座して。」

コン改め雪花はすぐに正座して待った。それを確認してから僕と雪花を囲むようして空壁牢を出し、その空間を契約の儀式と化した。

「汝、銀狐の妖獣である雪花よ。汝は我、新幸生を主とし、主の命をいかなる時でも従い支えることを誓うか？誓うのならばこの光を受け入れるがいい。」

言い終えると僕は直径１５センチぐらいの光り輝く球体を出した。

「はい。私雪花は新幸生を主とし、いかなる命にも従い支えることを誓います。」

すると光は雪花の体へと吸い込まれていきそれがなくなると一瞬雪花が光った。契約が成功したようなので空壁牢を消してそのことを伝えた。

「これで僕と雪花は主と式の関係になった。お疲れ様、雪花。」

「はい、これからもよろしくお願いします。幸生様。」

「今までどおりでいいよ。」

「いえ、幸生様は私の主なんですからこれだけは譲れません。」

「はぁ……じゃあそれでいいよ。」

「じゃあわちきのことは呼び捨てにしてこれからは。お願い！！」

「うん、よろしくね小傘。」

「よろしくね、雪花。」

「じゃあ一段落したところで今日は雪花歓迎の料理を振舞うことにしよう。」

「ありがとうございます、幸生様。」

「わぁ～い。」

その日は新しい家族が出来たことで今まで一番楽しいひと時に感じたのであった。

第３０話　雪上の戦い、そして新たな時（後書き）

コン改め雪花が式になりました。
そのうちまた一人増えるかもしれません、式が。まぁ当分ないと思いますけど。

次はいよいよ平安時代です。東方キャラもけっこう出てくると思いますのでよろしくです。
それではまた次回～

「……というわけなんだよ。」

「へぇ～それであの子があなたの式になったのね。」

今僕たちは都のすぐ近くにある山中にいて、紫と話している。いつものように状況報告をしにきてくれた紫に雪花という式が出来たことを伝えていたところだった。

「幸生様、この方は？」

「雪花は会うのは初めてだったね。妖怪と人間の共存できる世界を作るっていう理想を掲げてるスキマ妖怪の八雲紫。僕の友人でその理想に協力させてもらってるんだ。」

「そうですか、幸生様のご友人でしたか。幸生様の式をさせていただいています雪花です。迷惑をお掛けすることもあるかもしれませんが今後ともよろしくお願いいたします。」

「ご丁寧にどうも。私は幸生の言っていた通りスキマ妖怪の八雲紫よ。私はあなたを何度か見ていたけどね。あなたの毛並みはホントにきれいね。雪のような白銀の輝きがみえるわ。それにしても雪花はとても礼儀正しいわね。」

「そりゃ、都に来るまでの間は修行だけじゃなくて礼儀作法や家事についても教えたからね。一通りはできるはずだよ。雪花はそこらへんも覚えが早くて僕には本当にもったいないくらいの自慢の式だよ。」

そう言って雪花の頭を撫でると嬉しそうな顔をする。撫でていて気づいたが少し背が伸びたのではないだろうか。体の大きさは精神面に影響されることがかなりを占めているらしい。僕の式になったことでそっちが成長したのかな?

「いいわね~、私が欲しいくr「駄目だよ。」わかってるわよそれぐらい。私も式いつか手に入れよう。式になったばかりの雪花がここまでできているんだから小傘もすごいんでしょうね?」

紫の言葉に僕と雪花はおもわず視線を逸らしてしまった。

「どうしたのかしら?」

「いや、そのことはあまり小傘の前では触れないでくれるかい?」

「？でもさっきまでの会話聞こえてたみたいよ。よくわからないけどあそこで座ってるわよ。」

指差された方を見るとそこには会話の一部始終を聞いて最近の自分を思い出し、深く沈んで体育座りをしている小傘がいた。

「はぁ……。雪花頼む。」

「はい。」

タタタタッと小傘のほうへ行き慰めに行った雪花を見て紫は今度は小傘に聞こえないぐらいの声の大きさで再度聞いてきた。

「どうしたの？」

「えっと、まぁ雪花に礼儀作法や家事全般について色々教えた時に小傘にも教えたんだけどこれがなんというか見事に出来なくてね。むしろ状況悪化することが多くてその話題になるとああなるんだよ。」

「なるほどね。雪花はすぐできたのに自分はできないというのが悲

しかったのかしらね。」

「まぁ妖怪にも向き不向きはあるだろうから仕方ないと思うんだけどね。まぁ小傘は雪花がなんとかしてくれるからいいとして。どうだい、順調かい？」

「そのことなんだけど一つ幸生に言わなきゃいけない事があるんだけど。」

「なんだい？」

「幸生が住んでいた妖怪の山なんだけど理想郷創れそうなところに山丸ごと一つ移動させたから。」

「……はい？いまなんと？」

「だから妖怪の山を境界で移動させたのよ。」

「それはまた随分とすごい荒業使ったね。よくできたもんだ。僕はいいんだけど萃香たち鬼に許可は取ったかい？あと天狗にも。特に天狗は縄張り意識高いから君が行った時迎撃されたと思うんだけど。」

「えぇされたわ。戦うの面倒だったからスキマで直接鬼の所に行ったけどね。」

「相変わらずその能力ってずるいよね。」

「あなたにだけは言われたくないわ。そこで私の理想、そしてその考えにあなたが協力していることを伝えたうえでそこにこの山丸ごとその場所へと移動させてはもらえないかって頼んだのよ。」

「で、結果は?萃香や勇儀たちのことだから君と戦ったんだろうけど。」

「そうなのよ。『あたしに勝てば別にいいよ、幸生も賛成しているみたいだし。』って言われて理想郷のためにやったけどあなたあれによく勝てたわね。」

「ギリギリだったけどね。でも紫も勝ったんでしょ?」

「こっちもギリギリだったわ。勇儀って鬼とも戦ってたら死んでたわ。天狗の方は意外に簡単に治まったわ。天狗のリーダーっぽいのとその横にいた白狼天狗があなたの名を聞くとすぐに了承したの。確か彩と紅葉と言ったかしら。」

（へぇ～彩がリーダーってことは天魔になったのか。まぁ山を出る時にはすでに大天狗の最上位にいたから納得かな。紅葉も白狼天狗の中では一番だったし。）

「あと河童もいたと思うけど？」

「そっちは『盟友が賛成してるんだから全然いいよ！！』とのことでしたわ。」

「まぁきとりらしいって言ったらしいかな。ところで僕はまぁさっきも言ったとおり別にいいんだけど妖怪の山を移動させることに賛成した覚えないんだけど。」

そう言うと扇子で口元を隠してふふふっと笑った後に、

「まぁ細かいことは気にしないことよ。気にしすぎてるとしわが増えるわよ。」

「いや、僕は老化することはないから問題ないよ。それを言うなら紫が気をつけるべきじゃないの。紫だってかなりの歳をいっｔ」

その瞬間、最後まで言い切る前にどこからだしたかわからない妙に

派手な紫の日傘が僕の目の前を凶暴な速度で振り切られた。

「私の歳がなんなの？＜ニコッ＞」

「な、なんでもないです。すんごく若くてきれいだと思います！！！」

「そう、それならいいのよ。」

まさか永淋の時みたいなことが起きるとは……。気をつけないと死ななないはずだけど死ぬ気がする。

「でもその理想郷候補の場所にあの山を移動させても大丈夫なの？『妖怪の山』だよ。」

「それなら大丈夫よ。そこにある人里はそれなりに大きくてそこには何人か退魔師もいるみたいだし鬼とかと打ち解けてたわよ。天狗はほとんどが山から出てこないけど。それに人里を襲わないなら問題ないとのことよ。」

「へぇ～今の時代にそんなことを言う人間も居るもんなんだね。」

「まぁ現在の所はそういう状況ね。概ね順調よ。」

「それは良かったけど、なんかごめんね。手伝うとか言っておきながら何にも出来なくて。」

「そんなことはないわ。幸生があの山で友好関係を築いてくれていたから今回のことは成功したわけだし、こうやって聞いてくれるだけでも嬉しいわ。」

「そうかい、そう言ってくれると嬉しいよ僕も。」

僕達の話が一区切りついたところで小傘を落ち着かせた雪花がこっちに戻ってきた。少々疲れたような顔をしているのは気のせいではないだろう。

「幸生様、お話終わりましたか？」

「うん、今ちょうど終わったとこだよ。【雪花もご苦労様。】」

【これは……幸生様ですか？】

【そうだよ。雪花が僕の式になったことでついてきた特典みたいな

ものかな。思念通話ができるんだよ。まぁとにかくお疲れ様。小傘は落ち着いたみたいだね。】

【はい。いまは切り替えたようです。】

【ならよかったよ。じゃあそろそろ行こうか。】

【はい、幸生様。】

「これから僕らは都に入ろうと思うんだけど紫も来るかい？」

そう言うと一瞬行くと言うかと思ったがすぐに首を横に振った。

「行きたいのは山々だけど、私はあそこには行けないわね。陰陽師がうようよいるもの。」

「紫らしくもない。紫ほどの大妖怪なら大丈夫でしょ。」

「私ほどの妖怪でもとっても厄介で人間の癖に恐ろしいほど強い陰陽師がこの都に入るのよ。前に入った時スキマから興味本位で見てたら何故か見つかって戦う羽目になったの。実力は互角かそれ以上よ。それ以来私を退治するために追い回してるのよ。だから入れな

いわ。」

「紫にそこまで言わせるとはね。名前はなんていうの？」

「そうね、知っておくに越したことはないわね。名は安倍清明（あべせいめい）。稀代の大陰陽師と呼ばれているわ。」

「あ～うわさは聞いたことある。それはそれで僕としては会ってみたいけど。ね、小傘、雪花。」

「紫さんがあそこまで言う相手なんかにわちきは会いたくないです！！」

「幸生さま、私も小傘の意見に賛成です。」

「そうよ、だから都に入るんだったら細心の注意を払うのよ。妖怪と間違われて戦うことにでもなろうものならいくら幸生でも勝てるかわからないわ。」

「むぅ……。みんながそこまで言うなら諦めるけど。でも、会ってみたかったなぁ。」

「心配せずともここにおるわい。」

聞きなれない声が聞こえたかと思うと僕の後ろからお札のようなものが飛んできたので即座に空壁を出して防御したが防御した瞬間空壁が破壊された。それに驚いていると後ろのほうから紫の悲鳴が聞こえた。

「きゃあああ！？」

「紫！？」

「だ、いじょうぶよ。私のことはいいから小傘と雪花を。」

みると、小傘と雪花にもお札が放たれておりいまもなおそのお札は2人を追っていて必死に避けている。おそらく雪花がお札の速度を遅くしているんだと思うが相手の力が強大すぎて限界が近そうだ。

すぐに2人を追っているお札を全て空壁で当てると、相殺された。そう相殺なのだ。付加はしていないが手加減無しの空壁をぶつけているのに相殺されるほどの攻撃を未知の敵は放っているのだ。それも簡単に。

小傘と雪花を紫がいるところまで連れて3人の前に僕は立った。

「ふむ、八雲紫は今のではまだまだ無理だとは思ったが他のも生き残られるとはのぅ。原因はお主かな？」

目の前にいたのは1人の若い男性だと思われる人間だった。手には何枚ものお札を構えている。名は聞いていないが直感で相手が誰かを把握した。

「安倍清明ですね。稀代の大陰陽師の。」

「よくご存知で。お主さきほどの動きからしてかなり強いのぅ。人間にしては妙な感じがするが。お主普通の人間じゃないじゃろ？」

「そういうあなたこそ何かが混じっているように感じますが。」

「ほぅ、よくわかったのぅ。この都にいる陰陽師にもそこにいる八雲紫にも気づかれたことはなかったんじゃがのう。まぁそれはともかくお主の後ろにおる八雲紫及び2匹の妖怪をこっちに渡してはくれんかのぅ？」

「なんででしょうか？」

【紫聞こえるかい？】

【えぇ聞こえるわ。前に渡してもらった空壁を通して。なにかまた細工でもしたのかしら】
→（２２話参照）

「それはもちろん退治するためじゃよ。我は陰陽師なのだから当たり前じゃろ。」

「それもそうですね。」

【さっき細工しといたんだ。それはいいから合図したら小傘と雪花を連れて妖怪の山でも君の家でもどこでもいいから退却してくれるかい？隙は作るから。】

【そんなことできないわ！！相手は安倍清明なのよ！！私も一緒にやるわ。】

【それは無理だよ。さっきあいつの攻撃をかなり深くもらったでしょ。隠してもわかる。だからお願い。】

【……わかったわ。でも無茶だけはしないで。私も全力で傷を治すからそれまで持ちこたえて。】

「わかってくれたならこちらへ渡してくれんかのぅ？さすればお主が八雲紫と話していたことは目を瞑ってやろう。」

「……生憎とそれは出来ない相談でして。」

【わかったよ。じゃあお願いだよ。】

「理由を聞こうかのぅ。なぜじゃ？」

「僕は八雲紫とは友人です。そして狐と化け傘は僕の家族ですから。だから……無理ですよ！！！！流星『降り注ぐ飛行物体』」

言った瞬間僕は勇儀との戦いで勝つ決め手となった技を発動。上空から百枚以上の空壁が音速の速度で清明へと降り注いだ。
ドドドドドドッという衝撃音とともに清明のいた場所が土煙で見えなくなっていく。

【今だよ！！】

それを合図に紫は小傘と雪花をスキマへと落とし、そして自らもス

キマへと身を投じた。それを見届けると清明がいた場所へと向き直る。土煙はいまだ晴れず様子がつかめない。おそらくやられてはいないだろう。

そしてついに煙が晴れるとそこには見ただけでもわかるほどの強固な結界が清明を全方位で守っていた。そして次の瞬間その結界が崩れ落ちた。

「いきなり不意打ちとはひどいのぅ。しかも手加減なしのかなり強力な技。おかげで八雲紫他2名を取り逃すは我の結界が破壊されるは散々じゃぞ。」

「こちらも必死なもので。あなたにはこれぐらいしないと効きそうにもなかったので。しかし、無傷ですか……。さすがにそれは想定外ですよ。」

「いやいや我も想定外じゃぞ?取り逃すつもりはなかったし、まさか結界が破壊されるとは思いしななんだ。」

「それはご自身の実力に余程自身がおありのようで。」

「これでも稀代の大陰陽師じゃからのぅ。さて……八雲紫と手を組んでいると言うだけでも十分退治若しくは封印する理由にはなり得るのぅ。」

「でしょうね。まぁ僕は退治される気も封印される気もないですけどね。」

「お主も自信があるではないか。」

「いえいえあなたほどではないですよ。……自信のほうは。」

「では……始めようかのぅ。」

この戦いが終わった時そこにあった山は見るも無残なものへと変わってしまい、原因がわからなかったため都全域を震え上がらせたと言う。

第３１話　稀代の大陰陽師（後書き）

すいません、かぐや姫とかを書こうと思ったらまだ平安時代はまだ早かったです。なのでまだです。

清明を出しました。これぐらい強くてもいいかと思いました。前回の話での狐の長老の口調に似ていると思いますがスルーしてください。

第３２話　大陰陽師との決戦

清明が始めようかと言ってからの１分間。その間両者はどちらも動こうとはせず、互いに相手から視線を外さずただジッと攻撃のタイミングを図っていた。

先に動いたのは清明だった。清明は左右の袂から札を５本の指に挟み取りそれを幸生に向けて放った。札は直線的な動きと変則的な動きの二種類で襲い掛かってくる。幸生は様子を見るため受けずに回避した。そして、その隙に清明の懐に一気に潜り込もうとしたが後ろから何かを感じ、即座にその場を大きく跳んだ。するとその場にさっき避けたはずの札が突き抜けていった。対象を見失ったまま止まるかと思ったが急に向きを変えて空中にいる幸生のほうへ飛んできた。
それを見て避けても無駄だと判断し、札にむけて空壁をぶつけて相殺させてから降り立った。

（なるほどね。誘導型か、あるいは追尾型の攻撃か。防げることには防げるけど厄介だな。しかも、僕の空壁を相殺させるほどの威力までオマケ付とは。規格外だねほんと。）

追い討ちをかけるように清明が札を放とうとする前に幸生は清明の

目の前に視界を遮るほどの大きさの土壁を出した。投げ出された札は土壁へと突き刺さり爆砕した。
爆砕されたことでできた粉塵で見えなくなっている間に清明の頭上に転移壁で移動してかかと落しをした。だが、何故かはわからないけど当たる直前で自身の頭上に４枚の札を基にして出来た結界で防がれた。ガンッという音ともに結界が振動したが壊すまでには至らなかった。それを見て幸生はすぐにその場から離れた。

離れたのを見て清明は即座に拍手(かしわで)を打ち、短く何かを呟くのが見えた幸生は直感的にまずいと思い障壁を張った。

「壁符『二重障壁』」

「雷電『電灼光華・轟雷』」

二重障壁を展開した直後に晴れた夜空から僕めがけて鮮やかな稲妻、雷神の剣が打ち落とされた。衝突した瞬間爆裂が生じ、周りの木々を薙ぎ倒し土砂が巻き上がる。飛散した稲妻は薙ぎ倒されなかった木々を打ち抜いた。
そこまでしてなお雷神の剣は幸生の障壁に降り注ぎ続けた。幸生は間近で轟き続ける稲妻を必死で止めていたが、二重障壁のうちの一枚に亀裂が入った。

（クッ、こんな大技コンマ1秒でやるなんて。せめてもの救いは発動中はあっちも他の術は使えないことか。でもこのまま受け続けてたら破られる。なら……。）

幸生は障壁を維持しながら右足で強く地面を踏んだ。
すると清明の真下から土壁が突き上げようとした。突き上げられきる前に清明は高く跳躍したため避けることができたがそのため術に向けていた集中力が途切れ術が止まった。

稲妻が消えた瞬間幸生は清明がいる空中まで階段状の空壁を形成し、清明の真上を取ったところで上から叩きつけるようにして特大の空壁牢を閉じ込めるのではなくそのまま清明にぶつけた。
清明は当たる直前で右手で刀印をつくり、五芒を描いた。

「禁！！」

清明の眼前に霊気の壁が現れ空壁牢を遮った。が、真上からの超重量級の一撃を受けたため清明はそのまま結界ごと地面まで吹き飛ばされた。ドゴォォンという音とともに土煙と土砂が巻き上がった。

幸生が地面に戻ると土煙の中から清明が出てきた。服が破けたり少し汚れている所はあるが怪我自体はしていないようだった。

「けほけほ、お主なかなかきつい一撃をくれるものだのぅ。空中に

いたとはいえ押し負けるとはおもわなんだ。」

「よく言うよ。そっちこそ、あの一瞬で稲妻落とすなんて大技使うとは思いしなかったよ。おかげで少し服が焦げたよ。それにあの一撃で結界破って直接生身に叩きつけるはずだったんだけどね。」

「あの術で服が焦げるだけとは……。ところでお主さきのよくわからぬきつい一撃の折に我の障壁結界になにか細工したな？」

「やっぱり気づきましたか。まぁ僕は壁操ったり出来るんでちょっと清明さんの障壁結界の防御力を下げたんですけどそれでもその強度……感服しました。」

「褒められても逃がしゃせんぞ。それにしても壁を操るか……。ここまでの強敵に会ったのは初めてなもんでの、少し興味が湧いた。ここは1つお互いの能力を言うと言うのはどうじゃ。まぁ言うか言わないかはお主の好きにしてもらって構わんが。」

「変わった人ですね。まぁ僕もここまで強い人は妖怪を含めて初めてで興味は湧いていたんですよ。では自分から。『壁を操りあらゆる付加を壁に与える程度の能力』です。」

「変わっとるのはお互い様じゃ。我は『陰陽道を極める程度の能力』じゃ。お互い反則じみとるのぅ。」

「ですね。じゃ改めて始めるとしますか！！」

そう言って幸生は清明の目の前に転移した。理由は接近戦に持ち込むためだ。先ほどのような術を使うような隙を与えないためでもある。清明はというといきなり眼前に現れた幸生に驚くことなく幸生の真意に気づき接近戦で応えるようだった。

お互いが霊気を拳や脚に纏わせぶつかり合わせるたびにガァンと音がし、その衝撃の度に余波で地面が震える。

だがほんのわずかずつではあるが幸生の体が徐々に切り傷がついていく。力・技術そのものはほぼ互角。そして幸生はその理由に気づいた。

（霊気をただ纏わせてるだけじゃない？これは……呪詛ってやつか！？相手に直接ぶつけることによって裂傷を負わせるってとこかな。）

長引かせるとまずいのだが清明は離れさせてくれそうにない。おそらく少しずつこの調子で弱らせていき動きが止まった所をたたくのだろう。

そう考えた幸生はすぐさま行動した。

突き出された拳をぶつかり合わせず受け流すようにし前へと進んだ。その際にも体が傷ついていくが無視する。その様子を見て清明は何かに気づいたのか両手を前に突き出し何かをしようとした。だが両手を前に突き出し他のは間違いだった。

前に出ている両手を下から土壁で跳ね上げた。防御用の結界も張ってあったためかダメージは与えられなかったがそれにより両手はちょうどバンザイをしたような形になり懐が無防備な状態になった。

清明は驚愕の表情を見せたが何をしてももう遅い。幸生はその無防備な懐へと深く潜り込み腹部へと手を当てた。

「伸縮『如意壁（にょいへき）』」

腹部当てた両手付近から空壁を出したと同時にそれを勢いよく前方へと伸ばした。防御結界も貫かれ、為すすべのなかった清明はそれをまともに受け体をくの字に曲げながら如意壁に押し込まれていく。

そして後方にあった大岩へ衝突するかと思ったところで、清明はなんとか体をねじるようにして如意壁から逃れた。ゲホゲホと咳き込み腹部を押さえながらなんとか着地。だがまだ膝をついたまま立ち上がらない。

これを好機と思った幸生はその場でとどめにかかろうとした。だが、清明の表情を見ておもわず手を止めた。なぜなら腹部を押さえ苦痛

で顔を歪ませながらも笑みを浮かべていたからだ。
そこで動きを止めるべきではなかった。それがたとえたった1秒であったとしてもだ。その隙に清明は印を組み最後にパンッとよく響き渡る拍手(かしわで)を1度だけ打った。

「鬼技『三連滅爆符』」

そして一喝した。

「爆!!!」

その瞬間幸生の左腕が、正確には左腕にいつの間にか貼り付けられた3枚のお札が光り、爆発した。

「がぁぁぁぁぁぁ!?」

苦痛の声をあげながら幸生はすぐに爆炎の中から転がり出るようにして抜け出した。そして痛む左腕を見た、いや左腕があった場所を見た。
左腕は肩から先がきれいに斬られていた。幸生はお札が爆発する前に肩から先を切断することにより零距離でくらう事を回避した。だが完全には回避できず至るところに火傷が見られ、斬られた断面か

らは血がボタボタと流れ落ちる。傷口を変形させた空壁で覆い止血しながらも先ほどの攻撃について考える。

（両手を前に突き出したのは僕にお札を貼るためだったのか。全く気づかなかった。さすがは大陰陽師ってとこかな？）

清明は先の一撃で幸生が死んでいないことに驚いたがすぐに頭を切り替え、お札を構えた。構えたお札に霊力が急速に集まっていく。

（やばっ、あれはなんかマズイ気がする！？）

清明からただならぬ力を感じ全力で立っていた場所から離れた。直後、

「神威『魔滅陣』」

眼では追えないほどの速度で先ほどまでいた場所に４枚のお札が陣を作るようにして放たれた。そしてその陣が火柱でもあげるかのように天高く放出された。陣の中は霊力だけでなく何十種類もの呪詛も練りこまれていた。もしも幸生が放たれる前に勘付けていなかったらどうなっていたかは想像にかたくない。

「むぅ……、今のも外したか。ならば次はこれじゃ！！」

「神光『破邪の槍・五月雨』」

清明の周りと上空に無数の破邪・退魔の力を宿した槍が展開され、それらが一斉に幸生に向かって放たれた。幸生は回避と防御に徹したがその一つ一つの大きさは小さいのだが威力・スピードが凄まじく、避けきることができず数本刺さってしまった。刺さった箇所から呪詛が流れ込まれてきたので急いで抜いた。
元々張っていた障壁のおかげで呪詛は疲れが多少増すだけで済んだが抜いた箇所から血が流れ出る。

（まずい、血を流しすぎた。）

清明は清明でまだ倒れていないのを見て心底驚いた顔をした。

「お主タフじゃの～。ここまでてこずったのは本当に初めてじゃぞ。」

「お褒めに預かりまして。ですがそろそろきついんで終わりにさせてもらいます。」

「ぬかせ！！」

清明はこれで終わりにするつもりか大量のお札と神呪を唱えて出来た弾幕で怒涛の攻撃を仕掛けた。

「壁符『多重重剛空壁牢・反射』」

時間稼ぎのため幾重にも重ねた空壁牢を自分の周りに形成した。

（『堅さ』と『反射』を付加してるから２０秒ぐらいなら持つはず。その間に……。）

幸生は清明の上空に無数の空壁を配置した。気づかれないように限界まで色を薄くし『隠形』も付加した。清明はそれに気づくことなく攻撃し続けた。

（準備はした。あとはタイミングだけ。壊れるまで、３…２…１…今！！）

次の瞬間それまで幸生を守っていた空壁牢がついに破壊された。しかし、破壊される前に転移壁で清明の数メートル後方に移動した。それに少し遅れて気づいた清明はすぐにこちらを向いた。幸生は何かされる前にすかさず次の行動に移った。

「重力『堅すぎる重荷』」

黒い壁が三方から囲み清明の体に凄まじい重力がかかった。その力にさすがの清明もたまらず片膝をつき身動きが取れなくなる。もっとも片膝つくだけで済んでいることですでにありえないのだが。普通の人間は重力の大きさに耐えられず地面に減り込む。

「土壁!!!」

身動きが取れなくなっている清明の足元から土壁が飛び出て清明を思いっきり突き上げる。

「ぐほぉ!?」

今度ばかりは効いたようでうめき声をあげた。

そして最初に配置した空壁があるところまで突き上げられたところで隠形を解除した。途端に清明の周りに無数の空壁が現れる。なんとか防御体勢を取ろうとするが先ほどの重力と土壁の衝撃により体が一時的に動かせない状態にあった。

そして幸生は清明を全ての角度から取り囲んでいる空壁に『転移』と『光速射出』を付加して無数にある空壁のうちの1つに転移した。

転移した場所はちょうど清明の真下。重力にしたがって地に落ちようとしていた。転移した瞬間幸生は光の速さをもって真下から霊力を纏った拳でさらに突き上げた。

「がぁぁぁぁ!?」

幸生は殴った次の瞬間には他の転移壁に入り、今度は真横からの蹴り。命中したら次の転移壁へというのを繰り返し攻撃を加える感覚を最短まで短くすることによりやがて幸生の姿は光の残像となってあらゆる方向から攻撃した。

清明はというと術式を組むことも出来ず元々張ってあった何枚もの強固な結界で耐えようと試みたが次々と破壊され、破壊される度に凄まじい衝撃と痛みが自身を襲い為されるがままになった。

そして清明がほとんど意識がなくなりかけたところで幸生は真上か

ら光の速さで清明の腹部をかかと落としで地上まで蹴り飛ばした。

ドゴォォォォォォンという大きな衝突音が辺りに響き渡った。

幸生も確認するため地上へ転移して清明のところまで行った。清明が落下した地点は大きなクレーターが出来ておりその真ん中で清明はボロボロの状態で気絶していた。余程強固な結界を張っていたのだろう。弱弱しくなっているがまだ1枚だけ残っている。

「光速『駆け巡る軌跡』。実践では初めて使ったけどやっぱりこれきついや。身体にかかるGが凄まじいよ。」

ふぅと一息ついて気絶している清明の横に座る。すると前方の空間がにゅっと開き紫が血相を変えて出てきた。

「幸生!!助けにきたわよ……ってもう終わっちゃたの?」

「いましがた終わったとこだよ。無事勝てたよ。」

「どこが無事なのよ。左腕は無いし所々身体に穴が開いてるし、いま調べさせてもらったけど体中のいたるところが悲鳴をあげてるわよ。」

「相手が相手だったんだし大目に見てよ。結果的に僕死んでないし。

」

「まぁ生きていたからよしとしますわ。後は任して。」

紫は自身の日傘の先を気絶している清明へ向けると妖力を溜め始めた。そして頭へと射出したがそれを幸生が弾いた。

「……なんのつもりかしら?」

「殺さないでおいてもらえないかな?話も聞きたいし事情を話せばもしかしたら協力もしてくれるかもしれない。出来れば清明の傷の手当もしてくれると助かるんだけど。」

「……ハァ。あなたって本当にお人よしよね。あなたのおかげで私も助かったのだから従うわ。」

「ありがと、紫。」

「友人ですもの。当然よ。」

「うん、そうだね。……じゃあごめんけどちょっと寝るね。そろそろ限界みたいだ。」

「ゆっくりお休みなさい。それまで私の家で世話するから。」

「たの…むよ。」

そういって幸生はそこで意識を失った。

そして紫はすぐに行動した。二人とも傷がかなりやばいのだ。先に清明をスキマの中に放り込んでから紫は幸生を抱きかかえた。幸生は長身にもかかわらずそこまで重くなかった。幸生を抱きかかえたままスキマに入る前に振り返った。広範囲にわたり木々が薙ぎ倒され、クレーターがあちこちにあり、地割れのようなものも起きている。二人の戦いがどれほど凄まじいものだったかがうかがえる。

その光景を背にして、紫はスキマへと入っていきスキマは閉じられた。

第３２話　大陰陽師との決戦（後書き）

お久しぶりです。大学が始まってから書く暇がなかったのとなかなか思いつかなくて更新が遅くなってしまいました。すいません。
これからも更新していきますが遅くなることがあると思います。でも頑張ります。

それでは、また次回で～。

おそらく次回はマヨイガからです。

第３３話　和解

「う、う～ん。……知らない天井だ。」

目覚めた幸生が最初に言った言葉はそれだった。ここはどこなんだろうかと考えながら自分がいま布団の中で寝ている理由を記憶から掘り起こしていった。

（……そうだ。僕は清明と戦って確か…勝った。で、その後紫が来て家に連れて行ってくれると言ったところで気を失った気がする。ってことはここは紫の家か。）

そう寝たまま考えているとふと脚の付近が妙に重たいことに気づいた。なんだろうと思って起き上がろうとすると激痛が走り再び横たわる。横たわってからそれも無理はないということに気づく。全身に裂傷及び火傷、左腕切断、脇腹・両脚に刺突、最後に使った技の反動による筋肉の疲労などとこれだけ傷があればさきほど痛みも仕方ないだろう。

今度は気をつけながらゆっくりと布団から起き上がった。すると、雪花と小傘が僕の脚に顔を伏せて寝ていた。傍らに水の入った桶と手ぬぐいがあるところからずっと看病していてくれていたのだろう。

よく自分の体を確かめてみれば傷があったところには包帯が不器用ながらも巻かれている。

そのことを嬉しく思いながら2人の頭を撫でていると正面の襖が開きそこから紫が入ってきた。

「あら、起きたのね幸生。」

「うん、今起きたところだよ。ありがとね紫。」

「お礼ならそこの2人に言いなさいな。ずっとつきっきりであなたのことを看病していたんだから。あなたのボロボロになった姿見たときは大変だったんだから。」

それを聞いて思わず幸生は苦笑いをしてしまった。ついその光景が眼に浮かんだのだ。そしてどんなに必死でやっていてくれてたかも手当てから伝わった。

「そうみたいだね。あとでしっかりお礼言っておくよ。でもやっぱり紫、ありがと。君がここまで連れてきてくれて助けてくれたことはホントに感謝してるよ。」

「本当に助けられたのはこっちなのよ。それに私達は友人。そうで

しょ、幸生？」

「そうだね。ところであれからどれくらい経ったのかな？傷と左腕の再生具合からいってまだそんなに経ってないと思うんだけど。」

すると紫はギョッとした顔をした。

「えっ、体中の傷はともかくとしてその左腕治るの！？」

「あれ？言ってなかったかな？僕半不老不死だから時間はかかるけど頭でも吹っ飛んでなければ治るんだよ。まぁそれはいいとしてどうなのかな？」

「よくないと思うんだけど……まぁ幸生がいいって言うならいいわ。確かにあなたの言うとおりそんなに日にちは経過したないわ。ちょうど一週間といったとこかしらね。」

「そっか、一週間か。じゃあこの傷と左腕が再生するのはたぶん約半年ぐらいかな。」

「あら、結構長いのね？」

「あくまでも半不老不死だからね。完全な不老不死だったら一日もすれば治るのかもしれないけど僕はだいぶ遅いみたい。腕が完全になくなったの初めてだし、なんか傷口に呪詛やら神呪やらが染み込んで治りが遅くなってるのも要因のひとつかな。」

「便利そうでいろいろと大変なのね。」

「まぁ遅いといってもちゃんと治るんだから問題はないよ。それよりも完治するまでの間なんだけど……。」

「もちろんここにいていいわよ。元々いつかは私の家に招待しようと思ってたのよ。ちょうどいいですわ。」

「なにからなにまでありがとね。あ、そうだ。もう1つ質問。」

「なにかしら?」

「清明はどうしてるのかな?彼も僕なみに傷がひどいと思うんだけど。」

すると紫は途端にむすっとした顔になった。そしてしぶしぶといった感じで話した。

「あなた並みの生命力よ。さっき起きたわ。今は縁側にでもいるんじゃないかしら？弱りきってるから大丈夫だと思うけど一応下手な真似したらいつでも始末できるようにはしてるわ。」

「……そこまでする必要あるかなぁ。」

「用心に越したことはないでしょ？それにホントは始末したいのを我慢してるのだからそれぐらい大目にみて。」

「……ハァ。まぁいいや。僕をそこまで連れて行ってくれるかい？起き上がるのがやっとでね。」

「そもそもそれがあなたの目的だものね。わかったわ。」

そう言うと紫は手を幸生に伸ばした。幸生はそれを手を掴めという意味だと思い、手を掴むため伸ばそうとした。
だが実際には違った。

紫は伸ばしていた手を元に戻した。そしてわずかにほほえんだ。その時幸生はなんとなく嫌な予感がした。紫がろくでもないことを考えた時によく見せる笑みだったのだ。

次の瞬間、幸生が座っているところにスキマが開いた。いつもならこれぐらい簡単に避けれるのだが今は怪我により動けないため為すべもなくスキマの中へと幸生は落ちていった。

縁側

「――――ぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！？」

高い所から落ちた時特有の叫び声をあげながらスキマと繋がった場所へと強制的に移動した幸生はゴスンと鈍い音とともにスキマから固い木製の床へと落下した。

「ふぉぉぉぉぉぉ…。」

「お主は何をやっとるんじゃ？」

横から声が聞こえたので痛む頭を押さえながら向いてみると自分と

同じように体中に包帯を巻いた清明が呆れ顔でこちらを見ていた。

「いや、まぁなんというか…紫にスキマで落とされた。それよりも身体の方は大丈夫ですか？」

「やった本人が聞くことではないと思うがのぅ。お主のおかげで体中がボロボロじゃ。」

「それは失礼。まぁおあいこさまということで。」

「ハァ…。お主と話しとると調子が狂うのぅ。……で？我に何か用があるのじゃろ？そうでなければあの場で我を殺さなかった理由が見つからん。」

「用がなくても僕は殺す気はないですよ。まぁ確かに用はありますけど。」

「で、なんじゃ？」

「それはですね……ただあなたと話しがしてみたかっただけですよ。」

「……は？話したかっただけとな？他に何かあるのではないか？例えば我の術の源をよこせとか。」

「そんなこと考えてないですよ。あっ、でももしよかったら結界術について教えてもらえたら嬉しいかも。まぁそれはおいといてホントにただあなたと話したかっただけですよ。敵ではなく友人として。」

「友人？我がお前と？」

清明の問いに対して首肯。数秒ポカーンとしていたと思えばクックックッとこらえるように笑いはじめ、しまいにはこらえきれず大笑いしはじめた。

「はっはっはっは、あーはっはっはっは！！！」

「……そこまで笑わなくったっていいじゃないですか。」

「いや、すまんすまん。はぁーこんなに笑ったのは久方ぶりじゃ。お主本当に変わっとるのぅ。死合いした相手と友人になりたいとは。」

「だから僕は殺す気なんてなかったって言ってるじゃないですか。」

「そもそもなぜ我と友人になりたいなどと思ったのじゃ？」

「う～んなんだろう。しいて言うならこの人と友人になったらなんか楽しそうだなって思ったからかな。」

「よくわからんやつじゃの。なら1つ我からも尋ねてもよいかの？」

「僕に答えられる範囲内でしたら。」

「お主はなぜあの八雲紫の友人になっておるのだ？彼奴は妖怪だ。」

「妖怪というのは関係ないですよ。それを言ったら僕は式というか従者に妖獣一匹と化け傘が1人いますし。最初は彼女が語る理想を聞きその理想に対して僕が共感したから友人になったんですよ。でも、そうやって何度も会っているうちにただ話すだけでも楽しいと思うようになったんですよ。」

「ふむ、なるほどな。」

「意外とあっさり信じてくれるんですね。」

「なんとなくそうなのであろうなと思ってな。ちなみにその理想とは何かの？差し支えなければ聞きたいのじゃが。」

「いいですよ。」

半蓬莱人説明中――――。

「なるほどの、人間と妖怪が共存できるような場所を作る。確かに理想ではあるな。そうなってしまうと我の仕事が無くなってしまうがの。無いほうが平和でいいんじゃが。」

「紫が言うには共存するといっても全ての妖怪がと言うかほとんどの妖怪が仲良くしようとは思わないはずだから人間側にもそれに対抗できるだけの力、ストッパーみたいなのを用意するんだって、僕みたいな。」

「ちゃんと考えられておるのぅ。じゃがお主だけで大丈夫なのか？」

「人間側は今のところ僕だけだからなぁ。今できているところにも

何人かいるらしいんだけど僕ほどじゃないんだよね。そこであなたにも協力していただけたらと思うんだけどどうかな紫？」

「何でいつもばれるのかしら？」

僕の後ろからにゅっと紫が現れ僕の横に座る。

「しいて言えば勘だよ。にしても気になるんだったら最初から僕と一緒に来ればよかったのに。」

「私にだっていろいろあるのよ。今まで追い回されてたんだからそう簡単に気を許せるわけないでしょ。まぁ見てるうちに馬鹿馬鹿しくなったから出てきたんだけど。」

「はいはい。で？どうかな紫？僕的にはこれ以上ないいい人選だと思うんだけど。」

「確かに清明の力は理想郷を完成させるために必要だと私も思うわ。後は清明、あなたの意思を聞くだけよ。」

「無理はしなくていいですからね。あくまでこれはあなたが良かったらですから。無理強いさせていいことなんて誰にもいいことはありません。逆にそこから崩壊するのがオチですから。」

それを聞き清明はムゥと唸り、腕を組み目を瞑って考え始めた。そして数分が経ったところで清明は意を決したかのように口を開いた。

「よかろう。その理想、我も喜んで協力させてもらおう。」

「ありがと。あなたに協力してもらえると心強いです。」

「それはいいのじゃがそのあなたと言うのはやめにせんかの。我も友人として付き合っていきたい。普通に清明と呼んでくれるとありがたい。」

「そうだね。じゃあ僕のことも幸生でいいよ。」

「私は紫でいいですわ。」

清明が首肯したのを見てから幸生はその場を立って清明と紫を向き合わせた。

「？なんのつもりかしらこれは？」

「せっかく協力し合える仲間、友人になったんだからこれまでのわだかまりとかいろんなものとか水に流して改めてよろしくってことを確認するために握手したら？」

そう言うと2人は顔をしかめたがそれも一瞬ですぐに幸生に対して呆れ顔で言った。

「ホントにあなたって不思議な人ね。」

「我も同感じゃ。」

「なんだよ2人して馬鹿にしてさ。」

ハハハッと笑いが3人を囲み端から見ればそれは友人達が楽しく談笑しているように見えただろう。

「幸生の言うことも一理あるわね。じゃあ清明、これからよろしくお願いしますわ。」

「こちらこそ。我に何が出来るかわからんができることは喜んで協力しよう。」

2人は互いに手を伸ばし、しっかりと握手した。その光景をみて幸生はまた理想へと小さいが大きい一歩進んだと、そう感じるのだった。

「ところで清明ってなんでおじいさん口調なんだい？」

「ほっとけ。我のぽりしーじゃ。気にいっとるんじゃい。」

第３３話　和解（後書き）

清明を仲間にしてみました。

ここで使い捨てにするには惜しい人物なので採用しました。これからもがんばっていきます。

それではまた次回～。

第３４話　暗黒物質の食卓

あれから3ヶ月が過ぎた。
それまでの間はこれといって何も起きることなく強いて言えば清明が都に一足早く戻っていったことぐらいだ。

なんでも清明は稀代の大陰陽師と呼ばれるだけあってかなり多忙な日々を送っていたようで最初は都の方に紙で作った鳥の式を飛ばして自分が怪我で動きが取れないという旨を伝えていたのだが、さすがに1ヶ月以上も空けるわけにはいかないらしく1ヶ月過ぎる前に戻ったのだ。

「早く僕も行ってみたいね。住む所もあてができたことだし。」

ありがたいことに清明は幸生達が都に来てから住む所がなくて困らないように空き家を見つけておいてくれるといったのだ。

『どこになるかはわからんがまぁ我に任しておけ！！』

元々あてがなかったのでこれには大助かりだった。いつか何かしらの形でお礼をしなければ…。

とまぁこんな具合に起こった事といえばそれぐらいなもので、今幸生は縁側でお茶を飲むために茶葉を入れて湯飲みにお茶を注いでいた。紫の家に来てからというものほとんどこれをやっていたのですでに慣れた手つきである。

じゃあそれまでの間幸生はなまけていたのかというと残念ながら違う。幸生自身は自分だけ何もしないというのは落ち着かないと言うか性格上と言うかとにかくなにかしたかった。

けれどもそれを許さなかったのが幸生の式、現在三尾の銀狐の雪花（せつか）である。彼女は当初傷だらけの自分の主の姿を見てそれはもう大慌てしたらしい。初めてボロボロの主を見たのだから無理もない話ではあるのだがそれからが大変だった。
それは幸生が何か料理を作ろうとしたり掃除などの手伝いをしようとしたりすると、決まってこう言って布団へと戻されるのだ。

『幸生様はじっとしていてください。あれだけの傷を負ったのですから幸生様はゆっくりと療養してください。他は全て私がやりますから！』

自分のことを想ってのことだと思うし幸生もそれは嬉しく思う。それに雪花は本当に家事全般なんでもこなせるようになっていたので

頼もしい限りだと思う。思うのだがそうなってしまうと結局何もすることがなくなってしまうのだ。このことを紫と小傘に話すと、

『まぁ切り傷と呪詛の類の傷は治ったといっても左腕がまだ再生していないのだからお言葉に甘えておいたら。』

『雪花の言うとおりだとわちきも思います。ご主人はいつも無茶ばかりするんですからこれぐらいがちょうどいいですよ。』

ということなのだ。
なのでこれなら問題ないだろうとお茶の入れ方の勉強でもしていたのである。

「まぁゆっくりするのも悪くはないんだけどねぇ。……あっ、茶柱立った。」

ズズズッと縁側に座ってお茶を飲む。

「はぁ～お茶がおいしい。」

「なに爺くさいことといってるのよ。」

声がするほうを向くと紫が呆れたような顔をしてこっちに来ていた。

「年齢的には正真正銘爺やだよ。それより紫も飲むかい？ここのところこればっかりしていたからおいしいと思うよ。」

「じゃあいただこうかしら。」

湯飲みを受け取って紫は隣に座り、お茶を飲んだ。

「「はぁ～おいしい（わ）」」

その光景を離れた場所からこっそりと見ているものがいた。

幸生の式である雪花とその化け傘の小傘である。

「お2人とも和んでいらっしゃるね。」

「そうだね。でも、雪花。わちき見てて思ったことがあるんだけど……。」

「なに、小傘？」

「なんかご主人も紫さんも言ってることとやってることがお年寄りっぽいね。」

「なっ！？小傘、それは思っても口に出しちゃマズイよ。幸生様はああいう性格の持ち主であられるから気にしないとしても紫様に聞かれるとマズ」

とその時突然2人の足元にスキマが開いた。当然この不意打ちに対処できるはずもなく雪花と小傘はスキマへと落ちていった。

「なんで今のが聞こえるのーーーー！？」

「私何も言ってないのにーーーーー！！！」

「ん？なんかいま雪花と小傘の声が聞こえたような…。」

「気のせいじゃないの？耳まで爺やになったのかしら？（ズズズッ。）」

「確かに聞こえた気がしたんだけどなぁ。（ズズズッ。）」

（ついカッとなってやっちゃったけどばれたらたぶん……まずいわね。）

（十中八九は紫が何かしたね。というか僕にも話し声が聞こえてたんだけど。その類の話は紫にしたらマズイね～。とはいっても一応2人に代わって仕返しでもしようかな。）

「そうだ紫。君って見てる限りだと家じゃ何もしてないようにみえ

たけどなにかしてるの？」

その言葉に紫は肩をビクッと震わせて言葉を濁しながら返した。

「も、もちろんよ。あなたが見てないだけど私は色々してるのよ、家のことを。」

「でも掃除も洗濯物も食事も全部僕達が来てから雪花に全部やらしてるみたいだけど？」

「うっ。そ、それは……。」

そう、幸生の勘では紫は今まで家の中でのことはあまりというかほとんどしていなかったと思われる。容態が安定してから何気なく家の中を見渡したら至るところに妖気の残滓が残っていた。スキマを使う時に出る特有のものだ。おそらく散らかっていたものを慌てて全部スキマにでも放り込んだのだろう。

「もしかして紫って家事は出来ないのかな？」

いかにも挑発してます的な声で言うと紫はムキになって言い返してきた。

「で、できるわよそれぐらい！今まではやらなかっただけよ！」

「さぁ～どうだろうな～♪」

「くっ……。いいわよ、ならできるってとこあなたに見せ付けてあげようじゃない！そうね、今日の夕餉は私が作るわ！！」

「へぇ～それは楽しみだ。なにせ紫が作るものは食べたことがないからな～。楽しみにしてるよ。」

「幸生もあっと驚くような料理を見せてあげるわ。待ってなさいよ。」

スクッと紫は湯飲みを置いてから立ち上がり料理場へと向かっていった。

紫の姿が完全に見えなくなってから幸生はボソリと口からもらした。

「まさかあそこまで簡単に挑発にのるとは……。これはこれで問題だなぁ。これから先のことを考えていくならその辺りも直しておかないとね。」

そんなことを考えながら湯飲みに再度お茶を注ぎ飲もうとしたとこ

ろで小傘と雪花が戻ってきた。

「2人ともおかえり。」

「「ひ、ひどい目にあった。」」

「あんなに近くであんなことしゃべってたら紫なら気づいちゃうから気をつけるんだよ。」

「は～い。」

「申し訳ありませんでした。それでは私は今から夕餉を作ってきますね。」

「今日は雪花はいいよ。なんでも紫が作るみたいだから。」

「「……えっ！？」」

小傘と雪花は一瞬間をおいて驚いた。こころなしか小傘の唐傘の目も驚いているように見える。

「だ、だいじょうぶなんですかご主人?紫さんに任しても。」

「幸生様……紫様を唆しましたね。」

「唆すなんて人聞きの悪い。僕はただ紫がどんな料理を作るのかなぁって思っただけだよ。まぁ出来るまで気長に待ってようか。」

「わちきも確かに気になりますし待つことにします。」

「幸生様がそういうならば従います。」

それから幸生は2人を連れて部屋で待つこととなった。だが、数時間後に幸生はある意味人生最大の後悔と地獄を味わうこととなる。

「……遅い。」

紫が作ると言って調理場に行ってからすでにだいぶ時間が経過している。いつもの時間ならばもう食べている頃だ。

「ご主人～、わちきお腹減りました～。」

「小傘、幸生様の前でそんなこといわないの。」

「でも雪花だってわちきと同じようにお腹空いてるんでしょ？」

「私はそんなことないわ。」

そう言うと雪花のお腹からクゥ～と鳴り、雪花は顔を真っ赤に染めた。

「ほら～雪花も空いてるじゃないですか。」

「こ、これは…。」

「2人とも静かに待ってなさい。」

「「…はい。」」

「まぁ実を言うと僕もお腹が空いてきてるんだよね。いつもなら食べてる時間だし。様子見に行こうとしても入ってくるなの一点張りでよくわかんないし。」

あまりにも遅いので進行状況を確かめるついでに仕方ないので幸生も手伝おうとしたのだが何が何でも自分ひとりで作る気で入室させてくれなかったのだ。

(う〜ん、ここまで意地になるとは…。こんなことなら唆すじゃなかったかなぁ。さすがにこれ以上小傘と雪花を待たせるわけにも行かないし今度こそ僕も手伝いに…。)

そう思い腰を上げようとした時襖がパァンという音とともに勢いよく開き妙に服の至るところが黒くなっている紫が現れた。少し息が上がっているようにも見える。

「なんか息が上がってるけど大丈夫かい紫?」

「えぇ、まったくもって問題ないわ。完成したわよ。付いてきて。」

紫はそのまま踵を返し戻っていった。

「やっと食べられる!!」

余程お腹が空いていたのか小傘は紫の後を走って追った。

「幸生様、少々よろしいでしょうか？」

「ん？なんだい、雪花？」

「えっと、その、ですね……。」

モジモジしながら話してくる雪花を見て幸生は厠に行きたいのだと理解した。

「行きたいなら早く行けばよかったのに。はやく行っておいで。」

「すいません。では後ほど。」

厠の方向へ行った雪花を見てから幸生も料理が並んでいるであろう場所に向かった。和室の前まで行くと小傘が襖を開いた状態でなぜか固まっていた。

「そんなとこで固まってどうしたの？はやく食べたいんだろ……。」

小傘の後ろに立ってその視界の先にあるものを見た瞬間幸生は言葉を失った。何故ならそこにはいくつものさらに盛られた黒い物質の物や歪な形をしていて変色してしまっているものばかりが並んでいたのだ。すでにもとの原型が消えてしまっているのはおろか、何を作ったのかも判断がつかない。

「ゆ、紫。あの…これは？」

「思ったよりうまく出来て安心したわ。さぁ座って座って。そして食べて食べて。」

幸生と小傘は紫に動かされるがままに座り目の前にある料理？を見た。おそらく紫は本当にいい出来栄えだと思っているのだろう。いつもの胡散臭さがないのがその証拠だ。
ゴクリッと息をのみ、凝視する2人。いつまでたっても食べない幸生と小傘を見てついに紫が動いた。

「早く食べなさいってば。ほら。」

「紫さん待ってくだｓ、モガモガ！？」

小傘の制止も聞かず紫は黒い料理を小傘の口へと入れた。小傘はそ

れを反射的に噛み飲み込んでしまった。幸生と紫は小傘を見つめた。一方は食べても大丈夫だったのかを確認するため、もう一方は自身が作った料理の味はどうだったか確認するために。

すると小傘はニコッと笑った。

（だ、だいじょうぶだったか。ま、まぁ見た目より中身だもんね。）

ホッと胸を撫で下ろし安心したその時小傘は一気に顔を青ざめ、そのまま後ろへ倒れた。

「こ、こがさー！？」

確かめると目を回し、完全に気を失っている。予想通り、いやそれ以上の破壊力だったようだ。

「あら小傘ったら。おいしくて卒倒するなんて。さすが私やればできる。」

（なぜかいい方向に勘違いしてるーーーー！？）

「幸生も食べて。こっちのはさっき小傘が食べたのよりも自信作な

のよ。」

そう言って差し出されたものは他のどの物体よりもやばそうなものだった。と言うかなんか禍々しいオーラ見える。是が非でもここは回避したいところなのだがここで満面の笑みで幸生が食べるのを待っている紫を見るとそれはできなかった。そもそもこんなことになったのは自業自得。ならば覚悟決めて食べるしかない。

震える手で箸を持ちその物体を持ち上げ口元まで持っていった。そして一気にパクッと噛み飲み込んだ。その瞬間今までに味わったことのない形容しがたい味が体中に伝わり視界が明滅してきた。

「どう?」

「……ごちそうさまでした。」

それを最後に幸生も倒れてしまった。

「2人して卒倒しちゃうなんて。そんなおいしかったのかしら?」

試しに紫もその料理?を1つ食べてみた。直後、紫も目を回して倒れてしまった。

その後、厠から戻ってきた一匹の銀狐がその禍々しい料理と倒れた3人を食べて気を失ったまさに地獄絵図の光景をみて大慌てになってしまったのは言うまでもないことである。

そして幸生は早く紫にも式ができてほしいと切に願った日にもなったのであった。

第３４話　暗黒物質の食卓（後書き）

少々遅れました。

次は都に入ります。

それではまた次回～。

第３５話　なよ竹のかぐや姫

ある家の庭で１人の青年が腕の調子を確かめるかのように回していた。
言わずもがな半蓬莱人の新幸生である。アクシデントも重なり予定よりも再生する速度が遅くなっていたのだがようやく元に戻った。
現在、左腕に不具合がないかチェック中である。

「うん、よし治った。」

腕のあらゆる動きや握力など検査できる所は全てしたが問題なかったようだ。

「おはよう、幸生。」

声がする方向を向くと紫がいつの間にか来ていた。

「あぁおはよう紫。」

「その様子だと治ったようね。」

「おかげさまでこの通り。だから今日にでもここを出てさっそく都に行ってみようと思う。」

「そう……。ここも寂しくなるわね。」

「まぁこれで会えなくなるわけじゃないしね。またその時にってことで。」

「そうね。」

そしてその日に幸生たちは紫の家を跡にし都へと向かった。

「と言うわけで都に到着しました。」

「誰に言ってるんですか、ご主人？」

「いや、まぁなんとなく？」

「聞かないでくださいよ。」

呆れ顔で言う小傘に苦笑いで返しながらも幸生は都を見渡した。転生前に教科書で見た都と大体一緒だったがやはり実物を見ると違って見えてくる。ちなみにすでに幸生と小傘は誤認壁で、雪花は人化の術で完全な人の姿になっている。

食い入るように見渡していると雪花が尋ねてきた。

「それでこれからどうするのですか？」

「そうだね。一応ここに来る前に清明には伝えておいたからもういると思ったんだけどまだいないみたいだね。」

「では清明様が来られるまでここで待ちますか？」

「う～ん、ただ立ってるだけっていうのも退屈だしね。どうしようかな……。」

都を見てまわりたいと言う気持ちはあるのだが地理を理解していないから下手に動くと迷って清明が探す羽目になる。そう考えていると小傘がある場所を指差しながら提案してきた。

「じゃああそこにある甘味屋で団子でも食べて待ってませんか？というかそうしましょう！」

「あっ小傘勝手に行っちゃだめだよ。」

雪花の制止も聞かず小傘はすぐ近くにあった甘味屋へ走っていった。

「もう、小傘ったら…。」

「まぁまぁ。確かにあそこなら時間も潰せるし迷う心配もない。ちょうどいいんじゃないかい？」

「確かにそうですが、幸生様の意見も聞かず勝手に行くのはどうかと。」

「それも小傘のいいところのひとつでしょ？小傘は自由奔放じゃないと。しすぎもまずいけどね。」

眉間にしわを寄せていたので一応訂正もしておいた。

「幸生様がそう仰るのなら。では私達も行きますか？」

「そうだね。」

――――数十分後。

「お主らなにをやっとるんじゃ？」

遅れて到着した清明が目にしたものは甘味屋でのどに団子を詰まらせて悶絶している小傘とそれをなんとかしようと慌てている幸生と雪花の姿だった。

「おぉ清明ちょうどいいところに。見ての通りなんだけどどうにかしてくれるかい？」

「はぁ…、仕方ないのぅ。」

清明は小傘の背中に手を当て小さく何かを呟くとつっかえていた団子が取れたのかケホケホいいながらも表情を元に戻していた。

「じ、じぬかとおもった……。」

「だから一気に食べちゃ駄目だといったろうに。」

「すみません、ご主人。」

「それなら清明に礼を言うんだね。」

「すみませんでした、清明さん。」

「いやなに、我も妖怪を助けて誤られるという貴重な体験ができたのでもうよい。」

申し訳なさそうに謝罪する小傘を見て苦笑いしながらもそう言った。

「ホントに申し訳ない。こっちで処理できたらよかったんだけどなにぶんこういうことあまりなくて。」

「よいよい。それよりもお主らのここでの住む場所なんじゃが案内してもよいかの？」

「うん、頼むよ。」

一行は勘定を払って清明に案内の元に家へと向かった。

――――――青年達と妖怪移動中。

「ここじゃよ。」

案内されて着いた場所にあった家は普通のどこにでもあるような家だった。でも空き家だと聞いていたわりには随分と外も中もきれいだった。

「へぇ～。空き家だって聞いてたからけっこう古くなってるかと思ったけどかなりきれいだね。よく見つけられたね。」

「ここは都の中でも一番はなれた位置にあるでの。せめてきれいにだけはしておこうと思って迎えに行く前に清めの術と式を使ってやっておいたのじゃ。」

紙をひらひらさせてこの紙の式でやったということ伝えながらニヤリと笑った。

「それで遅かったのか。何から何まですまないね。」

「なんのこれしき。ついでじゃからこれ渡しとく。」

ヒョイと3人に向けて清明は何かを放り投げた。投げ渡されたものを見てみるとそれは何かのお札のようなものだった。

「これは？」

「我の関係者という証みたいなものじゃ。雪花殿と小傘殿には念のために妖怪だとばれんように細工しておる。」

「「「なるほど。」」」

「この都で生活していくにあたって幸生には陰陽師として生活していってもらうことになる。陰陽師登録はしておいたからそういうことでの。」

「わかった。」

「小傘殿は他の者が来た時だけ唐傘に戻っておいてくれるかの？」

「はーい。」

「雪花殿には今までどおり幸生の式として過ごしてくれればよい。妖怪を式にしておる陰陽師なぞ、この都にはたくさんおるからの。」

「了解しました。」

「うむ、まぁとりあえずはこんなところかの。」

「ほんとなにからなにまですまないね。今度折を見て礼をさせてもらうよ。」

「ええわい、そんなこと。」

「それじゃあ僕の気が収まらないよ。」

ここまでしてくれた清明になにもしないというのは幸生の性格上無理なのだ。

「そこまでいうのなら今度さきほどの甘味屋で団子でもおごってもらうことにしようかの。」

「了解。」

「うむ。じゃあ行くとしようかの。」

「うん、じゃあまた。」

その言葉に幸生は見送ろうとするとガシッと幸生は突然清明に首根っこを掴まれた。

「なにをしておるのじゃ、お主もいまから我と来るのじゃぞ。」

「えっ、どこに?」

「なよ竹の姫の警護じゃよ。お主を陰陽師登録するためにお主が我にも勝り劣らぬ実力の持ち主だと天皇陛下に報告するとな、その者も警護にあたらせよと仰られたものでな。ということで顔見せのためにいくぞい。」

「それは聞いてないよーーー！？」

幸生の抗議の声はむなしく響き清明にずるずると連れて行かれた。

断るわけにいかず、結局清明に案内され着いた場所はかなり大きな屋敷だった。そして屋敷から出てきた出迎えの者に依頼主の老夫婦がいる部屋まで案内された。清明と幸生がそこに到着するとすでにそこには十数人他の陰陽師が来ていた。
そしてしばらくそこで待っていると正面の襖が開き老夫婦が現れた。

「みなさま今日はわざわざお越しいただきありがとうございます。私どもがなよ竹の姫、かぐや姫の護衛を依頼した者です。ここにお

られる方々が護衛していただける方達でしょうか？」

翁の問いに陰陽師たちは全員首肯した。

「左様でございますか。では依頼内容の具体的な説明をさせていただきます。数週間前、我が愛娘のかぐやが突然月に帰らなければならないと言ったのです。」

翁の言葉に幸生はギョッとした。ここで月の話が出てくるとは思ってもいなかったからである。

「当然私たちはそんなことあるわけないと思ったのですがかぐやの目からは嘘は感じ取られなかったのです。月の迎えは今から3ヵ月後、ちょうど満月になる頃らしいのです。かぐやはこれは運命で逆らうことはできないと言いましたが愛しの我が娘を私どもは失いたくない。そこであなた方陰陽師の方たちに月から来る迎えを撃退して欲しいのです。」

翁が言い終わると1人の陰陽師が言った。

「お任せください！！なよ竹のかぐや姫を連れ去ろうとする不埒者たちなぞ我々が追い払って見せましょうぞ！！ときにそのかぐや姫はどこにおられるのかな？お姿を拝見したいのですが。あとお話しも。」

「すみませぬがそれはできませぬ。かぐやは家の者以外の者とは会うことも話す事もあまりしたがらないのです。」

翁がそう言うと発言したその陰陽師は翁に聞こえないようにだが間違いなく舌打ちをした。

（なんだ、守る云々は建前でこの人はただかぐや姫に近づこうとしただけだな。下心見え見えだなー。）

よく周りを見てみれば清明と幸生以外は全員なにかがっかりしたような面持ちの者たちばかりであった。その光景を見て幸生は心の中でため息をついた。護衛のための顔見せというのに本音はかぐや姫に会いに来ただけというのは情けないものである。

しかし、幸生もさっきの話を聞きそのかぐや姫に会いたいと思っていた。月に帰るということは月の住人だったということだ。現在月がどうなっているのかを聞きたかった。1人の幼馴染を思い浮かべながら。

そこで幸生は小石ほどの大きさの不可視の壁を創り出しを部屋の隅のほうに設置した。そして『爆』を付加し、発動させた。その瞬間何かが爆発したような大きな音が屋敷に響き渡った。当然そこにいた陰陽師や翁も突然の破裂音に驚き、音がした方向に向いた。それ

と同時に幸生は隠形壁を発動し姿をくらまし部屋からうまく抜け出た。

「成功成功。さてかぐや姫はどこにいるのかな?」

隠形壁を発動させたまま屋敷を見てまわっていると明らかに他の部屋とは造りが違う部屋があった。きっとここだと思い、そっと外から障子を開け覗いてみると、

「あーなんかめんどくさ。」

と、姫らしからぬ言葉が口から出ていた。あまりにも予想外すぎて幸生がこけてしまうぐらいだ。だがこけたことによってこちらの存在があちらにばれたようだった。

「!?そこにだれかいるのはわかっているわ。黙っててあげる代わりに入りなさい。」

その言葉に幸生はむしろありがたいと思った。逃げるのは容易いの

だがそれでは当初の目的が果たせないからである。幸生は隠形壁を解除して部屋の中に入った。
そこにいたのは一言で言うのなら美しいと思った。髪は腰の辺りまで伸びたきれいな黒髪、整った顔立ち、そして高級そうな着物を着ていた。

突然目の前に現れた幸生を見て少し驚いていた。

「へぇ～変わった能力を持っているのね。」

「まぁ。あのそれよりもその言葉使いは？」

「あぁこれ？こっちが素よ。おじいさんやおばあさん以外の人とはこっちのしゃべりかたしてないのよ。だからこのことはしゃべっちゃだめよ。いいわね？」

顔をズイッ近づけ念押ししてくるかぐやに幸生はだまって頷いた。

「まぁ一応自己紹介しましょうか。私はなよ竹のかぐや姫、本名は蓬莱山輝夜よ。輝夜でいいわ。あなたは？」

「えっと私は「素でいいわよ。」……では、僕は新幸生です。」

「幸生？……もしかして永淋が前に言ってた幼馴染っていうあの新幸生？」

「永淋から聞いたって事は無事に月に着いてたんだ。……良かった。」

「質問に答えなさいよ。なにか証明できることは？」

「これかな。」

そう言って幸生は腕を浅く切りつけた。すると傷口から血が流れ出したがすぐに傷が再生し血が止まった。

「！？……なるほどね。あなたも蓬莱の薬を飲んでいたのね。」

「僕が飲んだのは未完成のものだけどね。それよりあなたもってことはまさか…。」

「そうよ。私も蓬莱の薬を飲んだ。つまり不老不死ってことね。それを飲んだから地上に罪として追放されたのだけどね。まぁ飲むことが罪ってこと知っててやったのよ。」

「なんでだい？」

「退屈だったのよ。毎日が何も変わらないただ時を重ねるだけの生活が。そんな生活から抜け出したくてやったのよ。」

「永淋は……永淋は元気にしてるかい？」

「えぇあなたの話題が出る時以外は。月では永淋は私の従者みたいな存在だったからよく覚えているわ。だからあなたについてはあまり知らなかったけど他のことをは本当にいろいろ教えてもらったわ。基本的には家庭教師みたいなものね。本当に世話になったわ。」

昔のことを懐かしむかのような笑みを浮かべながら輝夜は語った。

「そうか。他にも聞いて…。」

幸生が次なる質問をしようとした時不意に清明から符での通信が入った。

『幸生お主どこにおるのじゃ！！』

『あっばれちゃった?』

『ばれちゃった?じゃないわい!!で、どこにおるのじゃ?』

『輝夜姫のとこかな。』

『!?……はぁ。お主は我の心痛を増やす気なのか?』

『ごめんごめん。どうしても話してみたくてさ。』

『とりあえず帰って来い。ぼちぼちおらぬなったことに気づかれるぞ』

『わかった。今すぐ戻る。』

そこで通信を切って輝夜に事情を説明した。

「話の途中ですまないんだけど戻らないといけないから帰るね。勝手に近づいてしかも上がりこんでごめんね。」

「気にしてないわ。月のことを知ってる人と会えたんだし私にとっても良かったわ。今度私からそっちにこの屋敷に来るように伝えるからそのときまた色々と話しましょ？同じ元月の住人同士。」

「僕は月には行ってないけどこちらとしてもうれしいよ。じゃあまた。」

その言葉を最後に幸生は隠形壁を発動して姿を消し、部屋を出て行った。

数時間後、家に戻ってから幸生が清明にこっぴどく怒られたのは言うまでもない。その説教は数時間におよび、幸生は清明を怒らせるとどうなるかということを身を以って実感したのであった。

第35話　なよ竹のかぐや姫（後書き）

輝夜の話なのにあんまり出せなかった。毎回の駄文すみません。

それでも頑張って投稿していきたいと思います。

次は輝夜主体でいきたいと思います。

それではまた次回～

第３６話　元月人たちの他愛のない話

輝夜に初めて会ってから数週間が経った。同じ月に住む者たちを知る者と出会えたということは幸生にとっては嬉しいことだった。１０００年以上も月の関係者とは会っていなかったのだ、無理もないだろう。

なので幸生はまた輝夜と話したいと思っていたのだが翌日からの陰陽師の仕事がそれを阻んだ。幸生が思っていたよりもハードだったのだ。妖怪退治はもちろん陰陽寮には病気快癒のために呼び出されたり、探し物の依頼が入ったりなどと範囲が幅広かった為時には幸生だけで、時には清明と２人で都中を駆け回っていた。その間は輝夜のことも頭に入れている余裕は無かった。幸生には雪花という式がいる分多少は余裕があったがそれでもなれない仕事の多さに目が回るかと思ったこともある。

そして最近になってやっと落ち着いてきたと思ったところで輝夜のほうからご招待したいという文面にて呼ばれた。あまりにもタイミングがよかったためこちらの暇が空くのをどうにかして把握したということなのだろうか。

まだ仕事は落ち着いたとは言えども書類関係のものがけっこう溜まっていたのでどうしょようかと思ったが雪花が「私が残りをやっておくので行ってきてらしてください。」と言ってくれたのでお言葉に甘えることにした。とにかく行くこととなり、幸生は輝夜の屋敷へと向かった。

屋敷へと着くと雑色(ぞうしき)が出迎え輝夜の部屋まで案内した。部屋に着き襖を開くと以前と変わらない美しさの輝夜がいた。幸生は一礼してから入り輝夜の正面に座った。そして案内の者が下がり、去っていく足音を聞いてから会話が始まった。

「お久しぶりだね、輝夜。」

「そうね、久しぶり、幸生。随分と忙しかったみたいね、よくやるわ。私は絶対無理。めんどくさいもの。」

「まぁ大変なのは変わらないけど慣れればなんとかなるもんだよ。それはともかく今日は呼んで頂きありがとうございます。」

かしこまって再び座ったまま一礼すると着物の袂を口元にあてふふふっと笑った。

「そんなにかしこまらなくてもいいのに。それに私があなたと話したくて呼んだのだからお礼はいいわ。」

「まぁなんというか僕の性質上というか性格上丁寧な口調のほうがしっくりくるときがあるからついね。」

「まぁ私どちらでもいいけどね。じゃあお互い月について話しましょ。月に行く前と、月での生活を。」

「そうだね。」

――――永遠の少女、永遠の青年会話中

「……ふぅん、あなたと永淋が知り合ったのってそんな経緯があったんだ。そこらへんは永淋話してくれなかったから知らなかったわ。」

「まぁね。こっちとしてはあの時以上に文明が進んでることに驚きだけどね。それもまぁ永淋がやったと聞かされれば確かにやりかねないかもって思うね。本来の職業は薬師なのにね。

「ほんとだわ。得体の知れない液体が入ったフラスコ片手に眺めて笑ってる永淋見るのもなかなかに怖いわよね。実験なんて言われて飲まされた時なんかは…。」

そこで一区切りつけた後2人は1度頷いて、

「「地獄だわ（よね）」」

見事に同じことを同時に言った2人は顔を見合わせるとお互いに笑った。

「それにしても輝夜があっちでも姫様扱いっていうことには少し驚いたけどね。」

「あら、どういう意味なのそれ？」

「そういう意味だよ。」

そう言うと顔をふくらませてムスッとした顔にした。

「幸生は私が姫らしくないって言いたいのね。いいじゃないの、こういう姫がいたってさ。」

「ははは、ごめんごめん。気を悪くしたなら謝るよ。お詫びに今度

招待してもらった時に甘味屋で団子を持ってくるよ。おいしい団子を売ってるとこがあるからね。」

すると団子に釣られたのかムスッとした顔が緩み満更でもないような顔をした。

「ま、まぁ幸生が買って来てくれるというのならもらってあげなくもないわ?」

「ん?その言い方だとやっぱりいらなかったか。じゃあ持ってくるのはやめて雪花たちにでも買っｔ「いるいる!!いるから買って来てください!!」うんわかった。」

幸生は勝ち誇った顔、輝夜は敗れ去ってしまったような顔をしていた。

「ううううっ、お詫びに買って来てもらう筈なのになんか上下関係が逆転してるのはなぜなの?」

「まぁそう気を落とさずに。きっといつかいいことあるよ。幸い時間は腐るほどあるわけなんだから。」

勝ち誇った顔のまま幸生がそう言うと輝夜がその後ろを見て目を丸くしていた。そして直後、輝夜の表情はさっきまでの表情とは裏腹に勝ち誇った顔をした。

「あなたもね、幸生。」

「？それはどういうこと？」

「こういうことじゃよ。」

背後から聞こえた声に幸生は思わずビクッと体を震わせた。そして背後から感じる痛烈な霊力と怒気が背後から刺さるかのように体全体で感じた。

幸生はおそるおそる後ろを振り返ってみるとそこには本物の鬼も飛び上がって逃げてしまうのではないかと思ってしまうほどの形相で腕を組み、仁王立ちして立っている清明がいた。

「書類がお主からなかなか届かぬし、やっときたと思えばそれをやって届けにきたのが雪花殿じゃし、雪花殿に問い詰めればお主は輝夜姫のところへ招待されたからそこに行ったというし。」

「すみません、幸生様。」

清明の後ろを見てみれば申し訳なさそうに頭を下げている雪花もそこにはいた。ついでになぜか一緒に来ている小傘はそんな僕を見て笑っていた。

「せ、清明。とりあえず落ち着こう。そして落ち着いたらまずは話合いを。」

「問答無用!!お主には1度痛い目にあってもらう必要があるようじゃの。」

清明は懐から目にも止まらぬ速さで符を投げ巨大化させ幸生に巻きつかせ拘束した。このままではまずいと感じ最後の頼みの綱である輝夜に目を向けた。そして、輝夜は手を振りながら、

「逝ってらっしゃい。」

「字が違う――――――!!」

「それでは姫様ご迷惑おかけしましました。」

「いえいえ頑張ってくださいまし。」

「い――――やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

その日幸生は術で滅多滅多にされたから数刻ボロボロのまま説教をきかされたのであった。

第３６話　元月人たちの他愛のない話（後書き）

今回は短めにしてみました。オチはいつも通りです。

特に書くこともないのでこれにて。

それではまた次回～

第37話　月の姫の願い

清明にこってりしぼられてから幸生は自分に割り振られた仕事を完了するため忙しなく動いていた。前よりも自分にまわってくる仕事の依頼量が増えている気がするのは気のせいだと信じたい。

輝夜もその辺の事情を理解しているのか文で済ませることも度々あった。ただ陰陽寮に送りつけるのだけはやめてもらいたかった。送り主があのなよ竹のかぐや姫だとわかると周囲の視線が痛いほどつきささってくるからだ。

まぁそれはともかくとして送られてくる文の内容は大体が今日はあんなことがあったとかこんなことがあったとかいう日常のことだった。そして文の最後には決まって次はいつ来れるかと綴られている。それに対してこっちも普段のことを書いていつなら大丈夫かを書く。そんなやりとりをしていた。

そして今現在、幸生は輝夜の部屋にいる。今回はちゃんと自分に割り振られた仕事は種類仕事も含めて全て自分でやり終えているし、一応清明にも報告はしたから今回は大丈夫なはずだ。

「ちょっと幸生、聞いてるの？」

「ん？あぁごめんごめん。それでなんだったかな？」

「私に求婚の話しがきてたって話しよ。」

「確か5人いたんだったかな。応じる代わりに1人1人に難題を出したんだよね。」

そう、童話でも語られるかぐや姫への5人の求婚者。石作皇子、車持皇子、右大臣阿部御主人、大納言大伴御行、中納言上麻呂の5人である。その5人に輝夜は応じる代わりにそれぞれにある物を持ってくるように言った。

石作皇子には「仏の御石の鉢」

車持皇子には「蓬莱の玉の枝」

右大臣阿部御主人には「火鼠の皮衣」

大納言伴御行には「龍の頸の珠」

中納言上麻呂には「燕の産んだ子安貝」

これらを自らの手で手に入れ輝夜の下へ持ってくればその方の妻に

なるということだった。だが、これらはどれも地上には存在しないものばかりで彼らに見つけられる道理はない。

「輝夜も人が悪い。どんなに探したってこの地上では見つからないのだろう？」

そう言うと輝夜は表情をわずかに暗くさせ呟いた。

「……仕方ないじゃない。確かにこんな私を好いてくれ、そして幸せにしてくれようとする気持ちは嬉しいわ。特に車持皇子様のところにいる姿だけなら私と同じくらいの娘とも何度か会って仲良くさせてもらっていたから尚更よ。」

でも、と区切ってさらに呟いた。

「私は普通の人間じゃない。蓬莱人、不老不死の女よ。愛する人がすぐそばで年々年老いて行くのに私はそれに連れ添うことができない。あなたも半不老不死とはいえわかるでしょ、この気持ち。」

「……確かにそうだね。不老不死者は歳を取ることが出来ない。死ぬことが出来ない。これは相手にも自分にもつらいことだね。ずっと一緒にいたいが死んでしまう者、一緒に命の時を刻みたいと願っても叶わない。」

「そういうことよ。だからこそ、お互いがそんな気持ちを抱いてしまうぐらいなら無理にでも諦めてもらうしかないのよ。」

そんなことを聞いた幸生は内心では少しだが否定していた。

（輝夜の言うことは確かにもっともだ。でも、きっと輝夜のことを本当に愛してくれる人がいたならばたぶんそのわずかな時間だけでもできるだけ永く幸せに過ごしたいと願うんだろうな、きっと。まぁこれも自論でしかないけど。）

「それに私はどうせ月へ連れ戻されるわ。」

「そういえばそういう話が前にあったね。そもそもなんで連れ戻されるの？罪人として追放されたんだよね？」

「まぁそうなのだけど、一時的なものでしかないわ。上の連中からしてみても不老不死の人間なんてそうお目にかかれるものじゃないもの。大方、連れ戻していろんな研究でもするんでしょ私を使って。」

そう呟く輝夜の表情からは諦めの色しか窺えなかった。

「それで帝は都中の兵士や陰陽師をかき集めて警護に当たらせるのか。」

「そういうことよ。でもきっと無駄よ。みんなは月の技術の恐ろしさを知らない。まず間違いなく返り討ちにあう。月の技術はそれほどまでに常軌を逸してる。幸生もそれはわかるでしょ？」

「確かに僕が知るのは月に行くまでの技術だけど、その当時の技術力だったとしてもまず勝ち目はないね。地上の者たちには。」

「でしょ？だから私はもう「だからって諦めるの？」えっ？」

「輝夜にはひとつ聞きたいことがある。……輝夜は月に帰りたいの？」

「そんなわけないじゃない！！！」

輝夜は文机を勢いよく叩き叫んだ。

「私は何の変化もないあの世界が嫌だったからわざと地上に降りた。それを抜きにしてもおじいさんやおばあさんには本当に感謝しきれないぐらいお世話になった。本当の娘のように。他の人たちだってみんな優しい人ばかりだったわ。できることなら私だって地上に残

りたいわよ！！」

息を荒らげ目元にわずかに涙をためつつ言い放った。それを見て幸生は頷いた。

「じゃあ残ろうよ。」

「だから言ったでしょ。月には敵わないって。あなたもわかってるって言ったじゃｎ「僕が全力で追い返す。」む、無理よ！月の技術力はあなたが知っているものよりもはるかに高まってるのよ。」

「そんなのはわかってる。でも、僕って自分で言うのもなんだけどかなり強いよ。うちの式も優秀だしね。それに君は帰りたくないんだろう？」

輝夜は俯き肩を震わせた。そしてゆっくりと顔を上げ目に涙を溜めながら小さく呟いた。

「……残りたい。絶対にもう戻りたくない。だから……力を貸して。」

「もちろんだよ。輝夜がそう望むのなら僕はそれに全力で応えよう。

」

そう言って幸生は輝夜の頭を撫でると少し顔を赤くさせながらも笑った。

「よし、じゃあこれで決まり。月の迎えが来るのはいつだったかな？」

「次の満月の日。つまり一週間後よ。」

（ふむ、じゃあそれまで色々手を打っとかないと……。）

「わかった。その前日には一度ここに来るよ。僕の式と化け傘も見たと思うけど一応顔見せをもう1回しとくから。」

「えぇ。……ねぇ幸生？」

帰ろうと立ち上がり襖に手をかけたところで呼び止められ幸生は振り返った。

「ホントに……いいの？」

「任しときなさいって。じゃあまたね。」

「えぇ、また。」

こうして幸生は本当に久しい月の者たちを迎え撃つこととなった。
改めて見上げた地上からの月はその日だけは違うものに見えた。

決戦の時まであと一週間。

第37話　月の姫の願い（後書き）

月の迎えについて主に書きました。微妙に健康マニアであるあの方も見え隠れさせてみました。わかりましたか？

いよいよ月との激突です。ここで久しぶりにあの方が登場します。

うまく書ければいいです。見ていただけると嬉しいです。

それではまた次回～。

第３８話　再会

「すごい人数だね、これは。」

現在、幸生は輝夜の屋敷にいる。正確には輝夜の部屋にいるのだが理由はもちろん輝夜護衛のためだ。
そう、ついに満月の日、月からの迎えが来る日なのだ。眼前に広がるのは帝が寄越したのであろう多くの兵士・陰陽師。帝の輝夜に帰って欲しくないという気持ちが表れていた。ここまでの人数となると若干職権乱用のような気もしなくはないが…。

ちなみに今この場に清明はいない。どうにもこうにも清明以外では対処が出来ない事柄が遠方の地で発生し事態の解決に向かっているのだ。清明がいれば百人力だったのだがないものねだりをしてもどうにもならない。

「ありがたいけど月の技術の前には無力なのよね。」

「そうだね。！？来たか！！」

はるか上空からどこか懐かしいような気配を感じ取り幸生は空を見

上げると、夜光り輝く月の方角から飛行船のようなものが近づいてきていた。その距離はすぐに縮まりすぐそこまで来た。兵士は矢を放ち、陰陽師は各々の得意な術を撃退するべく放った。しかし矢は当たる前に地に落ち、術は何かに阻まれるようにして弾け飛んだ。兵士・陰陽師たちがそれに動揺していると今度は飛行船からなにかわからないが光が降り注いだ。すると兵士・陰陽師たちは途端に崩れ落ち地に伏した。どうやら原理はわからないが相手を昏倒させる光だったようだ。地上の敵を鎮圧した飛行船はゆっくりと離陸した。そしてその中から何十人もの月の兵士が出てきた。そして最後に出てきたのは…

「……永淋。」

思わず口から出た言葉に幸生は思わず涙が出そうになった。前よりも背が高くなっているが他は以前のまま、間違いなく永淋だった。おそらく今の自分を見ても容姿が変わっているため永淋にはわからないだろうが何千年ぶりにその姿を見れたことが嬉しかった。

永淋は月の兵士達を残しこちらへ近づいてきた。

「かぐやぁ…。」

「行かないでおくれかぐやや。」

「おじいさん、おばあさん。危ないから屋敷の奥に行ってて。」

老夫婦はその場を離れたくなかったようだが少し考えて屋敷の奥へと消えた。
そしてついに永淋が輝夜の部屋へ入ってきた。

「姫さま。お迎えにあがりました。さぁ行きましょう。」

「…いや、永淋私月になんて戻るのは絶対にいや。もうあそこには戻りたくないの！」

「……それが姫さまの願いですか？」

その問いに輝夜がしっかりと頷くのを見ると永淋は笑って答えた。

「わかりました。では私も姫さまと共にこの地上へ残りましょう。」

「ありがとう、永淋！！」

ガバッと抱きつく姿は微笑ましいものがあった。しばらくそうしていると2人は離れた。

「姫さまこの地上に残るにはまず外にいる兵士達を無力させないといけません。姫さまにその覚悟はおありですか？」

「もちろんよ。」

「そうですか。その前にあなたは誰ですか？」

その問いにわかってはいたが少し悲しくなるのを幸生は感じた。

「そうよ、永淋。聞いて驚かないでね。この人はね、あのあらｔモゴゥ！？」

反射的に輝夜の口を塞いでその先を言わせなくした。いまここで知って動揺させるのはマイナスにしか働かないと思ったからだ。

「輝夜の護衛だと思っていただければいいです。決して敵ではないので悪しからず。事情も大体聞いてます。」

「そうですか。では行きましょう。」

輝夜が先に屋敷の外へと向かった。幸生もついていこうとしたが、

「ガッ！？」

突然永淋が振り返り何かを幸生に注入した。そして幸生は抵抗することも出来ず倒れた。身体は動かないし声も出ない。

「ごめんなさいね。味方してくれるのはありがたいのだけど月の兵士はあなた達地上のものではどうやっても敵わないの。だからここで気を失っていてくださいな。」

そういい残すと永淋も屋敷の外へと向かった。

この不測の事態に幸生はあせった。

（くっ、そういえば永淋は無関係の人を巻き込むのはいやだったっけ。油断した。雪花、いるかい？）

「ここに。」

頭の中で念じるとどこからともなく雪花が幸生の傍らに現れた。

（いま僕の体の中に毒が入ってるからそれを中和する速度を速めてくれるかい？）

「承知しました。」

雪花は幸生に手をかざすと自身の能力を、『速度を操る程度の能力』を発動させた。それにより中和速度が速まりすぐに動けるようになった。

「ありがと、雪花。すぐに2人の元に行くよ！！」

「はい！！」

永淋ｓｉｄｅ

「姫よ、今なんと申しましたか？」

「月には帰らないって言ってるのよ！！あんなとこには二度と戻らないわ！！」

「困ったものだ。永淋殿も何か言ってやってくだｓ『ヒュン！！』ウガッ！？」

先ほどまでしゃべっていた兵士の１人の額に矢が刺さっていた。兵士の前には矢を放った体勢でいる永淋がいた。

「永淋殿！？この行為が何を意味するかわかっておられるのか！！」

「えぇよく理解しているわ。こういうのを反逆っていうのでしょう。」

「月の賢者もおちたものだ。そして姫も地上の穢れに染まった。仕方ない、２人とも不老不死だ。動けなくして連れ帰るぞ。者どもやれ！！！」

その合図とともに後ろに控えていた兵士達からレーザーが何十本も向かってきた。永淋は輝夜を後ろへとやり、飛来するレーザーに向かって手の残像を残しながら矢を放った。矢はレーザーを次々と相殺したが何本かを撃ち漏らし向かってきた。そのレーザーは途中で軌道を変え、永淋達にではなくその眼前へと当たった。土砂と砂埃が巻き上がり輝夜と永淋がひるんだところで第２射が束になって向

かってきた。

（まずい、これは避けれない。）

体勢が崩れた状態からでは反撃も出来ず、迫り来る攻撃に目を瞑ろうとした。が、その攻撃は思いがけない者が止めていた。

「危なかったね、永淋。」

永淋ｓｉｄｅｅｎｄ

「危なかったね、永淋。」

結構ギリギリだった。雪花にレーザーの速度を遅くさせて幸生が空壁を割り込ませることが出来なかったら本当に危なかった。そうしていると当たらなかったことに気づいた月の兵士達は更に数え切れないほどの攻撃を放ってきた。ホーミングするもの分裂するもの極太のものと多種多様だ。

「多重空壁・剛！！」

幸生たちの周りを瞬時に障壁が囲みそれを防いだ。それに構わず次々と敵は攻撃を放ちその度に空壁が轟音と共に振動する。

「雪花、2人の様子を確認してくれるかい。」

「――――――問題ないようです。」

「ありがと雪花。2人に少し話があるから代わってくれるかい？」

「承知しました。」

障壁の監視を雪花に任せると幸生は地面に座り込んでいる2人の前に立った。すると、永淋が信じられないものでも見るような顔をしていた。

「あなたその霊気!!まさか!?」

永淋は立ち上がると幸生の右腕を掴み袖を捲し上げた。するとそこには赤と青の二色で彩られた永淋自信がよく知っているブレスレットが付けられていた。それを確認すると永淋は目に涙をため、肩を震わせ、声も途切れ途切れになりながら幸生に問うた。

「あなたの…名前……教えて…もらえるかしら？」

「今ここで言うつもりなかったのになぁ。……僕の名前は新幸生。薬を作るのが得意な女性の半不老不死の幼馴染だよ。」

そう言い切ったところで堪えきれなくなったのか永淋が勢いよく抱きついてきた。見ればその顔には涙をボロボロと流しながらも嬉しそうに笑っている永淋がいた。

「よかったぁ。ホントに…よかったぁ。」

「ごめんね、心配かけて。ホントにごめん。」

そう言うとぐすっとなりながらも永淋は離れ笑った。

「まさか幸生が生きててくれるなんて夢みたいだわ。」

「僕もまた永淋と会えるなんて想像もしてなかったよ。」

本当に久しぶりの親友との再会により2人だけの世界に入ったところで、輝夜と雪花がゴホンゴホンと注意を向けさせるように咳払い

をした。

「「お取り込みの所すみませんが…。」」

そう言われて2人はやっと気づき少し顔を赤らめて離れた。

「幸生様、私はどうしましょうか?」

「うん、あとはもう大丈夫だから戻っておいていいよ。」

「幸生様?その子は?」

「あぁ僕の式神だよ。」

「雪花と申します。以後お見知りおきを。それでは。」

そう言い残し雪花は風を切るような音とともに消えた。

「そうなの。それでどうするのかしら?あの人数は骨が折れるわよ。」

（もう切り替わってる永淋。さすがだね。）

「まぁ確かに。めんどくさい相手ではあるね。」

「あら、めんどくさいだけなのかしら？」

「このレベルなら清明と相手する方がよっぽどきついよ。だから問題ない。それに…」

「それに？」

「今回は永淋もいるからね。百人力だよ。」

「あら、奇遇ね。私も同じこと考えてたのよ。」

「ハハハ。」

「フフフ。」

永い月日の間会っていなかったというのに以前と変わらず気があっ

たためこの戦いの場で思わず2人は笑ってしまった。

「あの～そろそろどうするのか言って欲しいんだけど…。」

完全に空気と化していた輝夜がおずおずと言ってきたことにより今度こそ幸生と永淋は頭を切り替えた。

「僕としては殺さず意識だけを刈り取って無力化させたいと思う。」

「相変わらず甘いわね。生かしておけばまた追いに来るわ。」

「たとえ殺しても兵士達が帰ってこなかったらどのみちまた追っ手を増やしてくる。だったらむやみに殺す必要もない。どっちも一緒なんだから。」

「言いくるめられたような気がするけどいいわ、それで行きましょう。」

「よし。じゃあ合図したら解くよ。1…2…3！！」

合図とともに空壁牢が解かれそれと同時に永淋から無数の矢が兵士達に向かった。兵士達はそれをなんとか避けようとするが多くのも

のが突き刺さり蹲る。掠っただけの者たちは反撃しようと銃を構えようとしたが体が動かなかった。理由は永淋お得意の薬で麻痺せいの高いものを矢先に塗っておいたのである。偶然難を逃れた残りの兵士は一斉に永淋に銃口を向けた。しかし、引き金を引く前に幸生が兵士達の増したに突き上げるように土壁を繰り出したため宙に舞った。空中で身動きができない所を全て空壁で地面へと叩き落した。兵士達は身を鎧のようなものを着ていたため死にはしなかったがいずれも気絶した。

その様子を少し離れた場所で見ていた輝夜はただ愕然と見ていた。しかしそれも無理はないだろう。確かに永淋は強い。それは月にいたころから自分自身がよく知っている。ただ今の永淋はそれまで以上に強かった。いや、強いというよりは生き生きとしていた。戦いの最中だというのに笑顔なのだ。他人がそれを見たら戦闘狂だと思う者もいるかもしれない。でも、輝夜の考えは違った。おそらくその最大の原因は新幸生にあるのだろう。子どもの頃からの親友、死んでしまったと思っていた親友が生きていた。それが今の永淋を強くしているのだと思った。

そして幸生を見た。彼は本当に強かった。月の兵士を返り討ちにしてくれると言ってくれた時は嬉しい気持ちの裏腹に大丈夫なのだろうかという気持ちもあった。月の技術はそれほどまでにすごいからだ。でも、その月の技術の粋を集めて編成されたその月の兵士たちが次々と幸生の手によって無力化させられていく。その一つ一つの動作に全くの無駄がなく余裕であるようにも見えた。それは決して慢心から出たものではなく経験なのだろう。むしろその戦い方に貫禄すらにじみ出ているようだった。

そんなふうに見ているうちに戦いはいつの間にか終わってしまっていたらしく動けなくなった兵士達が山積みにされ、幸生と永淋がこっちに歩み寄ってきた。

「お待たせ、輝夜。」

「姫さま…はぁはぁ。もう完全に無力化させたので大丈夫ですよ。」

「あれ？永淋もしかして疲れてる？」

「当たり前でしょうに。永淋はあんなに動いたんだもん。息切れ一つしてない幸生がおかしいのよ。」

「そうかなぁ。」

「「そうよ。」」

それから輝夜は永淋から蓬莱の薬をもらい、おじいさんとおばあさんにお別れをしに行った。その間に幸生は気絶している月の兵士達を空壁牢で囲みその空間ごと適当な場所へ転移させた。しばらくすると屋敷の奥から輝夜が戻ってきた。手に蓬莱の薬が無いことから老夫婦に渡したのだろう。

「それでは、姫さま。行きましょう。」

「えぇ。」

「どこに行く気かい？」

「どこでもいい。どこでもいいから月の追っ手から逃げないと。だから幸生……しばらくの間お別れよ。じゃあね。」

永淋は輝夜の手をとり、歩き出そうとした。それを幸生は止めた。

「待って。僕が無責任に2人をそのまま行かせると思う？」

そう言って幸生は永淋たちの前に一枚の転移壁を出した。

「これは？」

「その壁を通ればある2柱の神がいる神社に転移する。そこにいる神は僕の古い知り合いですでにそこにいる神には話は通してる。だからしばらくの間匿ってくれるはずだよ。それと…」

幸生は手を出すとそこに手の平サイズの空壁が出た。

「これは一種の通信機みたいなものだからそれに向かって霊気をこめて念じてくれれば僕に繋がるよ。」

「でもここまでしてもらってもしあなたにまで追っ手が行ってしまったら…」

「大丈夫。僕って姿を誤認させること出来るしもし仮に追っ手がきても返り討ちにしてあげるよ。トラウマもおまけで。」

その言葉に輝夜と永淋は思わずブルッとしてしまった。

「なんか幸生ならやりかねない気がしてきたわ。」

「奇遇ね永淋、私もよ。」

「まぁそういうことだから。ここを通れば当分の間は大丈夫だと思うよ。そこの神もほんと強いから。」

「なにからなにまでありがとう幸生。あなたと永淋のおかげで月に帰らなくて済んだわ。感謝するわ。」

突然輝夜が頭を深々と下げて感謝の言葉を述べた。

「そんなことないよ。最後までフォローできないからむしろこっちがすまないって感じだよ。」

「私からも言わせて。幸生がいなかったらたぶん月に強制送還されていたと思う。本当にありがとう。」

「ゆっくりと話せないのは残念だけどお互い時間はたっぷりある。今度また会えるときに色々と話そう、永淋。」

「そうね、あなたが生きてて本当によかったわ。じゃあまた。」

言い終えると2人は転移壁に入りそして姿を消した。

「ふぅ、これで一段落っと。それじゃ皆さんを起こすとしますか。」

永淋たちがいた場所を少しだけ見つめてから気絶してしまっている都の兵士と陰陽師たちを介抱しに行った。いずれまた会えるその日を楽しみにしながら……。

第３８話　再会（後書き）

文才がないもので感動の再会のように見えたかどうか不安です。でも何とか描き切りました。

次は何を書くのか悩んでいる最中でしてここでこの小説を読んでくださっている皆様にご意見いただきたいです。

候補としては、

1. 妖怪寺
2. 太陽の畑
3. 何かご自由に

この３つの中から選んでいただき感想にでも書いていただければ幸いです。３日間ほど待ちますのでご返事待っています。

それではまた次回～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2669u/

東方新生紀

2011年11月26日00時55分発行